
迷宮世界

傍観者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷宮世界

【Nコード】

N12390

【作者名】

傍観者

【あらすじ】

学生の傍ら依頼屋として生計を立てる高崎浩介たかきみこうすけは、とある女性の頼みを受け通り魔事件の解決に協力することになる。だがその裏には巨大組織が関与し、更にその裏には日本を迷宮へと誘う異なる巨大勢力の存在があった。真実を知る為、戦うことを決意する浩介に訪れるのは幾つもの出会いと別れ。生き残る為の覚悟と苦痛、そして人の命を背負う重みだった。それでも浩介が選んだのは戦い続ける道であった。

プロローグ（前書き）

この物語は様々な事象が織り成すアクションファンタジーとなる
予定です。

更新遅めです。ご了承ください。

プロローグ

日も落ち、あたり一面真っ暗になった頃、一人の女子高生が家路についていた。

「はあ……遅くなっちゃったよ」

腕時計を何度も見ながら呟いた。

何度見ても当然の如く時間が変わることは無いのだが、女子高生は歩く速度を少し上げながらまた時計を見た。

彼女は焦っていた。

最近、この白ヶ丘^{しろがおか}付近の街で通り魔事件が立て続けに起こっている。被害者は必ず夜に一人で歩いている女性で、暴漢・痴漢・引つたくりなど行為は様々であった。中にはナイフなどの武器で重傷を負った者までいるのだ。

命を奪われた者こそいないが、それでも命の危険があることには変わらない。

彼女はまた時計を見た後、小走りになる。

通り魔事件によって心配するのは彼女の親も例外ではない。

もし娘になにかあったら……、という不安から門限を決めた。

そして、その門限に迫っている為、女子高生は通り魔よりも親に怒られる、という心配が脳内を支配していた。

「もう……ちょっと……」

少し息を切らしながら、間に合ったと安堵した。

今走っている細い路地を左に曲がれば、その先五十メートル先に家がある。

街灯はあるが、それでも薄暗い細い路地の両サイドは民家が並んでおり、その内部が見えないように女子高生と同じぐらいの高さのコンクリートの壁が路地に沿って遮っている。

その壁に軽く左手を付け、そのままの勢いで左へ曲がった瞬間、目の前に人の姿があった。

突然のことで回避も勢いを弱めることもできず、女子高生の身体に衝撃が走った。

全身黒の服装で帽子とマスクで顔を隠した目の前の男性に体を受け止められ預ける形になった女子高生は、転びさえしなかったがぶつかった衝撃で顔をしかめた。

しかし直ぐに我に返り、反射的に目の前の男から体を離しその男を見上げた。

「あつ！ ごめんな…さ…い…？」

誤ろうとした女子高生だったが、なぜか違和感を感じる。

——えっ！？

身体に力が入らない。いや、抜けていくという感覚だった。

「う、う……そ……」

崩れるように膝を付き、自然とお腹に手を押さえる。

——なんで……………？

お腹に当てた手は真つ赤な血で染まり、尚も溢れ出てくる。それを認識すると同時に、口から血が流れる。

支える力も失った身体は、ゆっくりと地面に平伏していく。そのまま俯せになった女子高生を中心に地面は血液で染まっていく。

最後の力を振り絞り彼女が出来る行動は、顔を上げ目の前の男を見上げるだけだった。

男の右手には血に染まったナイフがしっかり握られており、女子高生を見下ろしている。

マスクをして隠しているが、口元を吊り上げ微笑んでいることが容易に確認出来た。

——どうして……………？

誰でもいいから助けを乞おうと何度思おうが、既に言葉を出すことも出来ない程衰弱した彼女は、頬を伝う一筋の涙が顎から地面に落ちると同時に意識を失った。

その彼女の無念を最後まで見ていた男は、何を言う訳でもなくクルリと脚を返しその場から去っていった。

事の始まり1

「これで依頼は完了だ」

白ヶ丘学園に通う高崎浩介たかさきこうすけは、高級住宅街にある一軒家の玄関前に来ていた。

滅多にお目にかかれないような銀色に輝く突起のある大きな門。付近に監視カメラも設置され、遠隔操作で開閉される設備を見てもかなりのセキュリティだと想像できる。

門をくぐればきちんと手入れされた芝生が一面に広がる大きな庭。大きく茂る木や、鯉のいる小さな滝付きの池などが目に付く。そして門から玄関先まで大理石が地面に埋められ、まるで家までの目印かのように一直線に繋がっていた。

家の外装も白で統一され、三階建て。百メートル以上はあるうかという長さで、入口から一寸の狂いもない左右対称で出来ている。造りもお城をイメージさせるデザインだ。

一方、浩介を出迎えたのは派手なドレスに身を包んだ五十代の女性。

化粧も厚く、真っ赤に塗られた口紅が異質な雰囲気かもを醸し出している。香水やら何やら混じって異様な臭いを発しているものの、当の本人は気付いていない。

これで会うのは二度目の浩介だが、それでも顔は引きつってしま

う。
正直、二度と会いたくない人物だったが、依頼を受けたからには仕方のないことだったのでそこは割り切った。

「どこ行つてたのドリー？心配したんだからあ」

浩介から受け取った猫を抱えると、頬吊りをする。

『ドリー』とセンスの無い名前を付けられたシャム猫は嫌がる様子で暴れ出す。

不自由な生活や虐待などはされてないだろうが、この猫にとってこの場所、このご主人では満足出来ないのだろう。

毛を逆立て、女性の腕の中でもがいているその途中、浩介と目が合うとピタッと動きを止めた。

助けてくれ！と訴えているような眼差しだ。

そう直感した浩介はどうしようもない、という意味を苦笑いで返した。

再び暴れ出す猫を見て、次逃げ出した時はそつとしておこうと心に誓った浩介であった。

「あなたもたつた二日でドリーを見つけるなんて、本当に助かりましたわ！よかつたら紅茶でもどうかしら？」

猫を抑えきれなくなった女性は家の中へ放すと、浩介を室内へと勧めた。

「いや、俺はこれから学校なんでこれで失礼する」

今は早朝。これから学校というのは嘘ではないが、それよりも早くこの依頼人から離れたい、というのが本音であった。

「あらあ、残念ね。じゃあこれ依頼料ね」

大袈裟に残念そうなりアクションをした後、ひとつの封筒を差し出す。

浩介はそれを直ぐに受け取りお札を数え始める。

「おい。少し多いぞ…？」

逃げた猫を捕まえる、という依頼を十万で引き受けたのだが、封筒の中には十五万入っていた。

「こんなに早く見つけてくれたんですもの。感謝の気持ちよ」

軽くウインクするように、気持ち悪い顔を向ける女性に目は合わせない。

「そうか、じゃあ有り難く貰っておく」

朝からコンビニへ出掛けた時に偶々（たまたま）見つけたのだが、それがこういう形で返ってきたのだ。

浩介も顔が緩むのを抑え、あくまで冷静さを装って封筒をブレザーの内ポケットへしまうと、踵きびすを返すように背を向けた。

そして庭の中央まで行ったところで振り返る。

「ちな因みに、今度逃げた時は違う奴に頼ってくれよ。俺はどんなに金を積まれても二度と引き受けないからな！」

女性が笑顔で手を振るのを確認すると、苦笑いを浮かべその場を後にした。

その三時間後、再び猫が逃げ出し大騒ぎになったのはまた別の話。

浩介は白ヶ丘学園に入学してから、依頼を受け、やり遂げ、金を得る、という俗に言うハンターのような仕事をしている。

勿論、漫画に出てくるようなモンスターなどではなく相手は人間だ。

その為、ハンターよりも賞金稼ぎと言ったほうが近いかもしれない。

そしていつしかそれを『依頼屋』と名付けられていた。

一般人にはあまり知られてはいないが、世界各国には同じような仕事をしている依頼屋が確かに存在している。つまりは闇社会の職業だ。

麻薬や武器の運搬、敵対組織の情報集め、依頼によっては暗殺などもある。そのリスクの大きさによって報酬も変わるのだ。

それでも依頼屋の存在を知っている金持ち連中からの依頼もある。それが浩介が受けたような依頼だ。

基本的にリスクは少なく、それなりの報酬が貰えるのが特徴だが、猫探して十五万の報酬は異例中の異例だった。

依頼によっては命も落とす。そんな闇社会に浩介は足を踏み入れていた。

「た……き君、高崎くん！」

「……ん？」

誰かに体を揺さぶられたことにより、緩やかに意識を覚醒させた浩介は、眠りを覚ました張本人に顔を向ける。

「白木か。どうした？」

「どうした？ じゃないよ！ 今から全校集会だから体育館に行くよ！」

もう！と言わんばかりに頬を膨らますのは白木愛理だ。しんやあこ

浩介とは幼なじみ、という訳でもなく恋人、という訳でもない。高校から知り合い、何度か話すうちに気の合う友達、という存在になっていた。

少し茶色のサラツとしたセミロングの髪に可愛らしい笑顔、喜怒哀楽がはつきりしている性格で男子生徒から絶大な人気がある。

少し小柄な体型だが、胸も大きく頭も良い。それもまた男性を惹きつける要因だったりする。

早めに学校に行き、机にタオルを置いてそれを枕代わりにして爆睡していた浩介は、状況を把握しようとする周りを見た。

愛理の言つとおり、廊下は体育館へ行こうとしている生徒がぞろぞろと移動していた。早くも浩介の教室には数人しか残されていない。

次に左腕に付けている時計に目を移す。

時間は一限目が始まる時間を指していた。

「なにも聞いてないぞ。急に決まったのか？」

普通なら生徒に前日には連絡するのだが、浩介にはその記憶がない。

「うん。そうみたい。管先生が来て直ぐに、全校集会あるから今から体育館に集まれって」

管先生は浩介達のクラスの担任だ。

気は弱く、痩せ型の為あまり威厳はない。しかし、性格は優しく何事も一生懸命なことでクラスからの評判は良かった。

「はあ、なにかあったのか？」

めんどくさい、とうなだれる浩介をよそに、愛理は少し寂しげな表情に変わった。

そう言えばいつも笑顔を振り撒いている愛理だが、今日はそれが無い。

「ん？どうした？」

浩介は愛理の変化に気付き、椅子から立ち上がる。

「高崎君は、今日のニュース見てないんだね…」

「ニュース？」

実際、朝から外出していたのでニュースは見えていない。

今日のクラスの話題もそのニュースの内容が飛び交っていたのだが、爆睡していた浩介の耳に届くことはなかったのだ。

「昨日の深夜に、うちの学校の生徒が殺されたんだって……」

「殺された？」

「…うん。私達と同じ学年でD組の加藤さん」

その名前に覚えはなかったので、別の思考へと変える。

「例の通り魔か？」

ニユースを見ていない為詳しい情報は知らないが、真っ先に思い浮かぶのが今、世間を騒がせている通り魔だった。

「わかんないけど、そうじゃないかって言われてる」

恐らく評論家がそう言っていたのだろう。

ひったくりや軽い暴行など被害は様々だったが、人の命まで奪ったのは今回が初めてだ。それが同一犯とは断言できないが、元々これまでの通り魔事件自体、複数犯か同一犯かも断定できてないのだ。更に言えばただ単に恨みを持っている身近な人の犯行、という可能性もあるが、やはり真っ先に思い浮かぶのは通り魔ということに違いなかった。

ここで色々詮索しても憶測しか出てこないし、時間もあまり無いことから浩介は頭を切り替えた。

「兎に角、俺達も体育館へ行こう」

「…そうね」

愛理は同じ学校の生徒が殺されたことのショックと、自分も殺されるかも、という恐怖に少なからず怯えていた。

なるべく普段と変わらないように務めようと努力するが、性格上難しいものがあつた。

浩介は愛理の心境を察知し、優しく頭に手を置いた。

クラスメイトが居れば間違いなく怒気の目線で見られる行為だが、今は二人以外誰もいないのでその心配はない。

愛理は頬を赤く染めながら浩介を見上げるが、優しい笑顔に向けている顔を直視できず、逆に俯くこととなった。

——通り魔、か。

愛理の頭から手を離れた浩介は心の中でそう呟き、鋭い視線へと変え窓から見える街の景色へと移した。

事の始まり2

全校集会が開かれた理由。それはやはり生徒が殺された事件の影響であつた。

基本的には校長先生の長々としたお悔やみの言葉を聞くだけだったが、多くの生徒が号泣し、その声や鼻を吸る音が体育館に響き渡る。

それがまた殺された彼女の人の良さを教え、それと同時に事件が嘘ではなく現実だと証明している。

殺された生徒は加藤沙耶^{かとうしや}。浩介と同じ二年だ。

昨日の夜に襲われ、心配した両親が発見しそのまま救急車で運ばれたが助からなかった。

こんな形で生徒を失った学校側も、他の生徒への影響も大きいという事で明日から土日を含む四日間は休校になり、今日の授業も中止となった。

最後に、夜はなるべく出歩かないこと、当分は複数人で帰宅することなどを強要し、全校集会は終了した。

「高崎くんはこれからどうするの?」

教室でのHRも終え生徒達が続々と帰宅する準備をしているなか、愛理は浩介の机の前に来た。

「そうだな…。特にやることもないしこのまま帰るけど、なぜだ?」

「…ううん。なんとなく」

愛理は軽く顔を左右に振り、なんでもないよ、とアピールする。

一緒に帰りたかったが誘うことが出来なかった。

浩介がいれば危険は少なくなるというのも確かにあるが、それは愛理の心のほんの一部でしかなかった。

高校から知り合った仲だが、今まで出会った男性の中で一番心地良いと感ずることができた。

優しい笑顔と抜群の運動神経、頭の回転のキレも良く顔も整っている。

時折、他人を寄せ付けない険しい顔付きの時もあるが、それも浩介のミステリアスな部分ということで納得され、密かに女子の中では隠れファンもいるほどだ。

愛理もその中の一人だが、ファンというよりも確かな恋心を抱いている。

だからこそ一緒に帰りたいというのが本音だったが、よく考えればこの事件を利用して浩介に近付こうとしているのではないかと脳裏をよぎる。

不安、恐怖は確かにあるが、これをきっかけに浩介と親密な関係になっても何かスッキリしない。

元々愛理はそんな簡単に割り切れる性格は持ち合わせていなかった。

——あたしって、最低……

そんな矛盾ともいえる複雑な心境を自分で処理できる筈もなく、先走って浩介に予定を聞いてしまった愛理は、上手く笑顔が作れているか不安になりながらも浩介に背を向け帰ろうとする。

「駅まで送ろうか？」

「え！？」

予想外の浩介の言葉に驚き、足を止め振り返る。

愛理の視界には至って真剣な顔を向ける浩介がいた。

「で、でも、遠回りになるんじゃない？」

「別に予定がある訳じゃないし、そのぐらい何も問題はない」

浩介は学校から家まで徒歩で通っているが、愛理は白ヶ丘駅から二駅先に実家がある。校門から出て直ぐ前が十字路になっているが、その交差点を左の道へ進むと浩介の家。真っ直ぐ進むと白ヶ丘駅だ。

つまり、どう頑張っても浩介が遠回りになるのは否めないのだ。

それでも浩介が『駅まで送る』と言ったのは、暇つぶしや恋愛感情からではない。

愛理は『なんでもない』と笑顔を見せたが、その笑顔には悲観や哀傷などの感情が表れていたのだ。

泣きそうな面持でぎこちない笑顔を向けられた浩介には、そのまま帰るという選択肢を選ぶことを躊躇せざる負えなかった。

愛理は一度思い詰めるとなかなか立ち直れない性格だと浩介は知

っていた。

一度、同時に二人の男子から告白を受けた事があった。愛理は両方断ったのだが、その後二人の男子は悲観の気持ちをお互いにぶつけ、殴り合いの喧嘩になったのだ。

愛理は自分が断ったからだと言責任を感じ、一週間もの間悩み続けていた。

その時は浩介や友達も必死になって慰めたが、一度そこまで落ちた愛理は何を言っても上の空状態で手に負えなかった。

恋心までは気付いてないが、状況的にそうなる可能性のある愛理を放っておくことなど出来なかったのだ。

一方、浩介の心配を知る由もない愛理は、本来の笑顔を取り戻していた。

「じゃあ、帰るか」

「うん！」

並んで教室から出て行く二人を残っていた男子生徒は怒気の眼差しで見送り、愛理の恋心を知っている友達は歓喜の眼差しで見守っていた。

駅まで付いた二人はそのまま別れることなく近くのファミレスへ入っていた。

時間的にもお昼前であつたし、朝から何も食べていない浩介の提案に愛理が断る筈もない。

浩介は生姜焼き定食、愛理はマカロニグラタンを食べ終え、それぞれコーヒートメロンソーダを追加注文した。

「へえー。高崎君って一人暮らししてるんだ」

食事の時から何の変哲もない話題で盛り上がっているが、殆どは愛理が浩介に質問し、それを答える、というなんとも尋問のような会話であった。

「そんな大層なことじゃないだろ。実家から学校まで遠いから近くで一人暮らししてる。それだけだ」

実際、浩介の両親も反対することなく、成長できるから、という理由で寧ろ進めてきたぐらいだ。

「お金は？」

「最低限は親から仕送りがあるが、あとは——まあ、親から送って貰ってるな！」

しまった！と浩介は冷や汗を流し、動揺を隠すようにコーヒートをゴクゴクと飲んだ。

バイトをしている、と口にしようとしたが、今の流れからして愛理がバイトについて質問してくるのは目に見えて明らかだった。それは浩介にとって避けて通りたい道でもある。

「そうなんだ。いいなあ」

そう呟いたことから上手くごまかせたんだろう、と浩介は安堵し

た。

その後も、一人暮らしってどう？とか、なんで白ヶ丘学園にしたの？とか、好きな食べ物は？などと質問の嵐だった。

バイトの件以降、浩介も下手な事を言わないよう考えてから口に出すようにしていた為、ファミレスに入って二時間、疲れ果てながら店を出るといった結果になった。

駅で愛理を見送った後、帰ろうと思った浩介だったが、背後から迫る女性に声を掛けられ阻まれる事になる。

「初めまして、かな？高崎浩介君」

突然の出来事に咄嗟に振り返る。

そこに立っていたのは、見慣れた制服に身を包んだ女性だった。

根本から毛先まで少し茶色がかった色に染め、腰近くまであるサラサラとした長い髪が風に靡なびいている。

小さな顔とモデルのようなスラッとした体型で女性としては身長も高い。

誰が見ても綺麗、と言わざるをえない容姿だ。

現に、横をすれ違う他人からは二度見をする者までいる。

そんな美少女が何故話しかけてきたのか？そして同じ学園の生徒だろうが浩介には見覚えが無い。間違い無く初対面なのに何故疑問系で尋ねたのか？などと疑念を湧かしていた。

「えっと、君は…？」

至って冷静に口に出す。女性はそれにクスクスと笑みを浮かべ答えた。

「楠木綾華。^{くすのきあやか}あなたと同じ二年なんだけど…。噂通りの人ね」
「噂？」

一体どんな噂が流れているのか？と浩介に嫌な汗が流れる。

「他人にはあまり興味が無いってことよ」

少し皮肉を込めた笑みで右手を自身の腰に置く。
その凜とした姿が一段と威圧感を感じさせる。

実際、浩介は人の名前を覚えない。

友人や、何度か会話を交じらせた人なら記憶に留まるのだが、少し顔を合わせた程度だと直ぐに記憶から消去してしまうのだ。

その為、入学してからの一年の時のクラス全員を把握したのは実に半年近く掛かっていた。

浩介自身もそれは自覚していたし、無理して覚える必要もないという事で改善することは無かった。

それが噂になっているとは知らない浩介は何も言えず苦笑いを浮かべた。

「それは悪かったな。何度か会ってたか？」
「廊下ですれ違ったぐらいよ。安心して」

それぐらいで浩介が覚える筈無いと分かっていたし、改めて思い知った綾華は溜め息を吐いた。

「まあそんなことはどうでもいい。そろそろ本題に入ろうか」

浩介にとってここからが問題であった。

何故声を掛けられたのか？

このタイミングで話し掛けられる場面を考えればそう多くは無い。間違いなく綾華は浩介の情報を少なからず持っている。それがどこまでの情報なのか、目的は何か、と思考すると冷や汗が流れた。

ただ単に友達になりたい。とか、一目惚れで愛の告白。とかなら浩介にとってなんの問題も無い。その為、その思考は直ぐに消し去った。

可能性が無い訳ではないが、綾華の態度を見ても辻褄が合わない。

浩介には異様な不安感があつた。

「せっかちな。じゃあ言わせて貰うわ」

澄んだ目を向ける綾華に浩介はゴクリと唾を飲む。

周りを歩いている人の視線も気にならない。そんな雰囲気は二人を包み込んでいた。

「高崎浩介、十七歳。身長百七十六センチ、体重六十三キロ。好きな食べ物ラーメンで嫌いな食べ物はネギ。勉強成績は中の上。運

動神経抜群であらゆるスポーツに対応できる。でも部活動はしていない。白ヶ丘学園入学に伴い、こっちで一人暮らし。今は充実した高校生活を――」

「お、おい！一体何が言いたい！？」

余りに予想とかけ離れた説明をする綾華を啞然と見つめていたが、ふと我に返り綾華の言葉を止めた。

綾華は一つ息を吐き、依然変わらぬ真剣な顔で視線をぶつける。

「もう薄々気付いてると思うけど、私はあなたの秘密を知ってる」

不安感が現実が変わった瞬間だった。

ある程度予想出来ていて心の準備も整っていた為浩介もそこまで驚くこともなかったが、綾華の目的が未だわからないこの状況に、眉間に皺を寄せ険しい顔を向けるだけであつた。

「場所を変えよう」

しばしの沈黙の後、浩介は険しい顔を崩し口火を切った。

その提案に綾華も頷くだけの無言の肯定で承諾した。

駅前を通りすがりの人も多いし、何しろ綾華の容姿もあり見てくる人が多かった。

綾華自身、少なからず慣れているが気持ちの良いものではない。
慣れていない浩介なんて以ての外だ。^{ほか}

話の内容のこともあり、少し長くなりそうだと感じた浩介の思い

に、綾華は記憶にあった喫茶店へと誘導した。

駅前からちよつと離れた人気の少ない路地にお店はあった。正直流行っているとは思えないこじんまりとした風貌であったが、全体が木造で出来ているお店からは安らぎを感じる事ができ、入口の周りには手入れされた観葉植物が多数置かれ、木造の建物との相性も良かった。

何より滅多に客が来ることのない場所というのが、今の二人には丁度良かったのだ。

出入り口の前にある、こちらも木で造られた三段の階段を上り扉を開けると、カランカランと昔ながらの鈴の音が鳴った。

「……いらつしゃい。好きな席へどうぞ」

落ち着いた低い声で出迎えたのは五十前後の強面の男性だった。

この店のマスターに促された二人は入って左奥にある窓際のテーブル席へと腰掛け、お冷やお絞りを持ってきたマスターにアイスコーヒーを二つ注文した。

「楠木は——」

「綾華でいいわよ、浩介」

喫茶店に入って第一声を発したが直ぐに返された浩介はそうかと呟くと咳払いをした。

「綾華はコーヒーで良かったのか？」

「なんか変？好きよ、コーヒー」

「いや、ならいい」

なんとも繋ぎようのない会話が終わると同時に、マスターがアイスコーヒー二つと灰皿をテーブルに置いた。

アイスコーヒー二つは注文した品だからわかるが、灰皿の意味が分からない綾華はマスターに顔を向けた。

その視線に気付いたマスターは無表情のまま浩介に顔を向ける。

浩介は苦笑いを浮かべながら上着の右ポケットから煙草とライターを取り出し机に置いた。

恐らくお店に入った時にチラッと見えたのだろう、と考え、灰皿を持って来たのは容認されたからだと理解した。

マスターはそのまま奥へ消えて行き、浩介はそのマスターに感謝した。

「浩介：タバコ吸うの？」

綾華は少し驚いた顔をしていた。

「まあ、気休め程度だ。一本いいか？」

綾華が頷くのを確認してから煙草に火をつけた。

口から吐いた紫煙が天井に舞い上がり消えて行く。

「そんな情報は知らなかった…」

煙草の先からユラユラと昇る煙を見詰めながら呟く。

「それで？俺の何を知っている？」

綾華の口から語られるまで自ら真実を話すような墓穴は掘らない。綾華が飽くまでも半信半疑で強攻策に出ている可能性があるからだ。プロフィール程度の情報なら幾らでも手に入る。だがそれが依頼屋と繋がる事など絶対にならない。それだけ依頼屋という存在自体が謎に包まれているのだ。

だからこそ浩介も綾華を警戒し隙も見せない。ちょっとした油断が身を滅ぼす事を浩介は知っていた。

しかしそれは直ぐに解決することになる。

「あなた、依頼屋でしょ？」

ニヤリと笑う綾華に、浩介は依然表情を変えない。

「何故そう思う？」

「見たのよ」

その言葉に浩介はピクリと眉を動かす。

「……何を見たんだ？」

「三ヶ月前、あなたは麻薬売買をしている小さな組織を壊滅させた。場所は隣町の二丁目、繁華街にある看板も出てないお店のような所からあなたは出て来た。他の人は記憶の片隅にも無いだろうけど私は違った。何しろそんな怪しげな場所から出て来たのが学校で見たことのあるあなただったもの。そして次の日、ニュースを見た私は確信した。あなたは依頼屋だとね」

全てが正解だった。

恐らく浩介の情報は興味本意で調べたのだろうと推測するとそれを言ったのは動揺させる、又は全てを知っているという事を見せつけ優位に立てるようにしたかった戦略だと理解した。

まあその場を見ていたと言われれば反論するのも難しい事だ。

そこまで説明した綾華は少し氷が溶けたアイスコーヒーにミルクを入れかき混ぜた。それを一口飲み、喉の渇きを潤してから再び浩介を見る。

「あなたがあそこから出て来た理由、他に何かあるかしら？人違いとか見苦しい言い訳は止めてね。後はその組織の仲間だったっていうものないわ」

私の勘だけどね、と付け加え浩介に向けて微笑む。

綾華自身によって言い訳が削除されていくが、元から浩介は言い訳など考えていなかった。

ここで必死に言い訳をして話をあやふやにしても、普段の生活から動きにくくなってしまい自分の首を絞める事になる。尾行などされたら堪ったものじゃない。それに綾華をこれ以上ごまかし続けるのは無理があると感じていた。それよりも綾華がどうしたいのかを聞いた方が得策だと判断する。

それに、これだけを言うために浩介に近寄った筈が無い。

浩介は吸っていた煙草を灰皿へ押し潰して消すと、また煙草の箱に手をやり火をつけた。

心が決まった浩介は椅子に深く腰掛け天を仰ぐように煙を天井に向け吐き出した。そして勝ったように微笑む綾華に視線を移した。

「降参だ。言い訳も何も無い。綾華の思ってる通り、俺は依頼屋として仕事をしている」

「失態したと思わないでね。偶々私が見てしまったただけだから。それも運命だと諦めなさい」

確かに浩介は失態を犯したという気持ちがあったが、それを綾華からフォローされ自然と笑みが零れた。

「そうだな。それで、綾華は何が目的なんだ？」

目的を聞かれた綾華は微笑みから真剣な眼差しへと変えた。

「殺人犯、もしかしたら私達の学園にいるかもしれない。手伝ってほしいの」

綾華の言葉に浩介は驚愕した。

殺人犯が学園にいる。それだけでも興味あるが、間違いなく綾華は何かを掴んでいる。

——おもしろい

浩介は短くなった煙草を灰皿で消すと、気持ちの高揚を抑えるように三本目の煙草を手を取った。

影の通り魔 1

浩介は綾華を家まで送った後、暗くなった街中を歩いていた。

あれから日が沈むまで綾華と話込んでいた為、こんな遅い時間になったのだ。

内容は殺人犯だけの話では無く、綾華の話や世間話なども飛び交った。

何故、綾華の話も出たかというところ、勝手に浩介のプロフィールを調べた罪悪感からであった。

なんか私だけ一方的に浩介の情報を知っているのが嫌、という言葉から大して気にしていない浩介を無視して自らの情報を教えたのだった。

その中でも浩介が一番驚いたのは、依頼屋の存在を知っている理由を尋ねた時であった。

それに対し綾華は、何事も無いようにサラッと『私の父、警察庁で働いてるから』と言ったのだ。これには浩介も啞然とした。

警察庁といえば警察の中の最高機関だ。確かにそこで働いていれば依頼屋という名前だけは知っている。ただ、どれくらいの規模、メンバーの数などはいくら警察庁でも把握出来ていなかった。

あくまで浩介はこの組織にも属さないフリーの依頼屋だ。そして、フリーの依頼屋をしてる者達が大半を占めている。つまり、フリーの依頼屋を捕まえたとしても組織に関する情報を持っていない為なんの進展も起きないのだ。ましてや正式な組織として存在して

いるのかどうかも分からない。そして、需要があるから依頼屋が存在し続けている。

この食物連鎖のような繋がりで成り立っているせいもあり、いくら警察庁の人間が頭を悩ませようがビクともしない組織になっている。

そんな組織の大きさを改めて考えながら歩いていると、浩介が住んでいる三階建てのアパートが見えた。

オートロックの扉を抜け、三階の奥の角部屋が浩介の部屋だ。広めの1DKだが、物は少なく殺風景な部屋と言わざる終えない。

荷物を部屋の隅に置きシャワーを浴びる。そして寝間着に着替えベットへと寝転がった。

そしてスッキリした頭でもう一度綾華の言葉を整理する。

綾華と殺された加藤沙耶はクラスメイトだった。親友という訳ではないが、それでもある程度会話をする仲であった。そしてつい最近、沙耶から相談を受けた。

『同じ人から何度も告白され、正直困っている』と。

それには綾華も他人事のようにには思えなかった。沙耶と同じ様に何度も告白される事もあった。やんわりと断っている沙耶に対しその経験上から『はつきりと断りなさい』とアドバイスをする。

そのアドバイスが効いたのか、それ以降その男からの告白はピタリと止まった。

ホッと胸を撫で下ろしていた沙耶が殺されたのは、それから一週間後のことだった。

綾華の考えは分かった。だがあくまでも憶測でしかない。

一般の高校生が振られただけで殺人まで犯すだろうか。ならば通り魔によって偶然殺されたと考えた方が納得がいく。

だが、綾華の情報はそれだけではない。振られた男はそれ以来学校に来ていないらしい。

振られたショックで一週間も学校を休んでいる。

有り得ない事ではないが、確かに奇妙だ。それだけの時間があれば、十分な計画と準備はできる。振られたショックを恨みと捉えたなら犯行の可能性は確かにある。

「……駄目だ。駒が足りない」

今の時点では明らかに手詰まりだ。

殺人犯と通り魔。この二つが簡単なようで複雑に絡み合っている。解き方を間違えれば余計に絡まってしまう。

一筋縄ではいかない。

それは綾華も分かっているからこそ浩介に協力を求めた。

何故俺なんだ？と尋ねたとき、綾華は三つの理由を説明した。

一つ目は相手は殺人犯だということ。

犯人を暴いたとしても、対峙した時に返り討ちに遭っては意味がない。それまでの過程でも同じ事だ。綾華が事件を調べていると殺人犯が知れば何をしてくるかわからない。その為、綾華一人では限界があった。だから強い仲間が必要だった。

二つ目は浩介が他人に興味が無い性格ということ。

強い仲間。つまり大抵は男性に絞られる。だがそこで綾華の容姿が問題だった。

そこらの男子に協力を依頼したとしても二つ返事で了承してくれるが、本来の目的からは大きく外れてしまつと予測出来た。つまりは下心で綾華と接触しようとするからだ。

その点、浩介なら安心できる男性だった。女性に興味が無いとは思わないが、廊下ですれ違つても見向きもしない浩介なら心配無いと思えたのだ。

三つ目が浩介の全てが理に叶っているからだ。

頭の良さ、回転の速さ、運動神経、行動力、依頼屋としての経験。全てが理想的な人物であつたことだ。

この三つが浩介を選んだ理由であつた。

言葉にするのも照れ臭いこの理由を、綾華は真剣な面持ちで話してくれた。それは浩介にも痛いほど伝わった。

綾華は本気で犯人を見付けようとしている。

「はあ、巧いこと乗せられたな。それとも俺から乗ってしまったのか…」

そう呟く浩介はなんとも楽しそうな笑みを浮かべていた。

次の日の朝、浩介は昨日行つた喫茶店でモーニングとホットコーヒーを注文していた。

季節は十月。昼間はまだ残暑が残るが、朝晩は少し肌寒い。此処

に来るまでに冷えた身体をコーヒーで暖め、空の胃袋をモーニングで補っていた。

その際、着ている白のワイシャツに汚れが付かないよう注意していた。

それは浩介が今着ている服装がフォーマルスーツ。つまりは礼服だからだ。

今日のお昼から沙耶の葬儀がある。それに出席する為に朝からの格好をしているのだ。

モーニングも食べ終わり煙草を嗜んでいた時、カランカランと鈴の音になる。

入ってきた人物は浩介の姿を確認し、向かいの椅子に腰掛けた。相手は勿論綾華である。

「よく似合ってるわね」

「綾華もな」

綾華は黒のスーツを着用していた。

抜群のスタイルに高い身長綾華がスーツを着ると、そこらのOよりも断然似合っていると浩介は心の中で思った。

「何か食べるか？」

「家で食べて来たからいらない。私もホットコーヒーで」

お冷やを運んできたマスターにそう注文し、カウンターへ消えて行くのを確認した後、浩介に一枚の書類を手渡した。

それを無言で受け取り、目を通す。何やら履歴書のような作りで、

ご丁寧に顔写真のコピーまで付けられている。

「それが沙耶に何度も告白していた男の情報よ。名前は藤田稔^{ふじたみのる}。私達の学校の三年ね。目立った人物ではなく完全にインドア派の人間。パソコンが好きでコンピューターの専門学校に進学が決まってる。太っている体系と周囲にあまり馴染めない性格からクラスの中で虐めの対象になってたみたい。その為か学校を休む日も結構多かったみたいね」

「なるほど…。嫌な事を抱え込む性格で相談出来る親友もいなかった訳か。それが沙耶の件で爆発したと考えられなくもないな」

浩介は書類をテーブルに置きコーヒーを啜った。綾華も運ばれて来たコーヒーに口を付ける。

「そういうことね。でもアリバイまでは分からなかったからそこは直接聞いてみるしかないわ」

それでも一夜にしてここまで情報を集められる綾華に疑問を感じそれを尋ねた。

「そんなの簡単よ。今は全ての情報をコンピューターによって管理されてる。私達の学校も例外ではないわ。その学校のサーバーに侵入すれば簡単に情報は手に入れるのよ。こう見えてコンピューターは得意中の得意よ」

浩介は驚愕の目を向けた。

得意という範囲ではない。常識を一変するものだ。得意な事はコンピューター系と以前の自己紹介で聞いていたが、ハッカーの知識を高校生で身に付けている者などそう居ないだろう。そして、綾華

の態度を見る限りそう簡単にバレたりするようなへまは起こさないよう考えている。

——敵に回すと恐いな…

と頭をよぎり、苦笑いになる。

「まさかここまでとは思ってなかった。でも、尚更協力しなくなつたよ」

「それ、褒めてるのが引いてるのか分かんないんだけど…」

「どっちもだ」

元々浩介も依頼屋という法律を無視した仕事をしている為、綾華に対し注意する気もない。ましてや内容は違えど同じ立場にいる事で常人とは一線を引いている心の靄もやが晴れていくような感じであった。

「よし。そろそろ行こうか」

浩介が時計を確認すると、もう直ぐ葬儀の始まる時間であった。

お互いに残りのコーヒーを飲み干し、葬儀の場所である会館へと向かった。

会館には既に多くの関係者、生徒、教師が集まっていた。表のスペースには人が溢れ返り、事を終わらせた生徒や関係者の中には号泣している姿も目立つ。

浩介も素早く事を終わらせた。一方の綾華は長い時間遺影に手を合わせている。

その間、浩介はとある人物を探し周りを伺っていた。探している相手は藤田稔だ。

一週間学校に来ていないとしても、葬儀についてはちゃんと連絡も来ているだろう。そして葬儀には参列するかもしれないと踏んでいたが、どこを探しても姿は見えなかった。

「高崎君！来てたんだ！」

藤田を捜す事に集中していた浩介は後ろに迫る人物に気がつかなかった。そして後ろを振り向くと、そこには綾華と同じように黒のスーツを着た愛理が立っていた。

「白木か。驚かすなよ……」

「ゴメンね。高崎君が来ると思ってなかったから少しビックリしちゃって……」

他人に興味が無いという噂の事を踏まえて言ったのだろう。その自分自身の噂を知っている浩介はそう予測した。

「まあ、色々あつてな」

「??」

何も知らない愛理に下手なことを喋る訳にもいかず、浩介は苦笑いと曖昧な返答でその場を流した。

「あら？愛理？」

そのタイミングで綾華が入ってきた。

「あ…！綾華」

二人はそう挨拶を交わすと、何気ない会話を始めた。

「ふ、二人は知り合いだったのか？」

その途中で井の中の蛙状態であった浩介が気まずそうに話し掛けた。

「そうよ。同じ中学だったの。この学園に入ってから別クラスだったからあまり話す機会は無かったけど……」

「それでも学校で会ったらお話はしてたよ！…というより私としたら綾華と高崎君が知り合いだったことにビックリだよ」

「偶然学校の行事で話す事があってね。それがきっかけで友達になったのよ」

愛理の疑問に賺すかさず綾華がフォローを入れた。それに愛理は納得したようだ。

「もう！高崎君も言ってよ！全然知らなかったよぉ」

「わ、悪い」

浩介としたらそれが本当の事だとしても、愛理と綾華が知り合いだとは知らなかったの言うことは無かっただろうと思いながらも謝った。

「でも、加藤さんも凄い人気だったんだね。こんな沢山の人が泣いてるんだもん」

愛理は唐突に話題を変え辺りを見回した。それに伴い二人も視線を周りに移した。

関係者、生徒は勿論の事、綾華の担任の先生や、浩介達の担任の管先生も目にハンカチを押し当てていた。生徒の中には友達に支えられながら号泣している姿まである。遺影の傍らに座っていた両親も溢れんばかりの涙を浮かべ俯くばかりであった。

一人の命でこんな大勢に悲しみを与えている光景を綾華は目に焼き付け、ぶつけようのない怒りを拳を強く握り締め抑えていた。

それに気付いていた浩介は早速行動に移した。

「悪いな白木。これから綾華とちよつと用事があるんだ」

「え……？そう、なんだ。分かった。じゃあまたね綾華、高崎君」

「ええ、またね愛理」

綾華は軽く手を振り、浩介と一緒にその場から離れて行く。そんな二人を愛理は神妙な面持ちで見送るだけであった。

「何処へ向かうの？」

目的地を知らない綾華は隣を歩く浩介に尋ねた。

「葬儀に藤田は来てなかった。なら直接家を訪ねるまでだ」

住所は綾華の調べた書類に明記されていた。葬儀に行かないなら恐らく家に居るだろうと浩介は考えていた。

「随分と行動が早いよね」

「今の俺達は手詰まり状態だからな。犯人だろうがなかりうが早めに接触しといたほうがいい」

「そうね」

それ以降二人に会話らしい会話は無く、ただ目的地に移動するだけであった。

「うつっ……ひっ！うつっ……」

全ての光が遮断された暗い部屋で藤田稔は布団を頭から被り声を洩らしながら泣いていた。

部屋は荒れ散らかされ、足の踏み場も無い。少女のフィギアや机の上の漫画や雑誌も散乱している程この一週間荒れていた。

「沙耶ちゃん……沙耶ちゃん……」

泣いている合間もそればかりを口にしていた。今は行動で暴れる事はなく、ただ泣くばかりであった。

——コンコン

「みるー。お友達が訪ねて来たんだけど……」

そんな時、恐る恐るドア越しから呼び掛ける母親の声が聞こえた。母親もあんなに穏やかだった息子が突然この様な事態になってしまい、どうして良いか分からないでいた。

食事もせず飲み物だけ口に通す。トイレ以外部屋から出て来ず、ドン！ガタン！！と激しい物音を立てる息子に少し恐怖も感じてい

たのだ。

そんな状態の藤田は部屋から出る筈も無く、帰って貰って！と母親に伝えた。

母親は了承したのか、階段を下りて行くスリッパの音だけが聞こえていた。

藤田は再び悲しみに暮れようとしたが、今度は階段を上がってくるスリッパの音に意識を取られた。

「みる。友達がこれを渡してくれって」

そう言つと、ドアの下の際間から白い紙をスルスルっと入れてきた。

なんなんだよ！と言つように重い体をゆっくりと起き上がらせ、その紙を手にとった。

その紙はA四サイズの紙を四つ折りにしてサイドをセロハンテープで固定しただけの簡単な物であった。

藤田はそれを乱雑に開き、その内容に驚愕した。

『俺達は犯人を知っている』

とだけ書かれた紙を見た瞬間ドアを蹴破るかのような勢いで部屋を飛び出して行った。

玄関前で待っていた二人もたじろぐような勢いで飛び出して来た藤田は両手で強く浩介の肩を掴むと声を荒げた。

「ほんとかつ！？ほんとに知っているのかつ！？おい！！どうなんだ！？」

「と、兎に角落ち着け！！」

ユツサユツサと浩介の肩を揺らす藤田の両手首を掴むと、藤田もごめんと言って肩から手を話した。浩介は若干乱れた服の襟元をピツと両手で直すと、改めて藤田に向き合った。

一週間何も食べてないせいで頬は欠け髪もボサボサだ。どこか虚ろな目が窺^{やっ}れている印象を強くしている。

それを見た綾華も心なしか距離をとっていた。

「厳密に言えばあれは嘘だが、実際俺達は犯人を見つけようとしている。その為に君から話を聞きたいんだ。協力してくれないか？」

藤田の身体から力が抜けていくように、腕と首がだらんと下がった。すっかり意気消沈といった具合だ。

「沙耶の為でもあるの。お願い……」

「沙耶ちゃんの……ため……」

綾華の言葉にピクリと反応し呟いた。そして暫くの沈黙の後藤田が顔を上げた。

「……分かった。取り敢えず、入って」

その言葉に浩介と綾華は顔を合わせ一度頷いた。そして新たな情報を掴もうと、家に入ってしまった。

影の通り魔 2

藤田の部屋に到着した二人が最初に行ったのは部屋の片付けであった。

話をしようにも座るスペースもなく、一週間以上換気もしてないであろう異様な空気の中で話し合いもしたくは無かった。居間に行こうにも藤田の母親には聞かれたくはない。外出しようにもやつれた藤田と歩くことを綾華が頑なに拒否をしたのだ。勿論藤田には伝わらないようにだが。

そうとなるとこの部屋をどうにかするしかなかったのだ。

まずは綾華がカーテンを開け、窓を全開にし空気を循環させた。浩介は床に散らばっている雑誌などを纏め、藤田がそれを部屋の在るべき場所へ直していった。その間、綾華は散乱したゴミを袋へ詰めていった。

そうすることによって、ものの十分で部屋は綺麗に片付いたのだった。

それに歓喜した母親がコーヒーとケーキを運んで来てくれた為、部屋にあるテーブルを囲むような形で話し合いへと移った。

その中で口火を切ったのは浩介だった。

「さて、まずは伝えとくが、俺達はあるたを疑ってここまで来た」「ッー！」

「一つの候補としてだ。決めつけて来た訳じゃない」

浩介は藤田の動揺を抑えるよう口にした。そこで浩介の隣に座る綾華も口を開く。

「だから知ってる事を話してほしいのよ」

どのように藤田は沙耶と出会ったのか？何があったのか？沙耶は何を言ったのか？

藤田の善悪を知るにはそれを聞かなくてはならなかった。

藤田も一度は驚いた顔をしたものの、現実を考えれば疑われるのも無理はないと思えていた。

「……分かったよ。でもこれだけは言える。僕は沙耶ちゃんを愛していたんだ。殺すなんて絶対にしない」

藤田は少し悩んだが、このまま疑われ続けるのも嫌だったので話す事を決意した。何より犯人を知りたいと思うのは藤田も同じであった。

そして同時に浩介も藤田が犯人という説に疑問を感じていた。状況的には疑われる側というのは分かるが、実際に会ってみたらそのような人間かと考え直させられた。

犯人を知っていると書かれた手紙を見て直ぐに飛び出して来たことや、今までの藤田の言動を見てもこいつには無理ではないかと考えていたのだ。

「……なるべく最初から話してくれるか？」

藤田は母親の持ってきたコーヒを一口飲んだ。そしてカップをゆつくりとテーブルに戻すとコクンと頷いた。

「最初は僕の一目惚れだった。いつものように虐められた後、屋上で落ち込んでいた僕に『大丈夫ですか？』と声を掛けてくれたんだ。その時僕は沙耶ちゃんに惹かれた。あの時の優しい笑顔は今も、忘れられない……」

目に涙を浮かべる藤田に綾華はティッシュ箱を差し出した。

そこから紙を三枚引き抜くと涙を拭き鼻を咬む。それをゴミ箱へと捨て少し落ち着きを取り戻した藤田は、あの時の事を思い返すように話を続けた。

「あれから少し経って、気持ちを押さえられない僕は告白する事を決意した。結果は知つての通り振られたよ。『そこまで考えられませんか。ごめんなさい』てね。でも僕は諦め切れなかった。僕の通っている教会に行ってお祈りもしたし相談もした。その度告白した。でも駄目だった。最後の告白の時、『私今付き合っている人がいるの。その人にこんなところ見つかりたくないの。だからお願い！二度と私に話し掛けて来ないで！』と言われた。頭が真っ白になった。自殺しようとも考えてた。そんな時、沙耶ちゃんが殺された事を知ったんだ……」

自分の容姿、性格故に恋愛を諦めていた藤田にとっては沙耶が初恋の相手であった。経験が無い為に自身の気持ちをあるがままに、何度も告白をした。自分の想いが伝われば沙耶もきつと振り向いてくれると信じていた。

ところがそれが裏目に出た。ついに聞きたく無かった言葉を聞いたのだ。それが『もう私に話し掛けないで！』だった。

何日も沙耶のことを想う日々が続いた藤田は頭の中が真っ白になった。そして全てが崩れていった気がした。

それからは学校も休み、悲しさと悔しさと後悔だけが藤田を支配

し部屋を荒らしていった。本気で自殺も考えたが、それは実行に移すまでには至らなかった。

そんな藤田に沙耶の死が追い討ちをかけた。振られたばかりかその本人さえも奪うのか！と再び嘆き、苦しみ、悲しんだ。

運命とはなんと残酷なものかと生まれてきた自分を憎みさえもした。

思い出すだけで辛い記憶を話し終わると、ただ泣いていた藤田が突然机を叩いた。ダン！という音とその振動でカップに入ったコーヒ―が溢れんばかりに揺れる。

「僕じゃない……僕じゃない……」

そう消えそうな声で握り拳を作りテーブルに頭を付けるぐらいに俯いていた。

浩介と綾華もそれを見ているだけの静寂の中に、藤田の泣き声だけが聞こえていた。

少し時間が経った後、その静寂を破ったのは浩介であった。大袈裟に溜息を吐いたのだ。

「まあ、落ち着けよ。あんたの気持ちは良く分かった。加藤沙耶を好きだった気持ちも、殺してないということも分かった」

浩介はそう言うとう荷物を持って立ち上がった。もう帰るぞという意味表示と理解した綾華も立ち上がる。

二人は泣いている藤田に背を向け部屋から出ようとした時、扉の前で浩介が藤田に向き直る。

「ただ、ひとつ言わせて貰う。あんたは今のままで良いのか？このままウジウジしてるだけなら何かしら出来る事をした方が良いんじゃないか？」

「……なんだよ……今更僕に出来る事って何なんだよ！！何が出来るって言うんだよ！？」

藤田はどうして良いのか分からない苛立ちを涙と鼻水で濡れた顔で浩介を睨み付けた。

「あるだろ？今のあんたにでも出来る事が」

浩介は臆することなく、まるで赤子をあやすかのように落ち着いた口調で返す。

藤田は何も答えない。それをみた綾華が溜まらず口を開いた。

「手を合わせに行つてあげて。あなたが好きだった加藤沙耶の前で、あの時声を掛けてくれてありがとうって言つてあげてよ。あなたには辛い事だと思うけど、沙耶はもうこの世にいないのよ。ちゃんと別れを言つてあげてよ。それが今あなたが出来ることでしょ？」

それだけを言い浩介達はその後を後にした。

葬儀に行くなど考えてもいなかった。最後の挨拶など思った事も無かった。このままだと後悔するなど想像もしなかった。

藤田にとっては確かに辛かった思い出だ。でも最初に声を掛けてくれた沙耶の行動は本当に嬉しかった。救いだった。それなのに沙耶の事を考えず自己中心的に接していた。

藤田は身勝手な行動をしていたのは自分だったと気付いた。

――僕はなんて愚かなんだ……

「う……うう……あああ……」

様々な感情が芽生えていき、一人になった部屋で藤田は声をあげて泣いた。

藤田家を出た二人は一度喫茶店へ戻った。

綾華の思惑が外れ振り出しに戻った二人は、今後どうするかを話し合っていた。

しかし、振り出しとは言え全くのゼロではない。

早めに藤田から話を聞いて良かったと思えるように、藤田は多少なりともキーワードを口にし、それを聞き逃さなかった。

「綾華は沙耶の交友関係を徹底的に調べてくれ」

「わかったわ。浩介はどうするの？」

「俺は藤田の言っていた教会を当たってみる。この辺りで教会なんてそう多く無い筈だ」

藤田が教会で悩みを相談していたなら教会側も何かしらの情報を持っていると推測したのだ。

「何か分かったら連絡してくれ」

「そっちもね」

二人は今日三杯目となるコーヒをグイッと飲み干し、お店を後

にした。

思ったより早く教会は見つかった。

一度部屋へ戻り私服へ着替えた浩介は再び藤田の家付近へと移動し、辺りを散策した。すると、民家の並ぶ通りの外れにそれはあった。

そんなに大きくはないが建物自体は新しく、最近建てられたものだと思えた。そしてキリスト教が尊ぶ十字架が屋根に取り付けられていることから此処でまず間違いない。

浩介は一段の段差を上がると両開きの扉を押した。

——ギギギギイ……

真新しい扉なのだが錆付いているかのような音を出しながら内部が開放された。

木造の長いテーブルと同じ造りの椅子が設置され、大学の一室の様な雰囲気漂わせている。多くの人が巡礼出来るようその座席は中央の通路を挟んで左右に十列並んでいる。

通路の正面には燦々と輝くステンドグラスが壁と天井の境目まで高々と張り巡らされており、辺り一面をその輝く反射で染め上げていた。ステンドグラスの上部には聖像が掲げられ、教会に来る者を見下ろしている。

浩介は誰もいないガラリとした礼拝堂を見回しながら中央通路を進む。

浩介は不思議と心が安らぐのを感じていた。

そういった特殊な何かがあるのか、それともこの雰囲気がそう思わせているのか、などと思しながら最前列で足を止めると、目の前に広がるステンドグラスの眺めた。

どの位眺めていただろうか、ふと右横の扉が開いたのを感じ意識を思考から現実へと集中させた。

「気が休まるでしょうか？この神秘的な力を浴びれば誰しもそう感じるものです」

入ってきたのは首から十字架をぶら下げ、特殊な服装に身を包んだ四十代の男性であった。

「力、ですか……そうですね……確かに気が休まるような感じです。あなたが牧師様ですか？」

背格好から見て恐らく牧師だろうと断定する。
教会という場所もあり嫌なイメージを与えないよう浩介は敬語で尋ねた。

それを聞き、男は苦笑した。

「ははは、『様』と付けられるようなものでは御座いませんが如何にも、私がこの教会の牧師を務めさせて戴いております」

牧師は浩介の隣へと移動し、ステンドグラスを見上げた。

「この場所には多くの巡礼者が参られます。人生にとって不安や困難はつき物です。そういった方々がここで悩みを明かし、スッキリとして帰っていかれます。私はそれを少しでも解決へと導いて行く事を義務としています」

牧師は浩介へと視線を移す。

「あなたも何か悩みがあつて来られたのですか？」

浩介は苦笑いを浮かべる。

「悩み…と言えば悩みかもしれませんが。ただ、今日僕が此处を訪れたのは僕の話聞いて貰う為ではありません」

「……と、言いますと？」

「あなたにお話を聞きに来たのです、牧師さん」

牧師は目を見開いた。

「ほう……。巡礼をしに来るような方では無いと思っていたのですが、これはまた珍しい……」

牧師はお掛けなさいと浩介を一番前の席へ手で指定し座らせると、自身はステンドグラスの真下で浩介と向き合うように位置を変えた。

「ではお伺いしましょう。私に聞きたい事とは？」

浩介はテーブルの上で両手を絡めた。

「藤田稔という男性をご存知ですよね？」

「藤田……稔……？」

牧師は首を傾げた。

もしかしたら名前までは聞いていないのではないかと思い浩介は改めて聞き直す。

「少し小太りの気の弱そうな若い男です。最近よく相談していたみたいです。で記憶にあると思いますが？」

「ああ！あの方ですか！覚えていますよ。恋の相談で何度も来られました」

牧師は思い出した様で声を強めた。

「それで、彼はどの様な相談を？」

「先程も申し上げましたが、恋の相談です。好きな子に振られて大変ショックを受けていたみたいですね。どうしたら良いかという相談を受けました」

「それに対し、あなたはどのようなアドバイスをしたのですか？」

牧師は怪訝な顔付きに変わる。

「よく覚えてはいませんが、一回だけで諦めるなということを行いました。それが何か？」

牧師がイライラしている事は浩介も気づいていたがそれはそうだと納得する。

単なる一般人がこの様な質問をすれば誰だって好ましく思わない事は百も承知だった。ましてや相手は牧師だ。神に仕え巡礼者に教え導く行いをする者である。

つまり、家庭教師にどんな教え方をしたのですかと聞いているよ

うなものだ。

何か責められているような感覚であろう牧師は、苛立ちを抑えるかのように首から下げている十字架を無意識に手で握り締めていた。

「昨晚、その男の好きだった女性が殺されました。この付近で起こった事件です。あなたも知ってますよね？」

「え、ええ。でもまさかその子だったとは……」

牧師の驚いている顔をしり目に浩介は物音も立てずスツと立ち上がった。

「この事件は全てが繋がり過ぎている。解決しようとしても選択肢が有りすぎるんです。まるで迷路のように」

この事件の犯人を挙げるならまずは通り魔だ。だが殺人まで起こさなかった通り魔が何故今回は殺したのか、という疑問もある。

そう考えると次に加藤沙耶と何かしらの繋がりの有る人物が浮上する。それが藤田稔だ。

加藤沙耶が困るほど何度も告白をして、振られたばかりか突き放された怒りで殺してしまったと思えば納得出来る。だがそれも藤田と会ってきた浩介の思考には無い。

そうなると今度は藤田の言っていた加藤沙耶の最後の言葉だ。

——今付き合っている人がいる

そう本当に言っていたのなら、その人も何かしら関係してくるかもしれない。そちらは綾華に任せているので、浩介はもう一つのヒントを調べた。

それが藤田の通っていたこの教会と言う訳だ。

「彼が相談している時、他に誰かいませんか？」

浩介は牧師の正面に立ち尋ねた。

浩介の疑惑は藤田が相談している時、それを聞いていた第三者の存在であつた。

それを聞いた第三者が沙耶を殺したと考えられたのだ。

だがそれも加藤沙耶、または藤田稔という人物と繋がりのある者だ。何も知らない第三者が面白半分で沙耶を殺したとは考えられないしメリットも無い。ただ単に自分を不幸へと導いているだけに過ぎない。ましてや一般人がそれを出来たとすれば、相当狂っている人間だと思える。可能性は低かった。

その第三者の中には勿論沙耶と付き合いっていた人物も対象である。動機は不明だが、藤田ではなく沙耶を殺したのなら何かしらの問題を抱えていた事になる。

そして、藤田の気持ちを知っていたのならこの殺人の絶妙なタイミングも理解出来る。

容疑者は通り魔、または藤田へと優先されるからだ。

通り魔は兎も角、藤田がしつこく告白していたことは沙耶の友達の間なら既に広まっている。綾華がその情報を持っていたのも本人から相談を受けたからだ。

しかし、付き合っていた人物については直接言われた藤田以外誰も知らない。沙耶も話していなかったのだ。

藤田が警察に対し容疑を否定しても次は通り魔へと向く。通り魔

が捕まりこれまた容疑を否定しても藤田を自殺に見せかけ殺し、遺書でも置けば警察は間違い無く藤田を犯人と決めるだろう。

既に難なく人を殺しているのだ。自分が捕まらないようにするならそれぐらいは実行してしまうだろうと浩介は推測していた。

そんな思考の詰まった浩介の質問に、牧師は首を少し傾けて考えていた。

「もしくは彼の居ない時でも良い。それに関するような話をしていた人物とかでもいいんです」

「いや……そんな方は居なかったですね。彼が相談してくる時は必ず誰も居ない時でしたから……」

「そうですか……」

浩介は顎に手を付け暫く考える。

俺は考え過ぎなのか？それとも何か裏があるのか？という疑問を短時間で解消した。

当然答えは出ないままだ。

「ありがとうございます、牧師さん」

牧師に向け軽く会釈した後、浩介はその場を後にしようとする。

「あ、ちょっと宜しいですか？」

牧師は去ろうとしていた浩介を引き止めた。浩介もその言葉で足を止め牧師に向き合う。

「確かにこの事件は複雑に繋がっている様です。だから一つ私から忠告しておきます」

「何でしょうか？」

「興味本意で首を突っ込むのはお止めなさい。あなたも危険ですよ？」

その言葉に浩介はフツと笑う。

「肝に銘じときます」

それだけ返し、浩介は教会を出て行った。

辺りは既に綺麗な夕闇で染まっていた。

その中を歩く浩介は確かなる手応えを感じていた。

——やはりこの教会、一役買ってやがる……

正確な推理や矛盾点が有った訳ではない。只の勘だ。

浩介の依頼屋として幾つもの修羅場を潜り抜けてきた勘がそう伝えていたのだった。

——後は綾華待ちだな

その後、浩介はありとあらゆる構図を頭に描きながら家路に就いていった。

影の通り魔3

カーテンの隙間から差し込む日差しとカラスの鳴き声で浩介の意識はゆっくりと覚醒していった。

重い目を開け後方の棚に置いてある時計に視線を移す。

少し早いなと思える時間であったが、欠伸をしながらベッドから立ち上がる。そのままカーテンを開け、日差しを受けた身体で一度伸びをする。そしていつもの日常であればこの後顔を洗いに行くのだが今日は違っていた。

浩介は枕の横に置いていた折り畳み式の携帯を手に取り画面を開いた。その画面には普段と変わらないシンプルな時計の待ち受けが映るだけであった。

「連絡は無しか」

そう呟くとパタンと携帯を閉じた。

その相手は勿論綾華である。

昨日の夕方から今日の朝まで何の連絡も無いことからまだ調べている途中なのだろうと推測し、再びいつも通りの行動をとるのであった。

軽い朝食を食べ終えた後、浩介はこの白ヶ丘付近の拡大地図をタブレットに広げていた。そしてインターネットを駆使しながら地図に赤ペンで所々丸を付けていった。

「やっぱり毎回場所が違う。特定しにくいな……」

浩介は吸っていた煙草を灰皿へと戻し、自ら入れたインスタントコーヒーを口に含んだ。

調べているのは通り魔が犯行を行った場所である。

一件目から十三件目までの全ての犯行場所を地図上に丸付けしたが、被っている場所が一つも無いのだ。近くで行われた場所もあるが、それも二件目と八件目というように間を空けての犯行だ。そして近くの場所での三つ目の丸は無い。つまり一回犯行を行った場所の付近では今の所、間を空けての二回までという行動をとっていたのだ。

犯行時間も調べたが特に纏まった時間という訳でもない。曜日とも照らし合わせたがそれも無駄に終わっていた。

犯人に繋がる共通点も次の犯行場所も何一つ絞ることが出来なかった。

浩介は溜息を吐き出し、煙草を手にとってから地図を眺めた。考える事を止め、只ボーっと眺めているだけである。そこでふと思いついた事があった。

「そついや、このスーパーこの前通り掛かった時潰れてたな」

そんな事を思い出し、北にある隣町のスーパーにバツ印を付けた。他にもあったかと記憶を辿り地図上を指でなぞっていく。

「ん？」

浩介のなぞつていった指はそのスーパーから偶々犯行現場へと繋がる道程であった。

その丸印へ到達するまでにそれはあった。

浩介は直ぐに他のポイントも入念にチェックしていく。

「あつた……、此处もだ……」

次々に見つかっていくその場所に浩介は星印を付けていった。その全ての犯行現場に対し、二百メートルも離れていない場所に星印があつたのだ。

全てを書き終え、浩介は赤ペンを置いた。

「やつぱり……こいつは交番付近で犯行してやがる」

浩介がふと気になった点は交番であつた。

地図上を調べた結果、犯行が行われている場所の二百メートル圏内に交番が有り、犯行が行われていない場所には交番の表記が無かつた。そしてある場所だけはその二つに当てはまらなかった。

交番はあるのにその付近で犯行をしてない場所だ。そこから一番近い犯行現場を見ても七番目の犯行で日はかなり経っている。

——絞るならここしかない！

浩介は西に位置する隣町のその場所を大きくペンで囲つた。

綾華に連絡をしようと携帯を取ろうとしたが、丁度そのタイミングで携帯が鳴る。

プルプルという機械音をワンコールもしない内に通話ボタンを押した。

「何か分かったか？」

相手は綾華だと携帯の画面で知っていた為、下手な挨拶はいらなかった。

『ええ、色々と分かったわ。まだ確証がある訳じゃないけど、恐らく、ね。そっちは？』

「こつちも色々とな。……もうこんな時間か。昼飯は食べたか？」

腕時計を見ると時間は昼前を指していた。どうせなら電話ではなく直接会って話がしたい浩介は綾華に有無を聞いた。

「まだよ。奢ってね」

その意図を読んだ綾華は条件を付ける。電話越しだが明らかに笑みを浮かべている様を読み取れた。

浩介は承諾すると、場所と時間を決め電話を切った。そして、必要最低限の物と先程まで印を付けていた地図を手を持ち家を出た。

浩介がファミレスへ着いた時には綾華は既に席で待っていた。

一度愛理と来たファミレスだったので店内の配置は把握しており、容易く綾華を見付ける事が出来た。昼前ということもありそれなりに客は入っていたが、綾華の座る喫煙席は比較的空いている。

二人の大人っぽい容姿もあり、店員に疑問に思われる事も無く浩介は綾華の向かいへと座った。

「何にする？」

そう言っただけ綾華はメニューを浩介に手渡す。メニューに目を通さない綾華を見ると既に決めているようだ。

遅いと言われるかと内心焦っていた浩介だが、それも取り越し苦労だったと安心していった。

「俺はこれにする」

「じゃあ呼ぶわよ」

綾華はテーブルにある呼び出しボタンを押すと、駆けつけた店員に浩介が指を差した期間限定のステーキ定食とカルボナーラを注文した。

「じゃあ私の調べた情報から教えるわ」

店員が離れて行ったのを確認し、綾華は藤田の時と同じように書類を渡した。だが今回はびっしり文字の書いてある紙が五枚もあった。

それには浩介も苦笑いを浮かべたが、真剣な表情で目を通していった。

全て見終わる頃には注文の品も運ばれ、綾華は早くも口に運んでいた。

「候補は四人か……」

浩介は徐に言葉を出した。おもむろ

「しかも今の段階では沙耶と付き合っていた可能性があるだけよ。一人一人当たっていけばもつと絞れると思うけど」

「いや、その必要は無い。この四人の情報と加藤沙耶の情報を照らし合わせると殺人まで犯す動機が在るのはコイツしかない」

浩介は書類の一枚を抜き取り綾華に向けてテーブルに置いた。

綾華はパスタを食べる手を止め書類を見つめる。それは綾華も思っていた人物であった。

「でも動機だけよ。証拠まで見つけるのは難しいわ」
「確かにそうだな。でも本当にコイツだとしたら何か引っ掛かっているんだよなあ……」

浩介はステーキをナイフとフォークで器用に切りながら頭の中で引っ掛かる疑問を口にした。

「学校で？それとも葬儀で？」

綾華は浩介の疑問となる場所を尋ねていく。

綾華の調べた四人はいずれも白ヶ丘学園の内部の人間であった。浩介が引っ掛かる事があるならその人を見たであろう場所に限られるのだ。そしてそれは学校内部か、昨日行われた葬儀かという選択肢になるのだ。

それ以外、浩介のプライベートでの事なら綾華が知る事など無い

為に選択肢には入れなかった。

そしてそれがヒントとなった。

浩介は切っていたナイフを止め綾華に顔を向けたのだ。

「そうか、葬儀だ。あの時の行動の説明がつかない」

浩介は全てが繋がって行くような感覚だった。

「どういう事が最初から説明して」

一方浩介の考えが読めない綾華は少し不機嫌そうに問い掛けた。
浩介はそれに頷くと、教会に行った時の事から説明を始めた。

「その教会の何処が怪しいのよ？至って普通の教会じゃない？」
「だから言っただろ。俺の勘だって」

ステーキを頬張りながら苦笑いを浮かべる。

「そしてその勘が正しければこの事件もある程度繋がりを見せる」

そして浩介は依然理解していない綾華に全ての考えを説明した。

何故沙耶は殺されたのか？

いかに複雑な条件が絡み合っていたのか？
教会との繋がりは何か？

浩介の引っ掛かっていた点はなんだったのか？
今後どうしようとしていたのか？

その全てを聞き終えた綾華は愕然としていた。

「そ、そんなことって……」

「だが、そう考えれば全てが繋がる。可能性は高い」

浩介は食べ終えた器を隅へ追いやった後、いつものように煙草を吸った。綾華も自分なりに考え、その推理に納得した。

「それじゃあ直ぐに犯人と接触するの？」

「それはまだだ。先ずは逃げ道から潰していく」

「通り魔を捕まえるのね？」

「そうだ」

浩介はニヤツと笑うと、自ら持ってきた地図を綾華に見せた。

「これは奴が行った犯行現場と時間と曜日が書かれている。場所、時間、曜日とも共通点は無いが一つだけあった」

「交番ね」

綾華は現場の近くの星印を理解した。

「そうだ。そして交番は在るのにまだ犯行を行っていない場所がある。そこが――」

「隣町。蔵元六丁目の大通り」

綾華は浩介の言葉を遮った。全てを理解している綾華に笑みを浮かべて頷いた。

「決行は？」

「今夜からだ。だけどその前に準備をする必要がある」

綾華もそれに頷いた。

「じゃあ行きましょ」

そこで二人は立ち上がりファミレスを後にした。

「絶対にそこで起こる確証は無い。もしかしたら全く違う場所で起こるかもしれない。下手すれば長期戦だ。それでも協力してくれるか？」

二人並んで歩いている中、浩介が綾華の顔を見ることなく尋ねた。交番の近くで起こしている点から相手は愉快犯だと推測していた。十三件も犯行に及んでいるのだが捕まらない事に味を占め、挑発している。沙耶の事件で警察としても警戒を強めている今、間違はなく近々行動を起こすと確信していた。

その愉快犯を捕まえるには綾華の協力が必要不可欠であった。

夜に一人でいる女性ばかり狙っている為、浩介一人では犯行を見つけ難い。となれば綾華を囷にする方法が手っ取り早いのだ。

しかし一日だけなら兎も角、長期戦になる可能性も否めない為、その度綾華を囷にすることに悩んでいた。

何より綾華の精神状態を心配していたのだ。

いつ襲われるかわからない張り詰めた緊張状態を毎晩のように体感しなければならぬ。いくら綾華でもそれは厳しい事だと浩介は

不安に思っていた。

「今更何言ってるの？第一、最初に協力を頼んだのは私の方なんだし、そんな心配しなくていいわよ」

「それはそうだが……」

「それに、いざとなったらあなたが助けってくれるんでしょ？」

「当然だ」

「だから私自身はそんな心配してないわ」

「……そうか」

笑顔を向けてくる綾華を見た浩介は少し心の荷が下りた感じがした。そして絶対を守ると心に誓い、その為の準備をするのであった。

夜になり人通りの少なくなった道を、スーツを着た男がキョロキョロと周りを見渡しながら歩いていた。

場所は蔵元六丁目の大通りだ。

「ははは！バカな警察だ。事件のあった場所ばかり警戒して、この辺りは手薄じゃねーか！！」

奇しくも浩介の読みは初日にして大当たりとなっていた。

男は歩行者が居ないのを良いことに大きな声で言い放った。

男は服装自体も毎回変えており、今日は大通りを歩く為に見られても怪しまれにくいスーツで犯行に及ぼうとしていた。

「にしても、女の子いねえな！」

そう呟きながら舌打ちをする。

確かに大通りの割には人通り自体少なかった。

通り魔と先日の殺人が幾度もニュースで流れている為、自然と人通りも少なくなっていたのだ。その中で単独の女性を見付けるとなると至難の技である。

この男がそうさせているのもあるが、そんな事など考えもせずただ憤りを感じていた。

「んだよ！！折角テンション上げて来たのにこれかよ！！」

男は少し路地に入った公園の入り口で近場の木を蹴った。

今日は出直すか、と考えていた男の目にふと女性が映った。

女性は公園のブランコに腰掛けており、退屈しているように砂を軽く蹴っていた。

「きたきたきた！！やっぱり俺はツイてる！！」

男は小声でそう呟くとテンションを一気に高めガッツポーズをする。

そして、周りを確かめ女性が一人であることを確認すると、茂みの中を身を屈めながら移動していった。

「おいおい……超美少女じゃねーか！！」

女性がよく見える場所で止まると、声に出ているのかどうかというぐらいの一段と小さな口調で呟いた。

「胸はそこまで大きくないが形は良さそうだ。そしてあの長い脚と細いウエスト。顔も申し分ない。今日はお持ち帰りでもするかな？」
ぺろつと唇を舐め、男は嬉しそうに女性を分析していた。

そして意を決したようにスーツのポケットからスタンガンを取り出した。

男が綾華を舐め回すように分析している頃、浩介は綾華の座っているブランコの丁度真後ろにある大きな木の上から双眼鏡で男の行動を見ていた。

最初は綾華を大通りで歩かせることを計画していたが、それは急遽取り止めとなった。

思ったより早く不審者を見付けたのだ。

浩介が大通りを軽く見回していた時、スーツを着て辺りを警戒している男を発見した。

行動は道に迷っている人にも見えなくてもないが、浩介が疑問に思ったのはそこでは無い。

——何故あいつはスーツ姿なのに鞆を持ってないんだ？

という疑問であった。

会社帰りなら普通靴は持っている。それにこんな時間に外回りは無い。さらには人通りが少ない分、挙動不審な行動がやたら目立っている。

浩介はそれらを考えその男を通り魔だと断定し、綾華を近くの公園へと移動させた。

案の定、男は公園まで近付くと綾華を発見し、木の上で待ち構える浩介に気付かず行動を開始したのだ。

「綾華、左少し前の茂みの中で男が飛び出そうとしてる。警戒しといてくれ」

浩介は右耳につけているイヤホンと繋がるマイクに向かって小声で伝えた。それを聞いた綾華も左耳を触り了承の合図を送った。

準備の為に買ったものがこのワイヤレスで話せるイヤホンマイクであつた。

綾華が一人で行動する時に浩介が近付いては通り魔にバレてしまう。その為の情報手段として考えたのがイヤホンマイクだ。

勿論のこと綾華も目立たないように右耳にイヤホンを付けているが、情報は何か無い限り浩介だけが送っていた。綾華はその情報に全て野球のサインのような仕草で伝えているのだ。

そんな事とは知らない男は少し綾華の近くまで移動すると、スタングンを構え茂みから飛び出して行った。

「来たぞ！！」

浩介の言葉と同時に、綾華はブランコから立ち上がり男に顔を向けた。

「悪く思ふなよおお!!」

男は綾華に回避は不可能と判断し、笑みを浮かべながらスタンガンのスイッチを押した。

——パチパチッ!

スタンガンから聞こえてくる電流が綾華に迫ろうとしているが、焦りや避けようとする行動などは見られない。

そして見事なタイミングで木の上から飛び降りた浩介は、男のスタンガンを持つ右手首を掴んで着地すると、腕ごと一気に捻り上げた。

「ああ!?! あいだだだあー!!」

突然降ってきたように目の前に現れた驚きと腕に走る激痛で男は持っていたスタンガンを落とした。

浩介は男の腕を掴んだまま背後へ回り、足を掛け強引に俯せさせた。

「イテエー! 何なんだよ!?! オメエはよオ!!!」

男は俯せのまま唾を撒き散らしながら叫んだ。

「黙れ」

浩介は空いている左手で男の髪を掴み顔を地面に押し付けた。

「単刀直入に聞く。殺人を犯したのはお前か？」

男は砂に顔面を密着させながら苦しそうに首を横に振った。

「では一連の通り魔はお前の仕業だな？」

観念したように頷く。

「そうか。ありがとな」

浩介は左手を男の頭から放しスタンガンを手取る。

頭を解放された男は口の中に入った砂を必死に吐き出していた。

「ギャッ！！」

突然体中に走る電流で短く叫ぶと、男は意識を失った。

それを確認した浩介はスタンガンを男の背中から放し、そのスーツのポケットへと収めた。

「やり過ぎじゃない？」

一連のやり取りを見ていた綾華はボソツと呟いた。

「大丈夫。気絶しているだけだ」

そういう事を聞いた訳では無いが綾華は何も言わなかった。

ある程度男を調べたが特に何も出て来なかった為、浩介が匿名で警察に電話をしてから気絶している男をベンチに寝かせその場を去った。

「まさか初日で解決するとは思ってなかったわ」

その帰り道、ふと綾華が本音を零した。それは浩介も思っていたように深く頷いた。

「でもまあ、綾華に何度もさせる訳にはいかなかったからな。怪我也無かったし、何はともあれ良しでしょう」

「浩介」

「ん？」

綾華はそう言って立ち止まったので浩介も立ち止まり振り返った。

綾華は心配してくれていた浩介に透き通るような笑顔を向けていた。

「ありがとう」

浩介も笑顔を見せた。

「あいよ！」

そんな会話も緊張が解けた証である。
だが二人にとってこれは第一段階を抜けただけである。嫌にあっ

さりではあったがこの事件を解決させるための準備に過ぎなかった。

これからどう詰めていくか。

それをこの後二人で話し合いながら帰るのであった。

影の通り魔 4

通り魔の逮捕は緊急で大掛かりに報道された。

匿名の通報によって駆け付けた警官がベンチの上で意識を失い眠るように横たわる男を発見し、警官が男の持ち物を調べるとポケットからスタンガンが出て来た事で重要参考人という肩書きで連行して行った。

ただこの時点では重要参考人だ。通報の内容では通り魔がいるという事であったが、それを完全に信用するわけにはいかない。ガセの場合警察に非難が行くからである。

それを見越した上で浩介はスタンガンを通り魔のポケットに直した。

今は連行されるだけで良い。そうならば警察はその男の情報を細かい所まで調べ尽くす。全く証拠を残さない通り魔であれ、そうなればお手上げだ。

完全に無実であれば逆に調べてくれという思いもあるが、この男は黒だ。些細な情報でさえ通り魔と繋がってしまうこの男に出来ることは自白することだけであった。

男の名前は山田雅樹。やまだまさき 大学生の若い男である。

遊び半分で犯行に及び、それに味を占め何度も繰り返した。山田の自宅から事前に下調べをした場所が書き写された計画書が見つかり、その全てが犯行現場と一致したことで警察は逮捕へと踏み切り、本人も自白している為急速に事件は解決していった。

マスコミによって流されたニュースで住民は心から喜んだ。
いつまで通り魔を恐れながら生活していかなければならないのか、
という不安を払拭出来たからだ。

これで全てが解決したと誰もがそう思っていた。しかしそれは違
っていた。

山田は当然のように殺害を否定する。

ただ女性を襲い、快楽と優越感に浸っていただけなのに殺人まで
する意味が無いと思っていたし、伝えもした。

それはあくまで本人の意志であって他人には全つく関係のない話
だ。通り魔が何を言おうが結局危険因子に他ならない。殺人を犯す
理由など赤の他人からしてみたら正直どうでも良い事なのだ。

だが結果警察は山田を殺人犯と決める事は出来なかった。

動機も無ければ証拠も無い。ましてや彼にはアリバイがあった。

その時間居酒屋で飲んでいたら一緒にいた友人が証明したのだ。

山田では無いとしたら一体誰なのか。

警察は再調査をする羽目になり、浩介の考える思惑通り捜査線上
に藤田の名前が上がっていったのである。

その日の夕方、浩介は白ヶ丘学園の屋上にいた。

通り魔を捕まえ、第一段階となる準備も終えた。後は呼び出した
犯人が来るのを待つだけである。

ここからが本当の勝負だ。

この事件真相に対し浩介の推理、準備共に抜かりは無い。後は相手がどう出てくるか。その思考と思惑に頭をフル回転させ、目を瞑り集中させていた。

だが浩介は細かな点で悩んでいると言う訳ではない。
認めるか反抗するかのも二つである。

認めるならそれで良い。反抗して来るにもその時は真つ向勝負で良い。要はその方法だ。

闇討ちで来られた場合、下手しこちらが不利になる。だがそれを交わせるだけの面子はいない。綾華を戦力に入れないと考えると多少の無茶は必要だと内心決めていた。

そんな浩介の頬に温かい感触が伝わり咄嗟に顔を上げた。

そこに立っていたのは綾華であり、両手に缶コーヒーを持ちその一つを目を閉じて座っていた浩介の頬に当てたのだ。

そしてその缶コーヒーを浩介へと差し出した。

「はい、これ。私が敵なら一発でアウトよ」

若干心配そうな顔を向ける綾華に対し、気付かなかったのは殺気を出さない綾華だったからだと思いつつ苦笑する。

「悪い。少し考え事をしてた」

それでも屋上に入ってきた綾華にさえ気付かない程集中していた事に反省をし、缶コーヒーを受け取った。

「いいな、綾華。もし何かあったら――」

「直ぐに逃げろ、でしょ？」

浩介はそうだと頷いたが、綾華は逃げる気など更々無かった。

幼い頃から親の影響で護身術を習っていた事は浩介もまだ知らない。自分の身は自分で守れると思っていた綾華だが、それを知った所で命のやり取りに成りかねない現状では浩介の返答は同じだとかつていたからである。

缶コーヒーを飲み終えた時、屋上の扉がガチャリと開いた。

此処まで上がってくる人がいれば、それは呼び出した人物しかないと思定していた二人は同時に立ち上がり入ってきた人物に視線を送った。

その男も直ぐに二人を見付け歩み寄る。

「D組の楠木さんも一緒か。どうしたんだ高崎？私をこんな所に呼び出して……？」

男は五メートル手前で立ち止まり、浩介に真剣な表情で尋ねた。

「何故あなたを呼び出したか、もう気付いているでしょう？管先生」

浩介と綾華が目星を付けた人物は、浩介の担任の先生である管新太郎たろうであった。

真剣な表情をしている管だがいつも通り威厳は感じられず、どこかおどしているようにも見られる。

「い、いや。解らん」

性格上か、明らかに動揺している事を隠しきれていなかった。寒いぐらいの屋外であるが、管は顔から冷や汗を流している。

「先生。あなた、結婚してますよね？そして二人の子供もいる」

「そ、そうだが……」

「では、加藤沙耶とは不倫関係だったという事ですね？」

「——な、何を！？」

声を張る管に対し、綾華が写真を取り出し顔の前に突き出した。

二人並んで肩を組み笑顔を向けるその写真からは、恋人としか思えないほど密着している。背景に写っている部屋もそういったホテルの類いである事が容易に理解出来た。

「これ、沙耶の部屋で見付けたのよ。日付は半年前。あなたは沙耶と不倫関係にあったと見て間違い無いわね」

沙耶の部屋を搜索したのは今日の午前中である。綾華が友達だと言つと簡単に家にながらせてもらつことが出来、尚且つ部屋も容易に見せてくれたのだ。

「沙耶は藤田稔にこう言っていたそうよ。今付き合っている人にこんな所見られたくないと。その意味分かる？」

女性が彼氏に告白される瞬間を見られることは教師、生徒関係無くそう思う事だろう。

だが疑問なのは何故親友にも付き合っている人を話していないのかだ。

沙耶の性格上、親友には今まで付き合っていた男を紹介している。だが今回はそれを隠していたのだ。

浩介達は付き合っていて何か問題のある相手ではないかと思えていた。そしてこんな所見られたくないという言葉から、学校内部の人物であると推測出来る。

綾華の絞った付き合っている可能性のある四人から考えると、結婚をして子供もいる管だけということになったのである。

他の三人は沙耶と仲の良い友達なのだが、綾華が候補に管を入れたのは今にも消えてしまいそうな小さな噂からである。

二人で歩いている所を同じ学校の生徒が目撃していたのだ。少し距離があり顔も明確に分からず、それを見た学生も噂にまでしようとは思っていなかったらしく学校中に広まる事は無かった。だが調べていた綾華に偶然その情報が入ったのだ。

只の噂で信憑性も無いものであるが、この写真まで出て来たのだから間違い無い事実であると確信出来る。

最早紛れも無い証拠を見せられた管は今まで以上に汗を流していた。

「そ、その何が悪い！不倫だろうが何だろうが付き合っていた事がそんなに悪いことなのかっ！！」

「それは大して問題じゃ無い。不倫だろうがあんたの好きにすれば良いさ。だけど、その気持ち有加藤沙耶からの一方通行だったとなれば話は別だ」

「——っ！！」

「今の学生ってね、ブログとかで日記を書く子が多いのよ。沙耶もその中の一人。親友に見せるブログとは違い、もう一つの日記をとあるサイトに書いていたの」

それは悩みを書くだけでそれを見た全国の人が意見や感想を送るサイトであつた。名前や学校名などは公表せずに沙耶は悩みを日記のように綴っていたのだ。

綾華はそれをコピーした紙を管に放り投げた。ヒラヒラと舞う紙は管の足元へと着地していった。

「それによればあなたは奥さんに感づかれ、そして沙耶に終わりを告げた。沙耶は納得せず、あなたを脅した。バラしたらあなたの家庭も終わりよ、とね」

沙耶にとってみれば今の関係でも満足していた。それ程管の事が好きだつた。だが管は家庭を取つたのだ。ただ魔が差し、遊び程度の気持ちであつた。

その交わる事の無い思想が沙耶を強気へと出させ、管が手に負えなくなる結果を生んだ。

管は何も言えずただおろおろと視線を変えるだけだつた。

浩介はそんな管を尻目に煙草を吸い始めた。今更教師面出来る訳も無く、バレた所で浩介には何の支障も無い。

「そこであんたが浮上した時、俺は一つの疑問を感じた」

浩介が言つたのは何か引つ掛かる事があると言つていた内容であ

る。

「葬儀の時、あんた泣いていたよな？」

浩介の思い浮かべた出来事は沙耶の担任と共に、ハンカチを目に当て泣いていた管の姿であった。

「教師として——と、当然のことだ!!」

「今更何を言つてやがる？」

呆れた口調で言い放ち、煙を吐き出した。

「あんたは不倫関係にあつたんだぞ？しかもあんたにその気は無く妻にバラすと脅されている中だ。あんたがする行動は泣く事では無く、寧ろ喜ぶ事だ」

「そ、それは——」

「だがあんたは当然のように泣いていた。いや、そう演技をした。それが当たり前の出来事であるかのように」

管が犯人だと考えたあの時、浩介はそう思っていた。

不倫であろうが二人が満足していれば泣いていても不思議ではない。寧ろそうあるべきだ。だが現に沙耶は殺されている。となれば何かしらの問題を抱えている事になる。殺人まで起こさなければならなかった重大な何かをだ。

そんな奴が涙など出る訳がない。

そう考えた時、泣いているのは演技だと確信したのだ。

「じゃあ何故あんたは演技をする必要があつた？ 答えは一つだ。バレたくない出来事は不倫などでは無く、事件の方を優先したからだ」

愛し合っていたのなら泣いた方が自然。ただそれとは関係無く、不倫関係がバレたくなければ泣いた方が余計疑われる。なら泣かずに立ち回る方がバレにくい。

だが事件についてバレたくなければまたその逆となる。

泣いていればそんな人が殺す訳ないと他人に思い込ませる事が出来る。不倫はしていたものの、それを知っている人はいないと思っていた管にとってどちらを優先するかは一目瞭然であつた。

そう考えれば管が事件に関与している事は火を見るより明らかだ。

「あんたは考え過ぎた。それが裏目となり俺達に疑われる事になったんだ」

管の顔は既に青ざめていて死人のような顔つきになっていた。だが、まだ切り札を隠し持っていた管はニヤリと口元を吊り上げた。

「凄いな高崎。見事な推理だ。だがその推理は未完成だ。私にはその時間にアリバイがある」

一般人の推理では極めて難易度の高い問題である。

管は余裕があるかのように言葉を出した。

「それは確認済みだ。あの時はずっと家族と共にいたんだろ？」

管の妻に確認を取ったのだからまず間違いは無い。管はあの日早めに帰宅し、常に妻と子供と一緒にいたのだ。

ならば何故こんなに浩介は余裕を持っているのか。

——そんな筈はない！

有り得ない思考が頭に浮かび、一度は引いた冷や汗が再び管の額から流れ落ちる。

「殺害したのはあんたじゃない。だが引き金はあんただ。計画犯と実行犯と言った方が分かり易いかな……？」

「は、はは……誰がこんな計画に手を貸してくれると思ってるんだ？」

強気には出るが、焦りは治まらない。

管は唾を飲み込んだ。

「金を出せばどんな依頼も引き受ける奴等、通称『依頼屋』だよ」

浩介の言葉に管は驚愕の目を向けながら、一步、また一步と後退していった。

一般人には余り広まっていない依頼屋の存在を知っていた浩介に動揺し、恐怖すら感じていた。

警察でさえ把握していない依頼屋を使えば間違い無く上手くいくと思っていた。そして好都合なことに通り魔が出没しているこの付近なら真っ先に疑いが掛かる。そして藤田稔という存在も大きい。その二つの壁が自身を守っていたのだ。

なのに何故これほどまで暴かれているのか、今の管には考える冷静さも無かった。

「なっ！？何故……その存在を――」

「あんたが知る事じゃない。それと最後に聞かせて欲しい。やっぱりあんたもあの教会に行つてたんだな？」

これは賭だった。

何故管が依頼屋を知っていたのか？どこで接触したのか？今の浩介達には正確に答える事など出来なかったのだ。

藤田の存在を管が知っていたのも、沙耶から聞いたと考えられる。だが、藤田が振られて一週間という絶妙なタイミングからして管が全てを計画していたとは考え難い。

では協力していた第三者は誰なのかと考えた時、藤田の行動を事細かに聞ける教会という結論に辿り着いた。

だが所詮憶測であり、浩介の勘でしかない。否定されたらそれまでだが、今の管ならばリアクション一つで見極められると確信していた。

案の定管はさらに動揺していた。

「な、何故それを……！？」

「やっぱりな」

その言動で浩介は確信した。

あの教会が『依頼屋という組織』の一部である事を。

「いやはや、お見事。高崎浩介君」
「!？」

静寂な屋上に声が響き渡る。

綾華でも管でも無い。まるで違う低い声に浩介は聞き覚えがあった。

管の立つ後ろ、屋上の扉から二人の男が姿を表し、その中の見覚えのある男がパチパチと拍手をしながら歩いて来る。

「やっぱりあんたが計画犯だったんだな、牧師さん」

それは教会で会った牧師であつた。以前と変わらぬ格好で首から十字架をぶら下げている。

一方もう一人の男は見覚えは無く、ただニヤニヤと笑みを零しているだけであつた。

その中、真つ先に動いたのは管だつた。

助かつたと思ひ牧師の元へ駆け出して行つたのだ。

牧師は管の肩をポンと軽く叩くと再び浩介達との距離を詰めていった。

浩介としても牧師が来ることは想定内である。管を呼び出した時点で協力者に応援を求める事ぐらい想像していたのだ。

「あなたは随分と頭が切れるようだ。依頼屋と何か繋がりでもあるのかな？」

何故依頼屋の事を知っているのかという点を尋ねてきていると解釈した浩介だが、元々本当の事を話すつもりは無い。

「まあ、俺も色々あったんでな。闇社会については何かと知ってるんだよ」

浩介はそう言いながら短くなった煙草を足下へ落とすと靴で踏み潰した。

「そうですか。まあそんな事はどっちでもいいんですけどね」

浩介達から五メートルの距離を空け三人は足を止めた。

「どうすんの？」

浩介の耳元でそう囁いた綾華は、チラツと管でも牧師でも無いもう一人の男を見た。

髪は短めに揃えていて、グレーのシャツにシンプルなスラックスといったラフな格好をしている。だが、服の上からでも分かる強靱な筋肉と異質なオーラは綾華も危険だと判断したようだ。

浩介も綾華と同じ思考を持っており、最も警戒しなければならぬ相手だと認識していた。

「どうにかする。綾華はタイミングを見計らい逃げてくれ」

浩介も綾華にそう囁いた。

「そう簡単には逃がしませんよ」

二人のやり取りから何となく解釈した牧師は苦笑しながら釘を差した。

内容を理解された浩介もまた苦笑する。

「あんたらはどういう関係なんだ？」

ここで言い争いをしても意味がない。浩介は話題を変え、率直な疑問を口にした。

「簡単な事だ。管さんが加藤沙耶との事について相談しに来ていたんだ。それから暫くして、……彼、なんて言ったかな？」

「藤田だ」

「そう。藤田君が相談しに来たんだよ。あの時程笑った事は無いかも知れない。フツ……偶然が重なり合って面白かったよ」

牧師は思い返しながら心の底から笑っていた。

その対応に憤怒した綾華は一步前へ出ようとしたがそれを浩介が手で制した。

「それであんたは加藤沙耶を殺す事を提案し、そいつからがつつり金を巻き上げた訳か」

そいつとは無論管の事である。

もう教師とは思っていない浩介は目線だけで牧師に伝えた。

それに牧師は頷く。

「あんたの教会は『依頼屋』の組織の一部と考えていいのか？」

「少し違うな。確かに繋がってはいるが正式な組織の一部ではない」

「となると、仲介役のような感じか？」

「本当に頭が切れるな。その通りだ。我々が依頼を受け計画を立て

る。後は依頼屋組織に頼み近場の奴に実行して貰う。勿論フリーの奴等ではなく組織によって鍛えられた連中にな」

「成る程。だがそれほどの組織だ。中には失敗する事もあるだろう？」

浩介はある程度は理解した。

依頼屋という組織は確かに存在している。どういうシステムかは知らないが仲介屋などから依頼を貰い人選をして送り込む。それで得たお金が幾らか入るという流れだ。

しかしそこで一つの疑問が生じた。

何故ここまで表沙汰にならないのかだ。

聞く限りそこまで複雑な組織ではない。そして各地に展開されていると推測すれば捕まってしまう奴も多くいるはずである。牧師が近場の奴と言っていた事からかなり人数は多いと考ええるからだ。

だがそんなニュースを聞いた事もなければ、存在自体知っている一般人も少ない。

どうやって隠し通しているのか浩介には検討がつかなかった。

そんな中、管と筋肉質の男に挟まれ、真ん中にいた牧師は一メートル程度下がりの口を開いた。

「そうだ。しかし、この組織モルルには厳しくてな。バレそうになればどんな手段を使っても隠し通す」

「俺達を殺した後、藤田を自殺に見せかけ殺すのか？」

「……そこまで気付くか。だが、それだけでは終われない」

その言葉で筋肉質の男が管にチラリと目を移し、手を後ろの腰元へと移動させた。

「——ッ！？ 逃げろ！！！」

浩介が叫ぶのと男が踏み切るのは正に同時であった。

管がとつさに反応出来る筈も無く、何がなんだか分かっていない様子でおろおろとしていた。

そして浩介の言葉虚しく男の手に持ったナイフが深々と胸に突き刺さったのである。

影の通り魔 5

いつも通りの日常。それは毎日変わり映えなく物事が進んでいく。

そんな日常に不満は無かった。

刺激が無く退屈だと感じる人もいるが、それでも幸せだと思えていた。

朝起きて家族の朝食を作る。夫と子供達を起こし、たわいもない会話と共に朝食を食べ終える。子供達がワイワイと騒いでいる中、洗い物を済ませ洗濯機のスイッチを入れる。どこか頼りない夫のネクタイを結び、忘れ物がないか確認を取る。それぞれ弁当を持たせ、元気良く出掛けていく子供と夫を笑顔で見送る。それから洗濯物、掃除、買い物とテキパキとこなす。

確かに変わらぬ日常であるが満足出来る日々を送っていて何の不満があるだろうか。

頼りない夫はあるが二人の子供も授かり、すくすくと成長していく様子も楽しく毎日が過ごせる気持ちの一部だった。

それが崩れていったのはいつ頃からだろうか。

「ねえ、パパは？」

六歳になる息子が、帰って来ない夫の所在を尋ねる。

いつもははしゃいでいて騒がしい息子も今は静かにしている。

「パパね、急なお仕事が入ったの。もう少しで帰って来るからね」

妻は夕食の準備を一旦止め、息子の頭を優しく撫でる。

込み上げる不安感を持っているのは妻だけではなかった。一つ下の娘もソファ―に座り何をするわけでもなく静かにしている。

いつもより信じられない程元気の無い子供達だったが、その理由を尋ねる事など恐くて出来なかった。

この不安を言葉にするだけで身体が震えてくるような居心地は何か？いつから不安というものが芽生えたのか？

そう――あれは半年前からだ。

夫が何かを隠すようになった時から、少しずついつもの日常が変わっていった。

――コロコロコロ……

そんな事を思考している時、暗くなった空が一瞬明るさに包まれ唸るように音を響かせる。

「……雷？ 今日是一日中晴れの予報だったのに……」

空からはポツリ、ポツリと雨粒が落ちていた。

予報とは全く逆の天候に底知れない不安が増す。

――早く帰ってきてよ……あなた

妻はそんな思いをただ祈るだけであった。

筋肉質の男は管から大きめのナイフを引き抜いた。

胸からは夥^{おびただ}しいほどの血が溢れ、管はまるで人形のように崩れていった。

急所を外すなど野暮な手段は選ばない。失敗した時の危険因子はこうして排除していくと言わんばかりに、寸分の狂いも無く心臓を貫いていた。

生死を確かめるまでもないこの状況で、筋肉質の男は高らかに笑った。

ポツリポツリ降っていた雨もいつの間にか本降りになり、管の周りを血の海に変えていく。

誰が見ても悲惨と思える現状の中、浩介は拳を握り締めた。

「……それがお前等のやり方か？」

怒鳴る事もせず、牧師と男を睨む。
それに牧師はフンツと鼻で笑った。

「そうだ。こいつをこのまま生かしておくにはリスクがあるのでな」

そう言って牧師は倒れている管を足で蹴り、仰向けにさせた。既に絶命している事を確認し、筋肉質の男の肩に手を置いた。

「そして勿論、君達にも死んで貰う」

当然と言えば当然である。

管を殺しておきながら、浩介達を生かしておく筈は無い。ましてやそこまで追い込んだのは全貌を暴いた浩介達に他ならないのだ。

この逃げられない状況に浩介は腹を括り、いつでも動けるよう楽に構えた。

注意すべきは筋肉質の男だけだ。一度戦闘になってしまえば牧師など輪の外だ。

綾華に少し下がるよう伝え、浩介は筋肉質の男を凝視していた。

「知つての通り、この男は組織に鍛えられたメンバー。加藤沙耶という女を殺した依頼屋だよ。君も抵抗しなければ楽に死ねる」

牧師の言った事は大方の予想はしていた。

出しているオーラ、管を殺した身のこなしを見てもかなりの実力者だと分かる。この場所に来ている事も考えれば、事件に関与している人物だ。

管を依頼者という立場に置けば、牧師は計画犯、残すは実行犯ということになるのだ。

「悪いが最大限に抵抗させてもらつ。そう簡単に死ぬ気は無いんで

ね」

身構える浩介に男はベツトリと血の付いたナイフをポケットから出した布巾で丁寧に拭いていく。

その布巾をその場に捨てると一歩浩介に近づく。

「まあそう警戒すんなよ。あんたを殺すのはもう少し後なんだからよ」

「！？」

それに驚いたのは牧師のほうだった。

「何を言ってる！？こいつらをここで殺す為にお前を連れて来たんだ！みすみす逃がすつもりかっ！！」

組織の概要を世間に知られたくない。その為の手段として抹殺という方法を決めたのは紛れもなく依頼屋組織そのものだ。

ここで浩介達を生かしておくことはその組織自体にリスクを背負わせる事になる。

男は苦笑しながら短髪の髪をボリボリと掻いた。

「そうじゃねーよ。こいつらはここで殺す。それは間違い無い。だが、その前に問題はあんだだよ」

「何っ！？」

「あなたの計画でそもそもこうなったんだ。金欲しさに下らん依頼を俺に頼んだお前の落ち度は大きいぜ」

牧師の顔は見る見る青ざめていく。

組織がそんな牧師を野放しにしておく訳がなかった。

一般人から取れる金額は限られる。闇の組織だけにその金額は微々たるものである。ましてやその計画も見抜かれたことで組織は牧師をも危険因子と判断した。

下らない依頼――

男が言ったように組織にしたらメリツトの少ない、ましてや無いと言っても過言ではない依頼だった。そして結果が全てであるという理念の元、この結果は到底許されるものではなかった。

「何故だ！私はどれだけ長い間あんた達の組織に手を貸したと思っているっ！？ たった一回…… たった一回ミスをしただけで私から手を切る気かあー！！」

「あああー、うつせーな！ガタガタ騒ぐな」

男は騒ぐ牧師に対し耳を塞ぐポーズをすると、さぞかしめんどくさいといった表情をした。

「あんたがどう足掻こうが、これは上からの命令なんだ。それに、一回ミスをして生かしておく程組織はあんたを重要視してないんだ」

ストレートに言い放った男は牧師にナイフの切っ先を向けた。

牧師は思わず腰を抜かし、雨で濡れたコンクリートの床に尻餅を付く。

「あんたに恨みはないが、死んで貰うぞ」

「ちよつと待てよ！！」

その言葉で男は牧師から声を出した相手へと視線を移した。その相手は勿論浩介である。

「あんたら組織の事情なんて知らないが、そういった手段を取っていると知った以上尚更そいつは殺させない！」

組織をこのままにしておく訳にはいかなかった。

今まで犠牲になってきた人達は計り知れない。ならばその全容を表に出させなければ何も変わらない。その為には牧師に生きて全てを話して貰う必要があった。

浩介は男に一步近付いた。

「高崎浩介。安易な正義感からものを言うのは止めとけ。結果は変わらないぜ」

「ただあんた等がカスの集団だと認識しただけさ。正義感なんかじゃない。それに……俺を殺したいんだろ？」

浩介は笑みを浮かべ男を挑発した。

「……ほう」

身体が疼く――

男はそんな感じを抱いていた。今まで何人も殺して来たがこんな感情は久し振りだと笑みが零れる。

静寂の中コンクリートに打ち付ける雨音だけが聞こえてくる。

張り詰めた緊張感に綾華も声を呑む。

大きな組織が絡んだ一つの事件から始まりどうという結末を迎えるのか、綾華は無意識に胸の前で祈るように両手を絡めていた。

そして先に動いたのは男だった。

「ぶはっ!!」

男は近くにいた牧師の腹を力一杯蹴り上げた。

地面に座る形になっていた牧師は突然の事に受け身も取れず、三メートル飛ばされ苦しそうに倒れ呻いている。

「こいつは後でいい……。高崎浩介。俺を失望させるなよな」

浩介に向き合う男からは闘争心が溢れ、正に戦闘狂といった感じだ。

浩介もゆっくりと戦闘姿勢で構えた。

「安心しろ。お前に屈辱を与えてやるよ」

「……それは楽しみだ」

男は構えもせず突っ立つ形を取った。だが隙は無い。

状況では浩介が圧倒的に不利だ。

相手の手に握られているナイフをチラッと見た浩介はそう自覚した。不用意に近付けばあつと言う間に殺られる。だが近付かなければ勝算は無い。この間合いを失敗すれば命の確証は出来ない。

——ならば……

浩介は地面を強く蹴り一気に男までの距離を詰めた。あくまでも自分の間合いへと男を入れることを意識し、絶妙なタイミングで顔目掛けて拳を振り抜いた。

「——っ!？」

予想以上のスピードと無駄の無い動きに男は驚いたが、迫る拳を寸前のところで顔を後ろへ逸らし回避した。

あくまで躲されることは想定内だった。今度はそのまま体を反転させナイフを持つ右腕に回し蹴りを放つ。

蹴りは見事に命中し、男はその衝撃でナイフを落とし体勢を崩した。

浩介はその好機を見逃さず、再び顔を殴った後体を蹴り飛ばした。

落下防止の為に網状のフェンスにぶつかる事で勢いが止まった男は、崩れ落ちる事なく張り付けのような格好でフェンスを掴み、浩介に顔を向けニヤリと笑う。

そして何事も無かったかのように体勢を直し、殴られた時に切った口元の血を親指で拭き取った。

「成る程……大口を叩くだけの事はある。お前、何か格闘技でもやってたか？」

「いや、何もしてない。それに格闘技じゃお前に勝てないだろ？」

逆に浩介は質問を返し、そりゃそうだと男は肯定した。

格闘技のような動きでは型が決まり簡単に男に見破られる。あく

までスポーツでの動きの為、訓練を重ねた強者であろうとそこにはルールが存在する。

しかしルール外となるとその動きは極めて単純なものに変わり、それ以外の動きは僅かではあるが鈍ってしまう。

これは命を賭けた殺し合いだ。その僅かな鈍りでさえ致命的となることを浩介は知っていた。だからあくまで殺し合いの中での動きを実践していた。否、それしか知らなかったのだ。

型にはまらない浩介の動きは相手にとっても予測が付け難く、パワーとテクニク、スピードと感覚全てをその場の状況で変化させ、自分流の戦闘スタイルで戦っていた。

その一般人とはかけ離れた戦闘能力に男は驚いていたのだ。

「お前もこっち側の人間か？」

「一緒にするな。その一線は見極めているつもりだ」

「なら、その一線を踏み出す覚悟もしとけよ！！」

今度は男から仕掛けた。

同じように距離を詰め、流れるような動きで攻撃を繰り出す。浩介と同じ——いや、それ以上のキレの良い動きで多種多様な技を繰り出す。そして圧倒的なパワーで全て急所になる箇所を突いて来る。

——このままじゃマズい！！

防ぎ、躲しの防戦一方の浩介は男の動きが徐々に早くなっていくのを感じていた。

攻撃しようにもそのタイミングさえ与えない男は不適に笑う。

「どうした！？こんなもんか！？」

「クソッ！！」

浩介は強引に拳を放ったが、簡単に防がれそれが隙を作る羽目になった。

「オラアア！！」

男の一撃が浩介の顔に直撃し、その反動で倒れそうになるが直ぐにバックステップをとり倒れる事はなく距離を取った。

「寸前で後ろへ跳び衝撃を弱めたか。そのままなら致命傷だったな」

それでも口の中を切った浩介は溜まった血を吐き出し男を睨む。

「桁外れの力だな。危なかったよ」

「楽しいねえ。普段は下らん奴らを相手に依頼を遂行するだけだが、こんなに楽しい戦闘は久々だぜ」

いつもなら相手はもう戦闘不能になっている。だが浩介はまだ致命傷を貰っていないばかりか、一撃を与えている。

それを男は快感に捉えていた。

「俺は東野和樹^{（いづみかずき）}。依頼屋組織実行部に所属している」

「どんな気の変わり様だ？」

「冥土の土産だ。楽しい戦闘をしてくれるお前にな」

東野は最初に落としたナイフを拾うと、濡れた取っ手を脇の下で拭いた。

「当然だが俺は本気で殺しに行くぜ」

拒否権の無い浩介は構える事で承諾した。

東野は直ぐ攻めに出る。

ナイフを駆使し怒濤じうたうの攻撃を仕掛けていった。

隙のない動きをするのは相変わらずであるが、浩介も思考を全て戦闘に集中させ東野を凌ぐかのような機敏な動きでそれらを躲し、反撃さえ繰り出していた。

軽い切り傷は少しずつ増えていくが、浩介の攻撃も東野の胴体を捉え始め、その痛みで少しずつ動きが鈍っているのは明らかだった。

勝算を見た浩介は一気に猛攻を仕掛け攻撃が当たる回数も増えていった。

「まだまだだぜ……まだたんねーよ」

強気の言葉を出す顔に余裕は無い。

「……強がりやがって」

ナイフの突きを出してきたのを避けると同時に脚に強烈な蹴りを入れ体勢を崩させた。だが東野はそれすら気にする事無く、そのま

ま浩介の腹にナイフを突き刺そうとする。

——クソッ

まだ躲せる。だが躲せばこの好機を潰す事になる。

浩介は一瞬悩んだが、予定通り崩れた体勢の東野の顔面を渾身の力で殴りつけた。

東野は吹っ飛び、フェンスにぶつかり崩れ落ちた。

「——うつ！ くそ……」

そして浩介もまた地面に膝をついた。脇腹からは真っ赤な血が雨と共に地面に落ちる。

「浩介！！」

そう叫び走って来たのは綾華だ。

雨なのか泣いているのかは分からないが、顔は今にも泣き出しそうに崩し浩介の前でしゃがみ込んだ。

「心配無い。掠めただけだ」

突き刺さりはしなかったが、それでも傷は深い。綾華に心配させないよう軽めに言ったが、溢れ出る血の量から軽傷でないことは綾華も分かっていた。

「今すぐ救急車を呼ぶから！」

携帯を取り出そうとした綾華だったがそれを浩介が手で抑えた。

「何で——？」

浩介が見ていたのは綾華では無かった。綾華もその視線の先を追うとそこには立ち上がっている東野の姿があった。

鼻血を流し、形からして骨も折れている。

「それなりに打たれ強さもあるって訳か……」

会心の一撃だった訳ではない。ナイフで横腹を突かれた事によりその分威力は落ちたのだ。それでも十分な手応えはあったが東野には致命傷には至らなかったようだ。

浩介も脇腹を押さえ、激痛で顔をしかめながら立ち上がった。

東野は鼻に手をやり、顔を振ってポキッと骨の形を直す。

「ふう……効いたぜ、お前のパンチ」

「ならそのまま寝たい欲しかったな」

東野は笑みを浮かべた。

「それはできねえ相談だ。俺も負ける訳にはいかねえからな」

それを最後に両者は再び戦闘態勢になる。お互い身体に負担があり本来の動きは出来ない。つまり長期戦は無いと自覚していた。

死にたくないというのは誰でも同じだが、浩介が死ぬことは綾華も死ぬことに繋がる。それだけは防がなければと思考しながら、じわりじわりと東野への距離を詰めていった。

だがその時、予想もしていなかった事態が起こった。

落ちていたナイフを拾い、東野に刃を向ける牧師が立っていたのだ。

手足はブルブル震え、ナイフの照準さえ定まっていな。腰は引け恐怖の顔を向けている牧師に浩介は舌打ちをした。

「ああ？お前はお呼びじゃねーよ、牧師さんよお」

「何してる！？早く逃げろ！！」

依然動かない牧師に浩介は叫んだ。

「だ、黙れ！……殺される前に……こ、殺してやる」

だが、恐怖心が体を支配された牧師は一步も歩けなかった。

一方の東野は躊躇無く牧師に近寄って行く。

「くそっ！」

ここで牧師を殺される訳にはいかない。東野を止めようと走ろうとした浩介の脇腹が激痛を伝え、浩介はその場に倒れた。

「逃げろ！！」

倒れても牧師に向かってもう一度叫ぶ。

東野は牧師から簡単にナイフを奪い取ると、牧師の顔に両手を挟んだ。

「じゃあな、牧師さん」

一言そう言い残し、牧師の顔を思い切り捻った。

——ゴキッ！

首から上があらぬ方向に曲がった牧師は白眼のまま倒れていった。

「……っ！」

「何だ、そんなに助けたかったか？あいつはあんたらにしたら敵なんだぜ？」

俯いたまま地面の上で握り拳を作る浩介に、冷めた口調で問い掛けた。

その言葉で浩介は顔を上げた。

「……そうじゃない。そいつは確かに敵で許すことは出来ないが、死ぬことじゃ何も解決しない」

「それは意見の不一致だな。俺達組織の人間はあいつを殺したい。リスクがあるからだ。だがその組織を暴こうとしているお前達は牧師を生かしたい。それだけの情報を持っているからな。要は、俺達は交わることはない敵だということだ」

「分かってる。だから今度はお前を檻の中へぶち込む」

浩介はゆっくりと立ち上がり今までにない冷ややかな眼差しで東野を睨んだ。

「浩介……」

綾華は浩介が戦うことに不安を抱いていた。

これ以上深手の傷を負えば間違い無く命に関わる。だが浩介の顔を見ればそれすら覚悟しているのだ。浩介が勝とうが負けようが、どの道『死』というものが思い浮かぶ現状に底知れぬ不安があった。

そんな綾華の思いとは裏腹に浩介が動いた。

傷を負っているとは思えない程のスピードで距離を詰め、攻撃を開始した。

東野も流石というべきか、一瞬の攻撃を見切り、避けながら浩介の首にナイフを振りかざす。

――殺^やった

躲すことは不可能なタイミングだ。東野も終わったと思っていた。

だが浩介は左腕を間に入れることで防いだのだ。

止まることのないナイフはそのまま浩介の左腕に突き刺さり、首に到達する事は無くそのまま東野の頬を殴り飛ばした。

「ぐっ！お前……」

東野はよろめきながら呟いた。

浩介は左腕からナイフを抜き取り、息を一つ吐き出した。

「これが俺の覚悟だ。俺が倒れるのが早いか、それともお前か。これからは持久戦だ」

「おもしれえ！」

東野は滅多に味わう事の出来ない高揚感を覚え、口元を吊り上げながら向かって行った。

そして完璧な間合いで素早く浩介の顔へ左拳を振り出した。

東野の利き腕は右である。じゃあ何故左手でパンチをしてくるのかと疑問に思う浩介だが、考える時間も無く咄嗟に右腕でガードした。

しかし振り出した左手は直前でピタリと止まり、次は右手を振り出した。

——なっ！？こいつ！！

そこで浩介は理解した。

ガードに使っている右腕を解除して再びガードするには間に合わない。ならば左腕でガードするしかないのだがナイフの突き刺さった左腕が素早く動く筈も無い。そして東野の右拳がそのまま浩介の左腕に直撃した。

「ぐあああっ！！！！」

ピンポイントに捉えた傷口から血が噴出し浩介は膝を付いた。更に東野は浩介の脇腹に蹴りを入れ追討ちをかけた。

浩介は軽く飛ばされ地面に仰向けで大の字になって倒れた。

「——っ！！」

悲痛な面持ちの綾華も、対する東野も終焉しゅうえんを迎えたと思った。ぴくりとも動かない浩介から流れ出す血液がそれを物語っている。

——身体が軽い……

だがそれが今の浩介が感じている異変だった。

頭の中は余分な考えも無く何故かスッキリとしていて意識もはっきりしている。次に右手の指を少し動かし、左手の指も動かす。

——左腕は危ういが、体はまだ動く！

自分の意識と身体を簡単に分析し、まだ戦えると思考した浩介は近場に落としたナイフを握り、ゆっくりと体を起こし立ち上がった。

「こう……すけ……？」

「なっ！？お、お前……まだ……」

有り得ない！というように綾華は号泣し、東野は驚愕していた。

「まだ……終わってないぞ」

弱々しく、だがはつきりと口に出した。

「……っち！今度は殺してやるよ……！」

東野は地を蹴り一瞬にして浩介の懐に入った。だが浩介に焦りは無い。

研ぎ澄まされた集中力で東野の動きが鮮明に読み取ることが出来、まるでスローモーションになったかのような感覚であった。

今まで感じたことの無い感覚で東野の攻撃も簡単に見極められたのだ。

「てめえ!!」

東野が出した強烈な拳をいとも簡単に避ける。次の蹴りもバックステップで躲した。

簡単に躲されることに募る苛立ちを隠せない東野は一撃に賭けるかのように大きく右腕を振りかざした。

「ぐあっ!!」

ところがそれが届くことはなく、浩介は振りかざした瞬間の隙を見逃さず右肩にナイフを突き刺した。

東野は距離を取り右肩を押さえながら浩介を陰しく睨んだ。

「お前みたいな奴がいるとはな……」

「言っただろ。屈辱を与えると」

痛みは感じない。良く言えば浩介にとって生きる懸橋となり、悪く言えば死への前兆となる。

これが死ぬ時の感覚かと思いつつ、何もしないで殺されるより幾分マシだとポジティブな考えであった。

暫く沈黙が続き決着への道筋を思考する両者の間に、聞き慣れない女性の声が遮った。

「和樹がここまで追い詰められるのは初めてね」

突然の声で三人は一斉に聞こえた場所、屋上の入口へと視線を移す。

そこにはラフな格好だが胸元をパツクリ開けたスタイル抜群の女性が傘を差し、血の海と化した悲惨な光景を眺めていた。

——新手か……

一見何処にでも居そうな二十代後半の女性という印象を受けたが、東野を知っているとすれば同業者という考えで間違いない。

そう判断した浩介は尚更死への確率が高くなったことに、ただ苦笑するのであった。

それを見た綾華は直ぐに浩介へと駆け寄り体を支える。

自分がどうにか出来るとは思っていないが、綾華もこの状況になったことで命を懸けることを決意し、浩介の一步前へと出た。

一方の東野も怪訝な表情をしている。

「何しに来やがった、玲奈！助太刀なんていらねえ！！」

「何を言ってるのよ？私があなたの闘いを邪魔したことある？」

玲奈と呼ばれた女は微笑みながらそう答えると東野に近付いてい

った。

「……無いな。じゃあ何をしに来た？」

今まで助けられた記憶など無い。ならどうして此処に来たのか疑問に思いながら女性の言葉を待った。

「撤退命令よ」

「あ!？」

東野としてもそれは予想外の返答である。

「牧師の真似をするわけじゃねえが、今更こいつらを見逃せつていうのか？」

「組織として今あなたを失う訳にはいかないし、デメリットも多いと上層部は判断した。百パーセント勝てると保証出来るの？」

それに東野は答えられなかった。今の浩介と戦っても勝てる自信はあるが、確証は出来ない。もし負ける事があれば組織は大打撃を受けると想定した上での判断だと考える。

だとすれば東野が勝てると保証しようが、今の状況では個人の東野に集団の組織が任せきる程安心出来るものではない。つまり、東野が何を言おうが決断が覆ることは無いのだ。

苦虫を噛むような表情で無言の東野の様子から了承したのだろうと判断した女性は満足そうに一度頷き、浩介達に顔を向けた。

「私は烏丸玲奈^{からすまれいな}。悪いけど、私達はここで失礼するわ。あなた達が黙認するなら当分組織からの刺客は来ないから安心していいわよ。」

それとこの惨劇の現場も処理班が綺麗にするわ」

それだけ言うと、携帯を取り出しどこかに電話を掛けながら校舎内へと消えて行った。

東野も濡れた髪をボリボリと掻き、やるせないような顔で浩介に視線を向けた。

「……っち！まあしゃーねえな！楽しかったぜ、高崎浩介。またいずれ決着を付けよう」

「もう会いたくないんだがな」

「……っれねーな」

そう言つて苦笑いを浮かべ、屋上から消えていった。

二人だけになったことで緊張感が切れたのか浩介の体に痛みが走り、倒れそうになるのを綾華が支えた。

「浩介！大丈夫なの！？」

「悪い、綾華。……肩、貸してくれるか？」

綾華はコクンと頷くと傷の軽い右腕を自分の肩に巻くように掛けた。

「……無茶しすぎ」

一歩一歩と屋上の出口へと歩いて行く途中、綾華は小さく呟く。

「悪い」

浩介は謝ることしか出来なかった。

「……心配かけ過ぎ」

「ああ。心配、かけたな……いや、もうちょっと心配かけるわ……」
もう少しで意識を失うだろうと自覚し笑顔を見せた。

「……ばか」

その一言と共に、浩介を支える手に力を込めるのだった。

影の通り魔 6

あれから浩介が意識を取り戻したのは丸一日経った時であった。

ぼやける頭で辺りを見回すと白で統一された一室と薬品独特の匂いからどこかの病室なのだろうと認識する。

人の気配も無く、静けさの漂う空間で生き長らえたと改めて実感することが出来た浩介は、タフな自分と安堵の気持ちとの狭間で軽く苦笑した。

自分の体に意識を向けても右腕に点滴が繋がっている他、特に変わった所も無い。

「……………ッ!」

体を起こそうとした浩介だったが腹部と左腕に痛みが走り、再びベッドに横たわる形となった。

全治一カ月という怪我だ。当然のごとくたった一日で完治する筈も無く、左腕と上半身には無数に包帯が巻かれていた。

どうしたものかと思案していた浩介だったが、ガラガラとスライド式の扉が開いたことで中断し顔だけを扉へ向けた。

「意識戻ったのね!!良かった……」

入ってきたのは花で満ちた花瓶を抱えている綾華であった。

綾華は花瓶を窓際の棚に置くと、ベッドの横にあった椅子に腰掛けた。

「調子はどう？」

「左腕と脇腹が痛むがその他に異常は無い。痛みが無ければ健康体だな」

「死にかけたんだからそのぐらいは良しとしなさい」

意識を戻すのに三日は掛かると言われた綾華もたった一日で取り戻した浩介に驚き、そして安堵した。

「ここは何処の病院なんだ？」

「私の伯父さんが営んでる病院よ。小さいけど設備もしっかりしてるし入院も出来るわ」

その答えに浩介は心を撫で下ろした。

一般の病院ならば事情を説明するのが面倒だからだ。

階段で転んだ程度の怪我なら言い訳出来るが、浩介の怪我は明らかにナイフで刺された傷だと簡単にバレてしまう。病院側も間違いなく警察に連絡し、その警察から事情を聴かれるのは目に見えて分かる。

全て話しても良いが、今それが得策だとはとても思えなかった。

「俺が意識を失った後の事を教えてくれ」

「そうね。浩介が意識を失ったのは学校の敷地内を抜けて少ししてから。流石に私一人で運べないから、伯父さんに連絡して車で運んでもらったのよ」

「それで、その伯父さんには何て説明した？」

「喧嘩して刺されたって説明したわ。流石に本当の事は言えないわよ」

綾華も全てを話す事はしなかった。たとえ伯父であつても相手は闇の組織『依頼屋』だ。その小さな情報さえも掴まれた場合、下手し伯父にも危険が降り注ぐだろうと思いつにかこうにかごまかしていたのだ。

「分かった。後は適当に話を合わせる」

そう言うのと浩介は顔をしかめながら上半身をゆっくりと起こした。

「あんまり動いちゃダメ。重傷なんだから」

「このぐらいで傷は開かないから大丈夫だ。それより、悪い綾華。喉乾いた」

「あ、そうね。じゃあ何か買つて来るわ。何が良い？」

「コーヒーでいい」

「ついでに伯父さんも連れて来るわね」

そう言うつ綾華は部屋を出て行った。

浩介はベッドの横にある小さなテーブルの上から携帯を手に取り電源を入れた。日付は月曜日。時間は午前中を示していた。

加藤沙耶殺害事件で学校は日曜まで休みの筈だ。

——あいつ、サボったな

綾華がここにいることで学校をサボっているかと確信したが、それを口に出した所で自分を棚にあげて怒られると直感した浩介は胸の内に深くしまい込んだ。

そして不意に屋上はどうなっているのかという疑問が出る。

依頼屋の一人、烏丸玲奈という女性は掃除屋がどうにかすると言っていた。依頼屋組織の部署の一つだと検討は付くが、あれだけの痕跡をたった一日で片付けなければならぬのだ。

違う部署があるならかなり大きい組織だと分かる。そして人まで殺すその大きな組織が痕跡など残す筈がない。少しでも残っていれば誰かに見つかり警察を呼ばれる可能性がある。

結局何も無いと結論付けることでその疑問は解消する。

そのタイミングで綾華が扉を開けた。

隣には白衣を着た清潔感のある男性が立っている。直ぐに綾華の伯父さんだと理解し笑顔に向けた。

「高崎浩介です。色々にご迷惑をお掛けしました。有り難う御座います」

軽く頭を下げる浩介に、伯父は微笑んだ。

「いやいや、そんな畏^{かしこ}まらなくていいよ。私は当然の処置をしたただけだ。それに、綾華ちゃん^{あやが}の友達なんだろう？君が無事で何よりだ」

伯父はベッドの横に立ち、綾華は椅子に座り缶コーヒーを差し出した。

礼を言ってそれを受け取ると蓋を開け一口飲む。

「検査をしたところ内臓の損傷も無い。直ぐに退院は出来ると思うが傷は完全に塞がっていないから安静にしとくこと。まあ少し入院しとくといい。知っての通り小さな病院だ。患者も少ないし、医者

も私と看護師の二人だけだ。落ち着けると思う」

一軒家の一階が病院となっているこの場所で伯父は生活しており、雇われの看護師と二人で基本お年寄りを相手にしていた。

後に綾華から聞いた事だが、伯父は未だ独り身で恋人募集中との事らしい。

「じゃあお言葉に甘えて、今日一日は厄介になります」

「はは、そうしてくれ。私も久し振りに夜に話し相手がいて嬉しいよ。あ、私は楠木誠司。綾華ちゃんのお父さんの弟だ。まあ伯父さんと呼んでくれ」

屈託の無い笑顔を向ける伯父に浩介は心から感謝し、暫くの間何気ない会話で時間を潰した。その時当然怪我をした理由を聞かれたが、綾華の言った通り喧嘩をして刺されたと嘘を付き、警察に届け出る気が無いことも言い訳を重ね何とか了承してもらった。

別の患者が来たことで伯父が部屋を出て行き、綾華と二人つきりになった時に話の内容は一気に急変する。

現実的な会話へと必然的に変わり、今後の行動をどうするかの話をしなければならなかった。

多少の猶予が与えられたにしろ、このまま全てを水に流し平和な生活が出来るとは到底思えなかったし、相手もそれを許す筈がない。何しろ浩介達は闇組織に足を入れ最早逃げられない所まで来ているのは分かっている。ならいずれ何らかの形で接触をしてくるのはまず間違い無いと考える。

瞬時に抹殺に掛かるのか、それとも別の方法で接触を図るのか。いずれにしろ警戒をしなければならぬ事に浩介も頭を悩ませてい

た。

「どう思う？」

浩介は神妙な面持ちで綾華に顔を向けた。

「先ずは何故あの時決着をつけず撤退を選択したか、ね」

それには浩介も頷いた。

「同感だな。何か裏があるとしか思えない」

状況は互角にしる烏丸玲奈という女性が現れた事により、不利な立場に陥ったのは紛れもなく浩介達の方だった。

綾華も多少は身を守る術^{すべ}を持っていたが東野と烏丸という依頼屋組織のメンバーが二人で向かって来た場合、どちらが有利かは一目瞭然である。

東野が戦闘にはプライドを持っていたというのは知っているが、組織の命令となればそれを捨て勝ちにこだわらなければならない。

しかし組織はそれを選択せず撤退をした。

考えられる事は烏丸玲奈が戦闘員では無いということだ。

大きな組織だけにただ上からの情報を伝えるだけの存在がいても不思議ではない。

では何故戦闘員を派遣しなかったのかという思考が湧いて出る。

東野のプライドは何にせよ浩介達を見逃す事と比べるとそちらを選択した方が組織にとってメリットは大きい筈だ。

戦闘員を派遣出来なかった理由があるのか、浩介達を見逃すことで何か特別なメリットがあるのか、様々な案を出したが結局結論には辿り着かなかった。

「あの女の言っていた事、信用出来ると思う？」

綾華は買ってきていたミルクティを飲みながら烏丸の言っていた言葉を思い返し浩介に聞いた。

それは黙認するなら組織からの刺客は来ないという言葉だと理解した浩介は間も開けずに答える。

「信用は出来ないな。あくまで俺達を油断させる為に言った可能性もある。それにメリットも無ければ俺達が黙認する確証も無い。奴らが後手に回る事は考え難い」

綾華は溜息を零した。

「……そうよね。となれば直ぐにでも接触してくるかもね。どうするの？」

「分かっているけどどうも出来ないだろ。何も知らない俺達は結局後手に回るしかない。行き当たりばったりだな」

浩介はお手上げだと言うような動作をして苦笑い見せる。

「……私達、死んだかもね」

「心配するな。お前は守ってやるよ」

「無茶はしないで！」

「無茶をしなけりや死ぬだけだ。分かっているだろ？」

少し威圧感を込めて言った言葉に綾華も困惑する。

「……無茶をしてもあなた死ぬわよ？」

「そう簡単に死ぬつもりは無い」

素っ気なく言う浩介に綾華は何も言わなかった。

何を言おうが今の浩介を止める事も出来なければ、止めたところで言っていることは正論だと綾華も知っていた。

それでも綾華の為に浩介が犠牲になることだけは絶対に嫌だと内思っていたのだ。

「綾華……」

重苦しい空気が漂う中、浩介が口を開いた。

「……何？」

少し間を空けて何を言うのか不安を抱きながら聞き返す。

「腹減った。何か食べに行こうか？」

綾華は一瞬目を丸くし、その後クスクスと笑った。

「そうね。でも浩介、歩けるの？」

「多少痛むが、内臓は傷付いてないみたいだから大丈夫だ」

そう言って浩介はベッドから抜け立ち上がった。

「あっ！」

「何だ！？」

突然声を上げた綾華に驚きながら尋ねた。

「浩介の服……捨てちゃった」

「……マジか」

雨に濡れ、尚且つ血塗れの服は此处に運んだ時に伯父が脱がし、捨てていた事を思い出したのだ。

現在浩介は入院患者が着るような羽織ものとパンツだけを身に付けているだけであり、流石にこれで外出は出来なかった。

「住所教えて。何か適当に服を持って来るわ」

綾華の提案に今は納得するしかない。

「頼む。だが危険だぞ」

納得はしたがいつ刺客が来るか分からない状況で綾華を一人向かわせるのは気が引けていた。

「大丈夫よ。伯父さんに車で送ってもらうから」

綾華は住所の書かれた紙と浩介の部屋の鍵を持ち、部屋の扉を開けた。

「じゃあ、ちょっと待っててね」

「……ああ。気をつけろよ」

笑顔で手を振る綾華に手を振り返し見送った。

綾華が出て行ったのを確認した浩介は窓を開け煙草を吸った。

「あの笑顔で手を振られたら男はイチコロだな」

そう小さく呟き、少しでもドキッとした自分の心境を苦笑していた。

ここ数日間綾華と一緒にいたが、気持ちの高揚というものは感じなかった。

一目見た時から美少女とは思っていたが、そんな気持ちを抱くだけのゆとりというものが無かったのだ。

あまり恋愛には興味の無い浩介もそれが恋愛感情だとは思ってないが、他の男なら間違い無く虜になっているだろうと第三者の立場でそんな思考を繰り広げていた。

綾華が帰って来たのはそれから一時間経った時のことで、Ｔシャツと黒のスラックスに着替え、ジャケットを羽織った。

そして伯父にお礼を言ってから夕方までには戻る事を伝え病院を出た。

路地を抜け大通りへと出た二人は適当に選んだファミレスへ入り昼食を済ませた。

時間も余っていた為綾華の買い物に付き添い、お店の店員からカップルと認定される事に微笑しながら時間を潰していった。

「さて、そろそろ帰るか」

「そうね。それとありがとね。買い物に付き合わせちゃって」
「ああ、気にするな。俺も久々にリフレッシュ出来たから良かったよ」

大通りを歩きながらその後も会話が尽きることなく帰路の道を進んでいた二人だったが、ふと浩介が足を止めた。

「やはり、早かったな」

ボソツと呟いた浩介からは先程までの和やかな表情は無く、獲物を見付けたかのような鋭い眼光に変わっていた。
綾華もその原因が直ぐに理解出来た。

「あの女……」
「……烏丸玲奈」

人が行き交う大通りの三十メートル先に立ち止まる依頼屋組織の一人、烏丸玲奈が浩介達を見つめていた。

辺りを警戒するが、他の仲間の気配は無く浩介は烏丸に近付いていった。

「今日は二人でデートかしら？」

最初に一声を放ったのは烏丸からだった。
ニヤリと笑みを浮かべ挑発するように口に出す。

「それはもう聞き飽きた。あんた一人か？」

「そうよ」

「なら用件はなんだ？」

烏丸一人なら直ぐさま戦闘という手段は取らない。ならば何か用件があると考えた方が納得出来る。

だが冷静に考える浩介もその裏を頭に入れ警戒を解かない。

「組織があなたを必要としてる。フリーの依頼屋、高崎浩介をね」

別段驚きもしなかった。依頼屋組織が調べれば浩介も依頼屋だと簡単にバレると踏んでいたからだ。だが、必要と言われれば疑問を抱かざる負えない。

「……あいつ程の男もいて何故俺が必要だと？」

あいつとは勿論東野のことだ。

「私達には人員が必要なよ。あなたみたいな強い人員がね」

「依頼屋としての組織ならばそれで事足りる筈だ。何も危険因子と判断された俺を仲間に入れるメリットは無い」

「それがあるのよ。あなたを仲間に入れるメリットが」

真つ直ぐ目線を交わす烏丸に浩介は神妙な顔に変わる。

「……あんたらの目的は何だ？世界征服でもするつもりか？」

「今のあなたが知る事じゃ無いわ。それに、今すぐ仲間にならなくてもいいわよ。いずれ全て分かるんだから」

「なら答えは仲間にならない、だな」

即答した浩介に烏丸は予想していたように苦笑した。

「分かったわ。また会いましょう、お二人さん」

「あんたの考えが聞きたい。俺に何を望み、何処に向かおうとしている？」

背をむけた烏丸に最後の問い掛けをした。

浩介達は選択肢を与えられたのだ。それはちゃんと拒否権の有るもので想像していたものより遥かに生易しい。

では組織がその選択をした訳が目的自体に含まれるのではないかと想像する。浩介を生かし、仲間にするメリットがあるとすればそれはちつぽけな事象ではない。良くも悪くも何かしらの影響を考えた結果がそれを可能にしている。

恐らく依頼屋組織の目的を知っている者はほんの一握りしかいないと感じていた。そしていずれ分かったのはその目的を果たす時、組織が表立つ時だということだ。

だが人を殺している事には変わらない。そんな組織の仲間になることなど微塵も考えていない浩介も、組織の目的には興味を示した。

烏丸は一度振り返った。

「所詮私達は飼い慣らされているだけなのよ。あなた個人に何を望んでいるわけではないわ」

そう言うとき烏丸は人混みの中へと消えていった。

「どういふこと？」

意味の分からない最後の言葉に綾華が呟いたが浩介が答えられる

筈が無かった。

「さあな。だが、直ぐに仲間になかったところを見ると、俺達に構ってられない何かが起きているのかもな」

いずれ分かると言うならそうなのだろうと、その時浩介は深くは考えなかった。

だが通り魔から始まり依頼屋組織まで繋がったこれまでの日々で、運命の歯車が回りだしたような嫌な感覚を抱く結果となり浩介は拳を握り締めた。

想いを乗せて1

あれから一週間、浩介は何事もなく日常の生活を送れていた。

心配していた依頼屋組織からの奇襲などもなく、本当にいつも通りの生活が送れたのだ。

そのことに浩介と綾華も胸を撫で下ろし、今は楽しい学園生活を送ろうということになり警戒も少し緩めていた。

しかし一度出来てしまった綾華との接点は変わることにはなかった。学園内でも気兼ねなく会話もするし、一緒に帰ったりもする。そしてそれを快く思わない学生が殆どであった。

浩介のクラスには愛理というアイドル的な存在が居り、当然のように愛理も浩介に懐いている。それだけでも周りからしてみたら羨ましい存在であるが、違うクラスのアイドルまでも急激に奪っていったと解釈した生徒はやりきれない思いを浩介にぶつけていたのだ。

ぶつけたと言っても集団でリンチにするような策は取らない。浩介の運動神経は誰もが知っていたし、喧嘩に強いという噂も流れていたからだ。

あくまで一度も人前で喧嘩などした事の無い浩介だが、噂が噂を呼び大きくなっていった事に今では少なからず感謝をしていた。

更には運良く浩介にリンチ出来たとしても綾華と愛理が黙っていないのは明白だ。そうなれば妄想の世界が現実になることは永久に無くなり、最悪完全に嫌われてしまう恐れがある。

ではその生徒達に何が出来るかというと、冷たい視線を浩介に浴びせるだけだったのだ。そして浩介も、また敵が増えてしまった、

と嘆く事しか出来なかったのである。

だがそれも日常の中の小さな変化にしか過ぎなかった。運命の歯車が回ってしまった浩介達には、完全なる平凡な日常というものから少しづつかけ離れていくことを実感するのであった。

何時ものように周りの視線を浴びながら綾華と一緒に学校を出た。少し買いたいという綾華の要望に応えショッピングモールを回り、その帰りに近くの商店街を通った。

「なんの騒ぎかしら？」

その片隅、二人の目の先に野次馬の集団を捉え、滅多に無い光景に綾華が興味を示した。

「何だろうな。ちょっと見てみるか」

騒然としている人混みを掻き分け、その現況を目にした。

「っ！！」

浩介は言葉にならない程の衝動に駆られた。

そこには壁にもたれ掛かり座り込んでいる一人の老人がいた。顔には酷い痣が出来ていて額の部分からは血が流れている。意識はあるだろうが、観念したかの様に目を閉じて静かにしていた。

確かに珍しいことではあるが、それだけ見たら暴行を受け倒れた

と推測し、そこまで驚くことも無かつただろう。

浩介が驚愕したのはその老人の体に巻き付けられた物であった。

「これは……ダイナマイト!？」

綾華の言葉に浩介は唇を噛み締めた。

老人の体に巻き付けられた物は確かにダイナマイトの類いだと確信出来た。

筒状のダイナマイトが五つ体に巻かれ、それぞれに繋がった導線が一本の導線となり老人の隣に置かれている三十センチ程の小包のような木箱に伸びている。更にその正方形の箱の側面にはデジタルの時計が付けられていて、時計とは逆に秒数が減算されていた。

残り二十五分。

それがこの老人に残されたタイムリミットであった。

「警察には!？」

浩介は近場にいた年配の女性に尋ねる。

「ちょ、ちょっと前に連絡したけど爆弾処理班が来るのに二十分以上は掛かるって――」

「それじゃあ間に合わない!!」

大きな声を出した浩介に年配の女性はビクツと震えた。

爆弾処理班は期待出来ない。恐らく近くの駐在所の警官が先に駆けつけるだろうが為す術は無いだろう。

——やるしかない

浩介は制服の上着を脱ぎ、シャツの袖も捲り上げた。その時に綾華の溜め息が聞こえてきたが無駄な時間を使う余裕も無い為気付かないふりをした。

「気分はどうだ？」

老人の横にしゃがみ込み、刺激を与えないよう落ち着いた口調で問い掛けた。

その声で老人は閉じていた目をゆつくりと開けた。

「ワシはもういい……逃げてくれ」

「危うくなったら逃げるさ」

そう言いながらダイナマイトを調べていく。導線と共に体に巻き付けられ取り外す事は不可能だ。不用意に導線を切っても一瞬であるの世行きだ。

「なんでこんな事に？」

質問を続けながらダイナマイトと繋がっている小包のような木箱の蓋をそつと開ける。

爆弾の解体などした事もなければ知っている訳でも無い。だがこの処理は簡単なようだと言った浩介は苦笑いを浮かべた。

それはドラマなどで見た事のある赤と青の導線が二本あるだけで

あつた。

「ワシが今までしてきたことの罰じゃよ。こうなることは前々から予想出来ておつた」

「前々から予想していたのに何の策も取らなかったのか？」

その二本の導線をじっくり調べていた浩介も老人に顔を向ける。

「ワシはどの道殺される。何かの策をとつても同じことじゃよ」

「あんたを殺そうとしているのは誰なんだ？」

「……それを知ってしまったら君も危ないぞ」

「生憎、そういう事には一般人より慣れてるんでね。今更どうってことない」

浩介は微笑みながら言った。

「君も……そうか……」

老人はそこで再び目を閉じた。

タイマーは残り十五分を切った。

「皆さんは逃げて！遠くに避難して下さい！！」

やっと到着した警官二名が野次馬に声を掛ける。その前から少しずつ避難していた人も多く、数人にまで減っていた野次馬はその声で全員走り去っていった。その場に残されたのは警官二名と残った綾華、浩介と老人の五人だけとなった。

「君達も逃げなさい！！」

警官の一人が浩介達にも声を掛け、浩介の肩を掴んだ。警官としては当たり前と言動だろうが浩介にとったらそれが疎ましく思えていた。

「なら、あんたらがこれを止めるのか？」

肩に置かれた手を振り払い、浩介はその警官を睨む。警官はその言葉に返答は出来なかった。

今の自分達が出来た事はその被害を最小限に留めることだけである。つまり、現状でいえば老人は犠牲にするしか方法は無い。

「この人からはまだ聞きたいことがある。先に逃げるのはあんた達だ」

「しかし――」

「あなた達じゃ現状を変えられない。それは分かっている筈よね。じゃあ野次馬を抑えとくなりしといた方がいいんじゃない？悲惨な事が起こったらもうパニックになるわよ？」

自分達の無力さを知っている警官も、綾華の言葉に唇を噛み締める。だがそれは正論でもある為、今はその言葉に従う他ない。

「あなた達も時間が無くなったら引き戻しますから、無駄はしないで下さい！！」

綾華はそれに頷き、警官が走っていく後ろ姿を見守った後、浩介に目配せをした。浩介もそれに頷き返し、タイマーに目を移す。

残り十分。

もう時間も無い事から、浩介は时限装置を止める為の思考に戻した。

「君らも依頼屋か……」

老人は静かに呟いた。

「も、というとあんたも依頼屋に会った事があるんだな？」

「依頼中じゃよ」

そう言って一枚の写真を取り出し、二人に見せた。そこには中学生ぐらいだろう、一人の少女があどけない笑顔で写っていた。

「ワシの孫じゃ。両親は小さい時に亡くなってしまっただけ。今は親戚の家で暮らしているんじやが、死ぬ前に一目見たくての。二日前に依頼屋に頼んだのじゃ」

自分が殺されると直感した時、不意に頭に浮かんできたのが孫の顔だった。

「何故直接会いに行かなかったの？」

「ワシは軟禁されておって無理じゃった。そこを抜け出して会いに行けたとしても孫に危険が及ぶ可能性がある。だから奴らに気付かれることの無いよう密かに依頼したのじゃ」

「その奴らとは誰なんだ!？」

「この国の、政府の人間じゃよ」

「なっ!？」

「政府って……」

浩介と綾華も驚きを隠せない。

「誰が首謀者かはワシも知らん。政府の一つの駒に過ぎない研究所で働いていただけだからのう」

「だがあんたは少なからず情報を掴み、それを知った政府に命を狙われることになった」

「その通りじゃ」

「一体何を知ったのよ!!」

「それを話すには時間が足りぬようじゃ」

老人はタイマーに目を向けた。

残り六分三十秒。

「話は後だ！先ずはこれを止める!!」

浩介は舌打ちをし、装置に目を向けた。

「止めるって言っても、どっちの線が正解か分かってるの!？」

「分かるわけないだろう!こうなりや運だ。綾華、ハサミでもなんでも良い!!何か切る物はないか？」

綾華は荷物を地面に落とし、自分の鞆の中から持ち歩いているソーイングセットから小さなハサミを浩介に渡した。

——どっちだ?どっちなんだ?

浩介の額から汗が流れ落ちる。

どちらかを切れば良いと簡単に考えていたが、実際に切る決心をした時のブレッシャーは多大なものがあつた。

浩介の持つハサミは赤と青の二本の線をさまよっていた。

「綾華、今日のラッキーカラーは!？」

血迷ったか? と思えるぐらいの質問だったが、今の綾華にも突っ込む余裕は無い。

「えっと……確か黄色よ!!」

参考にもならない回答に浩介は滴る汗を拭った。

——考えろ、考えるんだ!

残り三分五十秒。

一秒一秒が重く感じられる。

遠くで到着した爆弾処理班やら大勢の警官が二人に向かって何やら叫んでいるが、それが耳に入ることには無かった。

「ああ、もう!!なんでダイナマイトなのよ!!どっちでもいいから早く切って!!」

そのプレッシャーに耐えられなくなった綾華は咄嗟に叫んだ。最早逃げるという選択肢も浮かぶ事は無く、綾華は耳を塞いでその場にしゃがみ込んだ。

浩介もそれは同じで、逃げるということだけでなく、綾華を逃がすという選択肢さえ出て来ない。だが、それとは全く違う思考が浩介の頭に浮かんだ。

「そうだ、何故こんな方法なんだ?」

ダイナマイトで木っ端微塵にするという方法が浩介は疑問に思えた。

この老人を殺す方法はいくらでもある。軟禁していたのなら尚更だ。ではこんな人前で殺そうと思ったのはどんな意図からか？

——見せしめか！？

恐らく研究所で働いている人は多い。そしてこの老人のように秘密を知ってしまった者の末路を見せようとしているのではないかと考える。そうなれば内部の者が下手な詮索をしなくなる心理制御も同時に植え付けることになるのだ。

次にダイナマイトを使った意味は何かを考える。

人前で見せしめの為としても手が込んでいる。これだけのダイナマイトなら全ての証拠を抹消出来るとの考えも一理あるだろうが、この老人をここまで運ぶ手間、爆弾処理班が処理出来ない事も計算してのリミット時間を考えてもある種の挑発、またはゲーム感覚だとは思えない。

迅速に済ますなら高いビルの屋上から突き落とすなどの方法もあるのだ。

それに、簡単な造りではあるがこの時限装置を見ても専門にしているプロが手掛けたと思える。

以前、何かで見たことがあった。こういったプロ魂は自分の造る物にプライドと自信を持っていると。

それが本当ならば、こう簡単に解除出来る導線を配置している訳が無い。

——この二本に解除線は無いのか？

そう考えるのが自然だった。

ゲームのように遊びながら、且つ確実に殺そうとしている。

「綾華なら、どっちを切る？」

「私に選ばせる気なの？その時の直感でどっちか切るわよ！！」
「だよな……」

残り一分。

「時間無いわよ！！どっち切るの！？」

「それが狙いなんだよ」

浩介は木箱の中の二本の導線を完全に無視しながら更にその下にスペースがあることに気付き、銅板をこじ開けようとハサミを隅に差し込む。

冷静になった頭で考えれば木箱の蓋を開けた直ぐの所に赤と青の導線が設置された銅板が付いていたのだ。つまり、その下にはまだ何かしらの装置があるということになる。

「狙いつてどういうこと？」

「結論から言うとこの二本はいずれも外れの可能性が高い」

「じゃあ解除出来ないって事！？」

「いや、解除は出来る筈だ」

残り三十秒。

理解出来てない綾華に浩介が説明を加える。

「この装置を造ったのはその手のプロだ。爆弾処理班が処理出来ない時間を設定したのは簡単に解除されてしまうからだ。それを考えたら解除は出来る。だが今回解除出来るのは一般人に限られる。そうなれば蓋を開けた時に見えた赤と青の導線に運を掛ける。どちらも爆発するとは知らずにな」

残り十五秒。

浩介は大胆且つ慎重に銅板を取り外した。
その顔には笑みが零れる。

「綾華、今日のラッキーカラーは何だった？」

「えっ？確か黄色——」

「ビンゴだ！」

その銅板の下には黄色の導線が繋がっていた。

「これに賭けるぞ」

残り十秒を切った時、浩介はハサミを入れた。

想いを乗せて2

商店街は静寂に包まれていた。

誰一人口を開く事なく、誰一人動く事なく、まるで時間を止められたかの様に制止している。

そんな中、ハサミが地面に落ちる音が微かに響く。

「どうやら、生き長らえたようだな」

「寿命は縮んだけどね」

浩介は深く息を吐き出し、綾華は壁にもたれ掛かりながら座り込んだ。強烈なプレッシャーから解放された瞬間だった。

「よくもまあ、造った奴の心理を読んだものじゃな。長年多くの人を見てきたが君のような逸材を見たのは初めてじゃ」

老人は残り四秒で止まったタイマーを見ながら感心するように呟いた。

あのプレッシャーの中、あれほどの推論を立てれる人が果たして何人いるだろうか。老人が生きてきた人生の中で唯一答えの出た瞬間に、類い希なる可能性を感じずにはいられなかった。

「運が良かったただけだ。今回は遊び心のある奴で助かったが、大真面目な奴なら解除も出来ずにあの世行きだった」

浩介は苦笑いを浮かべそう言った。あくまで解除出来る線を用意してくれていたから助かったと理解しているからである。

「君なら、そうだとしても最善の手を考えついたと思うがな」
「その時はあんたを置いて逃げてるさ」

解除したからと言っても、ダイナマイトを巻き付けられたままじや落ち着かないだろうと思い、老人の体に巻かれた導線をハサミで切り離れた。

「立てるか？」

ダイナマイトを取り外し完全に自由の身となった老人に手を差し伸べた。

「すまんが老人の身体には少々厳しかったようじゃ。このまま座らせといてくれるかの？」

「それもそうだな」

一度は死を覚悟した心境で心神共に衰弱している老人の言葉に納得し、差し出した手を戻した。そして隣に座る綾華に目を向け、同じ様に手を差し伸べた。

「綾華はどうだ？立てるか？」

「うん。ありがと」

綾華はその手を取り立ち上がった。

「さて、面倒な事になったな」

浩介の言う面倒な事とは決して老人を助けた事を言っている訳ではない。その後の対処法の事を言ったのだ。

現に浩介の目線は遠く離れた野次馬の方に向けていて、あれほど

静寂の空気に包まれていたのが嘘であるかの様に歓声が飛び交っている。そして駆け付け付けた警察がこちらに向かって来るのは時間の問題であったのだ。

警察署で取り調べという面倒な事を避けるべく、この場を去りたいという気持ちもあつたが、何しろ目撃者も多い中、顔をさらけ出し制服を着ていた事を考えるとそれが最善の方法とは思えなかった。身元が割れて不用意に怪しまれる事はそれ以上に避けたいものだった。

「まあ、私達は偶々通り掛かって善意で助けたって言えば問題無いわよ」

「実際その通りだからな。それでいこう」

二人にとって面倒ではあるが重要性は無い。だからこそこの簡単なり取りだけで済ませる事が出来るのだが、問題はこの老人の方であろうと察していた。

老人はこの事件の全てに関与しているが故に詳しい取り調べが行われる事は明白だった。

「あんたはどうすんだ？」

「そのような事を考えるだけ無駄な事じゃ。最低限は話すが重要な所は話しても分かつて貰えぬ」

老人は俯き溜め息をついた。

「一度動き出した歯車を止めることなど出来ん。ワシの人生は後悔の塊じゃ」

「そんなこと無いみたいよ。後悔は理想があるから芽生えるもの。少なくとも一つの理想は叶えられたみたいね」

綾華は老人を促すように野次馬の方へ視線を向けた。そこにはこちらに走ってくる警察官。その警察官に追われるように少女と一人の青年が疾走していた。

警察の包囲を振り切って向かって来ているのは一目瞭然だが、その少女に見覚えがある綾華はクスッと笑った。それに老人も気付いたらしく目を見開いた。

「おじいちゃんーん!!」

「ま、舞……!?!」

「おじいちゃん!!」

少女は走ってくるなり老人に抱き付いた。老人も力一杯それに応え少女を抱き締める。

「舞! 会いたかった……」

「おじいちゃん……おじいちゃん……」

少女は老人に抱き締められながらそう呟いて泣いていた。

久々に会う祖父がこんな形で命の危険に晒されていたことを考えると少女の心境としては辛いだろう。だが、この少女はそれ以上に老人の置かれている危険な立場を分かっているのではないだろうか。いや、分らずとも感じていると言った方がいいかもしれない。浩介は何となくだがそんな思いを抱いていた。

「いや、随分捜しましたよ。岸部^{きしへ}さん」

少女と一緒に向かってきた青年が老人に声を掛ける。

老人が依頼を頼んだ相手だと写真の少女を連れて来た時点で分かっていた浩介と綾華も青年の言葉に耳を傾けた。

「すまんのう。こんな事になってしまつてな……」

老人は孫娘である岸部舞の頭を撫でながら青年に返した。

「じゃが、この二人のお陰で命を長らえることが出来た。お嬢ちゃんの言う通り、死ぬ前に孫に会うという願望は叶えられた。なんと礼を言つていいか……」

「俺達はあるに依頼を受けた訳じゃない。俺達が勝手にした事だから今は孫を連れてきたその人に礼を言つんだな」

「……そうじゃな」

老人は青年に顔を向けた。

「舞に合わせてくれてありがとう」

真つ直ぐな言葉に青年は照れを隠すように顔を背けた。

「僕も依頼を受けたからそうしただけです。そこまで感謝されても困ります」

青年も依頼だからと主張した。

二人の謙虚な言葉に老人は声を出して笑った。

今の世の中、若者達の軽はずみな言動が問題視されることも多く今後の未来が不安だという声もあるが、二人を見ているとそんなこ

とはないと自然に思えてくることが嬉しく、そして期待出来るという確信に心躍っていたのだ。

まだ希望はゼロではない——と。

そんな中、ようやく数名の警官がその場に駆け付けた。大多数は交番などでよく見る制服を着た警官であつたが、その中でスーツに身を包んだ男がそれぞれの警官に指示を与えている。それを見てもそれなりに権限を持ち、重い事件を扱う刑事だと浩介は理解した。

刈り上げの髪に鋭い目つきのその刑事は一通り指示を出し終わると浩介達と向き合いパンパンと注目させるように手を叩いた。

「はい、君達。取り敢えずこのダイナマイトは爆弾処理班が片付ける。ちよつと移動願おう」

刑事の目線は野次馬のいる商店街の外れへと向けられた。

爆発はしなかったものの、世間的には大事件である。それを証明するかのようにその場にも多くの警官が配置され、パトカー、救急車、消防車などの赤いランプが夕方の空と交わっている。そして爆弾処理班が最大の防御を身に纏いこちらに近付いてくるのも異常な光景の一つである。

「舞、舞。先に逃げときなさい。おじいちゃんは手を貸してもらわなければ動けないんじゃない」

依然老人に抱き付いていた少女は老人の言葉と頭を撫でられる感触で顔をあげ、真っ赤な目でしっかりと頷いた。

「さあ、舞ちゃん。行きましょう」

こういう時は同性の方が落ち着かせる事が出来る。綾華は率先して少女に手を出し、少女もその手をぎゅっと握り返した。

「俺達も行こう」

浩介は依頼屋の青年と共に歩を進め、老人も警官の手を借りながらゆっくりと立ち上がった。

ピピピッ！

微かに、しかし確かに音が聞こえた。それは少し離れた浩介達には届かず、老人と老人を支える警官にしか聞こえない程の音量だった。

「なんだ？ 今の音？」

その警官には気付く事の出来ない違和感を老人は瞬時に悟った。それは、地に足を着けた時に何か小さな石を踏んだような感触だった。

しかしそうではないと確信した老人は瞬時に肩を貸している警官を突き飛ばした。

「うわっ！」

思わぬ老人の行動で地面に転倒した警官はそのまま驚きの顔で老人を見上げた。老人は全く変わることに無い体勢で立ち竦み、肩で息をしていた。

その顔は血の気が引き呼吸も荒い。それはまるでホラー映画のワ

ンシーンのようであった。

突き飛ばされた警官の声と物音にふと後ろを振り返った浩介はそこでの異様さを目の当たりにする。

「……何してる!？」

明らかに老人の行動がおかしいことは見て分かる。だが音の聞こえなかった浩介が分かることはそれだけだった。

浩介の声に全員が振り返り、その場に硬直する。そしていち早くスーツ姿の刑事が老人に向かい足を踏み出した。

「おいあんた!! 気が狂ったか!？」

「ワシに近寄るでない!!!」

警官が突き飛ばされた状況を見るだけでも非があるのは老人の方だ。最悪公務執行妨害で逮捕することも有り得る程の行為であるが、それすら老人の怒鳴り声が打ち消した。

皆驚きを隠せない。突如として変わってしまった老人に頭がついていけない状態だったのだ。

そんな中浩介だけが老人に近付き、十メートルの距離を取り向き合った。

「……何があつたんだ？」

老人は依然血の気の引いた顔で息を深く吐き出した。

「浩介君……だったな。奴らはやはりワシを生かしておくことはし

なかったようじゃ」

「どういうことだ？」

「ダイナマイトの……第二のスイッチが……今ワシの足の下にある」
「何だと!？」

直ぐにダイナマイトの繋がった箱のタイマーを見るが残り四秒で止まったままだ。

この状況で老人が嘘をつくなど考えられない。

となればまだ起動していないだけで、何かをきっかけに作動する仕組みになっていると考えられた。

「重さで反応する遠隔装置か!？」

考えられる選択肢はそう多くは無い。その中から一番今の状況と繋がる選択肢がそれだった。

老人の靴の底には何らかの方法で重さを感知するスイッチのような役割があり、地を踏んだ事によりスイッチを押した状態になっていたのだ。

そして靴を上げ、重さを感知しなくなった瞬間にダイナマイトが再び起動する仕組みだ。

凹凸タイプのスイッチを思い浮かべれば説明がつく。凹状態の時をオフと考えれば、押しっぱなしではオンにはならない。離れた時に初めて凸状態、つまりオンになるのだ。

結果、老人が一步でも動いてしまえば残り四秒が動き出す。

そう考えれば一步も動かない老人の違和感も、警官を突き飛ばした行動も納得出来る。

そして浩介の考えに同感するかのように老人が頷いた。

「恐らく、そうじゃろう」

「何とか出来る方法は？」

「思い浮かばんよ。ワシの重さで起動したのなら、靴を脱いだところで結果は同じじゃろう。それに少し動かしただけでもスイッチが入ってしまうかもしれんからのう……」

「打つ手無しか……クソツ!!」

浩介は自らの失態だと拳を握り締め悔やんだ。

確実に殺す事を目的と考えれば導線だけでは役不足である。解除された時の次の一手も読まなければならなかった。何よりゲームのような方法と手の込んだダイナマイトなら尚更のことだ。

「おい!! どういうことなんだ!？」

そのやり取りに付いていけなかった刑事が堪らずに口を開いた。

「……ダイナマイトが再び爆発する可能性がある。ここにいる警官全員を今すぐ避難させるんだ」

「な、何だと!？」

「……時間が無いんだ。早くしてくれ」

静かな口調で言う浩介は込み上げる感情を必死で抑えていた。それを悟った刑事は大声で警官に命令をして避難させた。

「あなたはどうするんです!？」

騒然と逃げて行く警官をよそに、動こうとしない浩介の姿を見た
依頼屋の青年が尋ねた。

「出来ることを考える。あんたも逃げてくれ。綾華もその子連れ
て先に行つててくれ!」

少し離れた所で戸惑っていた綾華に聞こえるようにそう言つと、
綾華も少女を抱え急ぎ足で避難していった。

「……………」

青年は迷っていた。自分にも何か出来るのではないか、このまま
逃げていいのだろうか。

浩介は無言で佇む青年に一度だけ深く頷いた。

——何も出来ない……

青年はそう感じ取り、苦虫を噛んだ。

青年だけではない。それは浩介も同じで、寧ろ浩介がそれを青年
に教えていた。

青年に悲観の隠^{こも}った笑みを浮かべ頷いたからだ。

青年がそのまま走り去つて行くのを少しだけ見送り、浩介は老人
に向き合った。

「これでゆつくり話が出るのお」

老人は屈託の無い顔でそう言った。それがまた浩介の心を痛めさ

せていた。

「爆弾処理班もいる……まだ何とかなるかもしれない!!」

「今は、じゃよ。前に言っただけどの道ワシは殺されるんじゃ。それが今か……もう少し後か……それだけじゃ」

爆弾処理班がダイナマイト自体を解除出来る可能性もあった。靴の底の仕掛けが解ける可能性もあった。

しかし、いずれも老人は選択せずこの道を選んだ。

「君を残したのは、今を逃せばもう二度と話せなくなるからじゃよ」
そして浩介をこの場に留めた。

言葉がなくても浩介がそれを察知したのは警官を突き飛ばしてからずっと老人が視線を送っていて、そして刑事が口を開く直前に、先程浩介が青年にしたように老人も笑みを浮かべたからである。

無事に助かる事が出来ても次浩介と二人で話が出来る時に自分が死んでいたら意味が無かった。老人はそれを懸念して此处で終わる覚悟をしたのだ。

「……俺に何かを託しても、何も出来ないかもしれない」

「かまわんよ。ワシも何も知らん一人じゃからの。しかし、遅かれ早かれ知る日がくるじゃろう。なら君には話しておこう。浩介君にその覚悟があれば、じゃがな？」

覚悟——それは政府から命を狙われる覚悟である。

「話を聞こう」

無論、浩介としても後には引けない。

「いいじやろ。ワシも限界に近い。単刀直入に言おう」

老人の言った通り動かせない脚はプルプルと震え、体力的にも限界だと感じられた。

「まず、ワシが研究所で知った事実じゃ。今の日本政府は殺戮兵器を造つておる」

「殺戮……兵器……」

「理由は分らん。研究所も各地に在り、部品の製造と研究をそれぞれ細かく担つておる。ワシは偶然その事実を知ってしまった。核の数倍の威力を持つ殺戮兵器をじゃ」

一カ所で造らないのは労働者に知られない為だ。新作の機械の部品だとも言えば誰一人疑いを持つことは無い。

「それが良いことに使われることは無いじやろ。恐らく兵器も完成間近じゃ。近々必ず何かが起こる」

老人は真剣な表情から笑顔へと変えた。

「そして君なら、全ての真実に辿り着くと思えてならないんじやよ。長年の勘じゃがな」

そして老人は深く息を吐き出した。全てを話し終えたのだと理解した浩介も溜め息を出した。

「真実……か。この世界は、どこに向かっているんだろうな？ あんたを殺してまで隠さなければならぬ研究、兵器、政府。人を殺してまで成り立つ依頼屋。そして俺自身。一体どんな意味があるんだろうな？」

答えの出ない問いを微笑み混じりに呟いた。

「……それは君が生きていくことで少しずつ知っていくものじゃ。じゃが、君には重いものを背負わせた。すまんかった」
「やめてくれ。俺は自分の意志で関わったんだ。あんたに謝られても困るだけだ」

浩介は頭を掻きながら避難した人達の方へ振り返った。

「それに、これから辛い思いをするのはあんたの孫娘だろ？」

今も遠くからおじいちゃん、おじいちゃんと叫ぶ少女の声が商店街に響き渡っていた。

「君も結構無理をしてきたように見えるんじゃない？」
「もうそんな無茶はしないさ。綾華に怒られるからな」

浩介は軽く笑うと、再び老人と向き合った。

「俺は高崎浩介。あんたの最大の後悔は俺が引き継ぐ。話が聞けて良かった」

浩介は老人に手を差し伸べた。

「岸部三郎^{かしのり}じゃ。ワシも浩介君に会えてよかった」

老人も浩介の手を握り返した。

「それじゃあ……ありがとう」

さよならとは言わなかった。

言ってしまったら老人の意志が消えてしまうように思えたのだ。老人の意志は今は浩介の中にある。だからありがとうでよかった。老人もそれには笑顔でしっかり頷いた。

浩介は老人と手を離し、背を向けて歩き出した。

「浩介君」

呼び止められた浩介は老人へと振り返る。

「『バラリア』という言葉、覚えときなさい」

「バラリア……？ 分かった」

軽く頷き、また歩き出した。

今度は止める事なく浩介の背中を見守った。

気付けば脚の震えは治まり、気分も楽だった。だが失われた体力は最早限界を超えている。

理想があるから後悔がある

老人は綾華の言葉を思い出していた。

——ワシの後悔は希望へと変わった。どうか、平和な世の中を生き

てくれ。

そして老人は綺麗な放物線を描くかのように後方へと倒れていった。

それを見ていない浩介もドサツという老人の倒れる音で拳を握り締める。

地面から靴の底を離れた事により、僅かな期待を打ち破るように四秒で止まったタイマーは誤差なく動き出した。

そしてついに誰もが耳を塞ぎたくなるような爆発音が商店街に響いた。ダイナマイト近くのガラス、壁、地面、横たわる老人を関係なく破壊していき、雨除けの屋根も爆発で吹き飛び噴煙が舞い上がる。

絶望のシンボルとも思える噴煙の舞う暗い空から、老人が握り締めていた孫娘の焼け焦げた写真がヒラヒラと落ちてくることには誰も気付かなかった。

想いを乗せて3

痛々しい結果で終わった商店街の事件で、浩介達は先程まで事情聴取を受けていた。

勿論細かなこと、老人から聞いたこと等は言わず、あの場で起こった出来事を大まかに説明した。綾華も依頼屋の青年も上手く説明し、それらの証言に矛盾は無く野次馬の情報と一致した為、下手な疑いを掛けられる事無く解放されたのだった。

それは事情聴取を現場にいた刑事、すぎたみつのり杉田満則が担当したお陰でもある。

いち早く情報の比較と組み立てが検証され、ある程度状況を把握していた為に嘘偽りが無いと即判断出来たのだ。

無論、杉田は老人を助けようと命を張った三人の中に犯人が居るという考えは持っていない。杉田もこれまで幾つもの場数を踏んできた実力者である。人を見る目、推理力、刑事の勘という点には相당한自信を持っていた。

だからこそ早めの解放となったのだが、一つだけ刑事の勘が働いた。それが高崎浩介という人間について、だった。

一般の高校生がああ状況でダイナマイトを解除しようとする勇氣、冷静な判断力。指示まで出せる統率力。そして何より何事にも動じない精神力。

これが本当に一般の高校生なのだろうか？と疑問に思っていた。そしてそれと同時に警察という組織の弱さを痛感していた。

高校生という少年にこれ程介入させた事など今まで例に無い。本

来ならば今回も全てを警察が処理、指揮をとらなければならなかった。

それが建前であつてもだ。

だが、現実には浩介が一枚も二枚も上手だった。

その場の状況に合った適切な言動で警察も介入出来ない程の偉才を放ったのだ。結果として老人は助からなかったが浩介がいなければ最初の爆発は免れなかった。実際駆けつけた警察は野次馬を避難させることしか出来なかったのが現状だからだ。

そしてそれが自分だったとしても結果は同じだろうと思え杉田は高崎浩介の凄さというものを改めて実感することとなった。

「今日は残業だな……」

浩介達を解放した後、杉田は休憩室で煙草をふかし、今日の報告書を作らなければならないことに溜め息を吐き、長い夜を迎えるのだった。

事情聴取が終わったのは二十一時を回っていた。

その後、冷たい風が容赦なく吹き付ける白ヶ丘駅近くの公園に浩介と綾華は場所を移し、ベンチに腰を掛けていた。

少し坂を上った高度の高い所にある小さめな公園の為、昼間などは子供で賑わっているが、夜になれば人のいない静かな公園に変わ

る。

寒さを和らげる為に浩介が先程買ってきたペットボトルのお茶がカイロ代わりであるかのように綾華の手に包まれている。更には浩介の上着が綾華の肩に被せられているのも今出来る万全の策であった。

会話があるかと言われれば無いに等しい。多少のやり取りはあったものの、会話と呼べるものではない。

沈黙と化した公園内であるからこそ、一段と感じられる寒さを浩介は耐えていた。

誘ったのは綾華であり、直ぐに帰るつもりがなかったというものもあるが、この先の行動と自分の立ち位置を今明確にしたいというのが大きな目的でもあった。

だが実際にはどの様に自分の考えを伝えて良いか分からず、思考を巡らす時間がそのまま沈黙へと繋がっていた。

無言の綾華を見て浩介もそれを何となくだが察していた。浩介としては今後綾華には関わらせないようにしようと思っていたのだが、綾華から誘われた以上明確に断る事など出来ず、良い機会だから本人の意志は聞いておこう、という結論に至っていた。

だから下手に声を掛けず買ってきた缶コーヒーを握り締めながらもただ隣に座り、公園内を静かに眺めるだけであった。

一通り眺め終えた後、溜め息を一つ吐き出し浩介は自分の手を存分に暖めてくれた缶コーヒーの蓋を開け一口含む。暖かいコーヒーが体内に流れ込むことで冷え切った身体に再び闘志が戻る。

「ねえ、浩介……？」

「ん？　なんだ？」

煙草に火を付けた時ついに綾華が口を開き、そして直ぐに浩介も綾華に顔を向けた。

「あのお爺さん、最後に何を言ってたの？」

やはり、と言う様に浩介は綾華から視線を外し、紫煙の舞い上がる空を見上げた。

それはいつかは来るであろうと確信していた質問内容であり、それを正直綾華に話すべきか迷っていたのだ。

綾華をこれ以上関わらせないようにと考えれば話すべき内容ではない。だが、それを聞いてくる時点で綾華にその気は無いと考える。ここで教えてしまえばもう二度と関わらせないようにするのは無理だと分かっているからこそ浩介としては悩ましい質問だった。

それに浩介には真実を知る為の覚悟は出来ている。寧ろ知りたいと思っていた。だが、綾華にその覚悟をさせるのは気が引けていたのだ。

それでも関わろうとしてくる筈だと分かっている。通り魔を捕まえる為の罠も簡単に承諾した事を思い返せば今回もそうだろうと思えた。

だが今は、前回とはまるで状況が異なっている。

殺人犯を追っていった流れで結局は依頼屋との戦闘になったわけ

だが、今回は前々から危険だと分かっているのだ。何よりその危険度がまるで違う事を浩介は感じていた。

綾華がどこまで本気なのかを知らない浩介は、あれこれと思考を練っていた。

「浩介の事だから私に被害の少ない方法を考えてたんでしょ？」

唐突に漠然とした綾華の言葉で浩介は考える事を中断し苦笑いを浮かべた。

考えていた時間は極僅かなものだったが、その少しの沈黙を綾華はそう読み取っていた。

「凶星ね」

更には否定をしない浩介の苦笑いを事実と捉え、綾華は溜め息をついた。

「もう分かつてると思うけど、今更逃げないわよ？」

「逃げる逃げないじゃない。自分の命を天秤に掛ける事態なんだ。容易に踏み込んで良い問題じゃない」

「でもあなたはそれに踏み込もうとしてる。私には今までの事を全て忘れろと言うの？ 浩介と行動を共にするようになってから日常じゃ考えられない程の事件に遭遇したのよ。これって偶然の出会い頭？ 私は本当に無関係でいられるの？」

真剣に問う綾華に浩介は返答出来なかった。

「私は偶然とは思わない。それが必然…、運命なら私にも真実を知る権利がある筈よね？ なら私はそれを知りたい。意味があるのな

「私は逃げない。無関係になんてなれない。それに、あのお爺さんの死を無駄にしたくない」

「……しかし――」

「全てを忘れ、のうのうと生きていくなんて死んでも嫌！」

商店街の事件後に浩介がこの先どういった対応をしてくるかは粗方検討がついていた。

綾華の身を案じこの件から離脱させようとしてくる筈だと。

しかしそれはまるで料理教室に入会したのに料理を作るなど言われているくらい綾華にとって納得出来ない所為であり、引き下げられない道筋でもあった。

「それが私の意志よ。分かってくれた？」

無表情で口を開かない浩介に真剣な表情でそう言った。

それに対し、浩介も思考を纏め一つ息を吐いた。

「ああ……分かった。伝わったよ」

女性だから、力が無いから、危険だから。

明確に思っていたわけではないが、結局浩介の考えはそれで収まってしまう。

全部が間違いとは言えないが正解とも言えない。確かなことは浩介が思っているよりも綾華の心は強く、それは簡単に折れてしまう様な柔^{やわ}なものではないという意志の固さだった。

だからこそ浩介はこれ以上説得も出来なかったし、する気も無かった。後戻りは出来ないが綾華の意志を尊重しようと心に決めたの

だった。

浩介は意を決した様にスツとベンチから立ち上がり、綾華に向かって手を差し伸べた。

「そこまでの意志があるならもう迷いは無い。一緒に進むぞ綾華。じいさんを殺した奴らに一泡吹かせる」

綾華は笑顔で頷く。

「勿論！」

そして浩介の手を取り立ち上がる。

お互いの結束を確認した手を離し、浩介は綾華に背を向けた。

「さあ始めようか！ 出て来いよ！！」

公園内に木霊する浩介の声を切っ掛けに、黒ずくめの五人の男達が異様な違和感と共に闇から姿を現した。

浩介達が事情聴取を受けている中、一足先に終えた依頼屋の青年、柴田俊樹は警察署出た後行き先も決めずただ通りを歩いていた。

その顔は疲れ切った表情や事件の事を考える険しい表情ではなく、笑みを含んでいるような爽やかな表情だった。

顔立ちも悪くなく、なんの癖っ毛の無いサラサラとした髪が風に

揺れる。浩介と同じぐらいの身長で、丸い眼鏡を掛けているのもあり、見た目では優等生で好青年といった印象である。

だが見た目とは裏腹に結構な図太い神経の持ち主であり、年齢も二十四歳で浩介よりかなり年上である。

浩介もそれは事情聴取までの空き時間に自己紹介をしたので知っているのだが、特別敬語を使ったりはしなかった。

それは柴田が気にしない事柄でもあったし、何より柴田自身が誰にでも丁寧語を使っている所為もあり、浩介は敬語を使おうなどとは一切思わなかった。

柴田のそんな性格も関係し、初対面でも親しみやすく嫌悪感というものを一切抱かせないのが柴田という人間の凄い所だと思っていた。

一方の柴田も先程の事件で浩介の凄さは実感したつもりであったし、性格は違っても何か自分に近いモノを持っていると感じた為、少なからず興味深い対象として見ていた。

そういった互いの想いもあり事情聴取前にかなりの会話を交わしていた。

その中の会話の一つが今、行き先も決めず通りを歩いているだけという柴田の行動だった。

その爽やかな表情は普段柴田が見せている表情の一つでもあるのだが、唯一違うのが今回は気持ちが入った笑みだということだ。

楽しい——いや、心底ワクワクしていると言った方が正しいだろ

う。

「さて、浩介君の読みが当たっているならそろそろだと思つのが……」

柴田はそうボソツと呟いた。

それが柴田がワクワクしている原因である。

柴田は完全に依頼屋として生計を立てている。勿論依頼屋としてプライドも持っているし危険な場面を幾度と切り抜けてきたという自信もある。それを今此処でも発揮出来るか？ どこまでやれるか？ と自分を試す事が出来るシチュエーションと、浩介の読みがどこまで正確なのか？ というものさしの役割が柴田の心を躍らせていたのだ。

「まずは、浩介君の読みは間違い無かったみたいですね」

柴田は嫌な違和感を感じ、浩介の読み通りだと確信した。

それは所謂尾行というやつであつて、警察署を離れるに連れジワジワと距離を詰めてきている事に気付いたのだ。

最初は偶然同じ方向へ向かう他人の可能性もあつたのでそこまで気にかけていなかったが、柴田が適当に曲がる道を^{くまなく}尽くしていくとその気配に違和感を持たない筈がない。ましてや今は廃墟となつた工場へと向かっているのだ。

「後は自分次第、ですね。浩介君」

その場所に着くと、立ち入り禁止のテープが貼られたフェンスを

よじ登り、荒れ果てた工場の入口前で足を止め、登ってきたフェンスへと視線を向けた。

「もう分かってるでしょう！？出て来て下さい！！」

柴田がそう叫ぶと、黒ずくめの男がフェンスを軽やかに登り柴田の前で立ち止まった。

「あなたは今日の事件の首謀者側の関係者ですね？」
「お前は何を知った？」

柴田の質問に答える事無く、男はドスの利いた声で威圧する。
その質問をしてくる事で肯定と受け取った柴田はフツと軽く笑う。

「正直僕は何も知りませんよ。まあ、これから知ろうとしているんですけどね」

「……………では、死ね」

男は腰元から拳銃を取り出し柴田に銃口を向けた。

相手はただの依頼屋だ。一般人となんら大差は無い。そう、ただの依頼屋――。

前もって得た情報では脅威になるような存在ではない。いつも通り闇に紛れて殺せば良い。それが自分の仕事だと、そのぐらいの思いだった。

「何が可笑しい？」

だがコイツの余裕はなんだと疑問に思う。

普通なら怯えた顔で助けると言ってくるか、恐怖心に負け逃げ惑うかのどちらかになる筈であった。しかし、柴田は依然爽やかな表情を崩さなかったのだ。

銃口を向けられてもなお余裕でいる柴田に不気味な違和感を感じずにはられない。

「いえ、あなた方の動きさえ見抜く浩介君に感心してただけです。そうですか。その拳銃で僕を殺す気ですか……。確かに絶対絶命のピンチなんでしょうけど、奇遇ですね。僕も同じ様なモノを持っているんですよ」

柴田は素早く懷から拳銃を取り出し男に向けた。

「これで立場は同じですね」

そう言って不適に笑った。

「さて、取り敢えず俺達を狙う理由を聞いておこうか？」

目線の先に立ちただかる五人の人物に浩介は煙草に火を付けながら尋ねた。

「何を知った？」

その内の一人が浩介の質問に答えること無く低い口調で返した。

「つまり岸部の爺さんから聞かれてはマズい事を俺達が知り、口止めとして俺達を消す……と。まあ予想はしていたが単調な理由だな」
「私達を尾行していた理由を考えるとそれしかないわよ」

浩介の隣で平然と言い張る綾華の言葉に思わず顔を向ける。

「なんだ？ 気付いてたのか？」

「当然でしょ。だから浩介を公園に誘ったのよ」

綾華に誘われなければこれは一人で解決する予定だった。しかし、公園に誘われたことで浩介にとって選択肢が削られたのも事実であり、綾華にしてはそれが狙いでもあった。

警察署で浩介と柴田が何やらコソコソと話しているのは気付いていたし、その内容も推測出来た。そうなればチャンスは今しかなく、除け者にされないよう浩介に自分の立場、意志を伝える必要があったのだ。

勿論浩介に言った想いに嘘偽りは無い。だからこそ綾華は戦う道を選んだ。

「無駄話をする余裕があるか？ どうやら状況が分からんようだな」

そんな二人の様子を腹立たしく見ていた五人の中の一人が皮肉を込めそう言った。

その言葉で、ああ…そうだった、と言わんばかりに浩介は平然と顔を向ける。

「状況は分かっているつもりだけど……。理由はどうあれ殺すつもりなんだろ？」

「理解が早いな。楽に殺してやるから安心しろ」

状況を分かっている中、二人が余裕なのは訪れる運命を受け入れているからだと推測し、早々行動に移そうと仲間と目線を交わした。

「まあ落ち着け。五対二で優勢なのはそっちだ。それに俺達はそんな武器は持っていない」

羽織っている黒いコートの懷に手を入れている姿を見ても、何らかの武器を持っていることは想定内であり確信もあった。

コートの懷から出てくる物であるから刃物類ではなく、恐らく予想通りの拳銃であろうと自分の推測が間違いではない事に奇しくも一致し笑みが零れた。

「俺達も知らない事が多いし、何よりじいさんから聞いた事がどこまで真実なのか確かめたいのもある」

「死に逝くお前等に教えてやることなど無い」

「だからこそさ。死ぬ前に教えてくれても良いだろ？ 何よりそっちが最初に聞いた質問、俺が何を知ったか聞きたいのもあるんだろ？ その情報次第で今後の組織の動きも変えなければいけないからな」

浩介の額から汗が流れ落ちる。それを綾華は見逃さなかった。

圧倒的に不利な状況なのは変わらない。今正面から戦えば敗北は免れないのだ。

それでも表面上では平然と見せている浩介には何か策がある筈だ
と思っていた。そして、それは簡単に導き出すことができ、綾華も
その時を待った。

「……どういう事だ!？」

案の定くらいいついてきた事に浩介も綾華も内心ホツとしながらも
表情を変えなかった。

「分からないか? あのじいさんから聞いて俺が知った事が真実か
どうかはお前等しか知らない。まああんたらも全部は知らないかも
しれないが、少しぐらいなら知ってるだろ? その情報がまるで見
当外れならあんたらは俺達を殺すだけで済むが、それが真実ならそ
れだけでは終われない」

「どっちにしても知った可能性のあるお前等を殺せば終わる」

「よく考えるよ。俺達はさっきまで事情聴取を受けていたんだ。何
故警察にも喋ったと推測しないんだ?」

「ッ!!!! 言ったのか!？」

「どうだろうな」

「ふざけるなッ!!」

五人の動揺は本物だった。その証拠に全員が既に拳銃を握り締め、
戦闘体制に入っている。

一方の浩介もポケットの中で震える携帯電話の振動を感知しなが
ら最後の詰めへと打って出る。

「あんたら日本政府は殺戮兵器を造っている! それをどう使うか
は知らないが世界にとって好ましい使い方はしないだろう。それが
真実でこれを警察が知ったとしたら世間的にもあんたら政府側にし

ても大問題だ」

言い放った浩介に対し一斉に拳銃を向け鋭い目つきで睨む。今にも発砲しそうな緊迫した雰囲気、浩介と綾華は軽く構える。

「それが真実かどうか、あんた等の反応で答えが出たよ。覚悟しろ！　じいさんの想いを受け取った俺達が、あんたら政府を叩き潰す！！」

「出来るかあ！！　クソガキがああ！！！！」

発狂した一人が拳銃を握る手に力を込める。

冷たい風が吹く乾いた夜の空に一発の銃声が鳴り響いた。

平穏とは無関係のその音が浩介達を日常へと帰さない合図となった。

想いを乗せて3（後書き）

大変お待たせ致しました。

急いで書き上げたので誤字、脱字など含め何かありましたら報告下さい。

それと……

メリークリスマス！！

そして……

良いお年を！！

想いを乗せて4

一発の銃声が公園を支配した時、四人の黒ずくめの男達の動きが止まった。

一体何故だ！？ と口に出すことも出来ず、ただ思考能力が追い付かないこの状況に啞然としていた。

倒れるべき人物が倒れず、倒れる筈のない人物が倒れたのだからそれも当然の反応といえる。

倒れたのは正に浩介を撃ち抜こうとしていた一人だった。銃声が聞こえた瞬間に肩から血を噴き出し、銃を撃つどころか握る力さえも奪われ俯せになったのだ。

苦痛で顔をしかめながら呻き声をあげているところからして命に別状は無いと思える。

だが、四人の仲間達はそれすらも考えられない程に頭の中は真っ白になっていた。それは、戦場では決して見せてはいけない油断であって命取りだ。

だが、そうなってしまったからには自分の意志でどうにか出来るものではなく、ただ時間が解決してくれるのを待つしかない。

その意志が戻るまで約二秒。

自我を取り戻した男達は銃声のした後方へと拳銃を向けながら振り返る。

それもまた咄嗟に出る無意識の行動であつて、最善の判断とは到底言えない。

とはいえ、後ろから自分を呼ぶ声がして咄嗟に振り返るぐらいのごく当たり前な生理現象なのだから男達には意識的に止めることなど出来ない。

その数秒で形勢逆転となることなど今の男達には想像も出来ていなかった。

僅か二秒。

浩介にとってそれだけで十分な程距離を詰めれる。更には倒れる仲間からそのまま後方へと視線を変えた為、浩介の動きを知る者など誰一人居なかった。

浩介は男達に向かつて走りながら最初に撃たれた男の拳銃を拾い上げると、そのままの勢いで背中を向ける左端の男の後頭部を殴り付けた。

脳が揺れるような衝撃で意識を失いながら倒れていく男の拳銃を奪い取ると、その内の一つを綾華に投げ渡しながらもう一人の男に突きつける。

浩介に銃を向けられていない男はまた仲間が倒された事に気付き、後方に向けていた銃口を再び浩介へと向けようとしていた。

この大逆転の口火を切った後方に位置する柴田俊樹は、自分から銃口が外された瞬間に浩介に銃を向けようとしていた男の太股を撃ち抜いた。

肉にめり込む銃弾の激痛に男は崩れ落ち、残るは浩介が銃口を突きつけている男と誰に照準を合わせていいか分からずオロオロとす

る二人になる。

そして投げ渡された拳銃を片手で掴み取った綾華はそのまま為す術の無いオロオロしている男を躊躇無く撃った。

綾華の放った銃弾は寸分の狂いもなく、柴田と同じ様に太股を貫き戦闘不能にさせた。

入口側に柴田が、その直線上の奥側に綾華が、そして至近距離で浩介が銃を向けているこの構図が僅か一分にも満たない間に構成された事を、未だ男は信じられないといった表情で為す術無く立ち尽くしていた。

「形勢逆転……最高の形が出来ましたね、浩介君」

柴田は明確な作戦を立てていた訳でも無いこの行き当たりばつたりの中、最高の流れで逆転出来た事に心底楽しそうな笑顔でそう言った。

「それならもつと早く来て欲しかったわ！　ちよつと焦ったわよ！」

楽しそうな柴田に綾華が懸念の顔で軽く睨む。

実際綾華には柴田とそんなやり取りがあつたと伝えてないのだが、浩介が冷や汗を流した時にそれが時間稼ぎだと感じ、何か策があるのなら柴田を使うのだろうと容易に考え付いたのだ。

「おや、中々手厳しいですね。それでも急いで来たんですが……」
「まあいいだろ？　結果上手くいったんだ。初陣にしては良い成果だろう」

事実連絡の遅い事に浩介も焦りはしたが、口には出さず綾華を宥

める。

「そ、そんな……お前にも一人、Bランクを付けていたのに……」

最早全てを諦めた男が驚きと共に柴田にそう呟く。その柴田も初めて聞く単語に首を傾げた。

「Bランク……ですか。まあそれなりに楽しかったのですがあの程度では僕は殺せません。ちなみにあなた達のランクは何です？」

「お、俺達はCランクだ。一般的な殺しは俺達Cランクの仕事だ」

浩介は成る程、と口に出した。

「ランクは何段階あるの？」

今度は綾華が尋ねる。

「DからSまでだがAランクからの情報は俺達には知らされていない。何人いるかも知らない」

「そう簡単に表に出ないってことか……。なあ、一つ聞いていいか？」

「……なんだ？」

浩介は少し間を置いて口を開いた。

「お前等は……いや、お前等の組織は本当に政府の組織なのか？」

聞かれた男は正直質問の意味が分からなかった。

「そつだが……何故だ？」

「いや、ならいい」

浩介はそう言って口を閉じた。

恐らくこの男に聞いても自分の意とする答えは返ってこないと思
ったのだ。

「取り敢えずどうするの？　そろそろ警察来ちゃうわよ」

綾華の言うように、あれ程銃声が響けば不信感を持った住民が警
察に連絡をしていると予測出来る。また事情聴取なんてされたくな
ければ黙秘すら通用しない。そう思えばここで捕まる訳にはいかな
かった。

その後の浩介の行動は目を見張るほど早かった。

既に戦闘意志の無い男の拳銃を払いのけると、鳩尾に強烈な拳を
叩き込んだのだ。

肺の空気を一瞬にして失った男は咳き込みながら地面に伏してい
く。

「綾華、その拳銃は持っている！　指紋が出ると面倒だ！」

綾華にそう忠告しながら浩介も腰元に拳銃を納め、倒れ込んだ男
の所持品を物色する。

浩介が探しているものは組織に関して何らかの情報が分かる物、
つまりはＩＤカードの類だ。

それがあれば少なからず情報を知ることができ、今後必ず役に立つという考えからだ。

一日も経たずこの様な追っ手に向けてくる組織の早さを実感させられた浩介としては、組織を追う為の情報を集める時間さえ無駄に出来ないと思っていた。次々と追っ手向けられれば先の見えない消耗戦となり、後手に回る浩介達には厳しいものになる。

それを回避するには早めに情報を掴み、こちら側からも攻めに討って出なければならぬ。

その為のメンツも一人増え、戦力的に問題は無いとも思っていた。

柴田俊樹という青年の性格も素性も分かってはいた。老人を助けようと直ぐに逃げなかった行動を見ても、この件に関しては協力してくれるとも確信していた。

しかし、だからと言って全てを信用する程浩介も甘くない。柴田を一人で歩かせ別行動をとったのも、敵の数を分散させるのと柴田の実力を試すことにあった。

それは三人で警察署を出て襲われ、柴田が戦力として計算出来なかった場合に状況が著しく悪くなると解しての処置だ。まあ、その時点では綾華が拳銃の扱いに手慣れていることなど知る由も無かったのだから、ある意味鬼のような判断をしたのだ。

柴田もそれは察知した上で行動に移した。もし逆の立場だとしても自分も同じ作戦を考えただからだ。

そして見事自分の役割を果たし、最高の結果へと導くことが出来た。

「……！　これだ……」

男の財布から目的のカードを手に取り浩介はそれをポケットに突っ込んだ。

「早く離れましょう！　時間が無いです！！」

柴田の言うように、うつすらと聞こえていたパトカーのサイレンが徐々に大きくなっている。二人はその言葉に頷き、その公園を逃げるように去っていった。

その数分後、駆けつけた杉田は衝撃を受けることになった。

倒れていた五人の男達に息は無く、頭を一発ずつ撃たれ絶命していたのである。

「どうなってる……」

ダイナマイトといい、今の光景といい、何一つ理解出来ない惨劇に杉田はそう呟き、その言葉は静かに闇へと消えていった。

公園を離れた浩介達はゆっくり話し合いをする為、一人暮らしをしている浩介の部屋へと移った。

街のファミレスなどは人目に付く事と浩介達が制服だった為選択肢から除外され、その状況で最適な場所が此処だったのだ。

部屋に上がった綾華と柴田はやっと緊迫感から解放されたのか直ぐに床に座り込み、各々楽な姿勢をとった。

「今日は二人とも泊まっていけ。今別行動は危険過ぎる」

浩介は制服のネクタイを外しながら二人に言った。それに頷いたのを確認し、浩介は押入からバスタオルを取り出し綾華に渡す。

「先シャワーでも浴びてこい。疲れただろ？」

色々あつて汗とかもかいているだろうし、女性を不快感のままにしておくのも忍びないので真っ先に綾華を促した。

「そうね。悪いけど、なんか着替えある？」

その気持ちを快く受け取った綾華は、立ち上がりながら浩介に聞いた。

「ああ、それなら——」

「浩介君！ワイシャツ一枚貸してあげなさい！！」

「バカじゃないのあんた！！」

勢い良く口を開いた柴田の提案に透かさず罵声を浴びせる。

「……スウェットあるから」

そのやり取りで溜め息をついた浩介はスウェットの上下を渡し、それを受け取った綾華は風呂場へ繋がる洗面所へと消えていった。

「おかしいですねえ。ちょっとしたスキんシップのつもりだったん

ですが……」

部屋の扉が閉められたと同時に柴田がボソツと呟いた。

「お前が言つとただのスキンシップだと思えない」

その言葉に対し、浩介は呆れながら言った。

「二人とも酷いですね。折角協力してあげたのに……」

言葉とは裏腹に柴田の表情はいつも見せる笑顔だ。

「よく言うよ。どっちみち協力してくれるつもりだったんだろ？」

そう言つて浩介も笑う。返事を聞かなくても柴田の爽やかな笑顔が答えだった。

「そついや、柴田に向けられた追っ手はどうしたんだ？」

「彼なら廃材となつてもらいました。と言つても同じ様に脚を撃つて気絶するまでたこ殴りにしただけですけど」

「……そりゃお気の毒に」

普段の柴田からは想像も出来ない言葉に、浩介は相手の冥福を祈った。

「それにしても……」

口を開いた柴田からは爽やかな笑みは消え、真剣な顔に変わる。

「ランクなんてあるのも驚きです」

「全くだ」

一方の浩介もそう言って立ち上がり、将棋の盤と駒を取り出し柴田と挟んでいるテーブルに置いた。

そして盤上に駒をバラまき、『歩』を指先でつまんだ。

「恐らく、ランクDとCは捨て駒だな。一人一人の力は弱い」

そして盤上に『歩』を並べていった。

「だからこそ集団で動かせる事で役にたたせている」

そう言つて『歩』を五つ同時に一マス上げた。

将棋では一つの駒しか動かせないが、それを何駒も動かせればより有利な局面になる。

「ですが、所詮は捨て駒。恐らく僕が戦ったBランクもそう変わりはしないでしょう」

柴田は『香』と『桂』を手に取り、盤面の正しい位置に置いた。

「彼等は『歩』より力を持っていますが、結局重要な駒では無い。使いどころを間違えなければ上手く動いてくれる、という所でしょう」

柴田は『香』で浩介の並べた『歩』を取り払った。
それに浩介も頷く。

「問題はランクAとSだな。ランクAは間違い無くコイツだ」

そう言つて浩介は『銀』をとつた。

「……意外ですね。『角』とか『飛』だと思ったのですが……」
「それも無くはないが、Bランクの強さを考えれば可能性は薄い。
飛び抜けた強さは無いが攻めにも守りにも、ましてや『王』を取る
為の捨て駒にさえ使える万能な奴らさ。しかも、手持ちに持つてい
るだけであらゆる局面に対応出来る厄介なランクだな」

浩介は『銀』を適当なマスへとパチン、と音を出し置いた。

「そうなれば圧倒的な攻撃力と同じぐらいの防御も出来る『角』と
『飛』がSランクということですね」

柴田は『角』と『飛』を盤面に置いた。

「あら？ 二人で将棋？ 中々渋い構図ね」

シャワーを終えた綾華がスウェットに着替え、タオルで長い髪を
拭きながら珍しいものを見たかのような口調でその光景を見ていた。
浩介はそんな綾華に軽く説明をする。

「とまあ、ランクはこんなもんだな」

一通り説明し終わると、浩介はコーヒーを入れにキッチンへと向
かう。

説明を受けた綾華は、ふーん、と軽く納得しながら盤面を見つめ
る。

そして説明では使われなかった駒を手を取った。

「じゃあこれは？」

綾華が手に取った駒は当然の如く『金』であり、それを柴田に見せる。

「そうですね……基本『王』を守る為に使う駒なので、Sランクと同等な立場なんじゃないでしょうか？」

柴田はそう言いながら顎に手を掛け考える人のようなポーズを取る。

「そうではないかもしれないぞ」

その柴田の疑問系の答えに返答したのは、コーヒーの入ったマグカップを三つ持った浩介だった。

「どういうこと？」

浩介はそれをテーブルに置くと、一口啜ってから口を開いた。

「組織の情勢を知らないからこれは俺の憶測なんだが、『金』に関してはランクなど無いんじゃないかと思ってる」

「どういうことです？」

今度は柴田が尋ねる。

「確かに柴田の言う通り、『金』は基本『王』の守りとして使うことが多い。それをSランクとすると何故そんな王制のようなシステムを取る必要があるんだ？ それはまるで組織自体がどこぞの小説に出てくるファンタジーの様な制度だ。そんな制度を創るより、自

衛隊のような軍隊を形成したほうが手っ取り早いと思わないか？」

そう言って盤面の全ての『歩』を指で押し進め、他の駒を盤から落とした。

「だが、実際にはランクが存在するような形式にしている。ということはどこその組織の様に内部で役割が決められていると考えた方が良い」

そう言っつ綾華に目線を合わせた。

「……依頼屋組織ね」

「ああ、そうだ。殺戮兵器を造っている今の政府が同時に軍隊では無く依頼屋組織のような影の組織を立ち上げたとなれば——」

「この世は絶望的ね……」

綾華は溜め息混じりに呟いた。

浩介は頷き、『金』と『王』の駒を手を取った。

「あの下らない議論を繰り返してるおっさん等に其処までの度胸は無いし、表沙汰にならない程の会議もそれを実行に移すだけの統率力も無い。そう考えると首謀者は『金』と『王』の立場の奴らでそいつらがランク制度を生み出したとしか考えられない」

そして浩介は『金』と『王』の駒を盤面の中央に置いた。

「一般の政府の皆様は盤面にさえ登場しないという事ですね？」

柴田も粗方納得したのか、眼鏡の位置を直しながらも真剣な表情でそう言った。

「そうだ。戦う力も無いしな。そしてこの『金』が本当に政府の間なのかという事も怪しいもんだ」

「『王』ではなくて？」

綾華は浩介が『王』では無く『金』と言ったのに疑問を持った。

「この日本で殺戮兵器を隠し造るなんてそれなりに権力を持った奴が命令しなければ実現しない。現にあのじいさんのように一般人を働かせているんだ。間違い無く『王』は総理大臣と言える」

「なるほど……」

「そして、その総理を丸め込んだのは間違い無く『金』なんだ」

浩介の言葉で一時の静寂が訪れた。

信じられないような話だが、疑い無いほどの推論に否定も出来なかった。

「『金』は一番下にいれば『王』と同じ様に何処へでも動ける最強の要と言ってもいいでしょう。長い戦いになりそうです」

『金』の動けない場所は斜め下だけである為一番下にいれば目に見える弱点は無くなる。つまり現実で考えれば『金』が動くのは詰めの見えた時だけだと推測した。

それを独り言のように呟いた柴田はいつもの笑みではなく苦笑いを見せる。

「まあ、組織図としてはこんなもんだ。取り敢えず柴田もシャワーしてこいよ」

少し重たくなった空気を払拭するかのようになり、直に浩介はそう提案した。

「そうですね。では失礼ながら先に浴びさせてもらいます」

柴田はそう言って洗面所へと向かって行った。

「じゃあ、私は何か作るわ！　ちよつとキッチン借りるわね？」
「ああ。自由に使ってくれ」

綾華はキッチンへと向かい、浩介は柴田の着替えを洗面所に置いた後、部屋で煙草を吸おうと口に加えた時だった。

「浩介！　卵が無いわ！！」

キッチンから綾華がそう呼び掛け、翻訳すれば買って来い、と言われていと感じ取った浩介は溜め息を吐き出し加えていた煙草を箱に戻し、財布を手にとった。

「後何かいるか？　因みに近くのコンビニだからそこそこよろしく」

「特には無いわね。飲み物ぐらいじゃない？」

「……了解！」

綾華の料理する後ろ姿が中々様になっている事に心の中で感心しながらコンビニへ向かった。

「あざっしたあー」

何ともやる気の無い店員の挨拶と同時にコンビニを出た浩介は、ひんやりとする外を上着を羽織って来なかった後悔と共に足早に歩いていた。

「おうおう！ 久し振りじゃねーの、高崎浩介！！」

その背後から不良のような台詞で呼び止められた浩介は、あからさまに嫌な顔をしながら立ち止まる。

嫌な顔になったのは不良に絡まれた時の面倒臭さでは無い。ましてや不良に絡まれたほうがまだ良かったとさえ思っていた。

それは聞いた事のある声であり、今は絶対に会いたく無い人物だったからだ。

クルリと振り返るとやはりその人物が立っていて、何故か小さい紙パックの牛乳をストローで飲んでいた。

「こんな所で何をしてる？ 東野和樹」

それは依頼屋組織のメンバーで、一度死ぬ思いで殺り合った相手だ。

「名前も覚えてくれているとは、嬉しいねえ」

東野はニヤリと笑うと再び牛乳を飲む。

「また殺りに来たのか？」

「傷の調子はどうよ？」

浩介の質問に被せる勢いで東野が口を開く。

「お陰様で、まだ本調子じゃないな」

浩介は横腹をさすりながら答えた。現に傷は完全には癒えていないから当然の答えだった。

「そんなお前を相手にしてもつまらねえし、上層部からも止められているからなあ。そのつもりはねえよ」

「そう言うお前は結構ピンピンしてんだな。鼻をへし折ってやったんだがな」

「ああ、もう治っちまった。コイツのお陰かな」

そう言って牛乳パックを見せ付けケラケラと笑う。

そんな東野に若干呆れながらも警戒は緩めない。

「んな訳あるか。回復力も桁外れってか。……それで？ 本当は何しに来たんだ？」

その一言で東野の目つきが鋭くなる。

「お前……政府の秘密を知ってしまったんだってな」

「お前がそれを知ってるという事は、やっぱり依頼屋組織と政府は繋がりがあるのか？」

薄々思っていた事だったので別段驚きはしなかったが、今当事者が目の前にいるのならそれを聞かない手は無い。

「繋がり、か……。あると言えばある。無いと言えば無い」

「お前といい、烏丸という女といい、曖昧な返事しかしないんだな」

「お前が俺達の仲間になるなら教えてやれるんだがなあ。俺は歓迎するぜ」

「それは無理な願いだ」

東野は、そうかい…、と呟いた。

浩介はその中思考を練っていた。

だがそれを教える為では無いとすれば、一体何の為に接触して来たのかが一向に分からないうちにいた。

「今回は俺の独断で会いに来たんだ」

そんな思考を知ってか知らずか、東野は口を開いた。

「お前、今回の件から手を引け！ でないと、死ぬぜ」

その言葉で浩介は怪訝な顔に変わる。

「どっちにしろ、同じ事じゃないのか？」

「まあそうなんだが……これは命令じゃねーからな。ただの忠告だ。俺としてはお前には関わっていてくれた方が楽しいんだけどよ、そう簡単にいかなかったってことだけ伝えとくわ！」

東野は牛乳を飲み干し、近くのゴミ箱に紙パックを放り投げた。そのままゴミ箱に入ったのを見届けた後、浩介に背を向け歩き出した。

「おい——」

「ランクSが動き出した。覚悟だけしとけよ。お前も、俺も……仲間もな」

それだけ言って手をフラフラと軽く振り、瞬く間に闇へと消えていった。

「お前ですら、危険だって言うのか……？　一体どんな関係なんだよ……？」

小さく呟いた浩介の声は誰にも聞かれることなく、浩介の心の中だけに反響した。

依頼屋組織と政府が仲間だとも考えられるが、東野の行動は辻褄が合わない。ならば敵対していると考えれば辻褄が合う。

強い仲間を探している依頼屋の目的も政府と対抗する為だと考えれるし、東野の言葉の説明もつく。

——奴らは、敵対組織？　だとしたら……

その後様々な思考を巡らせながら、浩介は自分のアパートへと戻った。

「ただいま」

「浩介！！」

玄関の扉を開けると出迎えた綾華が心配そうな表情と共に名前を呼び、浩介の全身に目をやった後ホッとしたように笑顔を作った。

綾華の一連の流れで思ったよりも時間を使っていた事に気付き、

腕時計に目を移す。案の定一時間近く出掛けていたことを時計が証明していた。

「悪い。遅くなった」

心配かけた事を素直に謝り、綾華に顔を向ける。

「無事ならそれで良いわ。卵使わない料理作ったから早く食べましょ」

綾華もそれを笑顔で許し、コンビニのビニール袋を受け取った。

部屋では柴田が寛いであり、テーブルの上には一時間足らずで作られたとは思えないほど豪勢な料理が並んでいた。

「待つてましたよ、浩介君。綾華さんもとても心配されていたんですから」

一方の柴田は普段の笑みより一段と輝きを放つようなニヤニヤとした表情で迎えた。

「柴田君だってさっきまで笑顔も無く、真剣な表情だったのよ。一体何を心配していたのかしら？」

軽く笑みを含んだ表情で柴田を睨む。

そんな二人のやり取りからも自分を心配してくれていた事に感謝の念を抱きながらもう一度二人に謝った。

その後は浩介と綾華が出会った経緯（きわい）や、柴田の今までの経験などを笑い合いながら食事を楽しんだ。

食べ終わった食器も片付け終わり、押入にしまっていたもう一枚の布団を引き後は寝るだけという状況の中、風呂から上がってきた浩介はテーブルの前に座り先程淹れた珈琲を啜った。同じ様に綾華と柴田もそれぞれ飲み物を用意して座っている。

それは食事の時の雰囲気とは違い、三人の顔は真剣なものである。

「それで？ 何があったの？」

綾華の言葉は浩介に向けられた。

勿論の事、聞いた内容は買い物に出た浩介が遅くなった理由である。

浩介としても話すべき内容であったし、二人としてもスルー出来る事象ではなかった。

浩介は一度頷いてから話の口火を切った。

「コンビニから出た帰り、東野和樹と会った」

その一声に綾華が驚きの顔を向ける。

「東野和樹って！！ あの依頼屋の……！？」

綾華としてもそう簡単に忘れられるような相手ではない。依頼屋組織の強さを見せ付けてくれた人物であり、あの時の光景は今も鮮明に焼き付いている。

そんな綾華に浩介はもう一度頷き、事の全容を二人に伝えた。

浩介としては厳しくなった状況で二人の士気が下がる事を懸念していた。寧ろ東野の言ったようにここで引き下がる選択を綾華と柴田がしてしまうがないとも思っていた。

だが、話終えた二人の反応を見てもそれは取り越し苦労だったと実感する。

「Sランク、ですか。楽しくなってきたそうですね」

柴田は笑いながらそう言った。

「真実を知る為には遅かれ早かれ対峙する事になるんだから、丁度良いわね」

綾華も柴田に同調した。

それを見た浩介も自然と士気が上がる。

「ソイツらを相手に俺達が勝つにはここを使うしかない」

そう言つて浩介は自分の頭を指差す。

「これは岸部三郎からの依頼だ。俺達が事の真相を暴くぞ!!」

「ええ!!」

「勿論です」

浩介の言葉に二人も賛同する。

ここで岸部三郎の想いは彼の最後の依頼として受理される事にな

った。

その為の行動はまた明日考える事にした三人は、現状の問題から解決する事になる。

「どうやって寝ようか……？」

普段浩介が使っているベッドと余っていた布団の二つ。必然的に数の合わない寢床の利用方法を考えながら、長かった一日が終わりを告げていった。

想いを乗せて4（後書き）

明けましておめでとうございます。

今年も『迷宮世界』の執筆を頑張って行きますので、お気軽に感想、評価をお願いします。

崩落の果てに1

長い一夜を過ごした浩介達はそれから三日間情報を集めた。

とはいっても確実な情報源は襲撃してきた男の一人から手に入れたカードひとつである。それは浩介と柴田ではどうにも出来なかった為、全てを綾華に任せ二人は岸部三郎の自宅の搜索、住民への軽い聞き込み、さらには刑事である杉田からも事件の進展を聞き出すとしていた。

岸部の自宅からは長時間調べることなどさすがに出来なかった為、幾つかの手帳や書類などを身内から許可を取り譲り受けた。

住民の聞き込みは、想定していがやはり有力なことは得られなかった。

そして今、杉田から再び事情聴取がしたいと連絡があつたのでそれを利用して何か聞き出せれば、という思いであつた。

呼ばれたのは浩介だけだったので、譲り受けた手帳などを柴田に任せ、浩介は指定された喫茶店へ出向いた。

その喫茶店は偶然にも綾華と行った白ヶ丘駅近くの喫茶店であり、扉を開けるとこれも偶然なのか浩介達がいつも座っている奥側の席に杉田は座っていた。

浩介の姿を視界に捉えた杉田は笑みをつくり右手を上げた。

「こつちだ」

浩介は表情を変えことなく真っ直ぐ杉田のもとへ歩き、向かいの席に座った。

「いいんですか？ 署じゃなく喫茶店で事情聴取なんてして？」

浩介はホットコーヒーをマスターに注文し、煙草を吹かす杉田にそう言った。

「事情聴取と言うが、今回はそんな堅苦しいものじゃない。単にもう一度君と話がしたいと思った私のわがままだよ。だからいいのさ」

そう言う通り今日はスーツではなくジャケットを羽織り、浩介とそんなに大差ないカジュアルな格好をしているところを見るとそれが本音なのだろうと思えた。

杉田は注文していたホットコーヒーを飲み干し、浩介のコーヒーを運んできたマスターにおかわりを注文する。そして、煙草の箱を浩介に向け、器用に動かし一本だけフィルター部分を箱から出した。

「吸うかい？」

「……俺、未成年ですよ？」

その言葉に杉田は微笑する。

「今時二十歳になったから吸うという若者は少ないだろう。さっきも言ったが今日は私の個人的な誘いだ。そんな些細な事を咎めることはしないさ」

まるで浩介が吸うことを前提とした言葉に自然と笑みを浮かべる。

浩介が吸わないかも……という考えは全くない。それこそ吸うと
いうことを知っているのだ。

「自分の持つてきているんでいいですよ」

杉田の差し出した煙草を手で制すると、浩介はポケットから煙草
を取り出し躊躇なく吸い始める。

それに満足するように杉田は煙草を自分の手元へと置き直した。

「それで？ 何が聞きたいんです？」

「いや、三日前に事情聴取した後、もう一事件事件があつてね」

間違いなく公園での出来事だと瞬時に理解する。

「住民が近くの公園から発砲音を聞いて通報して来たんだ。私も直
ぐに向かったが、その光景に驚いたよ」

「……何があつたんです？」

何も知らない、という口調だが、浩介の頭の中にその光景はリア
ルに思い浮かぶ。

「五人の男が血を流し横たわってたよ。どうやら拳銃で撃たれたみ
たいだ」

視線を向けてくる杉田から顔を逸らし、コーヒーに口をつける。

「……つまりその事件について何か知らないか、ということですね
？」

「まあそういうことだ」

頷きながら杉田も運ばれてきたコーヒーを飲む。

「すみませんが分からないですね。あの後、直ぐに帰りましたから発砲音も怪しい人物も見えていません」

その言葉で杉田はうんうん、と納得したかのように顔を動かす。

「そうだろうとは思っていたよ。すまないね、こんなとこまで呼び出して」

「……いえ」

浩介は煙草を灰皿へ押し潰しコーヒーカップに口を付ける。

一方の杉田はリラックスするように椅子にもたれかかり、ひとつ息を吐いた。

「それにしても妙な事件だ。ダイナマイトといい、五人の男の死体といい……何か関連があるのか全く分からない」

杉田はそう言って苦笑するが、それを聞いた浩介はピクリと眉を動かす。

「死体……？」

浩介が思い浮かべていたその時の光景では理解し難い単語であった。

確かに脚は撃ったが致命傷となるものではない。現に二人の男は浩介が銃ではなく素手で気絶させたのだ。死んでいる姿など想像もつかない。

しかしそれが本当ならば浩介達が公園を去り、警察が駆けつけるまでの僅か数分で彼等の命を奪った第三者の存在がいたことになる。そしてその人物もまた浩介達の敵だと容易に推測できる。

「そう、死んでいた。それがどうかしたのか？」

杉田はその反応に確かな手応えを感じ意味深な笑みで尋ね返す。

「……いえ、ニュースでもやってなかった事件だったので」

そして話が長くなると感じた浩介は二本目の煙草に手を伸ばす。

実際ニュースでは商店街の事件ばかりで公園でのことは全く報道されてなかった。生きたまま捕らえられ、少なくとも情報が手に入れば、と考えていた浩介にとっても報道されなかったのは想定外だった。

「これ程の事件、何故ニュースにならないんです？」
「上層部の判断だ。今それを報道しても住民に不安を募^もらすだけだからな。通り魔、商店街爆破と続けばしょうがないことだ」

それは一理あることだが、だからといって報道しないことが警察として事件解決に繋がるとは、ある程度事情を知っている浩介としては考えられなかった。

「あ、あともう一つあったな」

そこで不意に杉田がポンと手を叩いた。

「これはニュースにもなったが、二人の行方不明者がいたな。ひとりには町外れの教会の牧師、もうひとりには白ヶ丘学園の教師……そういえば浩介君もその学園の生徒だったわけ？」

これは偶然だな、と驚いたような顔を向ける杉田の白々しさに浩介も苦笑いで返す。

「管先生ですね。僕のクラスの担任でもありました」

「そうだったのか。だがその二人は未だに見付かっていない。通り魔で捕まった男が浩介君の学園の女子生徒殺しを否定している。捜査を進めていくうちその先生も容疑者として浮かび上がっているのだが、どうにも行方が分からんからなあ」

つまりは捜査が行き詰まっているということだ。

その二人の末路を知っている浩介は、そうですか、と返すだけで余計に踏み込むことはしなかった。心境としては過去よりも今。依頼屋よりも政府。その為に公園で対峙した男達の情報が欲しかった。

「随分あっさりしているんだね。キミも面識のある人物だろうに」

そしてその反応の薄さに杉田は踏み入った。真っ直ぐ真剣な視線を浩介にぶつける。

「生憎、そういう性格なもんで。それでもなきやあの場面でダイナマイトを解除しようとは思わないでしょ？ 俺が普通の精神の持ち主なら逃げてますよ。どんな時も冷静に。それが俺自身のルールです」

「だがそう心掛けていても簡単に制御できる事じゃない。誰しも大きなコトにぶつかった時少なからず心を乱す」

「普通の人間ならね」

「きみは普通の人間じゃない、と？」

「商店街であなたが感じ取ったコトは何ですか？」

浩介の挑発的な表情と口調に杉田は息を呑む。そして正確に理解した。高崎浩介という人間性を。

「……君の頭脳、観察力、行動力、そして強靱な精神力。それらを引き出せる経験の差。それがきみという人間なんだな？」

「まあそんな風に自分を意識したことないので何とも言えないですね。ただ、今回のことは必ず真実を暴くと決めた」

「それは商店街の事件か？ それとも公園での殺人事件か？」

「どっちもです」

そこで両者は間を空けた。

浩介はコーヒーを飲み、杉田は新たな煙草に手をつける。そしてふーっと煙を吐き一息つくと、ちらつと浩介に目を向ける。

遠回しだが確信をつくような質問をしたのに表情を変えることなく喫茶店のメニューに目を通して。杉田の言わんとしている内容は浩介も気付いている筈だが、それをストレートに言っても同じ様に逸らされるだろうと思い、杉田自身も深くは踏み込めない。

しかし幾つかのヒントは杉田も読み取っており、それが、どっちもです、という返事だった。

つまりは商店街の事件について真相を知ろうとしているなら、どっちもという内容から同じく公園での殺人事件も何かしらの繋がりがあある筈だと思っていた。

「それで杉田さん。この二つの事件について何か進展はありましたか？」

大胆且つ唐突に、依然メニューに目を通しながら浩介が口を開いた。それには杉田も目を丸くする。

「……そんなこと、きみに言えると思うか？」

そしてその質問には刑事としての権限を使わざるを得なかった。だが、浩介はメニューから目線を外し杉田に微笑んだ。

「話すでしょうね」

それは極当たり前で確信のあるような言い方だった。

「……その根拠は？」

「あなたは既に一般人の知らない情報を俺に与えている。それは何かしら俺に期待している証拠だ。その情報を俺に教える代わりに更なる情報、局面を知ろうとしている」

そこで浩介はコーヒーマグを口に含む。それにつられるように杉田も同じ行動をとった。

「だが、裏を返せば警察側も進展が起り得るようなモノを持っていないということ。だからあなたは俺に期待した」

杉田は一時目を閉じ、再び浩介に視線を向ける。その顔はまだ主導権は渡さない、といった柔らかな表情だ。

「きみに期待したのは認めよう。だけど、これ以上の情報をきみに教えるというのはまた別の問題だ。それだけ察しているきみに易々と教えるのも刑事のプライドが許さないからね」

杉田がそう出るのは飽くまでも想定内。それだけの論理で話してくれるほどの刑事は甘くないと理解していた。

互いにまだ詰めではない。だがこのまま平行線に向かおうとも浩介は思っていない。この杉田という刑事なら『こちら側』としても期待できると踏んでいるからだ。

「俺はただ駆け引きをしようと言っているんじゃない。情報交換をしよう、と言っているんです。あなたは今の流れを知りたい。俺は細かでも状況を知りたい。お互い得るものは大きい筈ですが？」
「じゃあやつぱり、きみはこれらの事件に深く関わっているんだな！？」

疑惑が確信に変わり、杉田の口調が大きくなる。前のめりになりながら問い詰める様子にも浩介は至って冷静に口を開く。

「俺は何も知りません」

「そんなわけ——」

「例えば！ あのじいさんが何か重大な事を知ってしまったたら」

言葉を被せた浩介の強い口調で杉田も冷静さを取り戻し、椅子に深く座り直す。

「その組織が口封じの為にじいさんを殺したとしたら。公園で殺された男達はその組織の追っ手だとしたら……流れは見えてくるでしょう？」

暫く沈黙が続く間、浩介は空になったカップを見てコーヒーのかわりを二つ注文し、煙草に火を付けた。杉田は未だ頭の中を整理している。

「……つまり、君達がその追っ手に——」

「『僕ら』は何も知りません。これはただ単に俺の憶測です」

「……そうだったな。つまり、その組織は商店街で何かを知った可能性のある『人物』を口封じの為追っ手を出し、逆に返り討ちに遭った。そして更なる口封じの為何者かが追っ手を殺した、ということか……」

「そう考えた方が辻褄が合うでしょうね」

運ばれてきた熱いコーヒーを啜りながら頷く。

「その組織とは一体……」

「まあ、並みの組織じゃない事は確かでしょうね。野蛮な連中の集まりだと考えた方が良い」

杉田はまた暫く考え込み、俯いた状態で目を瞑った。

一旦は浩介達の立場は置いておかなければならない。というのもある程度は把握はしたが、本人が何も知らないと言っている以上問い詰めようもないし、証拠もない。本気で捜査すれば追い詰めれるがそれをする時間も無ければ余裕も無い。その間に浩介達は警察が手出し出来ないような立場にいる筈である。そしてそれを優先すべき時ではないと浩介の説明が物語っていた。

浩介達の不利にならないギリギリのところまで杉田に話している辺り、警察が動ける範疇を完全に把握しながらその先の行動まで制限させている。つまり今後杉田がしなければいけない事は浩介達の粗探しではなく、その事件、または組織の解明を優先することだ。

——やはり彼は別格だな

改めて浩介を評価すると同時に杉田は浩介に顔を向けた。

「先ず、殺されていた追っ手の五人。脚に銃弾が撃たれていたのは
返り討ちにあつた時だろう。死因は五人とも頭に一発ずつ銃弾を受
けたことだ。これは全く違う銃で撃たれていたことから別の人物が
撃つたとして調べている。因みに五人いる中、銃は三つしか回収出
来なかったという点も一応伝えておこう」

それは浩介と綾華が一つずつ持ち帰っているので当然のことだ。

「男達の身元は？」

「それは今捜査中だ。その彼等を殺した奴の特定も難しいだろうな。
何一つ証拠を残していないからな」

落胆するように溜め息を吐き浩介は今日何本目かの煙草に火を付
ける。

「吸い過ぎじゃないか？」

「吸っても良いと言ったのはあなたですよ」

杉田は軽く笑う。

「そうだな。まあそう落胆するな。きみの『憶測』を聞いたお礼に
有力な情報を教えてやる」

その言葉に浩介はピクリと反応する。

「岸部三郎の働いていた仕事場が分かった」

そして気持ちの高揚を覚えた。

「どこです？」

「倉谷ノルベール研究所。地下三階、地上六階建ての大きな研究所だ。その職員は軽く千人を超え、全員が住み込みを強制される。一度悲報を伝える為電話したのだが、直接会うことは拒否された。こちらとしても大変残念な事件だが今は大きな研究を抱えていて寝る暇もなく忙しい、とかなんとか言っていたな。きみの『憶測』が正しければ、岸部さんが何らかの情報を知ったとすると怪しいのはまず其処だろう」

「倉谷、ノルベール研究所……か」

浩介は頭に刻むようにもう一度呟いた。

「ひとつ言っておこう。『君等』だけで無茶をしようと思うな。怪しいのは確かだが、確証なく突っ込めば立場が危くなるのは君達だ」

「分かってます。直ぐに動くつもりはありません。他に情報は？」

「今のところ君の知りたい情報はそれだけだ」

「そうですか」

浩介はそう言うつと煙草を灰皿で消し、残りのコーヒーを一気に流し込んだ。

「また何か分かったら連絡しよう。これが俺の番号だ」

切り上げようとする浩介に杉田は名刺を渡す。その裏には携帯の番号が記載されていた。

「いいか？ 『何か』 あったら直ぐに連絡するんだ。多少は力になれると思う」

「ありがとうございます。多分こちらから連絡すると思いますので」
その名刺をジャケットの内ポケットに入れ、浩介は一礼してから店を出た。

ひとりになった杉田は椅子に深く座ると煙草を吸って一息ついた。

「あいっ……容赦なく俺に奢らせたな……」

テーブルの上に置いてある伝票に目を向けながらもう一度溜め息混じりに息を出した。そして、呼び出したのは俺、相手は学生、と何度も心の中で呟き自分に言い聞かせるのだった。

崩落の果てに2

「——であるからして、ここの数式はこうなる。じゃあ次の問題は——」

外は木枯らしが吹いている四限目の授業時間。教室では教師の声だけが虚しく響き渡る。

その熱心な声さえ安眠術のように聞こえる者はそれに耐えることが出来ず机に平伏しているが、大半の生徒は熱心に黒板の数式を模写している。

この白ヶ丘学園は最近のテレビでお馴染みの荒れた学校ではないが、特別エリート校という訳でもない。偏差値は極普通の公立で、文武両道を掲げる至って普通の学園だ。

寝ている生徒もどちらかといえば部活動に勢力を注ぐ生徒であり、甲子園の常連である野球部などが大半である。

文武両道といっても、部活動で華やかな結果を出しているのだからその頑張りを認めている教師も別段注意をする事も少ない。

そんな中、浩介は席に座っている。

だが彼だけ違うのは部活動をしている生徒に紛れて寝るわけでもなく、熱心に黒板の文字をノートに書き写しているわけでもない。ただじっと座っているだけなのである。

一応の礼儀なのか、机の上に教科書を出しているものの閉じたまままだ。

杉田からの情報、そして普通に訪れるべき普通の日常が現に普通

に訪れている今の状況に疑問点を抱いている為に、授業中という状況下の中、心そこに在らず、といった現状をつくり出していた。

それはあれから何も襲来、または接触という行動を起こさない政府側の思惑は一体なんだ、ということである。

勿論浩介も警戒はしていたし、寧ろ今もそれは継続中だ。しかし尾行もなければそれらしい事件も起きていない。まるで東野と争った後に訪れた日常に酷似するような状況である。

あの時は依頼屋組織が浩介達に構ってられない何かを抱えていた為の判断であり、寧ろ仲間に勧誘してきたぐらいだ。

では政府組織も同じなのだろうか？ と予測したが頭の中でそれは直ぐに否定した。

否定といっても全く違うと判断したわけではない。ある意味立場が違うと判断したのだ。

例え依頼屋組織と対立していると考えても、ランクを用いている政府側には追っ手を仕向ける人数は幾らでも揃っている筈である。秘密を知った浩介達を無闇に放置したりはしない。

そのあたりが依頼屋組織と比べて違う立場だということ。それを踏まえ浩介達を放置している理由を思考すればただひとつの結論に辿り着く。

殺戮兵器が完成間近であり、次なる計画を遂行しようとしている段階だということだ。更にいえば兵器は既に完成しているかもしれない。

つまり浩介達は眼中にないと考えているならこの現状に納得できる。

君達がどう足掻こうが結末は変わらない！ と、頭の中で聞こえたような気がした浩介は小さく舌打ちをして拳を握り締めた。

——時間は余り残されて無いか……

そう結論付けた浩介は、今後の最適な行動を考える。

そんな思考にどっぷり浸かっていた浩介は、不意に訪れた頭の衝撃で思考を中断せざるおえなかった。

「随分やる気が無いんだな、高崎。教科書も開かず何してんだ？」

顔を上げると、浩介の前に立っていた数学の教師が丸めた教科書を持ちほくそ笑んでいた。

教科書で叩かれたのか……などと冷静に状況を分析した浩介は、教師に苦笑いを向けた。

「すみません。瞑想に力を注ぎ込み過ぎました。以後気をつけます」
「他の教員からも聞いたが、今日のお前は一限目からずっと瞑想しているそうじゃないか？ 何か考え事か？」

「そんな大層なことじゃないです。今日の昼飯何にしようかな、とかですから」

浩介の言葉で周りの生徒も笑い声を上げる。

「じゃあ腹の減っている高崎には昼飯前にひとつ働いて貰おう！」

そういった教師は黒板に目を向けた。そして何を言って来るか浩

介も察した。

「最後の問題を解いてみる」

浩介は溜め息を出し、渋々黒板の前まで移動する。そして問題の数式を十秒眺め、その答えをスラスラと黒板に記した。

書き終えた浩介はチョークを置くと、手に付いた粉を軽く払う。

「……うん。正解だ！」

浩介が授業中に瞑想していても教師からそこまでお咎めが無いのはこれが理由である。

頭の良い大学レベル、という程ではないが、高校レベルの問題はある程度理解している。いつも授業を聞いていない訳ではないのでどこまで内容が進んでいるかなどは把握しているのだ。

ここ最近は学校を休みがちな浩介でもそれが大きな支障をきたすということもなかった。最後の問題が結構簡単な問題であったという事実もあるが、このクラス内で浩介の頭の良さは誰もが知っていた。

「それじゃあ今日の授業はここまで！　しっかり昼飯を味わえよ、高崎」

教師がそう言うなり学校内にチャイムが響き渡り、浩介も教師に軽く頷き席へ戻った。

生徒が待ちに待っていた昼休み。浩介、愛理、綾華の三人は学校にある食堂で昼食をとっていた。

浩介の頼んだものは、考える必要があったのか？ と、先程の教師から突っ込まれそうな牛井という定番メニューだった。そして、先程の出来事を愛理が楽しそうに綾華に話しており、浩介はその話に割り込むこともせず、黙々と牛井を口に運ぶ。

「へえ、瞑想ねえ……？」

話を聞いた綾華は軽く微笑みながら浩介を見る。

「……………何だ？」

浩介が授業中に何を考えていたのかは綾華も察している。浩介もそれは理解している。だが、愛理が居る以上それを出すことは許されない。ならばその話題について話すことは無いと思っていたが、綾華がそれに乗っかってきたようだ。

「いいえ……妄想の間違いじゃなきゃいいけど」

「ええー！！ 高崎君に限ってそんな、イヤだぁ……………」

「分かんないわよ、愛理。こういう男はむっつりなタイプかもしれないから」

「ちよつと待つてよぉ！ むっつりってことは、イヤだぁ……………」

綾華は笑い、愛理は顔を赤くしてそれこそ妄想を繰り広げていた。

「おい、お前ら……………」

その様子に業を煮やした浩介はジト目で二人を睨む。

そろそろこちらから突っ込まないと終わりが見えなと思った所
為である。

「俺を変態みたいに言うな。それに白木も信じるな」

手で顔を覆い、うねうねとたじろいでいた愛理は動きを止め浩介
を見る。

「違うの……？」

「当たり前だ」

「ごめんね。愛理の反応が面白くて、つい……」

綾華も笑いながら謝罪する。

「なんだ……良かったあ」

「そもそも浩介がそういう性格だったらたち悪いわよ」

「どういう意味だ、綾華？」

「そのままの意味だけど、何か？」

「言つとくが俺も——」

そこで綾華と浩介が意味のない話題を膨らませながら会話を交わ
していく。いつもなら愛理も興味津々の内容なのだが、今は何故か
入り込めない。

——ただ、また嫌な気分になる

それを最初に感じた時は愛理も正確に覚えている。

加藤沙耶の葬儀の時に浩介と綾華が知り合いだと思った時だ。二
人は直ぐに何処かへ向かっていったが、並んで歩く二人の後ろ姿を
見た時初めて嫌悪感というのを感じた。

その時はまだはつきりとした気持ちではなく、何か靄が掛かるようなそんな違和感だった。

しかし、浩介と綾華と一緒に学校から帰る時、休む時、周りから色々な噂を聞く時、最近では互いに名前で呼び合う時、楽しそうに会話をする時など、その都度嫌悪感が愛理を襲う。そしてそれを感じる度、強くなっていく。

その正体に愛理は早めに気付く事が出来た。愛と嫉妬なんだと。

浩介が好きというのは一年前から抱いている気持ちだ。だが知り合って間もない筈の女性が愛理より親密な関係を築いている。その女性が愛理の親友なのだからより解決法が分からなくなる。

近頃このように三人で学食に集まることも増え、いつもと変わらぬよう振る舞ってはいるが二人だけの空気を醸し出されるといつもこのような気持ちに陥ってしまう。

「——り？ 愛理！？」

「ふえっ！？」

唐突に現実に戻された為に愛理は気の抜けた返事となった。

「どうしたの？ ボーっとしちゃって？」

綾華は心配そうに顔を覗き込む。

「えっ？ な、なんでもないよ！ ちょっと私も瞑想したくなっちゃって」

そう言っていつもの笑顔を見せる。

「愛理はそんなとこ真似なくていいの」

その笑顔に安心した綾華も優しい笑顔を向ける。

二人に気付かれないよう小さく息を吐き出し、ちらつと浩介を見る。

食後のコーヒーを飲む浩介は笑顔を見せる綾華に視線を送っていた。

——綾華だけじゃなくて、私も見てよ！

偶々綾華の方に視線を向けていただけなのだが、愛理の気持ちにそれを考えるだけの余裕は無かった。

そして更なる勘違いを生み出す原因となる人物が近付いて来ていることを、今の時点では誰も気付かなかった。

「デメエが高崎か？」

浩介達の座っている丸いテーブルを囲むように、三人の男達がその場の雰囲気を変えた。

大きく、汚いその言葉に食堂にいる全員が息を呑む。

「横田先輩……」

綾華がボソッとそう呟いた。

「知り合いか？」

「知り合いというか、何度か告白されて断っただけよ」
「成る程……」

浩介は横田という男を見る。

金髪の髪を逆立て、大きなピアスを耳に付けるその男は見るからに暴走族とかにいそうな風貌である。

「空手部のエース、横田だ……」

「やべーぞ、アイツは……」

「あの男子、何したの？」

などと周りからもぼやく声がちらほらと聞こえてくる。

「……成る程」

今度は誰に言う訳でもなく呟く。

浩介だからこそ知らないのだが、引退はしたものの元空手部のエースで、気に食わない者は力で排除するという短気で校内では有名な人物である。

そんな性格と風貌でも空手で全国レベルの成績を残している為、教師も強くは言えないのである。そして彼の様々な悪事も仕返しの恐れを考慮して黙認するのが生徒間での暗黙の了解でもある。

「テメエが高崎かって聞いてんだよっ！！」

もう一度響き渡る怒声で、再び重苦しい空気に変わる。

何故自分に悪意を向けられているのか薄々感じた浩介は溜め息を

吐きながらゆっくりと立ち上がった。

「そうだが、何か用か？」

辺りがざわめき出す。横田にそんな口調で返答する生徒を見たことも聞いたことも無かったのだ。

「随分舐めてくれんじゃねーの！！ 俺は先輩だぜ！」

「最初の印象が悪かったからな」

「調子に乗ってんのか、テメエ……」

「それはお前だ。要件を言え」

動じる事のない浩介に横田は顔を近付ける。

「楠木にこれ以上近付くな」

やっぱりか、というように浩介は綾華に視線を配る。綾華も困惑しているようだ。

「その理由は？」

「俺が楠木を好きだからだよ！ お前と一緒にいる所を見るとムカつくんだよっ！！」

横田の言葉にドキッとしたのは愛理だった。それは紛れもなく自分の抱えている感情に近いものがあった。

「悪いがそれは出来ない」

しかし浩介は容赦なく即答した。

「ああん!?」

「綾華は俺にとって必要な存在だ。それに何より力尽くでどうにかしようとするお前のやり方が気に食わない」

「デメエに選択肢はねえんだよ」

「ならお前にも無いな。綾華は諦めてくれ」

「綾華、綾華つて、気安く呼ぶんじゃねええ!!」

完全にキレた横田はすかさず浩介に殴りかかった。

その拳を手で払い退けると首裏の襟を掴み強く放り投げる。

横田は後ろの空いていたテーブル席諸とも地面に横たわる。

その激しい音で食堂は静まり返る。一同啞然といった感じである。

「そんな大振りじゃ俺には届かないですよ。横田先輩」

「——っ!」

横田は倒れたテーブルを支えに立ち上がると浩介を睨む。

「デメエ等何突っ立ってやがる。かかって行かねえか!!」

周りと同様に啞然としていた仲間二人は、我に返り浩介に向かう。

「ああああ!!」

「うおらあっ!!」

互いに声を出しながら向かって行く二人の姿はまるで素人だった。横田の仲間といえど、似たような風貌で威圧感を与えていただけであり実際喧嘩になれば殆ど横田に任せっきりである。そんな彼等に経験も糞も無い。

最初にひとりの拳を横田にした時と同じ様に横に払い退け、瞬時に顎に肘うちを当てる。同時に向かってくる男には身体を回転させ躲し腹部に蹴りを入れる。

ひとりはその場に崩れ、もう一人は壁に衝突し倒れた。

それを確認する暇も無く後ろから横田が空手技を連続で繰り出す。

先程と比べ動作も小さく何より速い。横田が恐れられている理由も理解できるような攻撃だが、浩介はそれを躲したり手で防いだりと一切決定打を与えなかった。

横田は浩介の動きに驚きながらも攻撃を続ける。いや、続けなければならぬと感じていた。

一度手を緩めた瞬間、狩る側は浩介に代わってしまうという焦りがあった。それだけ浩介の動きは隙が無く無駄も無い。自分の思考を読まれているのではないか、と思うぐらい的確に攻撃を防いでいたのだ。

「——ッ！ クソ！！」

案の定、間合いを読まれ手詰まりとなった横田は浩介の拳を顔面に受け仰向けで倒れた。

「はあ、はあ」

横田は息を切らしながら、頬にまで流れる鼻血を拭った。

「はあ、はあ、お前……何者だ？」

横田の言葉に浩介が答えることは無く、上から見下ろし冷ややか

な目を向けるだけだった。

ポタポタと鼻血を床に垂らしながら力の抜けた足に鞭を打ちゆつくりと立ち上がった。

「テメエが強いとは噂で聞いていたが、まさかここまでとはな」

浩介は初めて人前で殴り合いをしたのだから、それはここにいる全員が思ったことだった。

「だが俺は諦めねえ！ 楠木は俺のモンだ！」

横田はそう言って再び構えるが浩介は動かない。

「お前何か勘違いしてないか？」

鋭い眼で横田を睨んだ後、チラリと綾華を見る。綾華は真剣に浩介を見ていた。

「綾華は俺のモノでもないし、お前のモノでもない。お前が付き合いいたいなら勝手に告白したらいい。尤も、綾華をモノとしか見ていないお前に理想が叶えられるとは思わないがな」

「なっ——」

「それからもう一つ、だからって俺に喧嘩をふっかけてくる意味も分からない。俺を倒せたからって綾華と付き合えると思ってんのか？ かなり見当違いだと思うぞ」

横田は拳を握り締めながら浩介を睨む。

「もう俺には付き合えるとかの問題じゃねえんだよ！ 一緒に行動している姿を見ると苛つくんだよ！！ 力尽くでも離してやろうと

思っただよっ!!」

「それは無理だ。俺には綾華が必要だと言った筈だ。これから先も綾華と一緒に居させて貰う。誰にも邪魔はさせない」

「浩介……」

事情を知らない人が聞くと盛大な愛の告白と捉えられる内容に思わず綾華も顔を赤くする。

勿論浩介にそのつもりは無く、今後危険な道を進む為のメンバーに綾華が必要という意味なのだが、それが理解されることはなかった。

「デメエ殺す!!」

それに逆上した横田はポケットから折り畳み式のナイフを出し、切っ先を浩介に向けた。

横田の思わぬ行動で周りは騒然とし、女性の悲鳴さえ聞こえてくる。

「……それがどれ程の行動か、覚悟は出来てるんだろうな!?!」

今まで以上に重い口調で浩介は威圧する。

「黙れっ!!」

ナイフを構え向かってくる横田にもう遠慮はしないと決め身構える浩介だったが、不意に左側から気配を感じ左腕でガードをつくる。

浩介が蹴り飛ばした筈の男が、いつの間にやら持ち出してきた筈

の柄を武器にして振り下ろしたのだ。

咄嗟に左腕でガードしたことにより直撃は免れることが出来たのだが、浩介の左腕に鋭い痛みが走る。

「っ！！」

一瞬動きが止まるものの、それで状況を悪化させる程の時間は費やさない。

身体を捻り箒の柄を掴むと、そのまま向かってくる横田の腹部を突く。

瞬時に箒で攻撃してきた男も腹部、そして顔面を強烈に殴りつけた。

その男が気絶したことを見て感じた浩介は、腹部を押さえのた打ち回る横田の胸倉を掴み強引に立たせる。

「すみません、すみません」

戦意を失った横田は苦しそうに何度もそう呟いた。それは横田が初めて経験する完全なる敗北と恐怖と動揺が入り混じった結果だった。

「それは簡単に出して良い物じゃない」

それとは横田が出したナイフを意味している。

「自分の感情だけに任せそれを使おうとすれば全ては自分に返ってくる。その覚悟も無い奴が使えば自ずと結果はここのようになる」

浩介は横田を投げ離し冷たい視線を向ける。

「お前はもう後戻りは出来ない。その呪縛に縛られながら生きるんだな」

横田は涙を流し静かに泣いた。

空手の推薦で決まっていた大学もこれで無くなり、今後の人生も暫くは棒に振るうことが決定した。

先に仕掛けたのは横田であり、ナイフも出した事から最早言い逃れは出来ない。

横田に残された感情は、悔しさと言い様もない敗北感だけであり、この先後悔と反省をしていくこととなる。

唯一の救いは相手が浩介だったことだろう。一般の生徒相手だったなら我を忘れ怒の感情に支配された横田は間違い無く殺していた。

結果としてはどちらも辛い道になるのだが、命を奪った重荷に比べたら幾分軽い罪で終わる。

横田の哀れな姿を眺める浩介は何ともやり切れない心境だった。

そして浩介の左腕から流れる血が腕を伝ってポタポタと床に落ちる。

「浩介!？」

それに気付いた綾華が浩介に近寄る。

「……傷が開いた」

それは東野に刺された時の傷であり、数週間で治る筈もなくそこに箒の柄が直撃したのだから仕方のない結果だった。

浩介が制服の上着を脱ぐと、シャツの左腕は真っ赤に染まっていた。

「保健室！？ いや、救急車！」

「綾華落ち着け」

明らかに動揺している綾華に優しく微笑みかける。

「だつて！！」

顔を上げる綾華の目は赤く充血し、今にも泣きそうな表情だ。

「これぐらいじゃ死なない。消毒して包帯を巻き直せば自然と治る」
「っ——！ ごめん…浩介、ごめんなさい……」

ついに綾華は泣き出し、その傷が自分の問題で開いたと責任を感じ、膝から崩れ落ちた。

「綾華が気にすることじゃない。いずれは訪れる問題だった。その時も俺は同じ行動を取った。それが今だったってことだ」

浩介は綾華の前でしゃがみ、右手で綾華の頭を撫でる。

「これから何があっても俺がなんとかする。だから綾華は笑顔でいればいい」

綾華はコクコクと頷きながらも泣き続けた。

周りはそんな二人を見守るだけで、声を掛けようとする者はいなかった。

そんな静寂の中浩介はこの状況を変えようと立ち上がった。そして杉田に電話をする為に携帯の入っている上着を取ろうとした。

「——ッ！！？」

しかし急遽その動きを止め、素早く辺りを見回す。

——何だ？ 今の違和感は何？

浩介の視線に写るものは立ち竦む生徒の姿。特別違和感を覚える情景ではない。

そんな浩介の行動に疑問を持った生徒達もその姿を見入っていた。

——勘違い……か？

自分の勘違いを思考に入れ、一旦落ち着こうと大きく息を吐き出した。そして浩介はある音を入耳することが出来た。

——勘違いじゃないな

それは時計の秒針が刻むような音であり、食堂の壁に掛けられている時計の音量ではないことを理解した。

そして今度は音のする下へと視線を移し、床を見渡した。

「――なっ!？」

視線が捉えたモノは一メートル程離れた距離に置いてある小包のような箱だった。包装もしており、ご丁寧に赤いリボンまで付けられている。そして音は確かにその中身が発している。

――いつからあった!? 最初は無かった筈だ

記憶を思い返してもそんなものが床に落ちていた記憶はないし、誰かが持っていた姿も見えていない。

何より一メートルしか離れていない距離に他の生徒は近付いていない。誰かが投げたとしてもそれは直ぐに気付く筈だ。勿論綾華と愛理、横田や二人の仲間もそんなモノは持っていなかった。

浩介は何となくその中身を理解し、ゆっくりと近付く。

すると発している音の間隔が一秒からピピピピ、と連続して刻み出した。

「全員伏せろっ!! 早く!!」

怒声ともとれる大声に、その場にいた生徒達は地震の避難訓練のような形で伏せていった。

浩介もその箱を蹴り、誰も居ないスペースへ転がる箱を見ることがせずその場に伏せた。

ドオオーーン!!!!!!

と、大きな爆発音と共に、生徒から次々と悲鳴が上がる。

透かさず立ち上がった浩介は爆発した場所を見る。その場所の床や壁は黒く焦げ付き、近くのテーブルもボロボロの状態で転がっていた。

生徒達に怪我が無かったのは幸いだったが、精神的にはキツいものがあるだろう。

浩介はついに学園にまで被害を与えた相手と、その可能性を危惧きぐしながらそれを防ぎきれなかった自分自身に怒りを覚え、爪がめり込むぐらいに拳を握り締めた。

「いやあ、君は素晴らしい！ うん、素晴らしいよ」

その声で後ろを振り返った浩介が見たものは、壁にもたれ掛かりながら腕を組み笑顔をむける若い男だった。

「お前が元凶か？」

「そうとも。爆弾を作ったのは俺じゃないが、計画をしたのは俺だ」
「ついに動き出したって事か……」

「隠さなきゃならない事も無くなってきたからな。君達はその片鱗を早くも知ったわけだから光栄だと思うんだね」

「狙いは俺だろうが！ 皆は関係無い！！」

「関係無い？ 本気でそう思っているのか？」

男から笑みが消え、真剣に浩介に問う。

「関係無いことはないんだよ。寧ろ全人類に関係する事だ。その先駆けとなつたのが此処日本だ」

「浄化するとしても言いたいセリフだな」

男はニヤリと笑う。

「君達はそんなに問題視されて無かったんだが、今日は来て良かった。キミは大問題な人物だ」

「それは喜んでいいのか？」

「勿論さ。ただあの世で喜ぶ事になるがな」

男は壁から背中を離し、組んでいた腕も解いた。そして仁王立ちのような形で浩介と対峙する。

「いいのか？ もう直ぐしたら警察が来るぞ」

爆発の音で食堂の入口には大勢の人集りが出来ているこの状況で誰も警察を読んでいない訳がない。

だが男に焦りはない。

「警察？ だからどうした？ そんな奴らじゃ俺を殺すことも出来なければ、捕まえることも出来ない」

「成程……その自信がどこから来るのか、見極めてやるよ」

浩介はそう言っただけで戦闘態勢になる。

「君がその気なら、少し遊んでやろうかな」

男も微笑みながら構えた。

「来いよ」

手で挑発した瞬間に浩介は動いた。

一気に距離を詰めると顔目掛けて拳を振るった。

「ほう……」

男はあっさりと躲すが、浩介は直ぐに回し蹴りに転じる。それも身体を逸らし空を切らす。

躲し続けていた男だったが攻撃の手を緩めない浩介の手数に男はついに手を出し、顔の前で浩介の手を止めた。

「俺に手を出させるとはやるじゃないか。中々居ないよ」

浩介は掴まれた手を振り払い、一度距離を取った。

「君は優秀だ」

だが、その声が聞こえたのは浩介の直ぐ背後。男は距離を取った筈の浩介の後ろに立っていた。

男から目を離れた訳じゃない。離れたとしたら瞬きをした一瞬だ。まはたその一瞬で相手は後ろにいる。

考えられない出来事に周りについていけなかった。現に浩介も男が消えたようにしか見えず驚きを隠せない。

「まあ苦しめ」

咄嗟に振り返りながら身体を限界まで回避させる。繰り返して

た男の手の平の突きはその瞬発的な回避行動のお陰で当たる事はなかった。

しかし浩介の身体には得体の知れない衝撃が走り、その爆発的な力は浩介を弾き飛ばした。

「ぐあつっ!!」

背中から壁に衝突した浩介は無惨にも崩れ落ちた。

これも直撃はしてない。だが浩介は攻撃を受けた。その圧倒的な力と男から伝わる威圧感が食堂を支配し、誰一人、口を開くものは居らず、わけの分からない現状を眺めるに留まる。

「寸前で直撃を躲すとは、やっぱり君は素晴らしいね」

「……くっ——」

「あ、そうだ！ 君には教えところか!!」

男はカツカツと靴の音を鳴らしながら崩れ落ちた浩介の前に立つ。

「倉谷ノルベル研究所をやたら調べている男がいてね。丁度今頃は俺達の仲間が接触してる頃かもね」

「——!! 柴田……」

それは紛れもなく柴田だと理解した。

何事も無い状況の中、柴田はひとりで研究所を調べ上げると買っ
て出たのだ。一緒に調べるつもりだった浩介達に、

『搜索は僕の得意分野です。浩介君達はまだ学生でしょう。偶には

学校へ行ってリフレッシュしてきて下さい』

と、いつもの笑顔で言ってきた姿が脳裏に過ぎる。

それは張り詰めた詮索を続けていた浩介達を労^{いたわ}った優しさであり、依頼屋を本業としている柴田の強がりでもあった。

「君達は此処で終わりだ。平和ボケしている君には俺の力も理解出来ない」

男はそう言って先程の技で浩介に止めをさそうとしていた。

「サヨナラだ」

そう呟いた時、浩介の雰囲気が変わるのを感じた。

「クツクツクツ……」

浩介は息を殺し笑っていた。そしてそれは次第に大きくなりついには大声で笑い出す。

今の状況では有り得ない様な笑い声が食堂に響く。

「死を前に気が狂ったか？」

止めをさそうとしていた男にも理解が出来ず、精神が崩壊したとは思えなかった。

「フツ！ いや……気は狂ってない。俺は俺だ」

浩介はゆつくりと立ち上がる。いつでも始末出来る状況いる男はそれを眺める。

「確かにお前の言う通りだ。理解出来ない」

ふうー、と息を引き出しながら完全に立ち上がった浩介は男に顔を向ける。

「ならば俺は常識を捨てよう。お前という人間を常識で考えていても答えは出ない。そして俺はひとつの仮説を立てた。理解することは出来ないが、それが真実なんだろうな」

「……お、お前——!？」

「俺を……舐めんなよ」

男は突如浩介の殺気に吞まれ、頬に当たる浩介の拳を受けよろめいた。

「——ツク!!」

直ぐに顔を向ける男だったが、浩介は早くも懐に入っていた。

「俺は!」

そして鳩尾に強烈な一撃を叩き込むことで男は身体を曲げる。

「特異な人間なんだろうな」

続けて下から拳を振り上げ顎に入れ、男は仰け反る。

「お前もそうだろ」

最後に隙だらけの男を思い切り蹴り飛ばした。

壁にぶつかり、崩れ落ちはしなかったが相当なダメージを負った男は苦しそうな表情で浩介を睨む。

「尤も、俺が特異なのはお前と違ってココなんだろうけどな」

そう言っ て自分の頭を指で叩いた。

「粹がるなよ小僧!!」

男は手の平を浩介に向けた。

それは再び理解出来ない攻撃をするという合図でもある。

浩介は逃げることもせず、赤く染まった左腕を空に掲げた。そしてタイミングを見計らい一気に振り落とす。

バチンッ!!

見ている者は何の音が理解出来ないだろうが、当事者の男は驚愕の顔を向け、浩介はニヤリと笑った。

やはり腕には激しい痛みと痺れが残ったが、其れだけの代償で済んだことに安堵した。

「言っただろ。俺は常識を捨てたと」

浩介は男に近付く。

「だからといってそれに対応出来る筈がない！」

「悪いがそんな無駄話をしている暇はない。俺の仲間が待ってんだ」

浩介の眼が徐々に鋭くなる。

「そこを……」

そして男に向かって走り出す。

「どけっ！！！」

その怒声が食堂に響いた最後の声となった。

崩落の果てに3

浩介は人で溢れる大通りを携帯を片手に駆け抜けていた。

赤信号をも無視する浩介をすれ違う人が凝視する。左腕を真つ赤な血で染めながら走っているのもそれも致し方ない。そんな人々を気にする余裕もなく、ただ目的地へと足を進める浩介は携帯を耳にあてた。

「杉田さん、今何処ですか!？」

浩介が電話している相手は刑事である杉田である。

『もう直ぐでキミの学校だが、一体何があつたんだ!？』

「それは学校に行けば分かります。楠木綾華を残してるんで、詳しいことは綾華に聞いて下さい」

『ちよつと待て！ キミは今何処だ!？』

「後は頼みます。杉田さん」

浩介は携帯を切り、ひたすら柴田の元へ向かった。

杉田が運転する車は乱暴に校舎前で止まり、車から降りた杉田は辺りを見回す。

パトカーや救急車が数台止まり、今正に横田ら数名が救急車に乗せられる最中であつた。

数名というのは、あの状況を見ていた生徒が気分が悪いと言って

運ばれているからである。

近くの校庭では関わっていない全生徒が集まり、教師の指示を受けている。

それは爆弾というものが影響しているからであって、寒い校庭に集められている生徒に杉田は哀れみを抱いていた。

「……全く、問題の多い学校だ」

校舎を見上げた杉田はそう呟くと、警備している警官と視線を交わしながら中に入ってしまった。

「どういうこと、綾華！！ 一体高崎君と何をしてるのよ！！」

「それは……」

「普通じゃないよ。こんなこと……普通じゃないんだよっ！！」

食堂から出た綾華を含める関係者は、一度教室に集められ警察の指示を待った。

その中で愛理は綾華を問い詰めていた。それは勿論ここにいる生徒も知りたい内容であり、誰一人愛理を止める者はいなかった。

横田の行動から始まった今日の出来事だが、それだけならば愛理も此処まで問い詰めたりはしなかった。問題は爆弾から先の出来事である。

事情を知らない生徒達は浩介と綾華が危ない事に足を突っ込んでいるとまでは理解出来るが、今日のそれは一般人が考える面倒事で

は理解出来る範囲を遥かに超えており、頭の中は混雑状態であった。

危ないことといっても思い浮かぶ事象は、暴力団に狙われているとか、危険な連中に喧嘩を売られた、というレベルであり、実際に命掛けの戦闘を見てしまった生徒が冷静に理解出来る筈などない。

ましてや爆弾をも使って殺そうとした状況から最早理解出来る枠を超えているのだ。

そしてその時の恐怖や不安、混乱と個人的な感情が混ざり合い、愛理は綾華を問い詰めずにはいらなかった。

「何か言つてよ！！ 綾華あ！！」

愛理は崩れた理性を取り戻すことも出来ず、ただ泣きながら綾華の肩を揺らすだけだった。

「それはまだ言えないの。私だって完全に理解してる訳じゃない。突然こんな事になって混乱してるのは私も一緒なの！ だから、ゴメン。落ち着いて……愛理……」

綾華は小さな声でそう言い俯いた。

「じゃあ高崎君は何処に行ったの！？ 高崎君は何を抱えているの！？ 綾華は高崎君とどういう関係なの！？ もう私には分かんないよっ！！」

愛理はそう叫び散らし、膝を付いて泣きじゃくった。

自分には知らない事が多すぎる。こんなに高崎君のことが好きな

のに……と、どうにもやりきれない感情が愛理を襲い、その感情に支配されていた。

愛理が浩介を好きだという事は綾華も知っていた。直接聞いた訳ではないが、親友として繋がっている今も愛理の言動を見ていれば気付かないほうがおかしいぐらいだった。

しかし、綾華はその恋を応援することなど出来なかった。

浩介と愛理では生きている環境が違いすぎるのだ。

愛理は平凡な学生、浩介は依頼屋。それは一般人では分かり合えるものではなく、付き合ったとしても悩むのは愛理のほうなのだ。すれ違いが起きて悩む愛理の姿。ましてや依頼屋を受け入れたとしてもただの女の子である愛理にそんな危険は与えたくない。それは親友という綾華の切なる願いでもある。

愛理が優しいのは知っている。だからこそ真つ当な人間でいてほしいのだ。

でもそれを言うことは出来ない。言ってしまうえばその想いを自分から否定してしまうことになるのだ。

未だ泣き続ける愛理を見る。

その姿を見るだけで綾華も心が痛む。そして決心する。

「浩介にはね、私から話し掛けたの」

反応しない愛理に綾華は続ける。

「私のクラスの沙耶が殺されたと知ったその日、私は寝る暇も惜しんで情報を集めた。でもそれをひとりで解決させることは無理だった。だから浩介に協力を求めたの。愛理も良く知ってるでしょ？高崎君という人間性を？」

そこで愛理は顔をうずめたままコクンと頷く。

「全てが理に適っている人は浩介だけだった。それから私達は一緒に行動し始めた」

愛理だけじゃなく、その場の全員が耳を傾けていた。

「皆が思っている通り、私達は危険な所まで踏み入ってしまった。その中でも笑って、泣いて、楽しくて、不安で、怖くて……色んな事があった」

そこで綾華の目から涙が零れ落ちる。

「でも、私達は生きている。それは全部、浩介の……おかげだった……」

そこで愛理も顔を上げる。

「浩介が食堂で横田先輩に言ったのは……多分そいう道を一緒に進んでいるからなんだよね」

綾華は涙を流しながら愛理に微笑んだ。

「本当に頭良くて、強くて、頼りになって……でも、自分の事は疎

いんだよね。愛理がこんなにも浩介を好きだと知らないで……」

綾華は零れる涙を拭った。

「他人の事は覚ええないし、いつも冷静だし……冷めてるし……欲が、無いし……自分を……曲げないし……でも……でもね愛理！」

そしてまたポロポロと涙が零れる。

「そんな浩介が……多分、うつん。間違いなく……私も好き……」
それから綾華は、ごめん…ごめんなさい、と何度も謝りながら泣いた。

自然と生まれた浩介が好きという感情は、結果でいえば綾華自身驚いていた。

最初は本当に興味深い存在としか思っていなかったのだ。だが、行動を共にしていく中でそれは急速に変化していき、抑えることが出来ないぐらい惹かれていった。

浩介はそんなこと微塵も感じていないだろうし、綾華もそれを伝えようとは思っていなかった。——私達はそんな関係にはなれない、と心の中で幾度も言い聞かせた。

『こんなこと』が起きるまでは——

「……ずるい……ずるいよ、綾華……」

愛理は真っ赤充血した眼で綾華に顔を向けた。

「こんなことになって、高崎君は綾華と一緒に居ることを認めていて、私は何も知らないでただひとり想い続けてる。……そんなんじや勝ち目ないよお……」

愛理の想いは綾華にも伝わる。だからこそ綾華も心が痛む。

「……そうだよな。……公平じゃ、ないよね。……だから……私はこの気持ちを浩介には伝えない。一緒にいても、そんな素振りは見せないようにする。約束……するから……」

「私も一緒に行きたいって……言っても無理なんだよね……」

綾華は精一杯の想いで頷いた。

「……わかった。わかったから綾華ももう泣かないで。私は私なりに動くから……綾華の気持ちはわかったから……」

愛理は綾華の肩に手をかけながら優しく微笑んだ。

「私達ずっと親友だからね！」

「愛理……」

二人はお互い笑顔で顔を合わせ、いつまでも親友でいると絆を固めた。

「あー、話が纏まった所で、ちょっといいかな？」

ガラガラと扉を開け、気まずそうに教室に現れた杉田は苦笑いを浮かべ綾華と愛理に顔を向けた。

「……杉田刑事」

綾華の言葉で杉田を皆が刑事と認識し、表情を固める。

「皆お疲れのところ——」

「今の聞いてた？」

杉田は全身から冷や汗が噴き出るのを感じた。

一気に涙の乾いた綾華の顔は無表情であり、全身から怒のオーラを発している。

「い、いや……聞いたというか……聞こえた、というか……」

「盗み聞きなんてサイテー」

そう言ったのは愛理であり、彼女もまた杉田を睨み頬を膨らませている。

たじろぐ杉田に綾華が詰め寄りネクタイをグイッと引っ張る。

「いい？ 浩介に言ったら殺すわよ？」

「わ、わかったから……放してくれ」

綾華はネクタイを放し、座っていた席に戻った。

杉田は深く息を吐き出し、乱れたネクタイを直す。

「……ということで、俺は刑事の杉田だ。何故こんなことが起きたかはさっきの話——いや、大体予想はついたと思う」

綾華が睨んだことにより、杉田も一度咳払いをする。

「とりあえず何があったか説明してくれ」

生徒が顔を見合わせながらヒソヒソと話をする中、やはり状況を明確に知っている綾華が口を開いた。

「どけっ！！！」

走り出した浩介が男にトドメの一撃を繰り出そうとした時、男はニヤリと笑みを浮かべ消えた。

咄嗟に行動を止めた浩介は瞬時に振り返り後方に向け手を出す。

「グアッ！！」

その突拍子も無い浩介の行動だったが、その手は男の首を明確に掴んでいた。

「……何故、だ？」

男は浩介を殺す為のビジョンを頭に思い浮かべていたので、今の状況が理解出来ない。

「簡単なことだ。消えたお前がとる行動は逃げるか、俺を殺すかの二択だけだ。ならば俺が注意するのは殺すの選択肢のみ。お前が何処に現れるかは自然と検討が付く」

浩介は首を掴む手に力を込める。

「言え。柴田は何処だ？」

「い、今は廃墟となつた場所だ。尤も、生きているという保証は出来ないがな」

男は浩介に右拳を振るうが咄嗟に首を放しそれを回避する。

自由になつた男は浩介を睨む。

「これ以上貴様に時間を使うのも野暮だな。精々この地球が混沌と化す様子を絶望しながら眺めるがいい」

意味深な笑みを浮かべ男はその場から消えた。

浩介は暫く辺りを警戒するが男の気配が無いことを察し綾華に近付く。

「俺は柴田のそこへ行く。多分杉田刑事も来るだろうから綾華は此処に残れ」

綾華が返事をする前に浩介は上着から携帯電話だけを手に持ち走り去っていった。

「大体の状況はわかった。……それにしても、理解できん」
「それは私達も一緒です」

浩介から杉田に伝えた全容はあらかじめ聞いていたが、浩介も政府や依頼屋の名前は出していなかった。なので今それを伝えようとはしなかった。

あの男が政府組織の人間だろうと予想はつくが、何者なのか理解出来ないのは綾華も一緒である。

「高崎は廃墟へ行ったんだな？　今から俺もそこへ向かう」

「私も行くわ！」

そう言っただけ綾華が立ち上がる。

「しかし――」

「あいつらの正体を知りたいのは私も同じ。多分浩介は理解してる。何も出来ないかもしれないけど、行かないといけないの」

浩介も柴田も仲間である。その仲間をほったらかしになど綾華も出来なかった。

「高崎は知ってるのか！？」

「じゃなきゃあの男に太刀打ちするなんて無理よ」

「……わかった。俺が責任を持って君を連れていこう。他の者は違う刑事に引き継ぐからここで待機しといてくれ」

杉田は外で待っていてくれ、と綾華に言い、生徒を引き継ぐ為後輩の部下を探しに行った。

「綾華……」

そんな綾華を愛理は複雑な思いで見ている。

「ごめんね、愛理。一緒に行きたいと思ってるだろうけど出来ないの。私は彼等の『仲間』だから危険でも行かなくちゃいけない」

愛理は首を縦に振る。

「うん。わかってる。絶対に帰って来てね……綾華」

「……ええ。勿論」

綾華は強く頷き教室を出た。

廃墟に辿り着いた浩介が見たものは対峙する二人の男の構図だった。

ひとりは何論柴田である。拳銃を右手に持ち、息をあげながら相手を睨んでいる。

もうひとりの男はそんな柴田を軽くあざ笑っている様子。その周りには三人の男が倒れていた。

黒尽くめの服装からそれは奴らの仲間だとわかり、柴田が思った以上に善戦していると少しホッとすることができた。

そして男が柴田に向かって行っただと同時に浩介も走り出す。

柴田は銃で二発撃つが男はその弾が見えているのか走りながら躲していく。

「くっ——」

柴田は急遽肉弾戦に切り替え男の激しい攻撃を防いでいった。

しかし明らかに優勢なのは男の方だと見ていただけで知ることが出来た。随分疲れている柴田だが、それを抜きにしても男の方が強い。

柴田が得意としているのは人や場所、内情の搜索と拳銃やナイフなど武器系統の扱いだ。それだけで数々の依頼をこなしてきた柴田がこの男と慣れてない肉弾戦をすることは劣勢極まりない。

そしてついに男の拳が柴田の腹部を直撃し、血を吐き倒れる柴田に更なるとどめを刺そうとする。

「楽しかったが、これで終わりだ」

男は口元をつり上げ、不気味に輝く右手を倒れた柴田に振り下ろそうとする。

——終わったよ……兄さん……

自身の終わりを覚悟した柴田は目を瞑り最後の時を待った。

しかし男の攻撃が柴田にくることは無く、ゆっくりと目を開く。

「——！！ 浩介……君？」

振り下ろされたと思った男の腕は浩介によって掴まれていた。

浩介は腕を掴んだまま男を蹴り飛ばした。

「大丈夫か、柴田？」

「……先程の、攻撃で、あばら三本ぐらいは……やっちゃいましたね。気をつけて……下さい。彼の力は……異常です」

「わかった。今は動くな」

浩介は苦しむ柴田から男へと目を向ける。

たった一撃与えただけで柴田を戦闘不能にするこの男も、また常識では考えられない人間だと理解する。つまり一撃でも貰ってしまえば浩介だろうが地獄を見ることになる。

「貴様は……まさか！ グランが負けたのか！？」

名前なのかコードネームなのかはわからないが、グランとは学園に現れた男だと理解した。

「いや、あの男は自ら引いて行ったよ」

「引いた？ フン！ 甘い奴だ」

鼻で笑う男をよそに、浩介は倒れている三人の男に目をやる。

脚から血を流しているのは柴田の行為だとわかるが、彼らは顔の原形がわからないほど潰されていた。

「……ソイツはお前がやったんだな？」

その男も浩介の言葉の意味を理解した。

「ああ……三人掛かりでも始末出来ない役立たず共だったからな」
「そうか。これで状況は把握した」
「仲間なんだろう!? とか言わないのか?」
「生憎そんな心境は持ち合わせていない。こうなったのも自業自得だ」

その言葉で男は高らかに笑う。

「そうか! そんなサバサバした奴、俺は好きだぜ」
「俺はお前が嫌いだ。引いてくれんのか?」
「それはできねえな!」
「……だろうな」

男は浩介に構えると、柴田に浴びせた一撃の時と同じく拳に光を纏う。

「それがお前の強さの秘訣か……」
「……そんなに驚かねえのな」
「経験済みだ」

そう言うた浩介は男との距離を素早く詰め顔を狙う。
一方の男はお構いなしに同じく顔目掛けて拳を出した。

攻撃を止めた浩介はバックステップをとり相手の攻撃を躲す。

——厄介だな……

浩介がそう思うのも無理はない。

浩介の攻撃は元から狙い通りの攻撃で、いつもとは違い威力は無いに等しかった。その分スピードと防御を優先とし、男の出方を見定めたのだ。

それに対し相手は何の躊躇もなく攻撃してきた。これは浩介を試すような攻撃では無く、正に一撃必殺の力押しだ。肉を切らせて骨を断つという戦法を用いてくる限り、浩介にはかなり分が悪い相手なのだ。

一撃を貰ったらアウト。相打ちでもアウト。油断という二文字がそのまま死を迎えるこの現状に浩介は苦笑する。

「来ないならこっちからいくぜ」

今度は男から仕掛けた。攻撃は変わらず力押しである。それを連続で繰り出し、浩介はそれを次々と躲していく。

無駄な攻撃はせず、今は躲すことだけに集中する浩介に、中々当てることが出来ない男は次第に苛ついていった。

「チツ！ ちょこまか動きやがって……」

押しているのは間違いなく男で、浩介は躲す度後ろへ下がりが距離を取るという行動を繰り返していた。

果たして何発攻撃は空を切っただろうか、ついに男は浩介を追い詰めた。

追い詰めたといっても決して攻撃が当たったわけではない。下がり続けていた浩介の後ろは廃墟となった建物の壁が立ちふさがっていたのだ。

これでは後ろに回避は不可能。あとは左右に逃げるだけだ。そして距離をとって回避していたのも今度は壁のせいで思った以上の距離を取れなかった。この状況を男は最大の好機と捉えた。

——この距離は俺の間合いだ！

男は今までで一番力を込めた一撃を放つ。

それはやはり顔に目掛けて繰り出されたものであり、予測さえしていれば如何に相手の間合いだろうと浩介にとって避けるのは簡単だった。

寸でのところで顔を左へ躲し、男の拳は壁を突き破り大穴を開けた。

——左か！！

躲されることは男にとっても想定内である。
後はこの距離感を保ったまま攻撃を続ければいつかは倒せる、と思っていた。

いつかは倒せる——

それが大きな間違いであり、それこそ浩介が誘った男の油断であった。

攻撃を躲した動きからそのまま男の顔へと拳を振るった。
それが浩介が男に放った最初の攻撃であり、それを予知していなかった男は防ぐこともできず直撃を喰らった。

しかしこれで終わりではない。

砕けた壁の瓦礫を手に持った浩介は、フラついている男の膝へ殴りつけたのだ。瓦礫が更に粉々になる力で殴りつけられた骨の砕けた足から体を支える力を失った今、地面に倒れることしか出来なかった。

自由に動く時間が出来た浩介は、廃墟から程良い長さの鉄パイプを見付けると、それを持ち男を見下した。

男は必死の形相で立ち上がろうとするが、砕けた脚と朦朧とする意識でまともに動くことは出来なかった。

「無駄だ。顎に直撃したんだ。脳が激しく揺れたせいで意識もはっきりしない筈だ」

「——貴様……狙って、いたのか……？」

「ああそうだ。お前とまともにやりあっても不利な状況だったんだ。悪いがお前の油断を狙わせて貰った。全て俺の構想通りの結果だ。理解したか？」

無表情で言い放つ浩介に男は寒気をも感じていた。

「あ、ああ。俺の負けのようだ。さあ、好きにしろ」

男は観念したように大の字に横たわる。だが浩介はその言動に目を細め怪訝な表情に変わる。

「早くも意識がはっきりしてきたか。……お前、気に入らないな」
「な、何を——！！」

浩介の言っている意味がわからない男だったが、砕けていない反対側の太ももに鉄パイプが突き刺さり、思考も出来ず断末魔の叫びをあげた。

「そう言えば助かるとでも思ったか？　俺が善良な人間だとでも思ったか？」

それは正に男の考えの全てだった。

浩介の同情を誘えば命だけは助かる。後は怪我さえ治ればいくらでも復讐出来る。それだけの力が俺にはある。そう考えていたのだ。

「残念だったな、馬鹿野郎」

「た、のむ……たすけ……て、くれ……」

男の本音であろう命乞いに、浩介は鼻で笑った。

「前にも言ったが、生憎そんな心境は持ち合わせていない。自業自得。お前も然り、だな」

男は悲痛な面持ちで浩介を見る。

「お前は……既に……手を汚している、のか……？」

男の言っている意味はわかった。今までに人を殺したことがあるのか？　と、聞いているのだ。そうでなければこんな平常心で人の命を奪える筈がない。

人の心理でいえば余程追い詰められた状況か、平常心を失った人間ならば後先考えず行動に移す。それは横田が良い例である。

だが浩介は違うのだ。この場を制しているのは完全に浩介であり、相手を生かすも殺すも浩介次第。曖昧な覚悟で行動に移せるものではなく、行動に移したとしても後々後悔と罪の大きさにさいなまれる。それを平常心の浩介が知らないわけがない。

しかし男は恐怖する。浩介の冷めた目、口調、雰囲気。それら全てをとつてもコイツはヤバイ、と神経を伝って教えてくる。

そして気付くことになる。力を誇示し、この世界のぬるま湯に浸かっていたのは紛れもなく自分だったんだと。甘かったのは自分なんだと。

「あの男と会ってから、俺は覚悟を決めた」

浩介は男の脚に突き刺した鉄パイプを引き抜く。その激痛で男は再び悲鳴を上げた。

「お前達を生かしてはおけない。もう、戻ることは出来ない」と

浩介は鉄パイプを男の胴体、心臓へと狙いを定める。

「後悔？ 罪悪感？ そんなものいくらでも乗り越えてやる。俺は依頼屋だ。例えば正当な道を外れようがお前達は生かしておけない。俺と共に……地獄へ落ちろ！！」

そして浩介は意を決し鉄パイプを振り下ろした。

「やめてー！！！！！！」

丁度その時、車から降りた綾華の叫び声が木霊した。

それはまるで崩落していく世の中に佇む天使の叫びのように。

崩落の果てに4

——ドシュッ！！

その音と共に全員が硬直し、息を呑んだ。何も思考出来ずただ茫然とする。信じる事も出来ずただ見つめる。嘘だと思い真実を実感する。

何が本当で何が偽りなのか理解出来ない。何処で間違ったのかどれが正しかったのかもわからない。誰を疑い、誰を信じるか？果たして悪なのか、正義なのか？

それすらあやふやになる状況に陥った人間に取れる正しい行動とは一体何か、誰一人答えられる者は居なかった。

鉄パイプは寸分の狂いもなく男の心臓を貫いた。

男の口から溢れ出る血。貫いた箇所を中心に地面に広がる血。全く動かない男。そして両手で鉄パイプを握る無表情の浩介の姿。

この状況で誰が冷静にいられるだろうか？一線を越えた浩介を誰が温かく迎えられるだろうか？否、そんなものは必要無い。

今の浩介に必要なものは、かけがえのない仲間でも、温かく迎えてくれる優しさでもない。ただ高崎浩介という自分だけ。それ以外全て拭い去る覚悟がなければこの先戦っていくことなど出来ない。全てを背負っていくと決めた浩介に後悔はない。

鉄パイプを抜き、目を見開いたまま命を失った男の顔を閉じさせる。それはせめてもの優しさであった。

浩介は血で濡れた鉄パイプを近場に放り投げ、周囲に目を向けた。

やめて、と叫んだ綾華を始め、杉田も啞然としている。

そして浩介と顔を合わせた二人は恐怖と緊張で身震いするが、綾華が恐る恐る一步踏み出す。

「こ、こう……すけ……？」

「来るな」

浩介は重い口調で綾華を止める。

綾華の声は届いていた。だが浩介はその手を止めなかった。その時点で綾華と交わす会話も仲間と思ってくれる信頼も何もかも失ったのだ。

今更今まで通りの関係など築けないと知っている浩介は最後に笑みを浮かべた。

「綾華、柴田……ここでお別れだ」

「いや……」

「俺は俺の道を進む。お前らはお前らの道を進め」

「嫌っ……」

「後は俺がなんとかしてみる。奴らの好きにはさせない」

「いやっ！！」

綾華は涙を流し、膝から崩れ落ちる。

「短い間だったが、楽しかった。ありがとう」
「嫌よ、こんなの……」

浩介は綾華達に向かって歩き出す。

「……高崎。警察として、お前を捕まえざるおえんぞ」

杉田はそれすらしようがないことだと思っていた。まだその方が浩介にとって良いかもしれない、と。

「やってみる。俺はもう前に進むしかないんだ」

だが、浩介から返ってきた挑戦ととれる言葉に杉田は口をつぐむ。

そして浩介は綾華の目の前まで来ていた。

「だから、さよならだ」

しかし綾華の前で立ち止まることなく素通りし、一言小さな声でそう呟きそのまま出口へ歩いていった。

「こうすけえー！ー！ー！ー！」

綾華の必死の叫びも虚しく、反応することなく浩介はその場を去っていった。

「——ッ！ー！」

綾華は顔を押さえ泣き続けた。

自分の声が届かない悔しさと、何も出来なかった自分を憎むかのようになんて声を出し悲しみに暮れるのだった。

「――ハッ!!」

浩介は眠れぬ一夜を過ごし、朝は悪夢で唸るように飛び起きた。

呼吸も荒く、寝汗もびっしょりとかいている。時計を見ると六時
を指しており、約二時間しか寝れてないことに溜め息をついた。

「思ったよりもキツいな……」

それは人を殺めたことと、仲間を失ったことが精神的にきている
のだろうと考え、軽く苦笑する。

二時間といえ、すっかり眠気が覚めてしまったので二度寝などす
る気にならない。

ベッドから出た浩介は汗でべとつく体をシャワーで洗い流し、上
半身裸の状態で左腕に新しい包帯を巻きながら部屋を見渡す。

――この部屋も出た方がいいな

綾華と柴田はそこまで気にする必要はないが、杉田が来たら後々
面倒になるという思いと、気持ちを切り替えるには丁度良いという
考えで早めに引越そうと決意した。

私服に着替えた浩介は当分帰らなくてもいいように、有り金全て
と携帯、煙草、奪った銃をジャケットに入れ、その他必要な物を大
きめのビニール鞆に入れた。

——携帯も替えるべきか……

ふと手に持った携帯を見つめながら、めんどくさいという意味を含めもう一度溜め息をつき、鍵を持ち部屋を出た。

浩介が向かった先はいつもの喫茶店であり、駅前で早い時間から開いているだろうと予想した通り、七時前にして既に開店していた。

さすがに朝はちらほら客が入っており、いつもの席は使われていたのでカウンターへと座る。とはいえ待ち合わせなどではないのでテーブル席に座る理由もないのだが、少し心が痛むのはやむ終えない。

「いらっしやいませー。ご注文は？」

朝の混雑する時間だからなのか、お冷やとお絞りをテーブルに置き注文を聞いてくる店員はマスターではなく、可愛らしいバイトの女の子だった。

「コーヒーとモーニングを頼む」

「かしこまりましたー」

女の子の背中を見送りながら浩介は煙草に火をつけほくそ笑んだ。何も知らないこの女の子はバイトしながら平穏な日々を送っているんだろうな、と思うと自分の状況が随分かけ離れているんだなと実感出来る。

「今日はひとりか？」

そんな浩介を見ていたマスターが慣れた手付きでコーヒーを淹れ、カウンター越しに話し掛ける。

「ちょっと色々ありましてね。多分今後もひとりです」

苦笑いを浮かべる浩介にマスターは神妙な顔に変わる。

「随分疲れている様子だな。あんたがそんな顔して店に来ると思わなかったよ」

「こんなんで疲れたなんて言っただけでしょ。勝負はここからですから」

「大した精神力だな。どんな時でも冷静に、か。正にあんたを表す言葉だな」

それは間違いなく杉田に話した言葉だ。

「……聞いてたんですね？」

「そりゃあ他に人の居ない店内であれだけ大きい声で喋られたらな聞くなというほうが無理だ」

「……正論ですね」

マスターはカウンター越しからコーヒーとモーニングを浩介の前に置く。

浩介はお礼を言うと、煙草を灰皿へ押し潰しコーヒーに口をつける。

「それで？ 今後の行動は決まっているのか？」

「ええ。それも明確に」

「無茶するなどは言わん。お前の人生が無茶みたいなものだからな。ただ、勝負に勝つには体力が絶対条件だ。いくらお前だろうと体力が無くなれば思考力も低下する。今いっぱい食べとけよ」

そう言つてトーストとゆで卵を更に一つずつ皿に乗せた。

その行動に浩介は啞然とする。

「……マスター、何者ですか？」

「お前の顔に書いてある」

素っ気なく言うマスターに浩介は小さく笑う。

「いただきます」

とある警察病院の一室に杉田は来ていた。缶コーヒーを飲みながらベッドの横に置いてある椅子に座り、眠たい目を擦った。

昨夜眠れなかったのは浩介だけではない。綾華は泣き疲れて実家で寝ているだろうが、杉田と柴田は三時間程度しか睡眠をとっていないのだ。

杉田に関しては刑事としての書類系の仕事が山積みだったというのもあるが、理由はそれだけではない。だからこそ明朝という時間帯に柴田が入院している一室へとわざわざ足を運んだのだ。

柴田に関しては肋骨数本を折る怪我で、内臓や他の部分に外傷は無く、激しい運動は出来ない程度で済んだ。

柴田もベッドから身体を起こし、缶コーヒーを飲みながら杉田と対話していた。

「杉田さんは間違っていると思いますか？」

「ん？ そうだなあ……」

話しているのは紛れもなく浩介の行動についてだった。

「刑事として、結論は間違っていると言わなければならない。だが、俺が直接現状を見たわけじゃないから個人的には何も言えない。きみはどうなんだ？ 間違っていると思うのか？」

「僕も間違っていると断言は出来ません。あの男がそれなりの人間だったなら間違っていると思います。でも、それならば浩介君も殺すという考えまではいかなかったでしょう。しかし確かに彼は異常だった。それが全てだと思います」

その男と対峙した柴田が言うのだから、それは間違いないだろう。

「その異常とは？」

「光輝く異質な何かが手を中心に集まり、凄まじい攻撃力を生み出していました」

「ただの力自慢じゃないと言えるのか？」

「ただの力自慢がたった一発で人の顔を潰すことが出来るでしょうか？ コンクリートの壁に大穴を開けることが出来るでしょうか？ 僕には到底理解出来ません」

ふむ、と顎に手を当て杉田は学園での話を思い返す。

「俺が学園へ行って楠木さんから話を聞いた内容も結論はそうだった

た。男が消えたのだ、見えない攻撃をしたのだ、話を聞いた俺もそうだが、実際に見ていた生徒ですら理解出来ないと言っていた。一体奴らは何なんだ？」

「浩介君は『それがお前の力の秘訣か』とか言っていました。恐らく何かしら掴んでいるでしょうね」

「それは楠木さんも言っていた。彼は何を見出したんだろう？」

柴田はコーヒーを飲み、一息いれたあと杉田に口を開いた。

「杉田さん。話しておきたい事があります」

その真剣な表情に杉田も目を見開く。

「話しておきたいこと？」

「ええ、僕等が体験した商店街事件からの出来事です」

杉田の顔付きが一拳に変わる。

それを知らなくては男の正体など分かる筈もない、と思い柴田は全てを話そうと決意した。

浩介が離れた今、頼りになるのは杉田だけであり、何より警察の情報網も必要だと感じた。

柴田は見たこと、聞いたこと、体験したことを全て話した。

杉田も眠気が晴れたのか、真剣にその話を聞いた。浩介から触りだけは聞いていたのでそれらが嘘だとは思わない。時間も忘れ脳内を必死にフル回転させる。

「そんなことが……」

そして全てを知った。岸部三郎が何を知り、どこの組織に狙われたのか。浩介と柴田が依頼屋だということを。

「ちょっと整理させてくれ。君達は依頼屋組織に所属しているのか？」

「いいえ。僕達はあくまでどこにも属さないフリーの依頼屋です。組織に関しては僕もあなた達警察と同じぐらい何も知りません」

苦笑いを浮かべ柴田はコーヒで喉を潤した。

「奴らは政府の連中だと思って良いんだな？」

「それは間違いないと思いますが、政府に所属しているかどうかは分かりません」

杉田は首をかしげる。

「どういうことだ？」

「元から政府にいた人間ではない可能性が高いということです。浩介君の読みではそいつらが政府の人間を操っていると考えています。そして彼の読みが外れることはないと僕は確信しています」

柴田は何の疑いのない目で杉田を見る。

「つまり、今は政府の狙いを突き止めなければならないのか」「そういうことですね」

とはいえ政府の狙いが何であろうが、殺戮兵器という時点で悠長な行動はしてられない。

「俺は上に掛け合ってみる。上手くいけば政府の野望を止められるかもしれない」

「……彼等が何者か分からない以上、かなりの死者が出ますよ」

「それはそうだが、このままにしておいても結局同じことだ。上に伝えるだけ損は無いだろ」

現状を打開するならそれが一番手っ取り早いのは確かなので、柴田は不安を抱きながらも頷いた。

「君はどうする？　と聞くのも野暮か……」

依頼屋の柴田に今後の行動を尋ねたが、よく考えれば行動はひとつしか無いと杉田は自答する。そして柴田もクスツと笑う。

「ええ。僕が此処で身を引くわけがありません。もう少しまともに動けるようになったら浩介君と接触を図ります。今一番辛い心境にいるのは彼の方でしょうから……」

杉田は頷く。

致し方ないと開き直っても人を殺したことに変わりはない。別に誰も浩介を責めてはいないが、それすら浩介としては辛いものがあり、ひとりになることを決めた。

——彼の信頼は強いな

柴田の言葉でそう思い、自分の心境としても浩介に対しなお期待しているんだと実感し苦笑する。

「無理はするなよ」

杉田は椅子から立ち上がると、スーツの上着を羽織りながら柴田を見る。

「はい。僕も一度は諦めかけた命と野望を浩介君に救って貰いましたから。簡単には死ねませんよ」

杉田は笑みを浮かべ頷くと、またな、と言って病室を出た。

扉が閉まったのを確認した柴田は、ベッドの脇に置かれた小さなラックの引き出しから写真を一枚取り出した。

写っているのは当時十四歳である柴田と、その隣に笑みを浮かべピースをする二つ上の男。

——兄さん……一体何処に行っただんですか……？

柴田の野望は、生き別れた兄を見付ける事である。

その為依頼屋になり、兄を捜した。搜索の依頼がくると自分と重なったこともあり積極的に引き受けていった。

——あの事件から十年。これだけ捜しても見付からないなんて

依頼では全て見付かっているのに、自分の兄は一向に見付からない。そのもどかしさが柴田にはあった。

そして見付からないかもしれないという不安を押し殺し、柴田は布団に潜った。

「ごちそうさまです」

浩介はマスターの優しさが詰まったモーニングを食べ終え、食後のコーヒーを啜る。

朝からそこまで長居する客は居らず、今はいつもの落ち着いた店内に変わっていた。

煙草に火をつけ、紫煙を見つめながら物思いにふける浩介を見たマスターは、食器を洗いながら口を開いた。

「今後の考え事か？」

紫煙からマスターへと顔を上げた浩介は軽く頷く。

「考える必要はないんですけどね。まあ携帯変えてから動くかとか色々模索してたんですよ。でも、余り時間も無いのでこのまま行こうと思います」

「……そうか」

「携帯変えるんですか！？ まだ新しいのに、勿体無い……」

バイトの女の子がかなりフレンドリーに接してくるのを、浩介は微笑する。

「これは訳ありだね。気分の問題だ」

浩介は手に持った携帯を持ってきた鞆に入れ、それをマスターへと差し出した。

「すみません。ちょっと預かっというて貰っていいですか？」

「……それは構わんが、いいのか？」

「ええ。また取りに来ます」

納得したマスターは鞆を受け取った。

「どっか行っちゃうんですか？」

不安そうな女の子は浩介に尋ねる。

「ちょっと、世界を見てみようと思ってね」

そう言つて女の子の頭に手を置く。

「スケール大きいですね」

女の子は若干恥ずかしがりながらも返答した。

「夢は大きい方がいい。キミは何か夢があるのか？」

「勿論！ 私はいつか自分の喫茶店を持つの！！ 今はその為の勉強中かな」

楽しげに言う女の子に浩介は自然と笑顔になる。

「そうか。それが叶ったらいつか飲みに行くよ」

「じゃあ絶対叶えるね。約束するね！！」

浩介は大きく頷き、立ち上がる。そして財布を取ろうとした時、マスターがそれを止める。

「これから世界を見て回る奴から金は取らん。ツケといてやる。必ず返せよ」

「……じゃあお言葉に甘えます。では、また……」

浩介は微笑んだまま店を出た。そして一気に静寂に包まれた店内で女の子は浩介の後ろ姿が焼き付いて離れない。

「何だか、本当に遠くへ行っちゃみたいですね……」

あの軽装で世界を見て回るなど信じてなかったが、あながち嘘ではないと感じていた。

「奴は生きている次元が違っただ。そう思っのも無理はない」

「……それもスケールの大きい話ですね」

「お前はお前の夢を叶えろ。俺は休憩する。コーヒー、淹れてみるか？」

女の子の顔がパーッと明るくなる。

「はいっ!!」

そして夢へと向かって一歩踏み出すのだった。

崩落の果てに4（後書き）

話が進むにつれ、徐々にキーワードを追加しようと思っています。

ご理解お願いします。

揺るぎない心

突然の戦慄が研究所を襲い、逃げ惑う人達がパニックを起こす。他人を突き飛ばしてでも出口に向かう男や泣き叫ぶ女性。転ぶ老人やうつろたえる青年。

そんな混乱の中ひとつの声が飛び交う。

——悪魔が来た——！！

拳銃を握り淡々と歩く悪魔の前に位置する者はその雰囲気負け、反抗することも、口を開くことも許されない。ただひたすら通路を歩く悪魔に黙って道を譲る。そして通り過ぎた後に逃げ惑う。

しかしその悪魔は無闇に発砲することはない。実際撃ったのはD、Cランクの戦闘員であり、全員脚や肩を撃たただけで、命に別状はない。

それこそ無惨に殺していれば本当の悪魔になれるだろうと、張本人である浩介は微笑する。

その微笑でさえ、周りからしてみれば不気味な笑みであり異質だと認識される。そして視線を合わせないようにその場から離れる。

「貴様——！！」

しかし勿論のこと、この研究所には例外もいる。

刹那、前方の通路の角から再び拳銃を持った男達が飛び出し浩介

に狙いを定めるが、すかさず脚を撃たれ二人同時に平伏していく。そして発砲しながら残りの男達の脚を撃ち、銃では遅れを取る局面では距離を詰め一人残らず殴り倒す。

浩介は男達から弾のカートリッジを幾つか奪い、持っている銃の残弾と交換しながら何事も無かったかのように歩を進める。

男達が弱いわけではない。素早い行動と反応、的確な攻撃をする浩介が強いのだ。それ故一撃も貰うことなく浩介はエレベーター前で足を止めた。

二つあるエレベーターはそれぞれ上の階と下の階から向かってくる。まだボタンを押していない浩介は中に敵が乗っている事を懸念し、近くの非常階段へと向かう。

扉を開け人の気配が無いことを確認した浩介は迷うことなく階段を降りた。

今いる一階は兎も角、他の階の職員はパニックをおこさないよう行動を制限されており、その所為で非常階段には人がいないという状況も浩介にしてみれば助かっていた。

秘密の研究がされているのは恐らく地下だろうという憶測で降りる選択を取った浩介の考えもはずれではない。しかし、非常階段を使うことなど常識的な知識でもあり、案の定下から迫る足音で浩介も警戒しながら降り続ける。

そして階段の曲がり角の壁に息を潜めた浩介は、何も知らず登ってきた男を掴むと顔を殴る。その後ろを着いてきていた仲間を、掴んでいる男の体で激しくぶつけ合わせ、男は受け身も取れず壁に衝

突し気絶した。

すかさず、掴む男を階段から蹴り落とし後続の仲間を巻き込ませる。

ただでさえ狭い非常階段である為、為す術なく男と共に階段から転げる。まだ動けそうなやつには脚を撃ち、密集して横たわる男達を軽く飛び越えた浩介はそのまま地下へと向かった。

この研究所の感想を言え、と問われればそれはただ広い、という言葉しか出て来ない。

今の所特別なセキュリティも無いし、格別に綺麗というわけでもない。内装からしても大きな病院と大差ない。

しかし一番の違いは人の多さである。白衣を着た研究者、作業服の肉体労働者、私服のシステムエンジニア。そして拳銃を装備した警備員だ。

警備員といってもそれは表向きの言葉に過ぎず、正規の警備員が拳銃を所持している筈がない。極秘に政府に雇われたD、Cランクの闇の職業なのだからそれが当たり前となっているこの研究所では、それを疑問に思う人はいなかった。

そして何よりその人数が多いのだ。まだ一階の廊下を歩いただけの浩介もすでに三十名は倒している。質よりも量で攻めてきてはいるが、如何にこの研究所を重要視しているかが浩介にも伝わり、そしてある程度の情報がこの場所で知ることができると期待していた。

地下三階に歩を進めた浩介はその考えに疑問を抱く。

色気の無いコンクリートの壁に覆われた地下はほんのり薄暗い。電灯はあるもののその光は全てに行き届いているわけではなく、ひ

んやりとする空気とその雰囲気がるでお化け屋敷にいるような気分させる。それはまあいい、と割り切れるのだが、未だ特別なセキュリティーなども無く、何より手薄である。

ここが極秘の殺戮兵器を研究、開発しているフロアだとは到底思えない。非常階段から簡単に入ることができ、待ち構える警備の間もない。

浩介は考えを誤ったかと思いつつも先に進んでいった。

「社長……侵入者です」

とある地下の一室で報告を受けた倉谷ノルベル研究所社長、倉谷敏弘はフンツ、と鼻で笑う。

「知っている。もうお得意さんにも連絡した。直ぐに駆け付けてくれるだろう」

地下の一室とは思えない豪華で広い部屋。少し小太り体型の倉谷はお気に入りのこの社長室で紅茶を啜りながら光沢感のある黒いソファに短い足を組み座っている。

報告に来たスーツ姿の男はソファの横に立ち、突如として笑い出す倉谷に首を傾げた。

「……どうされました？」

「いや、たったひとりで来るとは思ってなかったのな。面白い奴だと思わないか？」

倉谷は男に顔を向け満足げに紅茶を啜る。

「油断は出来ません。彼はSランクをひとり殺しています。あの格蘭もてこずったとか……」

「多勢に無勢だよ。例え彼がこの研究所を抜け出せたところで状況は変わらない。まあ尤も、抜け出せるかどうかも分らんがな」

倉谷は立ち上がると壁に付けるように設置される棚、その上に置いてある一メートル程のひとつの模型を、まるで息子を撫でるかのよう優しく触れる。

「知っているか、松井^{まつい}？ コイツは五十パーセントの出力でアメリカを塵に出来る。フル出力ではまさしく全世界を沈められる。その製造を任せられた第一人者がこの私だ」

倉谷の側に立つ松井は一度頷く。

「ええ、知っています。政府から要請を受け各研究所に飛び回り製造の指示を与えて、ここまで極秘に働き続けていたあなたのことも」

倉谷は満足げな表情で松井を見る。

「ですが、細かなことは私も存じ上げません。これ程の殺戮兵器を造ることが出来るエネルギーと知恵は彼らがいるから成り立つとは聞いていますが、その彼らは一体何者なんです？」

倉谷はほくそ笑む。

「それはじき分かるだろう。腰を抜かすぞ。全ての人間の想像を超えるのだから」

「想像を超える……ですか？ その彼らの目的がそのまま私達の望みとなるなら私はそれ以上は聞きませんが、彼はあのままでいいんです？」

松井はその部屋の壁に掛けられた大型テレビに顔を向ける。そこには監視カメラに映し出される浩介がいた。

「何故そう思う？」

「その者達の一人を殺し、一人と対等に戦った。その実績からして私は危険と判断しますが……」

「心配はない。言っただろう。私はこの殺戮兵器の第一人者だと。その事実があるだけで私は彼らに護られる」

それだけの期待に応え、それだけのものを確実に造り上げた倉谷の功績は彼らも評価している。実自身の安全は保証するという契約書にサインをしているので危険という思考は頭の中れない。

それでも松井は渋い表情を変えなかった。

「しかし、万が一彼が此処まで到達してしまった場合あなたは確実に殺される。一応非難された方がいいのでは？」

依然不安を口にする松井に倉谷は疑問を抱く。

「随分あの男に肩入れするんだな？」

「そういうわけではありません。ただ危険な芽は早めに摘み取っておくほうが良いかと……」

倉谷は暫く考え、君がそこまで言うのなら、と呟き、扉に顔を向けた。

「カイザー！ 入ってくれ！！」

その声で扉が開き、真っ赤な短髪の男が姿を現す。

「何でしょう？ 倉谷さん」

倉谷のボディガードであるその男は物静かに倉谷を見る。
特徴であるつり目が睨んでいるかのように見受けられる男からは彼らと同じく異様な雰囲気醸し出している。

入室する際に席を外したカイザーとすれ違った松井も、何者か分からない心境もあり未だ慣れないでいた。

「松井が心配性だな。すまんが侵入者を排除しに行ってくれ」

「……わかりました。では暫くあなたの元を離れます」

「分かっている。間もなく助っ人達も来るだろう。巧いことやってくれ」

カイザーは一度頷くと松井をチラッと見ながら部屋を出た。

「これで良いだろう？」

ニヤリと笑う倉谷は再びソファに腰を下ろし、紅茶を啜る。
完全に不安を拭い去れない松井は渋々ながらも頷く。

今まで暗殺など狙われたことが無かったのだから、倉谷にいつも付き添っているカイザーの強さは知らない。特に不満があるわけではないが、何よりカイザーを心から信じることができないのだ。それは彼らが何者か知らないという疑心の感情もあり、ひとりの人間としてあまり近付きたくないという嫌悪もあった。

カイザー含めその彼らが人の欲に付け込むやり方を松井は何より納得出来なかった。

「まだ不安そうだな？　悩みなら聞くぞ？」

松井の顔を見た倉谷は苦笑いを浮かべそう言った。それならば、と松井も口を開く。

「私は彼らをあまり信用出来ません。恐らく力は本物でしょうが、やり方が好きになれません。人を上から見下ろすような彼らのやり方が――」

「そこまでにしとけ」

松井の言葉を倉谷は低い口調で止めに入る。

「彼らを疑うな。彼らの不満を言うな。そして彼らに反抗しようと思うな」

倉谷は立ち上がり松井を見る。

「君は優秀なサポートメンバーだから言うが、君を失うには勿体無い。いいか？　彼らは特別な存在だ。私達ちつぽけな人間に成し得ない筈の欲を与えてくれた。上から見るのは当然だ。全ての権限を握んでいるのは紛れもなく彼らだ。それを忘れるな」

倉谷は諭すように言い、松井の肩に手を置く。

「君が心配することは何も無い。間もなくこの世界は変貌する。それを高みで見たいようじゃないか」

そして倉谷と松井はモニターに映る浩介を見る。

「ッチ！」

奥に進むにつれ追っ手は増える一方である。その男達全員を拳銃で倒していくのも困難になってきた現状に浩介は思わず舌打ちをする。

「いたぞ！ 撃て！！」

「これ以上進ませるな！！」

「そっちから回り込め！！」

次々と溢れ出る男達に、太刀打ちできない浩介は先もわからない地下をひたすら逃げ回る。

既に地下三階まで降り立っていたのだが、一階より二階、二階より三階と追っ手の増える現状で間違いなく進路は合っていると確信する浩介は、少しでも状況を良くしようと後ろを振り返り天井に設置されているスプリンクラーを撃ち抜いた。

大量の水と警報で一瞬たじろぐ前線の男達を撃ちながら駆け出す。

その駆け出した方向は浩介の進んでいた道ではなく、男達の方だった。

突如向かってくる浩介に驚きながらも銃を撃とうとするが、逆にそれすら遅いといわんばかりの銃弾を受ける。

しかしそれで倒せたのは五人止まり。尚も五人が拳銃を撃ち、その男達の後ろからは十人程向かって来ている。

浩介は的を絞らせないようにジグザグに走行しながら男達との距離を詰める。更には一緒に銃を撃ってくるのだから男達の銃弾は焦りと比例し当たることはなかった。

距離を詰めた浩介を倒すのは至難の業だ。近くの一ひとりを残りの男達へと投げ飛ばし態勢を崩させる。その隙に銃を撃ち放つ。更には弾の少なくなった自分の銃を捨て、男達の持っていた銃を二つ拾い上げると向かってくる十人に両手で撃ち続ける。

激しい銃声が鳴り響いた地下三階の通路が静寂に包まれた時、計二十人の男が平伏し、浩介は先へ進んでいた。

「治らないな……こりゃ」

ズキズキと痛む左腕から血が流れる。銃を撃った反動で再び傷が開いたのだ。

元から左腕に不安を抱いてはいたが、この先を考えればかなりのリスクとなる。重要な場面で左腕が動かなくなるなど絶対に避けたい考える浩介は、取り敢えず止血はしようと視界に捉えた扉を開けた。

「ここは……？」

中に誰も居ないことを確認しつつ、室内の環境にも目をやる。

部屋はそれなりに広く、扉の正面にはまず三台のデスクトップが目に入る。その机には大量の書類が散乱し、回転式の椅子も三つ。中央にはガラステーブルとソファーも完備されている。左側には小さなキッチン、右側には幾つかの棚が並び、本がびっしりと陳列されている。

簡単な休憩室、または調べ物をする時の図書館的な役割があるのだろう。どちらにしても浩介にとって有り難い部屋に変わりない。

医療用品が無かったのは残念ではあるが、まだ使われていないであろつきれいな布をキッチンの戸棚から取り出し水に濡らす。

回転式の椅子に腰掛けた浩介はパソコンの電源を入れ、その布を左腕の傷部分に強く結び付けた。これで暫くは左腕に対する不安は払拭できる。

そして煙草に火をつけ開いたパソコンに保存されているファイルを調べていく。

だがどれも浩介が知りたい内容ではなかった。政府の狙い、グラソンの正体、殺戮兵器の情報などが知りたいのだが、どのファイルにもそれらしい情報は載ってない。

仕方なくそれ以外のアイコンをクリックしていく。

コンピューターを得意としているわけではない浩介にとって手当たり次第というのはいやがらないことだった。少し触ったことがあるレベルの分、手際が悪く時間も掛かる。

こんな時に綾華が居れば——と思いつつも、断ち切ったのは自分が選んだことなのでそれは考えないようにする。

そしてその手法でついに当たりを引いた。

パスワードを入力して下さい、という文と入力欄が表示されたのだ。

パスワードがいるという事はそれなりの極秘ファイルだと予想した浩介は微笑み、今ひとつだけ思い浮かぶ単語をそこに入力する。

『バラリア』と――

簡単に認証された画面はやはり重要な事のように、見出しには『バラリア計画』と題されている。

そして、概要・歴史・兵器・計画、と次々とクリックしていきその全容を頭に入れた。

「……マジかよ」

浩介は椅子に深く腰掛け天を見上げた。

それは正に政府の狙いそのものだ。残念ながらグラン達のはつきりとした情報は記されていないが、ある程度の仮説を立てていた浩介にはそれで充分だった。

浩介は頭の中を整理し、机の引き出しを開け始める。手に取ったのはUSBメモリーで、その中にバラリア計画の内容をコピーする。

これから地下の奥に向かおうとも考えたが、浩介ひとりではリスクが高い。殺戮兵器も分担して造られていると知っているので奥に行っても完成品が拝めるわけではない。ここで粗方の情報が手に入ったので、代表者と顔を合わせる必要もない。地下はコンクリートで覆われているので簡単に破壊は出来ない。

それじゃあ退散するかと思考を纏めた浩介は扉の前の廊下が少し騒がしい事に気付く。

——見つかったか！

コピーし終えたUSBをポケットに突っ込み、拳銃を手に持ちキツチンへと向かう。そしてガスを外気に出した。

危険な賭だが、この部屋から逃げ切るにはそれしかない。

ガラステーブルの下に引かれていた三畳ほどの絨毯じゅうたんを掴み上げ、扉から距離を取り顔を向ける。

刹那、扉が蹴破られ赤い髪の男が淡々と部屋に入ってくる。驚愕するのは男自身ではなく、手に持っている武器だろう。

サーベル、日本刀、そんな物ではない。銀色に輝く両刃の剣だ。滅多に体験することはできないその武器で浩介の額から冷や汗が流れ落ちる。

「随分と物騒な物を持って来たんだな？ 俺一人殺すのにご苦労なことだ」

「それが俺の任務だ」

赤髪の男は表情を変えず返答する。

「任務……ねえ。そろそろ化けの皮を剥がす時じゃないのか？」

「……………」

「まあいい。お前達とは話し合いで解決出来ると思ってない。お互い命で決着をつけるしかないんだ。そうだろ？」

「その通りだ」

「じゃあ始めようか」

浩介は持っていた絨毯を男に投げつけ、拳銃を向ける。

「——ッ！ お前もか……………」

男の視界を絨毯で遮ったと思った浩介だったが、男は一瞬にして浩介の真横に位置し剣を横に振るう。

バックステップで距離を取るが、やはり剣となればリーチは長い。避けきれなかった浩介の胴体に掠り、剃刀で切った時のような痛みが走った。

それを気にする間もなく男は軽々と剣を操る。それらを躲し、区切りとなる時に浩介も攻撃を繰り出す。

銃はまだ使えない。浩介は己の肉体だけで剣に立ち向かっていく。

だからといって浩介が押されているわけではない。浩介の攻撃が当たることは少なかったが、同じく赤髪の男の攻撃も最初に掠めた胴体以外全て躲されている。代わりに壁や家具などに当たり、最早部屋は滅茶苦茶状態である。

男の横になぎ払う攻撃に床を転がりながら避け、その浩介に剣を

振り下ろす。身を翻しそれを躲した浩介は横たわりながら剣の柄の部分に強く蹴りを入れる。

「クッ!!」

男が初めて見せる渋い顔。男の握力では保つことの出来なかった衝撃で剣は床を転がった。

剣に目を向けた男の足を引っ掛け、床に跪いた男の顔面に更なる蹴りを入れた。思わず苦痛の声をあげ床に倒れる。

賺さず立ち上がった浩介は上から再び顔面目掛けて拳を出した。しかし身を翻した男にその攻撃は届かず、床を殴る結果となる。

「……あと少しだったんだが」

床を殴った衝撃で痺れる手をフラフラと振りながら男に平然と目を向ける。立ち上がった男は暫く睨み、その場から消える。

「鬱陶しい」

その言葉と同時に放った裏拳は現れた男の顔を捉え、赤髪を掴み壁に二回顔を打ち付け続いて腹部に一発、顎に一発、額に一発と拳を繰り出した。

吹き飛んだ男は近くの家具もろとも巻き込み、激しい音と共に倒れた。

「な……ぜ……はん、のう……できる……」

「……まだ意識があったか。あんたも頑丈だな」

虫の息で血塗れちまみの顔を向ける男に冷たく言い放ち、再び赤髪を掴み無理矢理立たせる。

「あんたが消えた時の俺の反応か？ 教えてやるよ。やり方は知らんがまずそれが使えるのは体勢が整っている時のみ。倒れている時なんかはあんたもグランという男も使っていない。そして消えながら動ける訳じゃない。目標とした場所に現れてからやっと動けるんだろ？ その分俺の方が早く行動出来る。……ああ、その顔は何故現れる場所がわかるかって聞きたいんだな？」

男の虚ろな目をみながら浩介は微笑む。それは優しい笑みではなく悪魔のような笑みだ。

「お前等の考えが浅はかなのと、後は俺の勘だ」

浩介は掴んでいる赤髪を放し、崩れ落ちる男を無視して剣を掴む。

「案外軽いんだな……」

少し振ってみるが、変な違和感などはない。

「これは戦利品として貰っておく」

そして戦闘中に置いた拳銃を左手に持ち扉へと目を向ける。

そこには追っ手の男達が攻撃するわけでもなくただ呆気にとられていた。

「俺を……生かす……のか？」

「さあ、どうだろうな……」

浩介は曖昧な返事を男に返し、再び絨毯を手に取り呆氣にとられている男達の方へ歩み寄る。

「ッー！」

一斉に銃を構えるその緊迫感の中、ひとりの男の声が木霊する。

——撃てっ！！

その声と同時に浩介は入口から離れ、絨毯を被り壁の隅へ身を屈める。

怒濤うたけの如く唸りをあげる銃声。恐怖に負けた男達の狂気。そして臭いに気付かなかった男達の末路はただひとつ。

盛大な爆発音が部屋を包み、行き場のない熱風を帯びた圧力は扉を抜けようと男達を襲う。

男達の放った銃弾は正面のパソコンに当たり、部屋に充満していたガスに引火した為に起きたガス爆発。

これだけの短時間ではガスの量もそんなに多くはなく、それを絨毯ひとつで耐えた浩介は直ぐに部屋を抜け出し、その場から離れ去った。

圧力に押された男達は幾重にも重なり呻き声をあげる。扉の前に集まっていた為それも致し方ない。

赤髪の男についてはガス元に近かったこともあり、結末は予想出

来る。

「生かしておくわけないだろう」

浩介は走りながらそつと呟いた。

カイザーの敗北。それは倉谷と松井にとっても予期出来ない事態であった。その部屋の前に設置されていた監視カメラからの映像は爆発の衝撃で今は砂嵐が映るだけだ。

松井の不安は的中した。いや、それをも通り越す出来事だ。不安を口にする松井に負け、Sランクのカイザーを送り出した。その判断に間違いはなく、寧ろ今出来る最大限の判断なのだ。

部屋の中で何が起きたかは監視カメラでは捉えきれない。だが、爆発の直後違う監視カメラが捉えたのは走り去る浩介の後ろ姿のみである。カイザーの姿が映らない事を考えれば、やはり敗北という二文字が脳裏を過ぎるのだ。

「なっ……ば、バカなっ!!」

倉谷は砂嵐となったモニターから後ずさる。

「彼を逃がしてはいけません！　まだ切り札があります。私もそこに向かいます!!」

松井は拳銃を握り締める。

「わ、私も行こう」

「社長！ 正気ですか!？」

「勿論だ。あの男と少し話がしたい」

倉谷は額に脂汗を浮かべながら、緊張と恐怖を押し殺しそう決意する。

「……わかりました。行きましょう」

松井にその決意を止める術はなく、渋々頷き倉谷と共に社長室を出た。

来るときは逃げながらだったので帰り道を覚えていない浩介の視界に非常階段を捉えた。時間は掛かったがこれで抜けられると安堵した浩介は息を切らしながら胸を押さえる。

走った所為で胴体を斬られた傷がジンジンと痛み、血も溢れ出る。その痛みと闘いながらペースを落とし階段に近付く。

刹那、一発の銃声が響く。

その衝撃で浩介はよろめき、壁に背を預けた。

「がつ……ハッ……!!」

痛みの走った左肩を押さえると、浩介の右手は真っ赤に染まる。

——撃たれた……か。あぶねえ……

それがあと少し下ならば確実に心臓を撃ち抜かれていた。

「ゴフッ——」

浩介は吐血を吐きながら非常階段の方へと顔を向ける。

そこに現れたのは特別な訓練を受け、武力に対抗する為にある機動隊の面々だった。

その数は七名。銃を向けながら陣形を組み近付いてくる。

「警察……？」

陣形の中央に位置するひとりの男は周りの機動隊員より軽装であり、その組織の指揮をとっている人物でもある。

「そう、警察だ。侵入者がいると通報を受けた。それが君なんだろう？」

「それは——」

「その通りですよ！ 遠藤さん」

浩介の言葉を遮って声を出したのは後方にいる倉谷である。

浩介は倉谷に顔を向け睨む。

「お前が、責任者が……」

血塗れの浩介を見た倉谷は余裕の表情を向ける。

「はっ！ いいザマだな。私がこの研究所の社長、倉谷敏弘だ。随分暴れてくれたようだな？」

「クッ！！」

浩介は倉谷から機動隊の指揮官である遠藤久へ顔を向ける。えんどうひさし

「侵入したのは俺だが、あんた等はこの研究所の真意を知らない！ 今何が起こっているのか、何が起きようとしているのか、この研究所で造られているのは何か！ そこに目を向けないと世界は大変なことになる！！」

「……………」

遠藤は何も言わない。

血を吐きながらも訴える浩介は鋭い視線を遠藤に向ける。

「俺を捕まえるなら好きにしろ。だがその前に現実を知るんだ！ 全ての情報がここにはある！！」

「……………言っただろ。俺は侵入者がいると通報を受けた。私の仕事はきみを始末することだ」

慌てることのない遠藤に浩介は苛立ちを隠せない。

「それがお前等の正義か！？ 何の為に訓練をしてきた！？ この国の治安を守る為だろ！ 悪を許さない心があるからだろ！ この研究所は、いや、この国の政府が今しようとしていることは……………」

「……………」

浩介はそこで気付いた。

——この男に何を言っても無駄なんだと。

そして一気に脱力感が浩介を襲う。それは信じる者に裏切られたかのような脱力感である。

勿論そこまで他人を信じることはしない浩介でも、やはりそれは予想外の現実だった。

そんな浩介を襲った脱力感の次は、底知れない笑いが込み上げてくる。

「ははっ…………成程、そういうことか…………」

浩介は笑みを浮かべたまま、遠藤と視線を合わせる。

「今、悪は俺というわけか…………」

浩介の言葉には誰も反応しなかった。

暫くの静寂。そんな中倉谷が口を開く。

「君を失うのは惜しい。どうだ？ 私と共に来れば良い世界を見れるぞ？」

「…………そんな世界に興味は無い」

浩介は倉谷に拳銃を向けるが、機動隊の弾丸が浩介の左腕を捉え銃を落とす。

撃った男を睨むと、機動隊はじわりじわりと浩介に近付く。

「まあ、君はよく戦ったと思うよ。もう楽になれ」

それは終焉の合図だった。

遠藤は機動隊に殺せと命じ、じわじわと近づくひとりが浩介のこめかみに銃を突き付けた。

「恨みはないが、死んでくれ」

引金に掛かる指がぴくりと動く時、浩介の眼に活力が戻る。

咄嗟に左腕で男の銃を弾くと、右手に持っている剣で腹を突き刺した。

空気が一気に張り詰める。そして激しい銃声を皮切りに浩介は再び闘争に身を差し出した。

くし刺しにした男を盾に、背を突き破った剣先でもう一人の男を刺す。その男を蹴飛ばし銃を撃っていたひとりを巻き込ませると、最初に刺した男の拳銃で倒れた男を撃ち抜く。

脚や肩などではない。紛れもなく頭に一発喰らわせたのだ。

くし刺しにした男に身を隠し残りの三人へと突進し、銃でひとり、剣でひとりと倒していった。

残りのひとりも最後まで応戦するが、銃で脚を、そして男から完全に引き抜いた剣で喉元を突き刺した。

動脈を切った男から大量の血が噴出し浩介の全身を濡らす。

――まだ終わりじゃない

浩介に銃弾を放った遠藤に視線を向け、顔を反らしながら剣を投

げつけた。

銃弾は浩介の額を掠め、剣は遠藤の胸に突き刺さる。

その後、二発の銃声で幕は閉じた。

外は既に闇と化し、右手に剣、左手に銃を持つ浩介は研究所の敷地を出た裏路地までが限界だった。

あの銃撃戦の中、男ひとりですべての銃弾を防ぎきれる訳もなく、脇腹と右太ももにも傷を負った。

それだけで済んだのも奇跡だが、気力と根性でここまで来たこともある意味奇跡である。

座り込んだ浩介は壁に背を預け、血に染まる手で煙草に火を付けた。

静寂に包まれる夜の裏路地で自分の心臓の音だけがやたら大きく聞こえる。紫煙の舞い上がる空を見つめ生きていることを実感する。

今日得たものは多く、失ったものは僅かな希望と自分自身の余裕だけである。

なら良いか、と思いつつ浩介は煙草の味を噛み締めた。

「美味しいな、こんな夜は特に……」

そう呟き、煙草を持った右手が地面に落ちる。

地面に広がる血溜まりで煙草の火がジュツという音と共に消えるが、浩介が動くことはなかった。

後にこの戦いは『聖域の攻防』として語り継がれる。

決して揺るがなかったその心は見えなくとも確かに時代の礎を築いたと。

そして今、新たな礎を築く足音が浩介に近付く。

「高崎浩介君、か。ごめんなさい。ここまで巻き込んで……」

その女性は優しく浩介の頬を触る。

「私達でどこまで改善出来るかわからないけど、やれるだけやってみるから。多分、この世界は迷宮となるだろうけど、それも許してね」

女性は浩介の口に何かの液体を入れ飲ませた。

「さて、どうしようかな……？」

女性は長い髪を背中に流し、浩介の姿を眺めた。

揺るぎない心（後書き）

読んで頂きありがとうございます。御座います。

いかがだったでしょうか？

この話は一話で終わらすつもりだった為に少し凝縮したのですが、読者様に伝わりにくくなっていましたらすみせん。

わからない所などご感想いただけたら答えますし訂正もさせていただきます。

とまあ、かなり物語の確信をつくような話となりましたが、早めに想定出来るのもぐだぐだ進むより良いかなとは思っています。

勿論まだ続きます。

わかりにくい文章だと思いますが、興味を持っていただけでしたら幸いです。

これからも『迷宮世界』を宜しく願います。

真実の先へ1

都会の街中、ビルに設置された大型モニター。家電販売店でのテレビコーナー。家庭のテレビ、携帯のワンセグ、ラジオなど全てから流れるビッグニュースに国民は思わず見入った。

様々な医療品、家電製品、大型機械の制作など数多くのものを世に売り出し世界に名を知られる倉谷ノルベル研究所で起きた大惨事に興味を示さない筈がない。

しかし国民が知らされたニュースでの情報は真実と少し違っていた。

社長、倉谷敏弘の死。駆けつけた機動部隊の全滅。警備員の負傷、そして研究所に侵入し全ての責任を負わされた容疑者、高崎浩介の指名手配。

伝えられた内容は全て浩介を悪として見なされるものであり、世界に貢献していた倉谷敏弘の死を敬うものである。

何も知らない一般人はそれらを信じ、恐怖した。これ程の残虐な事件がここ日本で起きてしまったと。その加害者である高崎浩介は危険な人物だと、誰もが認識した。

未成年といえど名前と顔を公開したことに異議を唱えるものは少なかった。警察はプライバシーの侵害などを考慮せず、浩介を危険な悪だと公表し、捕まえることに全力を尽くすと国民に誓ったのだ。

しかしその事件以降、浩介の足取りは全く掴めていない。

「指名手配なんてやり過ぎでしょう!!」

とある一室に杉田の大声が響く。

その矛先を向けている相手は警察庁の長官である向井信之^{むかいのぶゆき}だ。

エリート街道をのぼりつめている向井だが、真面目な性格でエリートとは思えないほど努力を惜しまない人物である。そのため周りからも信頼され、下からの人望も厚い。実際今の警察組織の志気が高まっているのは彼が居るからといっても過言ではない。

そんな向井に下っ端の杉田が意見できるのは極簡単な理由がある。

杉田が新米刑事だった時に面倒を見たのが先輩であつた向井なのだ。彼はことある事に杉田の尻拭いをして一端の刑事に育て上げた。一方の杉田も先輩である向井に感謝をし、彼を目指した。

そんな月日を数年過ごし、二人は自然と固い信頼関係を紡いだ。

向井が出世していく事に杉田は自分のことかのように喜び、上になつた向井も以前と変わることなく杉田に接した。そして今でも二人で居酒屋に出向く程親友としての形が続いている。

それだけ信頼している向井の正義感や杉田も心得ており、崇拜もしている。

だが今はその判断に納得出来ない。

警察の送った機動部隊は基本立て籠もりや強盗事件などの際に強行突破が許される謂わば特殊部隊だ。

如何に浩介を凶悪犯と認めようと、倉谷ノルベル研究所に何の疑いも抱くことなくただひとりの学生を殺すことだけに出勤させている。そして全滅と知った警察は浩介を指名手配とした。

上からの圧力や命令もあつたかもしれないと考えても、今杉田が不満を言える相手は向井だけだった。何より柴田から聞いた情報を包み隠さず話した相手も向井なのだからそれはより強いものとなる。

「言つた筈です！ 研究所の秘密と政府の狙いを！！ 何故それを野放しにして高崎浩介に全ての罪を被せるやり方をとつたんですか！？」

「…………杉田。誰がお前の言うことを信じる？ その情報は誰の情報だ？ よりによつて依頼屋だと…………？ 俺がどちに付くかお前なら分かる筈だ。お前も頭を冷やせ」

真剣な眼差しを向ける杉田に机を挟んだ椅子に深く腰掛ける向井は下から杉田を見上げた。その目、その口調は親友としてのものではなく、上に立つ長官としてのものであつた。

「ではここ最近の不可解な事件について納得できるような説明が向井さんに出来ますか？ 商店街の事件から見てきている僕には彼らの情報こそが有力であり、全ての的を得ていると考えます。半信半疑でも構いません！ 一度内密でも調査をして戴きたい」

「その必要はない。高崎浩介を捕まえたならそれでいつも通りだ。君は的を得ているということだけで全てを信じているのか？」

「違います。刑事として、僕が体感したことを踏まえて確信があるんです」

「…………君は疲れているようだ。長期休暇を与える。暫く家でゆつ

くりしとけ」

「向井さん！！」

向井は杉田を無視して引き出しから休暇の書類を取り出すと躊躇なく印を押し杉田の前に置いた。

何を言っても無駄だと感じた杉田はやりきれない思いから拳を強く握り締めた。

柴田から聞いた話をした時もそうだった。何を言っても流されまともな話さえ出来なかったのだ。そして今回も無駄足に終わり、その現実を杉田は噛み締めた。

杉田は書類を置かれた机の横に警察手帳と手錠、拳銃を置き向井に目を向ける。

「わかりました。僕は僕なりに調べ上げます。もう、向井さんに頼むことは無いでしょう」

「お前、政府相手に戦争でも起こすつもりか！？」

思わぬ杉田の行動に向井の口調が荒くなる。

「全てが真実なら、そうなるかもしれません。僕がどっちに付くか、向井さんなら分かるでしょう？」

杉田はそう言って微笑む。

「勝手な行動は許さんぞ！！ 後悔するのは目に見えている！！」
「だからといってこのまま野放しにしておくことなど僕は出来ません。『何が正義で何が悪か見極めろ』 この言葉をくれたのは紛れ

もないあなたです、向井さん」

杉田は一度頭を下げ、向井に背中を向けた。そのまま部屋をでようとする杉田に寂しそうな視線を向ける。

「杉田。時に悪は正義すら超える時がある。正義ばかり追い掛けていてもどうしようもない時もあるんだ……」

「……その言葉、あなたの口から聞きたくなかった……」

ボタンと閉まる扉の音で向井は大きく溜め息を出した。そして備え付けの電話を手に取り、ボタンを押す。

「……ああ、私だ。今すぐ彼を呼んでくれ。今すぐだ」

「綾華さん。いつまで落ち込んでいるのですか？」

いつもの喫茶店のカウンターに座る柴田は、隣で俯く綾華にそつと声を掛ける。

もう少しそつとしておこうと思っていた柴田だが、現状が変わり急遽綾華を呼び出した。

呼び出したといっても、電話しても出ない綾華の自宅まで行き無理矢理引っ張り出したので綾華の落ち込み度は改善されていたわけではなかった。

カウンターに置く両腕に顔をうずめ、泣くわけでもなくずっとそのポーズを変えない。

痺れを切らせた柴田が軽い話題を話掛けてもうんともすんとも言わなかった。

「あなたがそんな防ぎ込んでいても現状は何も変わりませんよ。浩介君は今非常にマズい立場にいます。僕達が助けてあげないといけないんですよ？」

仕方なくそのまま確信を付く話題に移る。しかし綾華は小さく頷くだけだった。

「浩介君が僕達から離れたショックも分かりますが、それは人の道を外す覚悟をしたからです。あなたにそんな道は歩んで欲しくないという優しさからだと思います。じゃああなたも覚悟を決めなくてはいけません！人を殺す覚悟ではなく、そんな浩介君の全てを受け入れる覚悟です」

柴田の言葉が少しは届いたようで、綾華から鼻を吸る音が聞こえてくる。

そしてその話を聞いていたマスターが口を開く。

「彼ならあの事件の前に、一度此处に来たぞ」
「えっ!？」

そして綾華が顔を上げる。目は真っ赤に腫れ普段と比べてかなり酷い顔になっているが、その目は真っ直ぐマスターを捉えている。

「あれ程しんみりとした彼を見たのは君らもないだろうな。今にも折れそうな心を必死に堪えているような感じだった。表に出すことはなかったがな」

そしてマスターは浩介から預かった荷物をカウンターに置いた。

「これを預かって欲しいと頼まれた。携帯も代えろと言っていたし、全てをひとりで抱え込む決心をしたんだろうな。そんな彼を君はほっといていいのか？ 後悔はしないのか？」

マスターの言葉に綾華は賺さず頭を横に振る。

「ヤダ、絶対に嫌……でも、どうしていいかわからない……」

その時、喫茶店の扉が開いた。

「お！ 揃ってるな」

入ってきたのは杉田であり、二人の姿を見て笑顔を向ける。

「酷い顔だな、楠木」

「……………うるさい」

綾華は一度目を逸らした後、杉田を睨む。

そんな綾華を流し、柴田の隣に座った杉田はコーヒーを注文する。

「どうでした？」

「駄目だな。警察は何も動かない。寧ろ高崎を捕まえればそれで終わっている。期待は出来ない」

「……そうですね」

杉田は煙草を取り出し、紫煙を漂わせる。その杉田を見た綾華は疑問を口にする。

「何故杉田刑事が此処に？」

その質問に柴田が微笑む。

「少ないですが、これで仲間が集まりました。あとは浩介君と合流して政府の野望を終わらせるだけです」

「それに、もう俺は刑事じゃない。杉田さんと呼んでくれ」
「刑事、辞めたんですか……？」

綾華が心配そうに顔を向けるが、杉田は笑みを浮かべる。

「それも覚悟の上だ。じゃあ君は何の覚悟をするんだ？」

何の覚悟をするか考えるまでもなく答えは出ている。公園に浩介を誘った時、既に覚悟したのだ。浩介が選択肢を与えてくれた中で一緒に真実を知るという覚悟を。例え浩介が離れていったとしても進む道は変わらない。ならばいじけるのはもう終わり。私は今まで何をしていたのか？ と後悔まで感じてくる。

一度視線を外した綾華は少し考え二人に向き直る。

「私は浩介と共にいる。どんな状況になろうと、もう離れない。離れたくない」

それを聞いた二人は笑顔で頷く。

「それでは、先ず浩介君の居場所と更なる真実を知る必要がありますね」

柴田の言う通り、先ずは浩介と合流することが一番の鍵となる。それと同時に異常な彼らに対抗する為には確かな情報と更なる強さを求めなくてはいけない。

しかし、それがそう簡単に手に入るものではないと綾華と杉田も知っている。

「それじゃあどうするの、柴田君？」

杉田もそれには柴田を見るしかなかったが、柴田は微笑みながらメガネを触る。

「警察が使えないとなると、最初から事情を知っている組織に頼るしかありません。浩介君のように強行突破もしたいのですが、それを乗り切るだけの力が今の僕らにはありません」

「それはそうだが、じゃあお手上げ状態って訳か？」

「いえ、確かな情報を持っていると推測でき、力もある組織があります。少し危険もありますが、僕は『依頼屋組織』に頼らざるおえないと思っています」

以前の浩介の話から依頼屋組織が政府と敵対しているかもしれないと聞いている。うまくいけばそれに乗じて政府や異常な彼らの謎を知ることが出来るかもしれないと考えていた。しかしそれもうまくいけばの話である。下手をすれば依頼屋組織も政府の所有する組織であり、その場合返り討ちに合うのは目に見えている。

それだけ危険な賭けになるのだが、今の柴田達が行動するならそ

れしかないのだ。

「でも、組織がどこにあるかなんて分からないわよ」

「警察ですら知らないことだからな」

場所が分からなければ接触のしようがなく、調べるにしてもそんなに時間は掛けられない。柴田もそれには明確に答えられなかった。

「確かにそうですが、誰かひとりでも依頼屋組織に属する人物を見つければ、後は依頼をするという方法で何とかなると思いますが……」

「まあ、確かに今はそれしかないわね……」

時間は掛かるかもしれないが、今の三人にはそうするしか出来ない。

「じゃあその手でいこう。先ずはどうする？」

「それなら、依頼屋組織と繋がりがあった教会を知ってるわ。そこを調べてみましょう！」

綾華の提案に杉田はパン、と手を叩き、柴田も笑顔で頷く。

「……ちよつと待て」

その三人を止めたのは他でもないマスターだ。突然のことに三人は無言でマスターに顔を向ける。

マスターは洗ったカップを拭きながら不適に笑った。

「俺が教えてやるよ。依頼屋組織の拠点を」

三人の思考が一旦止まる。コイツは何を言っているんだ、というような眼差しを向けるだけで次の言葉が出てこなかった。

「そんなに固まるな。俺は元々依頼屋組織の実行部に属していた。

まあ今は喫茶店のマスターだが内情はお前らより詳しい」

「……は？」

「うそ……」

「……」

三人はそれぞれ意表を突かれた顔を向ける。それは空想で構成された物語ではよくある話であっても、実際体験してみれば人はこのような反応になると思い知らされる程に驚く事実であった。

しかしマスターの暴露は予想外ではあるが今の三人には救いの手となることは確かである。これからの苦勞と時間を考えても大幅な近道となるのだ。

だが、もう辞めた筈のマスターが自らの過去だけでなく組織の暴露までしていいのか、と杉田は疑問に思った。聞いただけの内容でも依頼屋組織がそこまで甘いとは考えにくい。

「そんな事を俺達に教えていいのか？」

マスターの秘密と元依頼屋組織の人間が拠点となる場所を教えて後々いざこざが起きたとなれば立場的に三人にとって障害になるのは目に見えている。

「心配はいらない。俺も結構顔が知れている立場にいたんだ。今でも俺の耳に内部の情報が流れてくるぐらいだから。それに高崎浩介をスカウトしている時点で仲間であるお前たちに居場所を伝えて

もリスクはない。尤も、今の依頼屋は猫の手も借りたいほど人手が足りていない状況だから寧ろ歓迎される筈だ」

マスターの言葉に柴田は疑問を持った。

「僕等としても教えて戴けることは助かりますし、断る理由もありません。しかし、イメージではかなり大きい組織を思い描いていたのですが、何故そんなに人手が足りていないのですか？ 僕が思っているより組織は小さいのでしょうか？」

「……組織の規模でいえばあれ程大きな組織も他にないだろう。支部を含めれば日本全国にあるのだからな」

「じゃあ何故……？」

マスターは溜め置きしていたコーヒーを入れたカップを三つカウンターに置き、もう一つ自分用でカップに注ぐ。

三人はそれを口に付けマスターの言葉を待った。

「軽く百名。現在三十力所。これが何を意味してるか分かるか？」

マスターは重い口調でそう質問した後コーヒーを口に含む。

「……政府の特殊な力を持ったヤツらに殺された組織の人数と潰された支部……そうでしょ？」

「正解だ」

マスターが元依頼屋ならば組織の拠点を教えると言った時点で政府と協力関係にあるとは考えにくい。浩介ならともかく今の三人には畏に掛ける程の戦力を持ち合わせていないからだ。拠点を教えてしまえば情報を不用意に教えることに繋がる。まずそんなリスクを

犯す必要が全くと言っていい程無く、今までに浩介を罫に掛けることもいくらでもできたからである。

となればマスターの言わんとしていることは容易に想像がつく。

浩介から東野が言ったSランクへの警戒忠告を聞いていたし、完全なる思考能力を取り戻した綾華がその答えを出すのは簡単なことだった。

「政府と敵対関係というのも、今の状況が悪いというのも分かりました。その中でひとつ聞いておきたいことがあります」

「なんだ？」

柴田は誰しも聞きたいであろう質問をする。

「依頼屋組織の存在意義です。何故この世界に依頼屋が誕生したのか？ 何故そんなに大きくする必要があったのか？ そして何を成そうとしているのか？ その全てが知りたいんです」

柴田に問われたマスターは顔を変えることなく一口コーヒーを含み、静かにカップを置いた。

「情報が流れてくるといつても最近の細かな状況までは俺も把握していない。それに俺が依頼屋に入った時には既に組織として成り立っていた」

マスターは少し遠い目をした後、少なくなった三つのカップの中に熱いコーヒーを注いでいった。

「昔俺が聞いた話でよければ大まかに話してやる」

三人は互いに目線を交わした後、再びマスターに目を向けた。

「お願いします」

マスターは軽く頷く。

「依頼屋が誕生したのは、今からおよそ五十年前だ」

「——ッ！ あああッ！！」

「動いちゃダメ。身体 of 自然治癒力を高める薬を飲んだからって傷が治った訳じゃないから」

ベッドから立ち上がろうとした浩介を小さな女の子が心配そうに言葉を掛ける。

浩介が目を覚ましたのはつい先程だ。上半身は包帯だけが巻かれ、違うズボンが履かされているが脚にも包帯が巻かれているのがわかる。だがここが何処なのかも、目の前の女の子の名前も知らない。助けてくれたのなら敵ではないと頭で分かつてはいるが、全く知らない場所で完全に警戒を解くことなど出来やしない。

しかし、まずは現状を把握したい浩介を一番に止めたのは身体全体に伝わる鋭い痛みだった。それは綾華の伯父の病室で体験した痛みの比ではない。身体中を突き刺されたような痛みはそれだけで気を失ってしまいそうになる程のものだった。

浩介はベッドから足を出し、女の子と向かい合うように座るだけで動きを止めた。

「大丈夫？」

女の子は依然心配そうな顔で尋ねる。

見た目小学低学年ぐらいの少女は淡いピンクのワンピースを着ており、肩に少し掛かるぐらいの茶色でサラサラとした髪が可愛らしさを倍増させる。更には小さな顔にパツチリとした眼の相性が良く整った顔立ちをしている。その中でも印象的なのが少女の眼の色である。それは鮮やかなブルーだった。

カラーコンタクトでも付けているのか、とも思ったがそれにしては綺麗すぎる蒼色がそれは違くと教えてくれている。

少女の質問に答えることなく、次は周りを見渡す。

部屋は殺風景なものであり、こちらの印象は銀色の世界に来たと思わせるような輝かしきメタルの部屋だった。しかしこれも圧迫感や違和感などもなく、未来へやって来たと思える程の空想世界のよきな居心地である。

それは勿論浩介の気持ちの例えであり、近未来など体感したことのない浩介が言葉で表現するならそう言うだろう、という感性の思である。

「大丈夫？」

そんなことを考えていた浩介に再び少女が問う。

流石にこれ以上少女を無視する訳にもいかず、浩介は少女に目を向けた。

「ああ、大丈夫。君は誰なんだ？」

「セリア」

はつきりとそれだけ言った少女は真つ直ぐ浩介を見ていた。

「そうか、じゃあセリア。ここは何処だ？」

「フィーガルという船の中。ナーシエがあなたを連れて来た」

浩介は目を瞑り状況を理解しようとする。

女の子の名前はセリア。ここはフィーガルという船の中。船というのがイマイチ分らないがそれは後でわかるだろうということでは片付ける。そして浩介を助けたのはナーシエという人物だということになる。

「そのナーシエを連れて来てもらえるかな？」

それならばその人物と話した方が手っ取り早いと解釈した浩介はセリアにそう頼んだ。

しかし、セリアが浩介に答える前にウィーン、という音で意識は音の鳴った方へと向く。

それは自動ドアのような扉の開く音であり、そこからひとりの女性が見せる。

その女性もまた綺麗な顔立ちで、セリアの眼の色と同じ様な蒼い髪が背中揺れる。白を基調とした身体のラインが浮き彫りになる

ようなノースリーブでタートルネックの服装が一段と女性らしさを演出し、蒼い髪もまた目立つ。

「もう意識が戻ったんだ。凄い生命力だね」

笑顔でそう言う女性の口調は嫌みや敵対心などは含まれていなかった。本心で安堵していると一目見ただけの浩介にも伝わるような笑顔だった。

「君は？」

「ナーシエ。ナーシエ・バレンシア。宜しくね、高崎浩介君」

「じゃあ君が助けてくれたのか？」

ナーシエは両腕を腰に付け胸を張る。

「そつだよ。感謝してよね」

綾華と変わらないぐらいの高い身長 of ナーシエだが、見た目とは裏腹に行動が子供っぽく思わず浩介も苦笑する。

「ああ、感謝はしてる。だが聞きたい事が山ほどある。それに答えてくれたら心から感謝しよう」

「お前っ！　なんだその物言いは！！」

ナーシエの後に入って来た細身の男が見かねていきり立つがナーシエがそれを制する。

「やめなさい、カイ。あなたは下がってて」

「しかし——」

「勝手に助けたのは私。それにこんな状況で目を覚ました彼が何も

質問が無い訳がないでしょ？ 彼とは責任を持って私が話をします。異論は認めません」

子供っぽい態度とは逆に威圧のある雰囲気です。話すナーシエに、男は反論すら出来ず俯きながら下がっていった。

「大体の状況は後々把握できる。俺が一番に知りたいのは細かな現状じゃない。ただひとつあんな達に確認をしたいだけだ」

「確認……？」

ナーシエは思わぬ浩介の言葉に首を傾げる。浩介は一度頷く。

「俺の考えが正しければこの質問で全てにおいて繋がりを見せる。その確認をするだけだ」

「へえ………うん、答えてあげるよ。その確認をどうぞ」

ナーシエは浩介を試すかのように軽い口調でそう言った。たかが知れているような確認だと心の中で確信しながら。

そんなナーシエに浩介は単刀直入に言う、と言って一度その場に
いる三人を見回した。その眼は確かなる確信を秘めた鋭い目線だった。

「あんな達は何処の星からやってきたんだ？」

「えっ——！？」

「なっ——！！」

「……………」

セリアは顔色ひとつ変えなかったが、ナーシエとカイからは驚きの声为零れた。

確信どころか真実を突いているその質問は流石に予想外の確認だったのだらうと浩介は軽く笑った。

「わかった。これで繋がったよ」

真実のその先へ2

フィーガルとはナーシェ達が乗ってきた宇宙船の名前であった。誰も近寄らないような山奥にフィーガルを停泊させ、耳に付けた小型無線機で情報を送り、備え付けられた転送装置を利用し浩介を一瞬でここまで運んだ。

それを聞いただけでも地球より科学技術はかなり高いと理解できる。フィーガルの内装、コントロールルーム、扉の精密さを見ても近未来アニメのように地球が目指す理想郷の姿であるとも錯覚させる。

地球から何万光年離れた星かはナーシェの話を聞くだけでは理解出来なかったが、つまりは今の地球では発見できないほどの距離だということに納得する。

動力となるエネルギーは一体何を使っているのか、フィーガルを構成しているこの物質はなんなのか、転送システムは一体どういった仕組みなのか、など研究者としては非常に興味の尽きない研究材料ではあるが、浩介にとってそれはどうでもいいことだ。

地球とは違う場所の人間^{ほし}ということが分かっただけで満足である。言葉が伝わっているのめかけ離れた技術力を持っているからだ、細かなことは恐らく理解は出来ないと処理する。

そしてこのフィーガルは幾多の船艦の中でも小型のタイプらしく、浩介が寝かされていた部屋が数力所と、普段皆が集まるコントロールルームしかない。

ナーシェは仲間に出会えると言ってカインに浩介の移動を手伝わせようとさせるが、まだこのメンバーを信頼しきれない浩介自身がそ

れを断る。

全身の痛みを得意の強がりでカバーし、何とか立ち上がった浩介はゆっくりとした足取りでコントロールルームへ向かっていった。

人員は全員で六名。ナーシエ、セリア、カイの他に女性一人と男性二人である。

女性に関してはガラス張りにされている船艦の一番前、車でいうと運転席か助席という場所に座り最先端と思えるようなキーボードをピコピコと叩いている。

後の男二人は見る限り男というガッチリ系だった。恐らくは戦闘員だと推測でき、結構シンプルなチームなんだなと思う。

浩介はコントロールルームの後方に設置してあったソファに腰を下ろした。痛みから解放された浩介は大きく息を吐いた。

「大丈夫？」

セリアが声を掛ける。ジャケットを羽織った浩介の袖口をずっと掴み此处までついて来たところを見ても、知らぬ間に懷かれたものだと軽く微笑む。

「ああ、そんな心配しなくても大丈夫だ」

「あらあら、セリアはコウちゃんに懷いちゃったね」

ナーシエはまるで幼い妹かのようにセリアの頭を撫でる。

「……コウちゃんはやめてくれ」

呆れ顔で非難する浩介を嘲笑うような笑みでスルーしたナーシエは浩介の向かいへと座った。

「それで、コウちゃんはある程度理解出来ているんだよね。じゃあ他は何が知りたい？」

いや、だから——と、言葉が出かかるが、無邪気な笑みを向けるナーシエに効果は無いと思いき思考を切り替えた。

「じゃあひとつ聞く。何故あいつらはこの地球^{ほし}にやってきたんだ？」

真剣に尋ねる浩介だったが、ナーシエは少し驚いた表情を見せる。

「いきなりその質問でいいの？」

ナーシエの言いたい事はすぐにわかった。

目の前にいるのは今の地球では確認出来ない程の惑星の人民である。普通ならば興味が勝りその惑星のことや、地球といかに違う環境であるか、などが真つ先に思い浮かぶとナーシエは思っていたからだ。

それは浩介も思わなかったわけじゃない。地球よりレベルの高い技術を持っているのはフィーガルを見ても分かるし、どのような街でどのような生活を送っているかも気になる。更に言えば魔法はあるか、魔物はいるかなど興味は尽きないのだ。

しかしそれはあくまでプライベートな質問だ。その質問をしたところで誰も浩介を責めたりはしないが、聞きたい事の中では最も低レベルな内容である。馴れ合いを求めるわけじゃない——と、浩介はその興味を頭の片隅に追いやった。

今成すべき事は全ての真実を知ることだ。だからこそ浩介はその切っ掛けを知る為の質問を優先した。

「まあ、コウちゃんは真面目そうだし、しょうがないか……」

ナーシエがコウちゃんとあだ名を付けるのは、彼女の性格からなのか何か裏があるのか、ただ単にいきなり訳の分からない場所に来た浩介を元氣付ける為か知らないが、それで油断するつもりはないというように真剣な顔をナーシエに向ける。

「ちょっと長くなるけど、いいかな？」

「なるべく簡潔に言ってくればそれでいい」

それはつまり関係の無い話はするなということである。ナーシエはそれを悟り僅かに苦笑する。

「カイ。何か飲み物を持ってきて貰っていいかな？」

「……わかりました」

あまり浩介を良く思っていないカイは浩介を睨むような眼で返事を返す。

ナーシエはそんなカイの様子を溜め息で払拭すると、浩介に顔を向け微笑む。

「話は約五十年前に遡るわ。この惑星^{ほし}は私達のいる区域では結構前から知られていたのよ。けどあまりにも技術力を含めた環境が違いすぎた為に接触が禁止された。でも五十年前、私達の惑星と抗争状態にあったバラリアという惑星がその禁忌を犯した。この惑星に降り立ち、あるうことか人と接触までした。飽くまでもこの国の一部の人達だけみたいだけ」

「なんでここ日本だったんだ？」

この地球には様々な国がある中で日本を選択した意味が理解出来なかった。それともすでにアメリカなどにも潜伏しているのか、と脳裏を過ぎり口に出すがナーシェが首を振った。

「彼らはここニホンしか潜伏していないわ。それはニホンが何かにおいて都合が良かったからだと思う」

「都合が良い？」

「そう。まずは技術力。繊細な技術力を持っていて、何をするかは知らないけど彼らにとってこのニホンの技術力が適していたんでしようね。次に人間性。比較的平和主義で闘争心が低い。性格上からも操るのは簡単と読んだのね。最後に言語。私達が使っている言語と近いのがニホン語だったから解析が楽にできた。これがニホンを選んだ理由と推測されているわね」

浩介は成る程、と納得し、カイが運んできたお茶のようなものを目を向けた。毒でも入っているのでは？ と思っただが、ナーシェがいる手前そんな大胆なことはいらないだろうとコップを持ち、舌先につける程度口に入れた。

「……お茶だな」

舌の痺れもないし変な臭いもない。味も普通だと確認し一口含んだ。

そんな思考を持っていたとナーシェがわかる筈もなく、話を続けた。

「でもその時はちょっと接触しただけでこの惑星^{ほし}を後にした。それ

以降何度か来ていたみたいだけど、それは緻密な計画を立てていたんでしょうね。そして五年前、彼らはいよいよ本腰を上げた。この二ホんに数人の優秀な人員を派遣させた。それがコウちゃんも知っている彼らの正体よ」

「……予想通りだな。しかし、約四十五年も計画を練るようなものか？ ヤツらの目的からしてそんなに年月がかかるとは思えない」
「言ったでしょ？ 私達の惑星^{ほし}と彼らの惑星^{ほし}では抗争状態だって。その抗争は百年以上も続いているの。その計画だけ遂行出来る余裕が無いのかもしれないわ。私達だって彼らがこの惑星^{ほし}と接触したと知ったのは一年前。それだけ内密に行われていたのだからそのぐらゐの期間は掛かるでしょう」

そこでナーシエはお茶を啜る。

「彼らのしようとしていることは大まかではわかるけど、細かなところまでは分からない。それはコウちゃんのほうが詳しいかもね」
「じゃあ最終的なヤツらの目的は何だ？」

ナーシエは少し申し訳なさそうに肩をすくめる。

「私達の惑星^{ほし}との抗争状態は更に近くの惑星を巻き込む程までに変わっていった。私達の惑星^{ほし}に味方するところと彼らに味方するところ、戦力は五分五分つてところかな。大きい抗争になった彼らは万が一負けた時、ううん、その場合でなくとももう一つの拠点を作ろうとしている。抗争に絶対に巻き込まれない距離にあり、簡単に自分達のモノに出来ると判断したこの惑星^{ほし}、あなた達のいう地球をね」
「……元からこの地球の人間は抹消させるつもりだったか。日本の支配する惑星を、か。……ヤツらの思惑通り巧いこと操られているんだな」

バリア計画に記されていた内容の一部分を思い返し、溜め息をつく。浩介の独り言を聞いたナーシエは申し訳なさそうに言葉を紡ぐ。

「迷惑な話だよね……私達の勝手な抗争でこの地球が狙われたことになるんだから。本当になんて謝ればいいか……」

「あんたに謝られても何も変わらない。ヤツらがこの惑星^{ほし}の人間に殺戮兵器を造らせているのも、あんたらを警戒してのことなんだな」

ナーシエは首を傾げる。

「殺戮……兵器？」

「ああそつだ。その話が確かならヤツらは内部からの人類破滅を狙っている。簡単に行うなら戦艦から攻撃すればいいだけだが、それだとあんたらに気付かれると思っただろう。それに比べ内部から浄化できればあんたらに気付かれることなく人類が破滅したただの惑星が出来上がる。後はどうにでも好きに出来るってものだ」

まあそれで全人類が死滅するとは思えないが、八割、もしくはそれ以上は減るだろう。残り二割程度の人間が生き残ろうが、彼らにとって危害がなくそれだけの人数で改善出来るとも思えない。事実上破滅と言っても過言ではないのだ。

浩介はお茶を啜った後、ナーシエと顔を合わせ口を開いた。

「さて、厄介な展開になったものだ」

真剣にそう呟く浩介を見たナーシエはその真意に気づき目を見開く。

「厄介どころか寧ろ喜べよ。実行される前に俺達が駆け付けたんだ。状況も確認出来たしさっさと援軍でも呼んで解決してしまおうぜ！」

戦闘員の一人が浩介に声を掛ける。しかし浩介は男に目を向けずナーシエを見たままだった。

「だからこそ厄介なのよ」

そんな浩介の言葉を代弁するようにナーシエが口を開いた。その声はいつものような明るい声ではなく、重い口調だった。

ナーシエの言葉で重苦しい空気が漂い、理解出来ていないカイがナーシエに顔を向ける。

「どういうことですか？」

理解出来ないのは皆一緒であり、ナーシエの言葉を待つように口を閉ざした。

「カイ、私達の任務は何？」

「え？ えっと……今この惑星がどうなっているかの状況を掴み報告する。場合によっては侵入しているバラリア人の抹殺です」

「そう。そしてそれはバラリアも知らない極秘任務。報告するのは特に問題はない。でも、援軍を呼ぶのと抹殺は迂闊に出来ない」

「何故です？」

「私達の存在を知られるからよ。それを知った彼らはどう動くと思う？」

その問いは浩介が間髪容れずに答える。

「あんたら含め抹消しようとするだろう。それだけならまだ良いが、

間違い無く計画の実行を早める結果となる。例え俺達が勝利したとしてもかなりの被害が出るのは明らかだ。場合によっては全ての計画を断念し、この地球ごとドカン、だな。あんたらには痛くも痒くもない話だがこちらとしては迷惑を被る話だ」

浩介は至って冷静にそう言った。それが癪に障ったのかカイが浩介を睨み付けた。

「随分な言い草だな！ 心配して来てやった俺達を迷惑だと思ってんのかっ！」

「心配？ ただ任務だから来たんだろうが。来てやった？ いつからお前は俺達の上に立つ存在になったんだ？」

そう口に出し、浩介もまたカイを睨みつける。

「ッ！ お前っ！！」

「やめなさい！！」

今にも殴りかかろうとするカイをナーシエの叫びに近い声が制止させる。

「やめてよ……………」

そして今度は小さな声で呟いた。俯くナーシエを見たカイも一気に静まり返った。

その光景を見ていた浩介は一度溜め息を吐き、煙草に火をつけた。

「別にお前らが来たから厄介だと思ってるわけじゃない。あんたらが何の考えも無しに動くことが厄介だと言っただ。それに、あん

たらが動くこうが動くまいが結果は変わらないかもしれないしな。そればかりは俺もわからない」

「……あなたは、私達にどうしてほしいの？」

コウちゃんと言わないところを見るとナーシェも今後の行動を見据えるだけの余裕がないのだらうと浩介は苦笑する。

「帰ればいいだろう。あんた達がここで命を張る理由もない」

「……」

「とりあえず、俺を此処から出してくれ」

「……そんな身体で何が出来る？」

正論を言われたカイは悔しそうにそう言った。

「人間、死ぬ気でやれば何か出来るだろ」

「死ぬ気なの？」

セリアが嫌さず口を開く。

「死ぬ気はないが、約束はできないな」

浩介は痛みを耐えながら立ち上がる。

「さて、誰か出口へ案内してくれ」

「……カイ」

「……わかりました」

ナーシェの短い言葉にカイが頷く。

そのカイとコントロールルームを出る時、浩介は立ち上がることに

もしないナーシエを見た。

「ナーシエ。助けてくれてありがとう。心から感謝してる。じゃあな」

軽く頭を下げたあと、右手を上げ踵を返した。

「ちょっと待って！」

不意に背後から呼び止められる声で浩介はナーシエの方に振り向く。ナーシエは立ち上がり同じく浩介を見ていた。

「武器、必要でしょ？　あなたが持っていた剣と銃、預かってるから」

その言葉で浩介も意識を失う前の状況を思い出した。

「ああ、そうだったな。どこにある？」

「案内するわ。付いて来て」

ナーシエは浩介とカイの横をすり抜け、一度浩介と視線を合わせたあと促すように背中を向けた。その後ろを浩介が付いていく。

コントロールルームを出た先は一本の通路になっていて、左右に幾つかの部屋がある。賃貸アパートのようなその通路を歩く二人に会話は無く、コツコツと足音だけが響く。

そんな中、ナーシエが一つの扉の前で立ち止まる。

「この部屋よ」

「そうか」

後ろを歩いていた浩介がその扉に目を向けた瞬間、視界の片隅でナーシェが動くのを捉えた。

その動作は生易しいものではない。まるで浩介を捕って喰うかのような威圧あるものであり、命を脅かすような雰囲気醸し出している。

浩介は咄嗟に後退しナーシェの拳を回避するが、すぐさま二撃目が出される。躲すのは不可能と判断した浩介は右手で軌道をそらし距離をとった。

「ッ——」

ナーシェの拳を完全に見切った浩介だったが、右手でそらした際の若干の衝撃でさえ今の身体には堪えきれないものがあつた。

思わず片膝を付いた浩介はナーシェを睨み付ける。

「なんのつもりだ？」

意味がわからない。それが浩介の気持ちだった。助けてくれた相手が逆に攻撃を仕掛けるのだから当然だ。

重い口調で言う浩介に、ナーシェは真面目な顔で口を開く。

「そんな状態じゃ何も出来ないわよ？」
「は？」

ところがナーシェから出た言葉は意外なもので、浩介も思わず聞き返す。

「そんな身体のあなたがいくら足掻こうが結果は目に見えてる」

それは正論だと浩介も思う。

「あなたの判断は決して正解ではない」

「だが、間違ってもいない。そうだろ、ナーシェ？」

浩介はゆっくりと立ち上がる。

「ええ、そうね。でもそれは私達が不用意に動けばの話。元々あなた一人でどうにか出来るものでもないわ」

「誰が一人って言った？ 俺の読みが正しければヤツらに敵対心を抱いている組織がある。そいつらをうまく利用すれば不可能じゃない」

「例えそうだとしてもバラリアの優秀な精鋭相手に、何の力も持たないあなた達が勝つのは難しい筈よ。あなたもそんな状態だし」

「あんたの考えもわかるが、俺が一番に懸念しているのはヤツらが見返り無く攻撃してくることだ。そうなれば勝てないどころかこの星そのものが無くなる。そうなる可能性が高いのがあんたらが動くことなんだ」

「じゃあそうならないようにすればいいじゃない」

「じゃあそうならないように動いてくれんのか？ 今の状況を詳しく知ってから行動に移せるのか？」

「あなたが私達に指示を出せばいい。そうでしょ？」

声を荒げることなく至って冷静な言葉のやり取りが途絶える。

次の言葉が出てこない浩介に対し、ナーシエは口元を吊り上げる。

「あなたが私達に正確な指示を与えればその通りに動く。あなたの心配はそれで解消される。……違う？」

満足そうに言うナーシエは浩介に微笑んだ。

「……どういう風の吹き回しだ？」

「別にそんなつもりはないわ。ただあなたの言う通り私達は自分の任務、都合で物事を考えていた。彼らの先の行動を読まずに、ね。この惑星^{ほし}のことなんて何も考えてなかった。言われて気付いたけど、何もせずに私達だけ帰るなんて出来ない。元はといえば私達の抗争の巻き添えなのだから」

言葉では上手く言ったが、何も出来ずに帰ることはナーシエの中で戦力外と言われているような屈辱があった。しかし、安易に動けば浩介の言った通りの結果となる。それならばお互いの立場を考えた行動をすればいいと、不本意ではあるが自分に言い聞かせたのだ。

浩介としてもそれは願ったり叶ったりの提案だ。何だかんだ言ってもやはり戦力となるナーシエ達に協力してもらうことはこの上なく大きい。

内心ほくそ笑む浩介は表情を変えず口を開く。

「それなら確かに話は変わる。だが、いいのか？ あんたらのプライドもクソもないぞ」

「今更プライドがどうこういうものでもないでしょ。そのまま帰るだけならもつと酷いわよ」

「そりゃそうだろうが、あんたがそう割り切っても仲間はどうだ？ 少なからず俺に不満を持っているだろうし、内部から崩壊なんて

勘弁してほしいところだ」

ぐだぐだの結果を想像し、浩介は苦笑いを見せた。

「それは私が言い聞かせるわ」

「俺達は大丈夫ですよ」

ナーシエの紡ぐ言葉に追い被せるような男の声で、二人は視線を声のした方へ向けた。

浩介が歩いてきたコントロールルーム側の通路にカイ、セリア含め全員が集まっていた。

そして最初に声を掛けたであろう戦闘員の男が微笑しながら言葉を続ける。

「あんたの言いたい事は俺達にも伝わりましたし、ナーシエさんの言う通りただ帰るというのも納得できません。ならそれが最善の方法だと、俺は思っただが……」

その言葉に他の仲間はひとりを除き頷き返すが、頷かないとわかっていたように男の視線はカイに向く。

「カイ……」

下を向き、拳を握り締めている姿のカイに、ナーシエは不安の気持と共に呟いた。

「わかってます。それが最善だということも、彼にその力があるということも……」

浩介の冷静な考え、ナーシエの不意打ちを躲す反応などを見てもそれは認めざるおえない。

カイは顔を上げると、浩介の近くまで歩み寄った。

「今までの数々の無礼、本当にすみませんでした」

そう言つて深々と頭を下げた。

それに対し、浩介はなんともいえない気まずさに苦笑いを浮かべる。

「頭を上げてくれ。俺はそこまで気にしちゃいない」

頭を上げたカイに、浩介は右手を差し出す。

「よろしく頼む」

「……こちらこそ」

一瞬驚いたカイだったが、すぐに顔を引き締め浩介の手を握り返した。

「じゃあ決まり！これからコウちゃんにはわたしと対等な立場で指示を出してもらいます。異論は無いよね？」

仲間は頷くが、浩介はナーシエの対等の立場という言葉に譲れないプライドを感じて苦笑する。勿論口には出さなかった。

「じゃあ皆コントロールルームへ戻つて。今後の動向を決めるから」

そしてナーシエは浩介を見る。

「その前にコウちゃんは武器を決めてね」
「決める？」

武器を返す、ではなく武器を決める、という点に首を傾げる。

「そう。剣は使えるけど、この惑星^{ほし}の銃は彼らに効かない。銃を使うならもつと良いのがあるわ。他に槍とか杖とかもあるから馴染む物を選んで、という意味よ」

「……………まるでファンタジーだな。いや、既にそんなものか」
「え？」

「いや、なんでもない。こっちの話しだ」

浩介は気を引き締め、ナーシエに続き部屋へと入った。

真実のその先へ3

喫茶店のカウンターに座る三人の姿。闇に纏われた根源を知ろうとする三人の顔は回答者であるマスターに向けられる。

ゴポゴポと沸騰したお湯が音を鳴らすなか、マスターもまた三人の顔を注視する。

人が居ない喫茶店だからゆったり出来るのだが、表の扉に準備中という札を掲げることでそれは確かなものに変わっていた。

そしてマスターは口を開いた。

「五十年前、突如としてヤツらは現れた。その時接触したのは政府の連中だけだが、依頼屋の創立者である緒方誠一おがたせいいちもその中の一人だった。結論から言えば今の政府を操っているヤツらは別の惑星から来た異世界人だ」

「異世界人!？」

思わぬ言葉に三人は驚き、顔を合わせる。そんなことが現実にありえるのか——いや、ありえたからこそ今の状況になっていると考えを纏める。

理解出来ない——確かに浩介が言っていた言葉の意味がやっとわかった気がした綾華は、マスターに顔を移し口を開く。

「でもどうしてそれが依頼屋をつくる切っ掛けになるの?」

「ヤツらの提案に緒方誠一が疑問を抱いたからだ。その提案は異界の技術を教えるから一緒に日本の支配する惑星にしよう、というも

のだった」

「随分強引な提案ですね」

柴田がコーヒーを飲みながら呟いた。

「今の状況ではそう思うだろうな。だが、異界の者からの提案に政府の連中はその気になった」

現実では考えられない異世界の人間が来たのだ。全ての可能性がうんと広がったと直感した政府の連中は大変喜び、興奮した。更には科学技術を貰えるうえにこの地球を日本人のモノに出来るという。普通なら無理だと笑い飛ばすところだが、何せ相手は異世界人だ。絶対に出来るかと確信し、抱くことのない欲を抱いてしまったのだ。それが彼らの狙いとは知らないで。

「だが、緒方誠一は底知れぬ不安を感じ胸に刻んだ。うまい話には裏があると直感したんだろう」

「彼は冷静だったんだな」

杉田の呟く言葉にマスターは頷く。

「それからヤツらが立ち去ったあと仲間を集めた。彼は対策を考える中でお金が入り、かつ情報を得る目的で新しい世の中の在り方を思い付いた。それが依頼屋という組織の始まりだ」

異世界人はすぐに何かしらの行動をとると予測していた緒方はこんなにも平行線を辿るとは思っていなかった。しかし、必ず動くかと確信があった為にここで解散など出来るわけがなかったのだ。依頼屋は緒方の確信と執念で築かれた賜物であった。

世界の在り方といっても、やはり人を殺す依頼も数多い。それを世界の在り方のひとつとして良いのか、と杉田はふと思う。

答えは否である。

理由はどうかあれそれは殺人。全てを許しては法など成り立たなくなる。

だがそれは一般人の考えなのだろうか、と再び頭をよぎる。何も知らない一般人ではそう考えるものの、緒方は常識を一変した出来事に遭遇したのだ。法を犯してまで組織の拡大とヤツらへ対抗する力を求めた緒方の判断は間違っているのか、と考えると絶対の否定は出来なかった。この世の末を垣間見た緒方の抵抗は今も尚続き、そこに頼ろうとしている自分達がいるのだ。

「それが緒方さんの正義なんでしょうね」

杉田はマスターに向かって微笑み、マスターも頷く。

一般人は勿論、警察組織にも知られずここまで組織を拡大できたのは、法を犯す決断をした緒方の精一杯の償いなのだろうと理解したのだ。

依頼屋組織の存在を一般に知られてしまえば、それこそ日本は混乱する。

『何が正義で何が悪か見極めろ』

その根本となる意味がようやくわかったような思いで杉田は笑った。

何も知らない一般人には悪だが、ヤツらの狙いにいち早く気づいた緒方には正義となる。

少なからず今の現状からして杉田には緒方の正義が何であるかを掴むことが出来た。

「そして数十年の時を経て今の依頼屋がある。大体こんな感じだ。わかったか？」

話し終えたマスターは乾いた喉を潤すかのように、カップに入った残りのコーヒーを飲み干した。

「分かりました。ありがとうございます」

爽やかな笑顔を見せる柴田に対し、綾華は怪訝な表情になっていた。

「でも大丈夫なの？ 今現在で各地の依頼屋がそこまで壊滅状態だと考えれば、政府は極秘にしていたその依頼屋の情報を掴んでいるっていうことでしょ？ それに力もヤツらのほうが上。そんなんで勝ち目はあるのかしら？」

例えこの三人が協力するといっても、それは微々たるものにしかならない。五分五分の戦力になるとは考えられないのだ。

「痛いところをつくな、お嬢ちゃん。確かにヤツらのほうが力はあるし、依頼屋の戦力は削られるばかりだ。だが……」

マスターの言葉に思わず息を呑む。何か秘策があるのでは、と期待したのだ。

「逃げないだろう。その為につくられた組織なんだからな」
「……………精神論、ってわけね」

期待してしまった気持ちのぶん、綾華は落胆しながら呟いた。

「しょうがないですよ。彼らが何故理解出来ない力をもっているのかも分かりましたし、何より地球の武器なんて彼らからしたら数段劣っているでしょうから」

「……………柴田君は前向きね。でも、それが事実、か……………」

一度彼らと戦ったことのある柴田だからこそ説得力があった。それ故、如何に戦闘に特化した人員を育てた依頼屋でさえも苦戦するのは納得できる。

そんなんで彼らの狙いを阻止することは出来るのか、と不安の気持ちを抱く綾華。

それを読み取ったのか、柴田は綾華に笑みを向ける。

「大丈夫ですよ。異界の者だろうと彼らも人間です。倒せないことはありません。実際、浩介君がそれを証明しているのですから」

それを聞いた綾華は胸が痛んだ。

綾華の叫びを無視し、“それ”を実行に移した浩介。その時の戦慄と別れの際の浩介の顔が鮮明に思い出される。

だが何も知らなかったあの時とは違う。今なら全てを理解し浩介を支えることが出来る。

「浩介……どこにいるのかな？」

そして綾華の口からでた言葉は真つ当な思いだった。

研究所の事件以降、浩介の詳細が不明なのは各日の報道で知っている。大量の血痕が近くの路地裏で発見されていたのもあり、浩介の死亡説も流れているが死体が無い為それも定かではない。尤も、この三人がその説を信じることはないが。

「あいつのことだ。どこかで身を隠しているんだろう。警察に見つかるへまはしないさ」

そう言つて笑う杉田だが、それは綾華に対して言つたのが半分、自分にそうだと言ひ聞かせる為に言つたのが半分である。

それだけの不安と期待を持っているのは、浩介の力を認め共に歩む仲間と認識しているからである。それは勿論杉田だけでなく、綾華、柴田も同じ想いだ。

「そうですね。依頼屋との接触はこれで解決しましたし、あとは浩介君の居場所を知ることが出来ればより良いのですが――」

刹那、激しい音が喫茶店を包み、柴田は言葉を紡ぐのを止め入口を振り返る。あまりに咄嗟の出来事で綾華、杉田、マスターも何事かと注視する。

そこにあるべき筈の扉はガラス共々無残に壊れ落ち、かわりにひとりの男が立ちはだかる。

男の顔は無表情でその雰囲気は鳥肌がたつ程殺気立っている。

ただ事ではない。それは皆同じ気持ちだが、一切状況が掴めない現状に為す術は無い。

しかしその顔、その雰囲気に見覚えのある綾華は全身から血の気が引いていくのを感じた。

「――あ、あなたは!!」

何故この男が此処に、と思う気持ちと焦りの気持ちが入り混じり、綾華は冷静ではいらなかった。

「何者だ？」

「悪いねえ。高崎浩介がよく現れる喫茶店と聞いて来てみたんだが、どうやらないようだな。とは言っても違う収穫を見つけたみたいだ」

綾華に聞いたマスターの問いに答えたのは紛れもないその男本人だった。

口調はおどけたような軽さであるが顔は依然無表情である。少しでも気を緩めればもう光は拝めないと三人は理解する。

「あんたに聞いちゃいない。それに扉の修理代は払って貰うから覚悟しとけ」

三人の緊張を無視するかのように男を睨むマスター。
それに対し、男は表情を緩めた。

「修理代？ 残念ながら金は持ってない。そうだな………あんたが死ねば修理代も必要ないよな？」

ニヤリと笑う男の反応に、綾華の身体は震えだす。

「やめてマスター！ この男は私達の学園を襲った張本人よ！ ただの人間じゃないわ」

「何だと！？」

それに反応したのは杉田だ。実際に見たわけではない杉田は、学園の惨状を思い返しながら再び男に目を向けた。

「ああ、あんたあの学園にいたのか。なら話はわかるよな？ 俺は高崎浩介を捜してる。あんたらも仲間なら何か知らないか？」

「それはこっちも聞きたいですね。どこにいるのか僕らも知りません。尤も、知っていても教えることはありませんが」

「はっ！ 自分の命は大切にしろよメガネ君。俺を温厚な人間だと思ったら大間違いだからな」

柴田の返しで更に笑みを深めるグラン。

グランが此処に来た理由はただ一つ。高崎浩介の抹殺である。

既に二人も彼によって殺されている現実には、グラン含め彼らも見過ごすことの出来ないところまできているのだ。そしてその仲間は誰だろうと殺す。それがグランの決定事項であった。

「落ち着いて、柴田君！ 今の私達じゃあいつに勝てない。逃げるわよ！」

睨み合う柴田を必死に止めに入る。今は逃げなければいけない。綾華の思考はそれだけで一杯だった。

「嬢ちゃんは賢明だな。まあ、逃がさないけどな」

「……無駄だ楠木。コイツの眼は本気だ。逃げることも困難だろう」
立ち上がった杉田は二人に背を向けグランの正面に立つ。

綾華は勿論柴田も怪我の影響で今は戦える状態じゃない。そうなれば自分がかすめるしかないと言悟を決めた。

「二人は先に逃げてくれ。ヤツは俺が足止めする」

「何言ってるのよ！ それなら私も残る」

「僕も同じです。こうなったからには三人でやるしかありませんよ。
杉田さんひとりに任せることは出来ません！」

まずは綾華、次に柴田と杉田の隣に移動する。

「お前ら、死ぬぞ」

二人の行動は嬉しかったが、杉田とて容易に承諾はできない。例えば三人掛かりで向かって万全でない柴田とあくまで一般の綾華では死闘は免れない。それだけのプレッシャーと力の差がグランを見るだけでも伝わってくる。

死闘にすらならないかもしれない、と思うものの口に出すことはない。何故なら今はそれでも動かなければならないからだ。結果がどうであろうと、今は生き残れる確率が高い道を選ばなければいけない。それが杉田一人で足止めという方法であった。

そんな杉田の横で柴田はいつもの笑みを向けた。

「それでも、です。ここで杉田さんを一人残すという選択をするな

「それはもう仲間ではありません。例えこの身が千切れようが傷痕ひとつぐらいは付けてやりますよ」

「それはちよつと言い過ぎだけど私も思いは一緒よ。こんな時に一緒にいるのが仲間でしょ？」

「……………お前ら……………後悔するなよ」

杉田も思わず笑みをつくる。

相手は強大。武器は無い。万全でない柴田。場所は動きにくい室内。状況は最悪である。それでも覚悟は出来た。脆くも散るなら潔く散る、という開き直りに近いものはあるが後悔はしたくない。その為なら後には引けないと三人はグランを見据える。

「……………話は纏まったようだな。じゃあ、遊んでやるよ」

グランのプレッシャーが明確な殺気に変わる。その確かな殺意はいつそ自害してしまいたいと思うほど気を揺るがすものだ。

グランが僅かに重心を下げた。

——来る！！

そう思った矢先、グランが顔を逸らした。

今の流れからすればあまりに不自然な行動だったが、顔を逸らしたグランの後ろの柱に包丁がドスツと突き刺さる。

「……………ほう」

体勢を整えたグランの口から関心の声が漏れる。その視線は三人の更に後ろを見据えていた。

「マスター……………」

それは正にマスターの一投だった。

「俺の店で勝手な行動は謹んで貰いたい。まずは店の責任者に話をつけるのが常識だろ、小僧」

そしてマスターもグランを真っ直ぐ見据える。
そこにいつものマスターの面影はない。

「はは、これは失礼。まさかあなたがこんな挨拶してくると思っ
てなかったよ。楽しくなりそうだ」

「生意気なこと言ってんな小僧。お前なんぞと楽しむ趣味はない。
潔く故郷へ帰りな」

「それはできないねえ。この星の住人に世の中の原理を教える時だ
からね。あんたも自分の愚かさを知るといい」

「だからお前は小僧なんだ。何も成し得てないうちにそんな大口を
叩くな。お前はただの使いつぱしりに過ぎん」

「……口に気をつけろよジジイ。無知なあんたがどうこう言つのは
俺を倒してから言っんだな」

「勿論そのつもりだ、小僧。粹がったお前ごときに遅れをとるつも
りはない。愚かさを知るのはお前だ」

マスターはカウンターの中から出てくると柴田にとある紙を手渡
す。

「これは……………」

「依頼屋本部の場所だ。裏にもう一つ出口がある。君達はそこに向
かえ」

それはグランに届かない小さな声だった。だがグランから目を離しているものの、マスターには一切の隙がない。流石は依頼屋として働く中で培った実力だと賞賛を贈りたいものであった。

「しかし……」

しかし、そのマスターひとりでグランに勝てるのか、と考えると答えは明確ではない。もしかしたら、という期待の気持ちも正直あるが、それでも現役ではないマスターがグランを倒すビジョンが全く思い描けないでいた。

「すまん。送ってやると言ったが俺はヤツに教えることがある。

そんなに心配する必要はない。君達は今他に成すべきことがある筈だ。ならこんな所で立ち止まるな」

三人の表情からマスターは心情を悟り、そして道を示した。君達はここで終わるな、と。

「それから、仲間の荷物も持って行ってくれ。この場所も無事では済まんだろっからな」

マスターの目線が浩介から預かった荷物へ注がれる。

「最後に、あいつに伝えといてくれ。お前が取りに来るまで預かれなくてスマンと。そしてここはコインロッカーじゃないと」

そう言っただけでマスターは軽く笑った。

「……………行け。そんなに長く待つてはくれない」

その笑顔を一瞬で消したマスターは顔をグランに移す。
いつ向かってくるかという油断できない殺気は増す一方である。

「……………行きましょう」

納得は出来ない。だがそれ以上に入り込む余地はないと柴田は感じる。

マスターに加勢しても結果として足を引っ張るのは明らかだ。それだけ力の差があるのは悔しいが、それを納得するしか方法は無かった。

三人は一度頷く。

「マスター……………」

「言葉はいらん。今の俺に出来ることは若い芽を摘ませないことだけ。これからの時代を担うのは君達だ。俺達はその道筋を築いていくだけに過ぎん。全力で生きろ。がむしゃらに生きろ。それだけだ」

胸に突き刺さるような言葉だった。

マスターを呼びはしたもののその先の言葉が見付からない。

スミマセン。――何を？

ありがとう。――軽い？

死なないで。――何様？

今の気持ちを言葉に出来ない。言葉は気持ちを越えられないと実感する。だから良いことばかりの人生は送れないのだと直感する。

だがマスターはそれすら考慮出来た。言葉に出来ない気持ちを伝

える方法はお互いの気持ちでの疎通なのだと。

三人はマスターに深々と一礼する。

そして裏口に向かって走り出した。

「行かせないよ」

それを易々と許す筈がない。

グランはその場から消え三人のすぐ背後に現れた。手を伸ばせば余裕で捕まえられる距離であり、何の戸惑いもなく実行する。

だがそれは出来なかった。

手を伸ばそうとした瞬間、服を掴まれ無造作に投げ飛ばされたのだ。

テーブルの上に飛ばされたグランの体でメニューや塩、紙ナプキンなど置いてあった物を撒き散らす。

そしてそのままの体勢でマスターを睨む。

「まさかあんたも反応出来るとはな」

「その様子じゃ、あんたらの捜してる“彼”も反応出来たんだな」

見えなくなった三人を完全に諦め、グランはテーブルから降り服を払う。

「一回目でここまで反応したのはあんたが初めてだな」

「教えることがあると言っただろ小僧。お前には思い通りにいかな

い現実を教えてやる」

「……教えて貰おうか！」

そこでグランは“力”を使った。

一進一退の攻防。

最早ここを喫茶店と呼ぶのは無理のある悲惨な家屋。窓ガラスは粉々に割れ、内部など喫茶店の姿形も無いほど荒れ果てている。

そこで二人の激闘する姿があった。

マスターの服はボロボロで、あちらこちらで出血が目立つ。とはいえグランも無事ではない。同じように出血が目立ち、余裕ではない表情でマスターを見る。

マスターの拳が決まるとグランは地に伏せ、グランが力を使えばマスターは弾き飛ばされる。

序盤こそ、その攻撃さえ見切っていたマスターでさえも今は見切れる余裕も体力もない。

一進一退で続いていた攻防は、徐々にその形を変えていった。

「はっ！！ キレが悪くなってきたな！」

「くっ!!」

年齢——それが明暗を分け始めていた。衰えた体力と身体の鈍りはマスターでも隠せない。

今のマスターにあるものは今まで培った経験のみだ。

最初は正に互角、またはそれ以上の動きを見せたマスターに正直グランは手こずった。地球に来てからここまで苦戦したのはこれで二人目。グランが驚くほどマスターは鮮麗な動きを見せた。それが依頼屋の中でトップクラスに位置したマスターの実力であった。

元々身体の衰えを懸念し依頼屋を辞めたマスターであるが、唯一の誤算は序盤で勝負を決めきれなかったことが全てだ。

持久戦となればこうなることは自身も知っていた。だからこそ最初から全力でいったのだが、それを耐えたグランが一枚上手だった。

「どうした？ 何か教えてくれるんじゃないのか？」

グランは体勢を整えながらマスターに余裕の笑みを向ける。

「……流石は異世界人というべきか、簡単にはいかんな」

そう言つてマスターもグランと向き合う。

「まあいい。彼らを助けられたいま、俺の成すべきことは終わった。お前らは必ず負けるさ」

グランは鼻で笑う。

「笑わせるな！ 俺達が負ける？ 逃げるしか出来ない奴らにか？

言っておくがそれこそ期待外れの見解だな。精々逃げ回っていいばいい」

「相手の力量、現状を理解するのも力のうちだ。彼らはそれを持っている。自意識過剰なお前は持つていないものだ」

「じゃあお前はどうなる？ 俺の力量を知らないわけじゃないだろう？」

「物事には優先順位というものがある。この星の未来を考えれば彼らを生かすのが優先だ」

「あんたは悲しい運命を選んだってわけか」

「悲しいことなんて何もない。あんたらが負けると信じているからな。……緒方誠一、俺の父の築いた想いはまだ生きている。俺がその想いをここで形にしてみせる！」

元依頼屋としての誇り、そして父親である緒方誠一の生き様を抱え、マスターは最後の意地をグランにぶつける。

拳と拳のぶつかり合い。グランの力とマスターの執念。再び均衡するお互いの実力は激しく衝突する。

「——ッ！ くたばれ——！」

グランの手から出される異能。まともにくらいながらも倒れないマスター。その執念はグランの余裕を奪っていく。

「お前などには負けん——！」

マスターの拳、蹴りが面白いほどグランに当たる。

両者に最早『冷静』という言葉はない。

殺るか殺られるか——ただそれだけの激闘。

意識が薄れる。

拙い、と思う時にはもう為す術はない。

グランに“負け”という言葉がよぎる。

膝を付くグランにマスターは最後だと言わんばかりの拳を振り上げる。

「——ッ！——！」

しかしその拳を振り下ろす前に体の機能が落ちる。

振り上げた拳を動かすことが出来ず、震える脚で硬直する。

人間の限界を超えた瞬間であつた。

——動け……動いてくれ！！　あと、あと一撃なんだ！！

マスターの切なる願いとは裏腹に全く動かない自分の身体。

グランはニヤリと笑い、マスターの顔の前に手を翳した。

「……………残念」

そして異能を発する。

吹き飛んだマスターは無残に荒れ果てた床に打ち付けられ、動くことはなかった。

「ツチ！ ムカツク連中だ」

完全な力が出ないこの惑星^{ほし}でも、自分達を超える奴らはいないと思っていたグランは腹立たしさを感じていた。

決してそんな連中は多くないとしても、浩介といいマスターとい

い満足出来るような結果ではない。
埃を払うように立ち上がったグランは、倒れたマスターの元へ歩み寄る。

「惜しかったな。全盛期のあんたなら、もしかしたら勝てたかもな」

マスターからの返答はない。

「確かに教えて貰った。お前等は侮れる連中じゃない、とな。だが結果は変わらない。誰が立ちはだかろうとも」

グランは再び倒れたマスターの顔に手を翳し、少し間を空けてから異能を発動させた。

鈍い音が静寂を包む。

そしてグランは静かにその場を離れていった。

真実のその先へ4

「ここです」

「……本当にここよね？」

「……驚いたな」

喫茶店を出てから約一時間。太陽は沈みかけきれいな夕焼け空へと変わっていた。

マスターに渡された紙に記された依頼屋組織の場所に辿り着いた三人は思わず唾を呑み、それを見上げた。

硝子張りの建物が空へとそびえる。三十階以上はあるであろうその建物から依頼屋という荒々しいイメージは湧いてこない。

前を通り過ぎても、どこかの有名な会社のオフィスなのだろうとは思えない。だが、確かに紙にはこのビルの住所が記載されていた。

ここで考えていても埒が明かない。三人は戸惑いながらも歩き出した。

内部は何の変哲もない広々とした空間だった。硝子張りの為に外の明かりを防ぐことなく照らし入れている。埃一つ無い床もそれを反射し、一階のフロアは眩しいぐらいの光に包まれる。

三人はひとまず正面にある受付カウンターへ向かった。

「こんにちは。どんなご用件でしょうか？」

カウンターにいるスーツを身に纏った若い女性は、にっこりと営業スマイルを浮かべ三人に視線を送る。

「とある喫茶店のマスターに言われここに来ました。この場所はいら——」

「はい！ 社長の弟様、祥三様（じやんじやう）のご紹介ですね？ 社長に直接連絡致しますので暫くお待ち下さいませ」

途中で言葉を被せ、見事にことを進める受付の女性はカウンター内のボタンを押し真剣な顔で電話を取る。

安易に『依頼屋』という言葉を言っではならないのだろうと、柴田は内心呟いた。

小さな声でやり取りをしていた女性は電話を置き営業スマイルへと戻る。

「確認が取れました。社長が直にお話があるそうです。あちらのエレベーターで最上階まで上がり下さいませ」

そう言って女性はエレベーターの場所を手で示す。

三人は軽く一礼し、案内通り最上階へ向かった。

エレベーターが最上階で止まり扉が開くと前に同じくスーツを着た一人の女性と二人の男が待っていた。

「ここから社長室へは私達が案内致します。ついて来て下さい」

言っなり歩き出す女性の後ろを少し遅れてついていく。その後ろを二人の男が歩く。

女性は秘書のような立場であり、男性は三人を警戒してのものだろうと構図から見てわかった。

それだけの警戒をしてくることで、やはりここは依頼屋本部なのだと再認識する。

終始無言で歩くこと数分、女性がとある扉をノックする。

「社長、例の三人を連れて参りました」

「……入ってくれ」

「失礼します」

女性が扉を開き、三人は室内へと入っていく。

その前方に立つ社長である男。体格や顔付きがどこことなくマスタ―と被る。

警戒の為について来た男性二人は廊下で静止し、女性は室内からゆっくりと扉を閉める。

「まあ、掛けてくれ」

男は中央に設置されたソファ―に三人を誘導し、自身は向かいの一人掛けのソファ―に腰を下ろす。

その言葉通りにソファ―に座った三人は改めて社長と顔を合わす。

「初めまして。依頼屋組織社長、緒方亮二りょうじです。よろしく」

そう言つて三人と握手を交わす。

「マスターから、創立者は緒方誠一さんとお聞きしましたが、あなたは――」

「息子ですよ、柴田俊樹君。あと祥三――マスターは私の弟だ」

「つまりマスターも創立者の息子だったのね」

「そうだ。祥三は言わなかったのか。あいつらしいと言えばあいつらしい」

緒方は苦笑いを浮かべ、二度頷く。

「何故僕の名前を？」

柴田が率直な疑問を口に出した。

「フリーの依頼屋を調べて無いとでも？ フリーの依頼屋は良くも悪くも影響してくる。それを見定める為だよ。悪く思わんでくれ」

仲間に出来るような人材なら仲間にし、依頼屋を悪用する者なら容赦はしない、ということだ。

「すまんが、君達も自己紹介してくれないか？ 流石にそこまではわからんからな」

緒方は綾華と杉田に視線を移す。

「紹介が遅れました。私は刑事をしておりました杉田満則といいます。今回のことで刑事は辞める覚悟をしています……」

「刑事、か。その判断は正しいのかもな。君は？」

「楠木綾華。最初に依頼屋のとある二人にお世話になった一人よ。」

白ヶ丘学園と聞けば多分直ぐに分かると思っけど？」

綾華は皮肉を込めてそう言った。

依頼屋を頼ることになっても、やはり簡単に割り切れるものではない。死ぬ思いをしたのだから未だに良いイメージは持てないでいた。

直ぐに解釈した緒方は軽く頭を下げた。

「成り行きとはいえ、悪い事をした。余りに状況が複雑だったものでな、東野に全てを任せたんだが情報の食い違いがあった。本当にすまんかった」

「もう過ぎたこと——とは言えないわね。あれは何だったの？ 依頼とはいえ、あなた達は一般人も平気で殺す組織なの？」

緒方は頭を上げ、綾華を見る。

「そうだな、そこから話すべきか。ひかり、飲み物を頼む」
「はい」

秘書の女性はその準備に取りかかり、緒方は息を一つ吐き出した。

「全ての元凶は黒瀬くろせという牧師と君の学校の教師、管という男から始まった。牧師は私達に依頼を送る仲介役の傍ら、政府に情報売るという人物でもあった」

「正に仲介役ね……」

呆れたように言う綾華に緒方は頷く。

「そして、牧師はある思いからか、教会に来る管という男に全てを話した。恐らく依頼屋の情報を更に売る為の、自分の意図するよう動くくれる駒としてだろうがな」

「あの性格じゃ、それしかないわよね」

「そして管が不倫していた女子生徒にその情報を漏らした。その女性もそれ以来管に張り付いていたそうだ。それも恐らく金目当てだろうな」

それは綾華としても初耳であり、予想していなかった事実だ。

「……沙耶、愛があつて一緒にいたわけじゃなかったんだ」

綾華は少し落胆し、小さな声で呟いた。

情報を買ったお金は管にも入る予定だった。勿論、政府相手なのだからその金額も相当なものになる。そのスネをかじろうとした沙耶は愛もなく、管に身体を売ってまで目的を果たそうとしたのだ。

「だが、その女性が邪魔になつたんだろうな。二人は依頼という目的で彼女を殺そうとした。依頼屋の情報を知ってしまった女性がいる、と言ってな。こちらもちらである程度の情報は掴んでいたし、その三人を抹殺するのにデメリツトはなかった。だから東野を行かせた」

「何で直ぐに牧師を殺さなかったの？ 実際に沙耶が殺された日から随分あつた筈よ」

「牧師が誰に情報を買っているのか掴みたかつたんだ。だから少し泳がせていたんだが、そこで東野から連絡が入った。真相を知った奴らがいる、と。そして調べた結果それはフリーの依頼屋だとわかつた」

それが紛れもない浩介だった。

「フリーの依頼屋であろうと、一般人を殺したのが依頼屋組織だと広まればこちらとしても状況は厳しくなる。それは事実を知った君達ならわかるだろう」

「そんな事で私達を殺そうとしたの!？」

「落ち着け、楠木」

思わず声を強める綾華を杉田が宥める。

「それだけ奴らに隙を見せることは出来なかったんだ。申し訳ない」
「……話を続けて下さい」

運ばれてきたお茶を一口飲んだ柴田が先を促す。

「東野に状況を見て彼らを抹殺するようにと指示を出した。依頼屋を知っているもの全員をな。それが白ヶ丘学園の屋上で起こったことの始まりだ」

「高崎を仲間にしようとしたのは、口封じの為か？」

重い口調で杉田が問う。それに緒方は首を振った。

「そんな物騒なことじゃない。東野は今の依頼屋の中で稀に見る戦闘能力を持っている。その東野と互角の強さを誇る彼をただ仲間にしたかった。彼が依頼屋の事を世間に話すリスクも考えたが、それでも彼は必要な人材だった」

「だから直ぐにあの女性を送ってきたのね」

「そういうことだ。結果として断られたが、その後も君達は世間に話すどころか、そんな素振りも見せなかった。それは非常に助かった」

「それは浩介に言つてよね。私だったら警察に話してたわよ」

緒方は頷いた。

「そうだな。結果として厳しい状況にあるのは間違いないが、それでも君達には貸しがある。何でも協力しよう。ここに来てくれたのを歓迎する」

「そのことで一つ報告があります」

真剣な口調で言う柴田に、緒方の顔も険しくなる。

「何だ？」

「僕らがここに来ることになったのはヤツらが、恐らくSランクの異世界人が現れたからなんです」

「何だと！？　ということは倒したのか！？」

柴田は首を横に振る。

「マスターが……祥三さんが僕らを逃がせてくれました」

「祥三が……」

緒方の声は少し震えていた。

「マスターが創立者の息子さんだと知らなかったとはいえ、もう少し早く伝えていれば……」

「……いや、それを祥三が伝えなかったとしたら、そんな重荷を背負わしたくなかったのだろう。——ひかり、直ぐに祥三の喫茶店に三人戦闘員を送ってくれ」

緒方は秘書である中村ひかりに目を向け、彼女は頷く。

「はい。しかし、三人……でいいのですか？　Sランクならもつと送ったほうが――」

「いや、Sランクと祥三の戦いだ。もう決着はついてるさ」

女性は渋い表情を向ける緒方を見て唇を噛み締めた。

「……………わかりました」

それだけ言つて部屋を後にする。

向かった喫茶店で何を見るのか、緒方は何となく想像が出来た。

祥三は強い。それは知っている。だがなぜか不安だけが募る。

――せめて生きていてくれ

それが難しいことでも、緒方はただそれだけを祈った。

「すみません。僕らでは、マスターの力になれませんでした」

マスターに言われたからといって逃げてきた自分達の未熟さに情けなく思い、柴田は頭を下げた。

「……………祥三が面白いことを言っていたよ。依頼屋の事を、全てを教えたい奴らがいる。彼らは自分達で進める強き者だ、とな。あいつがそんなことを言うのは珍しいからな。多分、祥三は君達に未来を見た。だから君達を逃がした。それに後悔は無い筈だ」
「マスター……………」

マスターの真意を知った綾華は震える声で呟いた。

部屋には重い空気が流れる。それを払拭するかのように緒方は無理矢理笑顔をつくった。

「それじゃあ今後の行動を決めて行こう。ここに来たからといって無理に君達を仲間として戦わせるつもりはない。ゆっくりしていつてくれてもいいし、今すぐ帰ってくれてもいい。強制はしない。さて、どうする？」

その言葉で三人の意志が固まる。

——共に戦います、と。

そして緒方は笑顔で大きく頷き、心の底から感謝をした。

とある山中に停泊してあるフィーガルのコントロールルームで浩介は治療を受けていた。

上半身の大半に巻かれた包帯を取り、ナーシエが紫色のクリームを傷に塗っていく。

その度襲ってくる痛みに浩介は額に汗を滲ませながら堪え続ける。

その傍らで「大丈夫？」と何度も尋ねるセリア。

見ているだけで痛くなりそうな傷を見て顔をしかめているフィーガルの操縦士の女性、ロゼ。

そのロゼの反応を面白がっているカイ。

愛用している槍の刃をもの静かに磨く無口なドルゴ。

大柄な体格だが気さくに動き回っている兄貴肌のジョスライ。

この六人の異世界人と行動を共にする事になった浩介は、異世界人でも地球人と何も変わりはないんだな、と周囲を見て苦笑する。

髪の色や眼の色などは特徴があるが、顔立ちや仕草などに違和感などはない。

それに、傷を一瞬で治すような特殊な機械はないのか？ と聞いたらナーシエは、そんなのあったら苦労しない、と言いつ返した。確かに文明は差があるようだが、生活習慣というものはそんな大差ないのだろう、と勝手に納得していた。

出てきた飲み物もお茶である。話している言語も日本語である。

それを考えたらそう思うのも無理はない。そして一度考えたらその答えが欲しいと思い始めていた。

「はい！ これでよしっ」と

ナーシエは一通りの傷に薬を塗り包帯を巻き終えると、笑顔で浩介の肩を叩いた。

その痛みでつい声が漏れるがナーシエはわざとやっているのだから咎めることはしない。

「……悪いな」

軽くお礼をいい、用意してくれた服を手を取った。

それは白のワイシャツと黒のジャケットだ。ナーシェ達も変な服装をしているわけではないので心配はしてなかったが、実際無難な服が出てきたことに安堵する。

「あんたらのこと俺達のところでは生活環境は近いものがあるのか？」

シャツに袖を通しながら、先程考えていたことを聞いてみる。

「え？ そうだねえ……食べ物、飲み物、衣類なんかは近いものがあるよ。若干の違いはあるけどね」

唐突に聞かれた質問にナーシェは少し考えながら答える。

「言葉は？ 何故日本語が通じる？」

「それは技術の問題よ。コンピューターによつてその星、その国の言語を解析し、それを人間の脳に記憶させる為の特殊な液体、通称ゼルネーションと呼ばれるものに配合させ、それを飲むことによつて――」

「ちょ、ちょっと待ってくれ口ゼ。話がややこし過ぎる。簡潔に言ってくれ」

得意気に説明していた口ゼは途中で遮られたことで不機嫌な顔に変わり、それはいつものことのようにでメンバーはからかうように笑っている。

「つまりはとある液体を飲んだからあなたは完全に言葉を理解することが出来るのよ。まあ私達も飲んでるから、この国の人間となら話せるけどね」

ふてくされた口ゼに変わり、ナーシエが簡単に説明する。

「液体？ あのお茶か？」

「違うよ。これのこと」

そう言つてナーシエは近くの棚からドロドロした液体が入った小瓶を見せる。色は何とも言えない黄土色だった。

「こんなもん、いつ飲んだ？」

「あなたを助けた時に飲ませたの。これには自然治癒力を高める効果もあるから。あとそれには私達の言語の解析成分も入っていたから、これでいつでも私達の星へ来れるね」

「……そりゃ有り難いことで」

無邪気な笑顔で言つたナーシエに浩介は気持ちのこもっていない口調で相槌を打つ。

勿論興味が無い訳じゃない。だがそれを考える前に自分達の問題を解決しなければならぬ。その為今は深くは考えられなかった。

「まあ武器に関しては色々見たから納得だが、興味あるのはこの銃だな」

浩介は武器を選んだ際にひとつは銃を取った。

この星の銃とは違い全体的に一回り大きい。そして一番の違いは

鉛玉ではなく特殊なエネルギーを発射するレーザー銃のようなものであった。その容量も決まっていて、エネルギーが無くなれば替えのカートリッジと交換しなければならないところは拳銃と同じである。

そしてもう一つは刀身が真っ黒な片手剣。

ガイザーから手に入れた剣でも良かったのだが、それよりも細くて短い為、扱い易いというのが理由だった。そして日本刀とどこか被るところがあり、何より刀身が黒という点に惹かれたのも事実である。

「それで、魔法とかあるのか？」
「あるよ」

軽く聞いてみたのだが、ナーシエの返答は早かった。

「今使えるのか？」
「使えるけど、よくわからないと思う」
「何故だ？」
「私が説明しようか？」

ロゼが是非とも、といった具合で割り込んでくるが、これについてもややこしそうだと懸念し目線をナーシエに戻した。

「ナーシエ。手短に頼む」

再び不機嫌になるロゼに苦笑しながらナーシエは頷く。

「まず重要なところは、この惑星には魔法を使える為の要素がない。私達の惑星でなら火とか風とか出せるんだけど、その要素がなければ

「ただ魔力を放出するか纏つかしか出来ない。消費魔力も多いし。だから実際にやってみてもいいけど想像と違うものになると思う。どうする？」

「いや、もういい。成る程……ただの魔力か……」

ヤツらの異能な攻撃の正体がわかった浩介は内心で微笑む。

「それは俺にも使えるのか？」

それを使えたら今後かなり楽になる筈である。

「多分無理ね。この星の人間がそれを使えたらとつくの昔から使えてるよ」

「……そりゃそうだな。じゃあそれを防ぐ手立ては？」

「わたし達なら相殺出来るけどコウちゃんは避けて」

つまりは正当な防御手段が浩介には無いということだ。

一度グランの攻撃を腕で防いでいるものの、何度も防げる方法ではない。

——躲すしかないか……

そう答えを出した浩介は再びナーシエに顔を向ける。

「最後の質問だ。自分の思い通りの場所に急に現れたりすることはそっちの技術では可能なのか？」

「……簡易転送装置。それを持っていれば可能ね」

「簡易転送装置？ 俺をここまで運んだようなやつか？」

「それは本格的なやつだけど、仕組みは一緒ね。簡易転送装置は自

分の魔力を送ることによってその人の意志通りに転移出来る便利なものよ。ポケットに収まるぐらいの大きさだから持ち運びも出来る。けどわたし達の星でも犯罪に使われることが多かったこともあって随分前から製造中止になってるけど」

「そういったものがあるんだな。わかった。ありがとう」

これでヤツらの特殊な戦闘スタイルはかなり認識できた。あとは自分がどこまで対応出来るか、と浩介は先を見据えた。

太陽が沈み月が顔を出したその日の夜。

浩介は与えられた部屋で煙草をふかし、物思いに耽っていた。

まだ一日しか経ってないが異界の仲間も出来た。戦力的なものではかなりの期待が出来るし、もう少し経てばそれなりに絆も深めることが出来ると思っている。

それなのになぜか気分は冴えない。まるで自分が鬱になったような感覚である。

仲間の事が原因なのか？

それもあるだろう。今どうしてるのかというのも気になるし、自分の中でも完全に割り切れるものではない。

——綾華、泣いてなければいいが……

そう思いながら浩介は苦笑する。

どうやらそれだけではない。仲間のことは心底心配だが、それまでここまで鬱になることは無い。彼らも自分で考え、行動する力を持っている。

そして浩介は煙混じりの溜め息を出した。そして心の中で覚悟はしていたんだが、と呟いた。

そして覚悟していたからこの程度なんだろう、と訂正する。

そんな思考を繰り返していた時、ノックの音で意識を扉に向ける。

「コウちゃん、入るよ」

そしてノックの後に、ナーシェの声が耳に入る。

「ああ、どうぞ」

浩介の言葉でナーシェが部屋に入る。その手には温かいお茶が持たれていた。

「良かったらお茶どうぞ……って、何か考え事？」

ベッドに座り、煙草を吸っているこの構図を何故考え事だと決め付けたのかはわからないが、それは当たっていたので苦笑いになる。

「まあな」

それだけ返すと、浩介はコップを受け取り一口飲む。

「隣いい？」

浩介が頷くと、ナーシエは浩介の隣のスペースへ腰掛ける。

「わたしでよければ話を聞くよ」

浩介に目線を合わせることなく、足をぶらぶらさせながらそっと口に出す。

「そんな大層なことじゃない。ただ、戻れないところまできたなと思っただけさ」

「戻りたいの？」

「そういうわけでもない。後悔はしてない、寧ろしないタイプだから俺は。だが俺はこの手で人を殺した。それは事実で、割り切ってるつもりでもいる。それを背負って生きていけばいいだけの話なんだ。つまりは解決済みだな」

浩介は軽く笑うが、ナーシエは真剣な顔を向けていた。

「……でもつらそうだよ。ひとりでも抱えこまないでね。いつか爆発しちゃうよ」

「……なんか誰かにも言われたような気がするな。俺は大丈夫だ。何とかするさ」

そう言って立ち上がり大きく伸びをする。

「ナーシエもそろそろ寝たほうが——」

振り返った瞬間、ナーシエは浩介の胸に抱き付いた。思わぬことで浩介も驚く。

「……………ナーシエ？」

「そういうところが心配なんだよね。出逢って一日しか経ってないけど、コウちゃんのことよく知らないけど、何か心配になる」

「……………多分、そういう性格なんだよ、俺は」

そういつて優しくナーシエの頭を撫でる。

「心配するな、とは流石に俺の口から言えたことじゃない。でも心配し過ぎるな。俺の精神はそんなに脆くない。それは自分がよく知ってる」

浩介は微笑みながらナーシエと顔を合わせる。

「まあ見てろ。俺がこの星の運命と自分の運命を変えてみせる。その時はナーシエを笑顔で見送ってやるよ」

「……………うん。じゃあ約束」

ナーシエは小指を立て、浩介も小指をしっかりと絡めた。

「ああ、約束だ」

そしてゆっくり小指を外した。

ナーシエは浩介から離れ扉へ向かう。そして満面の笑みで振り返る。

「もしかして、一緒に寝たい？」

「……………バカ言ってるんで早く寝ろ」

「ふふ……………おやすみ、コウちゃん」

「ああ。おやすみ、ナーシエ」

ナーシエの姿が見えなくなると、浩介はベッドに背中から飛び込んだ。

「……あそこまで心配されるとは。俺もまだまだな」

弱みは見せない、見せたくないというのが浩介の本音である。どんな悩みやつらい事があっても他人にはその顔を見せないように今まで生きてきた。

だが知り合って間もないナーシエにそれをいとも簡単に見抜かれたのだ。顔に出ていたのかと疑問に思うがそれは定かではない。

「ナーシエだからかな……」

人懐っこいナーシエだから気付かれた。浩介はそちらのほうで正しい気がして笑みを浮かべる。

「さて、明日からの計画でも練ろうか」

なにはともあれスッキリした気持ちになれたことは事実である。今度ナーシエに何かお礼でもするかと感謝の想いを抱きながら、眠気がくるまでひとり状況を整理するのだった。

積み重なる策略 1

——痛い……何だこれは？ 身体が焼けているようだ

「あ、あああ……ぐっ……つうう……」

全身を駆け巡る痛みが浩介の脳を活性化させる。

徐々に意識が現実へと呼び戻され、その痛みはより激しくなる。

「クッ……な、んだ……これは……」

完全に意識を覚醒させ、目を開けた浩介は掛け布団を叩き落としベッドの上で達磨のように丸まった。

体の外見的に違和感はない。血も出ているわけじゃない。ならばこの痛みはなんだ、と堪えながら思う。

その痛みは身体の内部、腹痛のような感覚が全身から伝わってくる。しかも腹痛で味わえる痛みではない。それこそナイフなどで内蔵をえぐり出されているような痛みだ。

昨日このフィーガルに運び込まれ目を覚ました時とは比較する必要がないほど辛いものがある。

浩介は大量に出てくる汗を拭う余裕もなく、ベッドに置いていた腕時計へ目を向ける。

「……六時……か……」

昨日の夜はちゃんと寝た記憶があるため今は明朝の時間だと理解する。丸一日近く寝ていて夜だという可能性もあるがそれならばナ―シェ達が起こしにくるだろうし、今までそこまでの長時間目を覚ますことなく眠り続けた記憶などもない。

――どうするべきか？

ナ―シェ達を起こしに行くのは今の状態では無理がある。原因を探ろうともその方法も無ければ、それほど思考能力を持続できる痛みでもない。

今の浩介に出来ることはその痛みにひたすら堪えるだけであつた。

そして三十分堪え続けていた時、ゆつくりとその痛みは緩和していった。

ベッドで丸まっていた浩介もゆつくりと体を起こし腰掛けた。

「はあ……はあ……なんだった……？」

額から流れる汗を拭い、浩介はべつとりと濡れたシャツを脱ぐ。身体にまかれた包帯も汗で濡れていたので包帯も取り外した。

そこで初めて体の異変を感じた。

「傷が……塞がってる……」

痛々しい跡はあり完全ではないが、学園で傷が開く前の状態までは左腕の傷も回復している。左腕だけでなく、肩や腹部に受けた拳銃での傷も同じ程度に回復していた。

「……薬のおかげか？ ナーシエに聞いてみるか……」

浩介としては嬉しい誤算である。若干の痛みはまだあるがそれも許容範囲だ。

昨日の夜に自分が動けない事を考慮しながらすべきことを考えていたが、それも早めに実行できるだろうと笑みを浮かべた。

そして扉がノックされる。

「コウちゃん、起きてる？ 入るよー」

浩介の返答ないままウィーンとスライド式の扉が開き、ナーシエが姿を見せる。

そのナーシエは上半身裸でベッドに腰掛ける浩介を見て一瞬驚きはするものの、その場からみても尋常じゃない汗をかいていることに気付き足早に近付いた。

「ちよっ……大丈夫！？ どうした……の……」

近付いたナーシエも浩介の傷が塞がっていることに気付いた。

「——なんで!?!」

「その様子じゃ、どうやら普通じゃないらしいな」

薬を塗ればこれが普通、という考えは無くなった。

驚きの顔を向けるナーシエにそう言って微笑む。

「三十分前……いや、もつと前からだろうな。強烈な痛みが俺を襲い治まったあとと見てみたらこうなっていた」

「なんで！？あの薬塗つても早くて一週間はかかるのに」

「ナーシェがわからないのに俺が分かるわけないだろう。長くなりそうだが、ロゼに聞いてみるか……」

そう言つて浩介は立ち上がり軽くストレッチをする。

「若干痛むが特に問題はない。てなわけで俺も行動に移るとするか」

その後、呆然とするナーシェを我に返らせ、シャワー室のような場所で汗を流してから新しいシャツに着替えた。

そしてコントロールルームで朝食をとりながら、先程の疑問をロゼに尋ねた。

ロゼは食べるのを止め、真剣な表情でありとあらゆる可能性を独り言のように呟きだした。

その結果の返答は「わからない」だった。

主な原因はやはり塗り薬と飲み薬という結果だったが、ナーシェの言つた通り普通では有り得ない早さだと全員が口を揃える。

浩介の体内の構成、DNA、もしくは誰しも持っている魔力などを詳しく精密検査をすれば原因はわかるかもしれないと口に出すが、それはこの地球ではなくナーシェ達の星でないと行えないとのことだったので、今は結果オーライということで後回しになった。

朝食を食べ終えた七人は今後の行動を話し合う為、コントロールルームのテーブルを囲むように各々ソファや椅子に腰掛けた。

その中でロゼはこの地球で使っているテレビやラジオの電波をキヤッチし解析すれば今の現状を知ることが出来るかも、ということなのでいつもの場所で一人違う仕事をしていた。

「それで？　俺たちは何をすればいいんだ？」

まず口火を切ったのは兄貴的な存在であるジョスライだった。その顔にはやる気が溢れ、今すぐにでもバラリアの連中を叩き潰してやるという闘争心さえ見える。

浩介は苦笑し、用意されたお茶を啜り、テーブルに置いた。

「今すぐどうこう動くつもりはない。今は情報だけを集める」

「それじゃあ僕達はまだ待機、ということですか？」

カイが割って入る。ロゼが情報を集めているのだから今の所自分達にすべきことはないのかと落胆する。

「そうじゃない。前にも言ったが今の状況で迂闊に動けばヤツらに気付かれる恐れがある。そしてロゼが調べてくれているのはこの地球ではテレビといわれる表向きの情報だ。本当の情報は実際ここには手に入らない」

「なら直接街へくり出すんだね？」

「そついうことだ」

若干楽しそうに言葉を発するナーシエ。それは自分の知らない街を体験出来るという楽しみからだ。

それを見た浩介は首を捻る。

「ナーシエは街に出たんじゃないのか？」

「え？ 出てないよ。なんで？」

「いや、ならなんで俺を助けたんだ？」

浩介は街を散策している過程で偶然助けてくれたものだと思っていたのだ。

「そういえばそのあたり詳しく話してなかったね。いい機会だから話しくね」

「頼む」

「まず、私達が地球の圏内にまで来たとき、とある場所から魔力を感知した。それがあなたの倒れていた近くの建物ね」

「倉谷ノルベル研究所か。あの赤髪のヤツの魔力だな」

浩介は一人納得する。

「私達は今居る場所、近くの森の中なんだけど、ここにフィーガルを停泊させ監視システムを使いあの建物の中を傍受した」
「見てたのか？」

ナーシエは首を横に振る。

「確かに映像も映るけど、建物内までは映せない。音声だけだよ」

「それである程度状況を把握したのか……」

「そう。あなたの名前を知ったのもその時。それで建物から出てくるあなたを映像で見て助けたってわけ」

敵は浩介一人だったあの状況なら名前と姿を一致させるのは簡単だった。

ナーシエは満面の笑みを浮かべていた。

「ならそれを使っているんな場所の映像を出せばいいんじゃないか？　そうすればもつと情報が集まる」

「それは出来ないわよ」

「なぜ？」

言葉のみを発したロゼは、依然カタカタと何かを入力している。そして浩介もロゼの後ろ姿へと視線を移す。

「監視システムも範囲がある。そしてそれはそんなに広くない。映像を映すならその付近にフィーガルを移動させなければいけない。音声も一緒ね」

「……成る程」

「それからこれは違う話になるけど、昨日とある場所で魔力をキヤツチしてるわ。昨日あまり触ってないから気付かなかったわ」

「どこで！？」

すぐナーシエが声を上げた。

「地図で出します」

前方の硝子一面がモニターになり、全員が立ち上がり表示されるところある場所の地図を見る。

恐らくナーシエ達が見ても全く分からない場所であるが、浩介はその場所を知っていた。

「もうちょっと拡大できるか？」

「はい」

ロゼが倍率をあげると、より細かな地図がモニターに映る。

そして魔力を感知した場所を示す赤い点滅は、浩介が思った場所とぴったりに一致する。

「間違いない……あの喫茶店だ。だがなぜ——俺を捜しているのか！」

そこで魔力が感知されたとなると間違いなくヤツらがその場所を使ったことになる。

浩介を捜している中で喫茶店の情報を掴み、マスターか仲間かは分からないが一悶着あったということになる。

「悪いがこれは俺が行く。近くまで転送してくれないか？」

そう考えればいてもたってもいられなかった。

浩介は素早くジャケットを羽織り、銃を腰元へ差し込み、黒剣を布でくるみながらナーシェに言った。

その浩介を見たナーシェも頷く。

「悪いけど、それはやめておいたほうがいいかもね」

しかしその行動をロゼが止めた。

振り向いた浩介を確認したロゼは、キーボードの役割をしている手元の画面をポンと押した。

地図を映していたモニターには原稿を読む女性が映し出される。それはまさに何日振りかに見るテレビの光景であった。

『——で起きた虐殺事件の容疑者、高崎浩介の行方はまだ掴めておらず、警察も必死の捜査を続けています。未成年ながら指名手配されている彼もまたかなりの傷を負っているものと見ており、警察では何者かの協力が——』

「そうきたか……」

浩介は思わず舌打ちをする。何かしらの処置は行われると予想していた浩介でも、ここまでされれば流石に姿を晒すわけにはいかない。それこそ迂闊な行動となるからだ。

浩介は暫く考え、ソファーに腰掛け煙草をくわえた。

「ジョー、俺の代わりに行ってもらっていいか？」

そこで一つの判断をした。

ジョーというのはジョスライのあだ名であり、言にくいからという理由で浩介が勝手に付けたものだ。

「俺でいいのか？」

「それに関してはジョーが一番上手そうだからな」

「ごもつともだ。それじゃあ行ってくる」

ジョスライは笑いながらそう返した。

「何か連絡手段はあるか？」

「そりゃ大丈夫だ。この通信機を持ってるからな」

そう言ってポケットから五センチ四方の小型の機械を見せる。

「音声だけだが、フィーガルを通じて居場所も分かるし、そっちからも常時通信出来る。この世界では馴染み無い物になるから人前ではあまり喋れないがな」

「わかった。状況だけ掴んでくれればそれでいいからな」

「了解。ロゼ、頼む」

ロゼは頷くと、喫茶店の近くで人のいない場所を検索し転送を開始した。

コントロールルームの中央に移動したジョスライは淡い光に包まれ、光が強くなったと思った瞬間その姿を消した。

「実際見ると、凄いな」

初めて転送を見た浩介はそれだけ眩き、モニターに顔を移した。

約一時間でジョスライの仕事は終わった。

結果として得るものは僅かであり、殆ど無駄足といえるものであった。

警察が警備していたため中までは入れなかったが、外から見るだけでも内部は荒れ果て、喫茶店として見る影もなかった。

ジョスライとしてもかなり壮絶な戦いがあったのだらうと口に出

したが、浩介の中でその過程はどうでも良かった。

——死者一名

それが浩介を悩ませる問題である。

ジョスライも野次馬から得た情報だけに実際に見たわけではない。

バラリアの一人ならいいのだが、實力からして考え難い。ということは喫茶店に集まっていた仲間の一人か、マスターという可能性が高かった。

仲間が集まっていたことも定かではないし、何より死者が一人と
いう点で仲間の可能性も低いと思われる。

そう考えればマスターではないか、という思考にたどり着いた浩
介の不安は奇しくも当たりを引いたのだった。

「ロゼはそのままニュースに気を配つといってくれ。もしかしたらそ
の情報が流れるかもしれない」

「……わかったわ」

浩介はドサツとソファーに座り煙草に火を付けた。

ヤツらがそこまでして一つの喫茶店に行ったのは自分を捜してい
たのではないか、と推測していた。もしくは仲間を捜していたとも
考えられるが、脅威に思われているのは仲間ではなく自分だろうと
自覚しているからだ。

何も知らない一般人がいる研究所を襲う決意をしたのも、必ず警

察がやってくると確信があったからである。

研究所の秘密が暴露されればヤツらであろうと焦り、何かしらの行動を取る。その隙を狙えば勝機はある。——そう思っていた。

だが現実はその予想通りにいかないものだ。

大きな予想外を体感した浩介は心からそう思った。そしてその行動が今となっては悪い結果を生み出している。

「くそっ！」

その憤りを浩介はソファアの肘掛けを叩くことで露わにした。

「どうするんだ？ 今すぐ復讐しに行くか？ お前の作戦と矛盾するが、行くなら行くぜ」

その浩介の憤りを真摯に受け止め、お前のやりたいようにやれとジヨスライは意志を見せる。

浩介はその言葉に苦笑する。

「それで終わらせられるならそうするさ。だがそれは無理だ。ヤツらを消すのは今じゃない。いずれ完膚無きまでに叩き潰してやるさ」

その眼は殺意に満ちていた。初めて見る浩介のその感情に全員が寒気を感じた。

「……………じゃあ、どうするの？」

その重苦しい雰囲気の中、ナーシェが浩介に聞いた。
浩介も目を瞑り策を練る。

いきなりヤツらを正面から追い詰めようとしても勝てる保証はどこにもない。むしろあちらは長い期間をかけて纏めた味方がいる。勝てる保証どころか何も出来ずに終わる可能性すらあるのだ。

ならばその味方から潰していったほうが勝算はできる。しかしそれに時間を費やせばその間に計画を実行される恐れもある。

ではその要因となる殺戮兵器を潰してしまえばいいのではないかと考えるが、その場所もわからなければ、それだけで地球が安全というわけでもない。それは一つの理想的な戦略であり、浩介の予想通り最悪な結果はヤツらの戦艦での攻撃、またはバリアの援軍を呼ばれることである。

そこで浩介は深く考える。

——戦艦で攻撃？ 報告されて援軍？ その心配はどこから来てる？

それは正に奴らが異世界人というところからである。

確かに力は持っているが、浩介としてはそれを一番懸念しているわけではない。

——それを潰せば最大の心配は無くなる。あとはそのタイミングか……

浩介はそこで顔を上げ、ナーシェを見る。

「ナーシエ。このフィーガルに攻撃手段はあるよな？」

「え？ 勿論搭載されてるよ」

「通信機はどこまで通じる？」

「この星の圏内なら通じるよ」

「バラリアの戦艦がどこに停泊してるかわかるか？」

「……時間はかかるけど、探索システムを使えばわかるかもしれない。どう？ ロゼ」

「やってみる価値はあると思いますが、彼らも探索システムを使っていればバレる可能性もあります」

「そこはバレないようにやってほしい。いくら時間が掛かってもいいから細心の注意を払ってくれ。ロゼなら出来るだろ？」

「……当然です」

試されるような言い方にロゼは笑みをつくりながら返した。浩介も笑顔で頷くと、セリアに顔を向ける。

「他のメンバーは何となく予測できる。セリア、お前がここにいる理由は何だ？ 何が出来る？」

このメンバーと顔を合わせて思ったこと。それはセリアの存在意義である。

ただ行きたかったから連れてきたとは到底考えられない。この地球には魔法を成す要素が無いと知っているのだから魔法に長けているということもない。この体で接近戦が得意だとも考え難い。

だからこそ浩介がそう思うのも無理はないのだ。

「コウちゃん……！」

しかしそれは聞いてはいけない質問だったのか、珍しくナーシエ

が大きな声を上げた。

「いくらコウちゃんでも、それは——」
「いいの」

浩介を責めようとしたナーシエをセリア自身が止める。

「セリア……」

ナーシエの眩きを無視するようにセリアは浩介の前に立つ。

そして浩介の腰付近に手を出し目を瞑る。そしてその手のひらの上に“とある物”が現れた。

「これは……？」

浩介はその“とある物”を掴むとまじまじと観察する。

「俺の吸ってる煙草だ」

それは紛れもなく浩介の煙草だった。きちんと封もされパッケージも何一つ間違いはない。

その封をあけ、中を確認してもきちんと二十本収まっている。
試しに一本取り出し火をつける。

「間違いないな。いつもの煙草だ。どういうことだ？」

煙を吐き出しながらセリアに問う。

「それがわたしの能力。創造の具現」

「能力？ 魔法とは違うのか？」

その言葉にセリアは少し俯く。

「わたしには魔力なんて関係ない。創造するだけでその物を具現化できる」

小さい声でいうセリアをナーシェが抱き締める。

「……セリアの能力は魔法を遥かに超える力がある。勿論使えるのはセリアだけ」

ナーシェの反応からして何かあると思っていたが、こればかりは想像以上であった。そしてセリアだけしか使えないとすれば、その過去も想定できる。

「どんな経緯いきまつで今がある？」

それを聞かなければ今後に支障が出ると思った浩介は、戸惑うことなく尋ねた。

「わたしは生まれてからすでにその能力を持ってた。それがわかった時にはみんなに悪魔だと言われた。親にも突き放された。何度も人体実験をさせられそうになった。その度能力で抵抗した。おかげでわたしはひとりぼっちになった」

「そんなセリアを私が引き取ったんだよ。あまりにも可哀想で、ほっとけなかった。それがセリアがここにいる理由、かな」

そしてセリアがナーシェから顔を離す。

「こーすけもわたしを悪魔だと思う？」

目に涙を溜め、拒絶される恐さを抱えながらセリアは浩介を見上げた。

浩介は微笑みながらセリアの頭を優しく撫でる。

「俺にはセリアの過去も能力も関係ない。今のセリアしか知らないからな。俺の中にいるセリアは今ここにいるセリアだ。心配することなんて何もないだろ」

「でもわたしは有り得ない力を持つてる！」

「だからどうした？ 有り得ようが有り得まいがセリアは俺の仲間だ。ならその有り得ない力でさえ俺が難なく使わせてやる。その力を俺が認めてやるよ。存分に使えばいいさ。あとは俺が何とかする」

本心で言っ たつもりだったが、その言葉でセリアも他の仲間もポカンとする。

そしていち早くセリアが微笑んだ。

「周りの人からはなるべく使っ なって言われたけど、使えっ て言っ た人はこーすけが初めて……」

「そうか」

「うん。……使っ ていいの？ 何も心配せず使っ ていいの？ もしかしたら、この力で仲間を殺しちゃうかもしれないの？」

「言っ ただろ。俺が何とかするっ て。そんなことはさせない。俺が制御させる」

本当にそう なっ ては困るが、実際そう いった展開も頭に入れとか

なければいけないなと思いながらセリアの前で屈み頭を撫でる。

「……ありがとう」

涙を浮かべた笑顔でセリアは浩介に抱き付いた。そのセリアを抱き上げ、浩介は皆の方に顔を向ける。

「これで大体の戦力は分かった。後は情報集めと下準備だ。その過程で戦闘もあるかもしれないからそのつもりで動いてくれ」

そして浩介はニヤリと笑う。

「始めようか。逆襲の展開を」

積み重なる策略2

緒方祥三^{マスター}の死は報道よりいち早く依頼屋組織に伝わっていた。それは緒方亮二の指示によって送られた三人の戦闘員からの情報からであった。

そしてそれは依頼屋組織を騒然とさせ、さらなる決意を高めさせた。

それ程、緒方祥三が依頼屋として貢献し続け、誰もが認める人物として認識されていたのである。

「もう私たちに猶予はない。こちらから攻めに出る時が来た。皆もそのつもりでいてくれ」

依頼屋本部のビルの一室。大きな会議室に集まった大勢の前で緒方亮二はそう言い放った。

その顔に笑顔は無く、時には憎悪の感情も見取れる。それが伝わっているのか百名を優に越す面々に動揺や困惑する者は少なく、今は緒方亮二の話を聞き入っている。

異世界人との全面戦争、という結論は前々から計画されていたものではあるが、それを決断させたのはやはり弟、緒方祥三の死を知らされた兄、緒方亮二の個人的感情も入っている。その個人的感情で踏み切ったとしても、祥三の功績と依頼屋がつくられた意味を知っている仲間からは特に不満の声はあがらない。

ついにこの日が来た——という心境で二代目社長、緒方亮二の言葉を待つばかりであった。

「我々に残された道はひとつしかない。異世界人の抹殺だ。そして今の腐った政府を潰し、新たな日本を築き上げる。その為には死闘は免れないだろう。だから今一度考えて欲しい。命をかけて依頼屋組織に残るかどうかを」

そこで緒方は間を空けた。

戦うのは飽くまで実行部隊であり、その実行部隊は今各地にある支部の援護に繰り出されている為、この場に残っている実行部隊は少ない。だが、本部が襲われた場合実行部隊でなくとも危険が纏うのだ。

戦いたくない者、家庭がある者、そんな者達を考慮したからこそこの問いであつた。

出来れば全員に残ってほしいと願うものの、それは現実的に叶わないだろうとわかっている。誰しも自分の命が大事であり、守るべき者がいれば尚更である。

実際のところ、証拠を隠滅させる処理班や受付や経理、電話対応を任される事務班は、今回しなければならぬ仕事もないので解散に近い。戦える力がない中、命の危険があると知れば大半が逃げるだろう。

それでも残ってくれるなら、と緒方は期待を持っていた。

戦えはしなくても、実行部のサポート、つまりは情報の把握や敵の動きの報告を担ってくれるだけでもかなり助かるのだ。

だが、そんな直ぐには判断出来ない組織のメンバーは近場の人と

言葉を交わし始め、会議室は徐々にガヤガヤと沸き立つ。
そんな騒然とする空気を緒方が止める。

「皆静かに！ 何も今すぐ答えをだして欲しいわけじゃない。決行は明日以降だ。もし残ってくれるなら明日、この時間、この場所に集まってくれ。強制はしない。出て行く者も間違いないだろう。内密な事が多い依頼屋組織は皆としても辛かったと思う。そんな中、今まで着いてきてくれたことを感謝している」

緒方は深々と頭を下げ、その気持ちを伝えた。

「では、解散してくれ」

そして頭を上げた緒方は穏やかな表情でそう告げた。

「吉と出るか、凶と出るか、勝負時だな」

その場を去っていく組織の人達を見つめながら小さく呟く。隣に座る秘書、中村ひかりにも伝わったらしく、彼女も小さく呟いた。

「……そうですね」

そして真剣な目を前方に向ける緒方に軽く微笑んだ。

セリアの持つ能力、“創造の具現”はある程度の形、性質、構造、機能など、セリアが認知しているものしか具現出来ない。つまりはノートパソコンを出してくれ、と頼んでもそれを見たこともなければ構造、機能なども知らない為、想像も出来ないセリアがそれを具現することは不可能なのだ。こういうものだ、と口で説明すればセリアが“そのように想像した物”は出せるが、恐らくあちこちで欠陥が見つかるだろう。

浩介の煙草を正確に具現出来たのは、実際に見て触り、浩介が吸っていた姿を眺めていたその過程で、ある程度の機能、性質などは掴んでいたからである。ニコチンやタールなど、全てを知らなくても難しい構造でない限りそれに見合ったものが自動修正される。セリアの育った星でも多少は違い煙草と同じものが流通していた為に出来た自動修正でもあるのだ。

つまり地球より最先端の技術を持っている星で生まれたセリアに、この地球での技術で生まれたノートパソコン、主に電化製品などの物は全く違うものが使われ、違う構造になっているので自動修正はかからないのである。

それにセリアが想像出来るものであっても、セリアが具現できる限界もある。例えば巨大な炎は出せても太陽は出せない、といったように人知を超えるものはセリアの能力をもつてしても不可能であった。

それを知った浩介は、戦闘になった場合セリアの可能な行動をフイーガルの中で出来るものは実演してもらい、出来ないものは詳しく話を聞いた。

それはセリアだけでなく、全員の力を把握したかった浩介は雑談を交えながら確かめ、その和気あいあいとした雰囲気のお陰で交流を深めながらも異界の者の实力を知ることが出来たのである。

その中で確証出来たのは如何に異界の者といえど、メインとなる戦力は武器と己の肉体のみだった。

身体能力はやはり高い。だがそれも一般の人と比べた場合だ。その動きは浩介の推測していた枠を超えることはなく、自分と比べても大差ないと思えていた。そして戦力となる方法でいえば彼らの星でも武器と魔法の割合は五分五分であり、こちらは思ったより武器の割合が高いと考え直す。

話を聞く限り、ナーシエ達の星でも戦闘になれば魔法を頻繁に使う戦い方はあまりしないとのことだ。

そしてこの地球には魔力を具現出来る要素が無いため、その方法はやはり武器に頼るしか他ならない。

身体能力はそこそこ。魔法は除外して残ったものは武器の性質。それもバリアのヤツらと大差ないだろう、と考えれば間違い無く勝てるという保証はどこにもなかった。

——ならば優劣をつけるのは互いの策略か……

どこまで相手の先を読めるかが鍵となる状況に、浩介は小さく溜め息を吐いた。

「どうかしたんですか？ 溜め息なんてついて……」

その行為を見たカイは首を傾げ浩介を見る。

少し前までは警戒していたカイも、今は自分から浩介に話し掛けるまでに心を開いてくれている。

こんなに懐かれやすい性格だったか？ と頭をよぎりながら浩介は苦笑する。

「いや、なんでもない。それよりヤツらが何人ぐらい地球に来ているか知ってるか？」

「そこまでの情報はないですが、フィーガル程の宇宙船と聞いているので多くても十人程度じゃないでしょうか？」

「十人、か……。まあ妥当な数だな」

浩介は納得したようにお茶を啜る。

「それで？ これからどうするの？」

セリアが出す創造の具現の能力で注文し続けて遊んでいたナーシエが口を開いた。その光景をチラッと横目で確認し、呆れたように笑みをつくる。

「さつきは格好いいこと言ったが、実は何もする事がない。ここで鍛錬しながら時が来るのを待つだけだ」

事実、ヤツらのいる場所も知らなければ、敵対関係だと予想している依頼屋の本部も知らない。魔力を感知するか、世の中の流れの変化があるまで動きたくても動けないのが現状である。

それでもナーシエは不服な顔に変わる。

「えー、勿体ないよお。……………ねえコウちゃん、デートしよう!」
「……………は?」

満面の笑みで言ってきたナーシエに、浩介はただその一言を返すのが精一杯だった。

「だから、デートしよう! もちろん街に出てだよ」

疑問の言葉を聞いたナーシエは場所を付け加え再び言い直した。

「いや、俺は顔が知られているからそれは面倒事を増やすだけだ。それにナーシエもその髪の色じゃ目立つだろ」

「帽子で隠せば問題ないよ! コウちゃんだって少し顔を隠せば大丈夫、バレないって!」

「そういう問題か?」

「ねえーいこーよー! 案内してよー!」

ついには肩を揺らしてくるナーシエに手のつけようがない浩介は助けを求めるべく、他の仲間に視線を送る。しかし皆は苦笑いを浮かべながら哀れな目で浩介を見ていた。その意味を今の浩介が知ることは出来なかった。

「わ、わかった。わかったからやめてくれ」

エスカレーターしていく揺さぶりを止める術は納得することだけであった。

「じゃあ、いこー!」

浩介の肩から手を離し、満面の笑みを浮かべる。そんなナーシエ

の様子に苦笑いで応える。

「そんなに長居はしないからな。軽く見て回るだけだぞ」
「わかってるよ」

その後、準備を終えた二人はナーシエの期待通り街へとくり出すのだった。

「バレないものだな……」

街を歩く二人に怪しげな視線を注ぐ者はいなかった。

ニット帽を被り、ネックウォーマーで鼻から下を隠す浩介と、同じく色違いのニット帽とネックウォーマーを着けるナーシエ。所謂ペアルックで颯爽と歩く二人は誰がどう見ても恋人同士という認識であった。

「寒いからこの格好でも違和感ないし、怪しい行動をとらない限りバレないと思うよ」

先程買ったクレープをかじりながらそう言ったナーシエに、浩介はテイクアウトしたコーヒーを一口飲み頷く。

十一月に入ってから例年を下回る寒さの気温に浩介は少なからず

感謝をする。周りを見ても同じ様な格好をしている人は多い。それも怪しまれない要因の一つでもあったのだ。

「まあしかし、そう考えれば指名手配犯を捕まえるのも難しいことだな」

浩介はあくまで他人事のように苦笑する。

「何らかのきっかけがないと気付けないもんねえ」

「そのきっかけを作るのがこういった行動なんだがな」

浩介は苦笑いを含めそう言った。とはいえナーシエに対しての嫌みなどではなく、確率を含めた結果的な事象、という意味で言ったのだ。それを浩介の表情で感じ取ったナーシエは申し訳なさそうに笑みをつくる。

「ごめんね。今を逃せばこの機会はもう無いと思ったから」

「いいさ。何か話があったんだろ？ まあ、予想はつくが……」

ナーシエがデートという口実をつくってまで必要以上に誘ってきたのには理由があると思っていた。“全てを終わらせる”ことが出来ればそれからいくらかでもこの機会はつくれるのだが、先程のナーシエの言葉から推測するにそれは絶対の確証があるわけではない。勿論それは浩介も思っていることで、この先の出来事など良くも悪くも確証付けることなど出来ないと分かっている。

ナーシエは複雑な表情に変わり、暫く間を空けてから口を開いた。

「そうだよな。コウちゃんも知っているよね。いくらわたし達が来たからって、絶対この星が平和になるという保証はないってこと。」

それにわたし達もそうだけど、最悪この星の人も――」

「いつになく弱気な発言だな、ナーシエ。それを考えていつても答えはでないぞ」

あくまでいつも通りの冷静な口調でそう言いナーシエを見る。ナーシエは沈んだ気持ちを立て直せる筈もなく浩介の視線を受け止める。

「……でもそれが事実だよ」

「そうだ。それが事実だ。じゃあ何を迷う必要がある？ 誰も死なせず全てが終わる……そんな綺麗事では終わらない。必ず死人は出る。それが多いか少ないかは運命次第だ」

素っ気なく答える浩介に対し、ナーシエは少し寂しい心境に陥る。

「サバサバしてるね……」

「性分だな」

「“そういった事”に関してはわたし達のほうが慣れてる筈なのに、コウちゃんは平気なんだね。……わたしが死んでも、そうなのかな？」

勝てる確証がないということは、自分が死なないという確証もないということだ。浩介に協力すると言った以上それすら覚悟はしているが、その覚悟を決めたきっかけの相手が自分の死に対してなんの感情も抱かなければそれは悲しさしか残らない。

哀の表情を向けられた浩介はその気まずさから頬を掻く。

「変なことを言うな。俺だって悲しいものは悲しいさ。ナーシエだろうが他の仲間だろうが死なせたくはない。だからそうならないよ

うに策を考えてる。……だが、それは俺がどうにか出来る範囲内ではない。それ以外は助けたくても助けられないんだ。“そっち”の抗争だってそうだろう?”

浩介にはナーシエ達の星がどのような戦争をしているのかは知らないが、争い事の原理は一緒なのだ。人数の少ない争いなら別だが、それなりの勢力同士の争いであれば浩介の言い分は間違いではなく、実際起こり得る事象である。

「……………うん、そうだね」

それは身にしみて知っているナーシエも小さくそう口にする。

「だから常に覚悟しとかなければいけない。俺達は——いや、俺はもうその道を進むしかないから」

死ぬまでな、と付け加えた浩介は諦めに近い苦笑が漏れる。

例えどんなに苦しく、過酷な戦況になろうが浩介に逃げる道など一切残されていない。“俺達”を“俺”と言い直したのは、最悪ナーシエ達は自分の星へ帰還させるという道があるからだった。

協力すると言ってきたナーシエ達には感謝に尽きるが、それを強制することもしたくなければ、なにも一緒に心中する必要もない。最悪の結果になればナーシエ達は帰そうと心に決めていたのだ。

しかしその言葉でナーシエの寂しい気持ちに拍車が掛かる。その沈むようなナーシエを見た浩介は小さく溜め息を吐いた。

「悪い。この話はやめよう。せつかくのデートなんだから楽しく行こうナーシエ。もうなるようにしかならないんだから」

無理矢理明るく振る舞う浩介はナーシエの頭をポンポンと軽く叩く。それに感化されたナーシエも無理矢理笑顔をつくった。

「うん、そうだね！　じゃあ次は――」

「ちよつと君達、少しいいかな？」

ナーシエの言葉を遮り、後ろから呼び止められた二人は同時に後ろを振り返った。

自転車から降り、見慣れた服装を纏った二人の男性は足を止めた浩介達に素早く近付いていく。

帽子を被り、胸元には無線機が取り付けられ腰元には拳銃が収められている。一人の男は浩介の前で止まり、もう一人は一步後ろで無線機を手に持ち警戒している。

「言つたそばからこれかよ……」

思わず本音が漏れる。

目の前にいる二人の男、街を巡回する警察官に呼び止められた浩介は内心盛大な溜め息をついた。

「ちよつとお話聞いてもいいかな？」

指名手配されている浩介の情報は目の前にいる警官も当然のように知っていた。巡回中に似たような人物を見つけ、まだ確証は無いため“お話”という姿勢をとってくる警官に浩介はどうしたものかと頭を悩ませる。

「ちょっと急いでいるんですが……」
「そんなに時間は取らないから」

これで躲せるほど甘くはなかった。

「何の確認ですか？」
「今指名手配されてる人に感じが似ていたものだからちょっとお話をと思つてね。よければそのマフラーを取ってくれないかな？」

ここで顔を見せれば間違い無くバレる。浩介は最悪の展開を思い浮かべた。

「寒いんでちょっとでいいですか？」
「ああ、かまわないよ。あと身分証も見せて」
「身分証は持つてないんですけど」

「君、学生？」
「学生ですよ」
「学校は？」

「サボりました」
「感心しないな。ちゃんと行かないと」
「色々事情があります」

「その事情も含めて話してくれるかな？ あ、その前に顔見せて」

——うざったい……

逃がしてもらえそうにないと確信した浩介はナーシエに何もするなと目で制し、鼻まで隠していたネックウォーマーを下ろした。

その顔を見つめる警官は確信したかのように真剣な顔つきになり、

もう一人の警官も無線で何やらやり取りをし始める。

「君、高崎浩介君だよな？」

案の定バレたことに、浩介は不適に笑った。

「そうですよ」

「——っ!!」

その言葉で警官はすぐに動いた。浩介を押さえつけようとする警官の腕を、それより速い反応で掴みあげ後ろに捻る。それを見たもう一人の警官は無線から手を離し腰元の拳銃へと伸ばす。

ここで立場を逆転されるわけにはいかない浩介は掴んでいた警官をその警官へと投げ飛ばし、二人は愛用の自転車を巻き込み激しい音と共に倒れ込んだ。

「逃げるぞ！」

そう言うと同時に浩介は走り出し、遅れることなくナーシェも続く。

残されたのは必死の形相で無線機片手に連絡する者と慌てて自転車を起こそうとしている者。何が起こったのかいまいち理解出来ない街行く人々。

「……見つけた」

そして今はもう姿が見えなくなった浩介を名残惜しそうに見送り、そう呟いた少女だった。

積み重なる策略3

緊急の会議を終えたあと、柴田は医療施設を訪れていた。

普段の生活に支障はないといえ、異世界人から受けた傷をそのままに決戦を迎えるわけにはいかない。それに参加すると決めている柴田は緒方から聞いた情報の元、完璧な医療形態を誇る施設へ向かったのだ。

とてもビルの中にあるものだとは思えないほど広く綺麗な施設はエレベーターで少し下りたフロアにある。広いと言える理由が、その階のフロア全てが医療施設となっているからである。それを見ただけでも施設というより一軒の病院と言った方が近いのかもしれない。

どうやって集めたのか最新医療器具を取り揃え、幾多の病気や手術にも対応できる。その様はまるで近年建てられた大学病院にも負けていない。

勿論そこまで大きいわけではないが、ビルのその階全てのフロアでそこまでの設備が整い、利用するのは主に実行部隊の怪我人などだから贅沢な施設と言わざるおえない。

エレベーターから出た柴田を迎えたのは受付のある待合室だった。依頼屋組織だけの病院という仕様の為、待合室には誰も居なかった。その光景に少し啞然としながら柴田は受付へと足を進めた。

「柴田俊樹様ですね？ 社長から話は聞いています。直ぐに診察をしますので奥の診察室へどうぞ」

受付の女性は軽く笑みを浮かべながら柴田に目を向ける。

勿論の事、保険証など必要なければ、医療費も個人負担ではない。依頼屋がどれだけ儲けているのか想像もつかない柴田は苦笑しながらその言葉に従い奥へ進んだ。

診察室の扉を叩いたあと、どうぞという男性の声で扉を開けた。

机の前で回転式の椅子に座り何やら書類を作成していた男性はその手を止め、椅子ごとクルッと回り柴田に微笑んだ。

「初めまして。僕が医者いしかの一人、幸村です。どうぞ座って」

幸村は変哲もない丸椅子に促し、そこに座った柴田は改めて幸村に視線を向ける。

服装は黒のシャツとスラックスに白衣を羽織っている。年齢は三十代だろうが、髪は短く髭もきちんと剃って処理している。中年太りなどもなく体つきも引き締まっているような感じだ。

医者は清潔感が大事だと言われれば、正にそのお手本となるような男性である。

見た感じでは好印象。しかし正式な病院でない以上、医療の腕に関しては怪しいものがある。少し医療をかじっただけの医者だという考えもあれば、下手し医師免許すら持っていないという可能性だってある。

緒方が勧めるほど内部では信頼されているようだが、此处に来てまだ一日しか経っていない柴田ではそこまで信用することは出来ないのだ。

「えつと……柴田君。キミ、どこか骨に異常あるよね？」

書類を見ずに記憶から柴田の名前を掘り起こし、柴田の悪い部分を口に出した。それは極当たり前だと思うかもしれないが、柴田にとっては驚きを隠せない。

「……何故それを？」

この依頼屋本部に来てからまだ一日。誰にもどこを怪我しているかは伝えていない。緒方には怪我をしていることは伝えてあるが、どこを負傷しているかは教えていない。知っているのは杉田と綾華だけだが、その二人も言っていない筈である。

ならば何故幸村はそれを知っているのか、という疑問を柴田は感じていた。そして柴田があれこれ考える前に、幸村は微笑しながら口を開く。

「いや、キミの動作に若干の違和感があつてね。内臓の損傷ならもうちょっと違和感は強いし、それなりに痛みもある筈だからね。じやあ骨かな、と思ったただだよ」

受付の女性が緒方から聞いていると言っていたので、それは幸村の耳にも入っている。しかし、緒方に怪我の個所を言っていないのだから当然幸村の耳にも怪我人が行く、程度の内容しか伝わっていない筈である。普段の生活程度なら支障はないと思っていた柴田だが、それでも幸村の目に映ればどこに問題があるかは経験上見極められてしまっていた。そんな幸村の洞察力に対して、この人の腕は本物だと本能的に理解した。

そして、どうりで周りから信頼があるわけだ、と柴田は一人納得し、幸村に対して笑みをつくる。

「その通りです幸村さん。一度病院には行ってますが、肋骨が数本折れていると言われました。今はその治療もあつてか痛みとかはないですけど、流石に今回の戦いに参加出来る身体じゃないみたいです」

「そりゃそうだろう。普通なら絶対安静だ」

「……やっぱりそうですか」

すぐに良くなる怪我ではないことぐらい柴田も分かってはいる。だが、いつ何が起こるか分からないこの状況で一人戦力外というのはあまりにも情けない、と柴田は思っていた。緒方が宣戦を決断したばかりなのでそれは尚更強くなる。

その中で何か治療法があれば、と少なからず期待をしていた柴田は落ち込みを隠せない。

そんな柴田を見た幸村は一層笑みを強くする。

「柴田君。僕は“普通なら”と言ったんだ。全治一ヶ月は掛かるだろうその身体を、僕が三日で普通通り動ける身体にしてあげるよ」

その口調は自信に溢れ、不確定な言葉は使わず絶対の確信が詰まったものだ。った。

落胆していた柴田も思わず顔を上げる。

「本当ですか!？」

「冗談に聞こえたかい？　僕はこう見えて“そういった怪我”の治療には自信があるんだ」

その言葉に柴田は、ああそうか、と理解する。

幸村は依頼屋組織専属の医者だ。依頼屋の仕事のリスクを考えても、同じ状態の怪我人など幾多もいただろう。“そういった治療”も既に確立していれば、幸村の腕と経験だつて培われている。それだけの大口を叩ける腕は持っていると感じたのだ。

「でも、それはある意味強引に治すといっても過言ではないんだ。同じ個所を怪我した場合の痛みは計り知れない。下手すれば命の保証も出来ない。最終的に決めるのは君自身だが、僕は一ヶ月間ゆっくり治す方法をお勧めするよ」

「構いません。治療をお願いします」

躊躇無く答えを出す柴田に少し驚くも、“こういった事”も慣れているのかすぐに笑みを浮かべる。

「よしわかった。検査をしてから今日中にでも手術をしよう」

了承を得た柴田は幸村にお礼を言い、安堵したように微笑み返す。

「ところで、君がそこまで戦いたい……いや、言葉が悪いな。戦わなければならない理由は何なんだい？ 別に依頼屋組織の人間ってわけじゃないし、ヤツらに何か恨みがあるわけでもなさそうだけど……」

幸村は机に向かい、紙に検査項目と手術内容を書きながら柴田に聞いた。柴田は少し考えたあと口を開く。

「簡潔に言えば、それが正しい気がする、からでしょうか」

「正しい気がする……?」

ペンを走らせていた幸村はその手を止め、首を傾げて柴田を見る。

「はい。正しい気がするからです」

そんな幸村に少し困ったように苦笑いを浮かべ同じ答えを口にした。

「何に対して正しいの? いや、あんまり言いたくないなら別にいいんだけどね」

「僕の今後に対して……っていうのもありますし、仲間がいるからっていうのもあります。勿論世界の在り方に対してっていうのもあります。色んな意味で後悔しない道かなって思うからでしょうね。まあ、そんなところです」

「……そうか。なら、僕は君が後悔しない為の手助けとして頑張らせて貰うよ」

笑顔で言う幸村に柴田は信頼を込めて手を差し出す。

「宜しく願います」

その手を幸村が握り返す。

「任せといて」

柴田が医務室という名の病院へ向かったあと、綾華と杉田は緒方と一緒に社長室へと移動した。

秘書の中村が三人の前にお茶を置き、そのお茶を一口飲んでから緒方が溜め息を出す。

「ゆつくり出来る時間がなくて君達には申し訳ないな。柴田君の調子も万全ではないのに」

「構わないわよ。元々私達もゆつくりする為にここに來たわけじゃないし、柴田君もヤワじゃないし」

綾華の言葉に杉田も頷く。

「ああ。あいつも高崎並みにプライドが高いからな。怪我は治らなくても必ず参加するだろう。勿論、無茶はさせないがな」

杉田と綾華は大人しくさせとこうにも拒否をする柴田を想像して苦笑し合う。

それを見た緒方も立ち上がりながら苦笑し、机の引き出しから一枚の紙を取り出しソファーへと戻る。

「高崎浩介君か……。出来るものなら仲間として共に戦って欲しかったのだが」

緒方が見ている紙は、依頼屋の情報網を駆使して纏めた浩介の情報である。

その紙を机の上に置くと、すぐに二人が目を通す。

「すごいな……これだけの情報を集めるなんて……」

「……そうね」

杉田が驚いたのは全ての情報からだ、綾華は一部の情報からである。

紙に書かれている情報の三分の二は、一度綾華自身が調べ上げた内容に酷似したものである。浩介と初めて会話した時の事を懐かしく感じながらも、綾華では調べる事が出来なかった残り三分の一の情報に目を通していく。

それは浩介がフリーの依頼屋として請け負った内容である。

- ・暴力団三澤組の壊滅
- ・とある男性の浮気調査
- ・ホームレス狩りの犯人探し
- ・麻薬売買の代役受け取り
- ・悪徳企業の証拠調査
- ・誘拐された社長令嬢の奪還

それを見た綾華も杉田も思わず啞然とする。まだ記憶に新しい事件もあれば、ニュースにもならない探偵のような依頼も請け負っている。そしてその全てに依頼成功と書かれている。

「浩介、なんて依頼をこなしてるのよ……」

「それはほんの一部の筈だ。まだまだ彼が受けた依頼はある筈だが、調べていっても全て成功しているだろうな」

驚く二人に対し、緒方は冷静にそう言ってお茶を飲む。

「俺が知っている事件も多々あるが、どれも誰が解決したのか分かっていない事件ばかりだ。三澤組の壊滅なんて組員全員がボコられた状態で捕まったし、麻薬密売組織も誰かの通報で一網打尽にされた。社長令嬢の誘拐に至っては、事件から三日後に娘が急に帰ってきたっけか。勿論犯人はすぐに捕まったが、まさか高崎が関わっていたとは……」

「ははは。驚くのは無理もないよ。現に依頼屋組織の社長をしている私だつて驚く内容だ。誰にも知られず依頼を遂行する、そして成功させる。この内容を見ても一人で同じ事が出来るやつはこの本部にも居ない。典型的な依頼屋の天才だよ、彼は」

浩介の存在を緒方が知ったのはあの通り魔事件の時だった。それから浩介の情報を集める度に驚かされる内容が緒方に届いていたのだ。

もう少し早くその存在を知っていれば間違いなく今打てる手も変わっていただろうと思えてならなかった。

当然その時スカウトしても浩介が仲間になったかと言われれば頷くことは出来ないが、それでも今の状況は防ぐ事が出来たのだ。

依頼屋組織は徐々に戦力を削られ、マスター祥三を殺され宣戦しなければならぬ状況も起きなかっただろうし、浩介もノルベル研究所を無謀にも襲うことは無かった筈だと考えていた。

緒方がどれだけ悔やもうとそれはあくまで結果論に過ぎず、最早どうすることも出来ないとなわかっている。

決して現実逃避をしているわけではないが、緒方からしてみれば

今は最悪な状況の一手手前まで来ているのだ。

浩介の行動は無謀だった。

倉谷ノルベル研究所は依頼屋組織としても簡単に手が出せる場所ではなく、警戒のみの対策しか行えなかった。それ故ヤツらのペースに合わせるしか出来なかったのだが、浩介がたった一人でそれを打開した。

その情報を聞いた依頼屋の大半は歓喜して震えたが、それに引き換え高崎浩介という人材も失った。

現在浩介は行方不明となっている。ニュースでは生死不明で流しているが、かなり負傷していることは確実である。例え生きていたとしてもそれは仲間にしたかった依頼屋としては不都合な点が多い。

実績としては誇れるものであるが、結果としては無謀だったと言わざる終えない。そこに依頼屋組織の実行部隊を同席していればまた結果は違っていたのだろうと緒方は悔やんでいたのだ。

「浩介は大丈夫よ。また必ず私達の前に現れてくれる」

緒方の心境を表情で悟った綾華は確証のない言葉を紡いだ。

「何故そう言える？」

今の緒方としては確証ある証拠が欲しかった。

「私の勘」

「……………」

「俺もそう思う。俺達は高崎を信じてる。あいつがこんなところでくたばるなんて想像出来ない」

綾華に賛同した杉田もそう口にした。

その真剣な顔を見せる二人に、緒方は気持ちを切り替え微笑んだ。

「じゃあ私もそう信じよう。そして今は自分達でこの状況を打開する方法を考えないといけないな」

その言葉で二人は頷き、綾華が思っていたことを口に出す。

「そのことで、緒方さん。あなたも気付いていると思うけど、この依頼屋内部にスパイがいる可能性があるわよ」

その言葉は微笑む緒方を険しい顔つきに変えた。

「……………どこでそれを知った？」

緒方の低い言葉に杉田が答える。

「マスターの話を聞いた時です。ヤツらは的確に依頼屋支部を攻撃しているようですね？ その数、その正確さを考えても情報が漏れているとは思えない」

「盗聴器とか仕掛けられただけならまだいいけど、仕掛けられる行動が簡単に取りれる場所じゃないし、最悪仲間が潜んでいると考えた方がいいでしょうね」

この広いビルの至る所に盗聴器を仕掛けるリスクを考えるとスパイを送り込んだ方がより簡単である。

「それは支部が攻撃されていくにつれ私も思った事だ。君達ではないとわかってるから言うが、今日の緊急会議はその人物を暴く為の作戦だ」

「それじゃあ、ヤツらと抗争はまだしないということですか!？」

「そうじゃない。明日……とかではないが、近々として考えている」
「あれだけ人数も多ければ絞り込むことも出来ないってことね？」

「そういうことだ。厳しい言い方になるが、事務班や処理班が解散しようとも今の状況で困ることは何もない。多くの戦闘部隊が出払っている今、残るか残らないかの選択肢を与えても痛手は少ないんだよ」

「スパイなら必ず残る。そういうことね……」

そう呟き、綾華はお茶を啜った。

「人数の減った仲間の中からならスパイも見つけ易い。それはわかったが、もし実行部隊にいたとしたらどうするんだ？」

杉田は刑事の顔つきで緒方を見る。

「それは無いと推測している。実行部隊は何かあれば適当に人選をして送り出している。つまり常に正確な情報が全員にすぐに伝わるわけではないんだ。だから実行部隊にスパイはいない、寧ろ相応しくないんだよ」

「成る程な。じゃあ明日以降が本当の勝負所になってくるってわけか」

「何人残るかかわからないが、そうなってくるだろうな。柴田君にも言っただけで早く安心させてあげたほうがいいか。明日にでも抗争が起きると思っただけ焦っているかもしれないからな」

「じゃあ俺が言うよ。ゆっくり治せってな」

杉田が苦笑しながら立ち上がり、綾華と緒方に視線を合わせた後、扉の横に立っていた秘書の中村に医療施設の場所を聞き部屋を出た。

杉田を見送った緒方は、足を組んでお茶を啜る綾華に目を向けた。

「楠木さんはどうする？ 流石に戦うことは出来ないだろうから――」

「いやよ。私も参加するわ」

「だがそれは……」

「危険って言いたいんでしょう？ でもお生憎様。流石に浩介や柴田君みたいに戦うことは出来ないけど、戦況のサポートぐらいなら出来るわ」

護身術は習っていたし、父の影響で銃の扱いも慣れている。Sランクを相手にすることは出来ないが、その他のサポートなら力になれると思っていた。何よりそうしなければ浩介に会えない、という心境もあった。

真剣に言う綾華を止めることは出来ず緒方も頷く。

「なら、君にも武器を与えよう。着いて来なさい」

海外から集めに集めた依頼屋組織の真骨頂である武器庫に綾華を連れて行く決心をした緒方は立ち上がりそう言くと、笑みを見せた。

後に合流した杉田と共に武器庫に入った二人は、その武器の多さに言葉を失うのだった。

うたかたのような1

幸村はエリートな道を歩んで来たわけではない。今に至るまでにはかなりの紆余曲折を経てやっと自分の価値を見いだせたのだ。

父が医者で母は看護師、祖父も医者という家系に生まれた幸村は、両親から期待され続けることを日に日に疎ましく感じ始め、高校生にもなると幾度も口喧嘩を繰り返した。

『自分のしたい道は医者じゃない。自分の人生ぐらい好きにさせてくれ』それが幸村が何度も口にした否定の言葉だった。ところが両親から帰ってくる言葉はその逆のものであった。『お前は医者になるべき才能がある。お前の将来を考えて言ってるんだ』と、何度も跳ね返された。

まだ若かった幸村にはその意味も分からず、ただ感情論で自分の曖昧な意見を口にした。

別になにか違う事がしたかったわけじゃない。ただ口酸っぱく勉強をしろと言われ続けることに嫌気が差していただけだったのかも知れない。そんな平行線を辿っていた日々だったが、明確な将来を考えていなかったその時の幸村では両親を説得させるだけの理論も言えず、結局は両親が望む道である医科大学へ入学することになる。

入ったからには今更どうこう言っても解決しない。納得はしていないものの、渋谷医学の道を進んでいく幸村は自覚がないままトツブクラスの実力を見せ付けていった。ただ自分の出来ることをしていっただけの筈が、それは周囲の目を奪い驚かす内容であったのだ。そこで父の言っていた“才能”に気付くと同時に、以前感じていた嫌気というものが一気に心を支配した。

周りからの期待と嫉妬。そして医者の子だから、という見えな
い壁を作られた疎外感は幸村にひしひしと伝わってくる。

こんな関係を望んでいたわけじゃない。友達と楽しく遊び、彼女
をつくり充実した学生生活を送りたかっただけなのになぜそれが出
来ないのか、と幸村は嘆いた。

近付いてくる友達はどこか一步引いた感覚で話し掛けてくる。近
付いてくる女の子は今の自分ではなく未来の自分を見ている。

それに堪え切れなくなった幸村は心を閉ざした。そして淡々と医
学を学び、近づく周りの人間には素っ気ない対応にかわる。

自然と周りから人が避けていく現状を幸村は何とも思わなかった。
寧ろそちらのほうが気が晴れる感覚だったのだ。

そしてついに卒業を迎える。

幸村はこれから冒険に行くかのような高揚感を持っていた。
周りからの期待を受け止めながら、周りの人達を遠ざける学校生
活を送った幸村はそれまでで確かな医療の腕を身に付けていた。し
かし、十年に一人の逸材と言われた幸村の就職先は無かった。否、
選ばなかったと言ったほうがいいだろう。

どこの企業の面接も受けず、ただ卒業まで待った幸村の選択は所
謂フリーターという道であった。当然のように反対する両親を振り
切って、自らの欲望に後押しされるまま家を出た。

これで何もかも自由だ。自分の進みたい道へと歩くことができる。

そう思った通りバイトをしながら一人暮らしを始めた幸村は毎日が新鮮で充実していた。そこには自分を苦しめたプレッシャーというのが無かったのだから。

だが、そんな生活が長く続くことはなかった。

都心にあつたとあるビルの爆発事故。地上20階建てのビルが爆発と同時に崩れ落ち、多くの死者と怪我人を出した悲惨な事故が幸村の方向性を変える出来事になったのだ。

偶々その爆発を近くで体感した幸村は驚きと共に言葉を失った。

爆発に巻き込まれ血塗れで呻く人々。落ちてきた瓦礫に当たり泣き喚く人々。既に事切れている人々。人の血や怪我人に慣れていた筈の幸村はそこで初めて恐怖を感じた。

学校での座学や訓練などでは知ることの出来ない“人の命の重さと儚さ”というものを初めて感じた瞬間だった。

——まだ今すぐ治療すれば助かるかもしれない！

そう頭では分かっているのに体がいうことを聞かない状態の自分を心底小さく感じた。何の為に医学を学んできたのか？何の為に自分は生きてきたのか？そう思いながら幸村は拳を強く握り締めた。

そんな時、崩壊したビルの中から血を流した二人の男女が一人の男性を支えながら外に出てくる姿があつた。二人の男女はかなりの重傷を負っているその男性を瓦礫の少ない路上に寝かせると、その場で懸命に治療し始める様子が目に映る。

その男女でさえ頭や脇腹、腕や足からかなりの出血をしているようだったが、そんなことはお構いなしというように男性だけに集中しているようだった。

そしてそんな二人を幸村は知っていた。

「と、父さん……母さん……」

暫く会っていなかったとはいえ、間違えようのないその二人は幸村の両親だ。

久々の再会で両親の痛々しい姿を目にした幸村は何を考えるより先に駆け出していた。

「父さん！ 母さん！ こんな所でなにを………それより大丈夫なのか！？」

幸村の大きな声で二人は視線だけを向ける。

「守か……^{まも}丁度良い。手伝え」

「手伝えって………そんなことより二人共怪我してるじゃないか！！早く治療を——」

「今私達が離れたら、この人は死んでしまっわ。私達のこととは後でいいの！」

今までに聞いたことの無いような母親の重い口調に幸村は言葉を失った。

「守。俺達は人の命を助ける事が仕事で生き甲斐なんだ。助けれる命は助ける。それが医者という仕事だ」

そして今まで聞いたことの無いような父親の穏やかな言葉だった。

幸村は立ち竦んだまま治療を続ける両親を見つめる。

幸村は医者という仕事が嫌いなのではない。寧ろ大学で勉強するうちに奥深さというものを感じていた程だ。

だが幸村はその道を選ばなかった。

今のようなバイトで食いつないでいく生活も新鮮味があり、大学では経験することが出来なかった仕事仲間との何気ない会話で心の底から笑い合うことができ、楽しいと思える一時を過ごせたことも医者になりたいと思わなかったひとつの要因である。

だが、それで満足かと聞かれたら素直に頷けないところでもある。

幼い時から教えられ学んできた医療の知識。学校で体感し学んできた医療の重要性。それらは医療から離れてもなお幸村の心に強く根付いていた。

そして父親が震える腕で男性の傷口を必死になって押さえている姿は、そんな幸村の記憶と心に新たなものとして根付くには充分だった。学ぼうにも学べない精神的な部分はまだ幸村自身持っていないものだ。

生まれた時から自分の進路が決められているような気がして幸村は医者になることを拒んでいた。

ただそれだけの理由だった。

ただ何も知らず嫌気が差していただけだった。

それはただ自分のちっぴけなプライドだった。

「呼吸が弱くなってる！」

男性が意識を失い、看護していた母親が叫んだ。父親の応急処置を嘲笑うかのように出血は止まらない。それはつまりこの男性の死が近いことを意味している。

父親は苦虫を噛み締めた表情に変わる。

「このままじゃ出血多量で死んでしまうわ！」

救急車で来たら話は変わるが、都市部のビルで起きた爆発で交通網は完全に麻痺し、救急車もそれに巻き込まれていたため未だ到着していなかった。

現に軽傷重傷含め、誰一人まともな手当てをされず地にへたり込んでいる状況である。

「仕方ない。まずは出血を止めることが優先だ。ここでオペする」

元々仕事の一環でこのビルを訪れていた父親の手元には、幸いにもメスなど最小限の器具は揃っている。アルコールしかないのが衛生面では不安が残るがこの状況では無いよりマシだ。何よりこのような場所で手術をする事自体、前代未聞のことである。しかしそうしなければこの男性が死ぬことは避けられない。

全ての責任が自分に掛けられることを受け入れながら、父親は医療器具の入っているアタッシューケースを開けた。

「本気が父さん！？ そんなこと無茶だ！！」
「お前は黙ってる」

たまらず声を掛けた幸村に父親は耳を傾けなかった。

この場所、そして最低限の器具で父親は本気で手術するのだと理解したその時の幸村は、驚きや不安よりも自分自身何か吹っ切れるような気持ちであった。

「……父さん、そんな震える手で手術が出来るとは到底思えない」

幸村の父もまた怪我をしている。重傷という程ではないが瓦礫が頭に当たったことで出血もあり状態も万全ではなかった。その証拠でもある僅かに震える手を見ても、幸村の判断は正論であった。

「黙ってると言った筈だ！ 今この人を助けられるのは俺しかない
い」

そんな状態でも父親はやらねばならなかった。

手先の精密加減が重要な手術において今の自分の状態はやろうとしている行為に対して比例していないことは承知の上だ。

しかし、今、誰かがどうにかして対処しなければこの人は“死ぬ”ということが分かっている以上、生かすことが出来る可能性のある自分が対処せざるおえないのだ。例えその結果が同じであっても医師としての行動はするべきだと意志のない意思が告げていたのだ。
った。

「僕がやる！ 今の父さんじゃ無理だ！」

ところが、父親の行動は思わぬところで手を止めることになった。

「……………おまえ、何を言ってるか分かってるのか……………」

手を止め幸村を見る父親からは信じられないといったような驚きがある。それは母親も一緒だったらしく父親と同じ表情を見せる。

そんな二人に合わせるわけでもなく、幸村はアルコールを手に取り万遍なく両手に吹きかけた。

「ここで対処しなければこの人は死ぬ。そして今の父さんに任せても確率は上がらない。そういうことだろ？」

そして幸村は父親の隣へ屈み込み男性の状態を調べる。これは授業でもやった通りのマニュアルで培った為、幸村には怪我の状態を見定める程度は難しいことではない。

「一年もブランクのあるおまえが、ましてや医者でもないおまえが何を言ってる！　これは遊びじゃないんだ！！」

「そんなこと言ってる場合じゃない！　この人を助けるにはそうするべきだ！　それに父さんもいるんだ。細かい指示は父さんが出せばなんとかなる！　僕自身がどこまで出来るかやってみたいんだ！
！　頼むよ父さん！！」

「守……………」

父親の隣で頭を下げる幸村に母親は驚きと共に呟いた。

自分達の息子が前向きなことで声を荒げるのは初めてだった。今までは医学の道へ進ませようとする度に言い争いになったものだが、今回はその逆といえる息子の言い分だ。

父親は暫く幸村を見た後、口を開く。

「守。医者として自分がどこまでの腕を持っているか確かめたいのは何となく分かる。だが、さっきも言ったがこれは遊びじゃない。人の命を受け持った一度限りの真剣勝負だ。理由はどうあれ医者でもないお前がメスを握り、それによってこの人が助からなければ世間から非難をあびるだろう。おまえは医者としての道を失うことになる。その覚悟があって言ってるのか？」

幸村は静かに頷き、父親もまた頷き返す。

「確かにおまえの言うとおり、今の俺ではこの人を助けられない可能性が高い。いいか守。自分のことよりもこの人を助けるという信念だけ持って挑め。それ以外の思想を持つと必ず小さい綻びが生じる。それは結果として良い方向に転がることは絶対じゃない。それが出来るならばやってみろ。全責任は俺が持つ」

「父さん……」

父親の言葉を胸に刻み、幸村は大きく頷き深呼吸をする。

「よし！―」

自分に気合いを入れるかのようにひとつ声を出し、幸村は男性の傷と向き合った。

長い時間が過ぎた。だが、幸村にはあつと言う間に流れ去った時間に感じられた。

「縫合……終了……」

男性を治療し終えた幸村は、流れ落ちる汗を拭う余裕もなく地面に座り込んだ。全身から全ての力が抜け、崩れ落ちたと言ってもいいだろう。

そんな幸村の頭に父親の手が乗せられた。

「見事だ。お前はやはり医療の才能がある」

「よしてくれよ。父さんの細かな指示がなければこんな結果にはならなかったし、父さんならこの半分の時間で終わらせていただろうし」

幸村は血が止まり、まだ息をしている男性を見ながらそう呟いた。まだ危険な状態は変わらないが、それでもやるべきことはやり終え、その結果に男性はまだ生きている。それもこれも全ては父親の冷静且つ的確な指示のおかげだと思っている。

「いいえ、指示されただけであそこまで正確に実行出来る者なんてほんの一握りしかない。あなたはやっぱり天才よ」

男性の脈を測っていた母親もそう口にする。脈拍も今のところ問題ないのだろうと思いつつ、幸村は苦笑した。

「母さんまで………ありがとう」

否定するよりも、今の気持ちのままお礼を口にした幸村は達成感で一杯だった。

「父さん、母さん。今までちっぽけな僕のプライドで迷惑をかけて

ごめんなさい。でも僕は決めたよ。父さんのような腕を身につけて母さんのように患者を大切にできる医者になる！僕はもう迷わない。それを気付かせてくれたのは父さんと母さんだ。本当にありがとう！！」

「ま、もる……………」

母親は息子の言葉で涙ぐみ、父親は滅多に見せない笑みを見せた。

丁度その時サイレンの音が聞こえ始め、ようやく救急車が近くまで来たと認識した幸村は両親に笑みを向け立ち上がった。

「守。初めてお前の手で救ったこの男性は救急車に乗せるまでお前が見ておけ。俺達は他の人の怪我の手当てをしに行く」

「父さん、それは僕がするよ！それより父さんも母さんも早く治療したほうが良い。酷い傷じゃないか」

「なあに、これぐらい心配ないさ。俺達よりこの男性のほうが危ない状態だ。手術が終わってからその患者の容体を見守るのも医者のお務めだ。お前はこの男性を見ておいてくれ」

そう言う両親は医療道具を纏め、応急処置が必要な怪我人から治療しに回って行った。

幸村は再びその場に座り込み、父親の言った通り救急車が来るまで男性の容体を見守った。

そしてその場に救急車が到着した。怪我人含め全ての人が見慣れている筈の車の姿で安堵した。これで助かると多くの人が思っただろう。

しかし、そんな人達を裏切るかのように、まるで救急車が到着す

るのを待っていたかのように、本日二回目の爆発がビルから木霊したのだった。

幸村はハーブティを口に付け、その光景を思い出すかのように目を閉じた。

「それで……どうなっ たんです？」

向かいの椅子に座る柴田もコーヒーを口に付け幸村に尋ねた。

「その二回目の爆発で建物は完全に崩壊。下にいた怪我人は崩落した建物の瓦礫の下敷きになり多くの人が犠牲になったよ」

幸村は目を開け真剣な顔で柴田に返した。

一通り柴田の検査も終わり手術は今夜からと決め、それまでの開いた時間を利用して二人は組織内にあるカフェへと足を運んだのだ。

社長である緒方から明日にも残るかどうかの決断を迫られていることもあり、今の時間カフェで寛ぐ人は誰一人としていない。そして会話している話の内容もあり二人の空気はどんよりとしたものになっていた。

「その男性はどうなったんです？」

「僕が抱えて避難したから無事だったさ。幸いにもそれから病院に運ばれてすぐ意識を取り戻したって後々知ったよ」

「そうですか。……では、ご両親は……？」

「……運悪く、ビルの近くにいた怪我人を治療していてね。巻き込まれたよ」

「……そうですか」

柴田は幸村から視線を外し、手元のコーヒークップへと移した。

「……でもね、その時はまだ生きていたんだ。急いで駆け寄った僕は瓦礫の下敷きになった父親を見つけた。母親は即死だったみたいだけど、父親は胴体を挟まれ頭部は無事だった。でも、すぐに亡くなっただけだね」

幸村は苦笑するが、その雰囲気は哀愁漂うものだった。そしてその話を他人事のように聞けない理由が柴田にもある。

「幸村さん。僕の両親もそのビルの爆発で死んでいるんです。見た訳じゃないので人から聞いて知ったんですけどね。変な境遇ですね」

柴田の言葉で口に近付けていたカップを止めた幸村は、柴田を見てから笑みを浮かべ口に付けた。

「そっだったのか……」

カップを置くと幸村は自身の両指を絡めテーブルに乗せた。

「変な境遇といえば、その通りだね。でもそれは運命でもあって今ここに確かな繋がりを見せている。全く、不可思議な話だね」

一人納得したような笑みを浮かべる幸村に柴田は首を傾げた。

「どういうことですか、幸村さん？」

そして当然のようにそれを尋ねる柴田に幸村は口を開いた。

「これは死に逝く前の父親から聞いて知った事実だ。簡潔に言うと、あのビルは依頼屋組織の一つの支部だった」

「依頼屋組織の……支部……」

「そう。都心にあった為、この本部よりも利用率が高く、多くの実行部隊が行き来していた拠点でもあったんだ。そして、僕の父と母は依頼屋組織専属の医者だった。子供の時から反発ばかりしていたから両親が医者というのは知っていたけど、働いていた場所までは知らなかったから、父から聞くまでは普通の病院で働いていると思っていたよ。そしてその爆発を起こしたのは他ならない政府、いや、異世界人の犯行だった。だから僕は両親と同じように依頼屋組織に入った。医者として奴らに復讐することを決断してね」

言葉の出ない柴田に追い討ちをかけるように幸村は更に続ける。

「それでだ、君の聞いた話が本当なら、君の両親も依頼屋組織のメンバーだったという可能性が非常に高い」

「僕の両親が、依頼屋組織の……メンバー……」

「そして今君は依頼屋としてこの本部に足を運び、共に両親を失った十年前の話をしながらお茶をしている。繋がりのある境遇だろう？これを運命と言わず何と言えるか。過去が今になって繋がりをみせているのにはどんな意味があるのか、人生わからないものだね」

幸村はそれが見えてくるだろう未来に期待する一方、柴田は頭

の中を整理することで一杯だった。

幸村のいった通り、両親が依頼屋組織のメンバーだった可能性が高いのかもしれない。

——だとすると、兄は……

「柴田君。そんな考え過ぎなくても、自ずと真実は見えてくる筈だよ。君が生きてさえいればね。だから僕は君の手術に全力を出して挑むつもりだよ。それが君の為でもあり、僕の為でもあるからね。……っと、もうこんな時間か」

時間を確認した幸村は残りのハーブティを飲み干し、椅子から立ち上がった。

「僕は今夜の為の準備を始めるよ。話を聞いてくれてありがとう。それじゃあ、九時に診察室へ来てくれ」

笑顔で言う幸村に頷くと、そのまま幸村は去っていった。

そして柴田は時間ギリギリまでカフェにて一人の時間を過ごした。

幸村の言う過去と今と未来の繋がりを見据えながら。

うたかたのような2

何かから逃げている時、その人は果たして何を思っ
て逃げているのか……

例えば喧嘩を売られた相手から逃げる時。

例えば自分で抱えきれない問題に直面した時。

例えば嫌な事を押し付けられた時。

そんな時、逃げるという選択肢を選ぶのだから、大半の人はそれらに関わりたくない思いであろう。逃げ切ってしまうは自分にそれらは降りかかってこないと内心願っている筈だ。

そしてそれは決して間違いとは言えない。

逃げなければならぬ事から乗り切れ、幸せな生活を取り戻すこともあれば、逆に端から悪い方向に進むこともある。成功法がある以上逃げることは間違いだと断言できないところである。

そして浩介の場合、どちらを選んでもそれは間違いなく後者になる。

逃げ切ったとしてもその先良いことなんて一つも無い。浩介の状況においてこの件から逃げる道がないのだからそれは当然のことである。

浩介は近付いてきた警官から逃げた。応援を呼ばれ、浩介が生き

ていると世間に教えることが明白な状況を、逃げるという選択肢を選んだ浩介自身で作り上げてしまったのだ。逃げなくてもそうなる状況下にはあるのだが、浩介の選んだ選択はその行動だったということになる。

そうなってしまった場合、大半の人はひとまず立て直しを謀るため落ち着ける場所へと移動する。それがその人にとって家なのか、誰も居ない森の中なのかは各々あるが、今の浩介で考えればフィーガルということになる。

仲間もいて絶対に見付からない場所である為、浩介にしてみれば何とも都合のいい拠点なのだ。

ところが浩介はフィーガルに戻るという選択肢を敢えて選ばず、今も尚アウエーである街中にいる。

「ねえ、フィーガルに一度戻ったほうがよくない？」

走ったことで体温も上がり、普通に顔をさらけ出して歩く浩介とは違い、依然ナーシエはネックウオーマーとニット帽で顔を隠したまま浩介に尋ねた。

歩いている場所は街中といっても人通りの少ない入り組んだ裏路地であり、偶に事情を知らない歩行者とすれ違う程度だったのだからこまで気にすることもなかった。

「その選択は無しだ。相手は俺が生きていると知って血相を変えて搜しているだろうな。悪いがこのピンチを収獲無しに終わらせるつもりはない」

このままフィーガルに戻ったとしても結局は攻めに打って出れる

局面を待つしかない。ヤツらが動いてからこちらも動くという後手の戦略から逃れられない。

ナーシエ達の存在をヤツらに知られたくない以上、それは致し方ないと思っていた浩介だったがその考えは瞬時に変わった。

あくまで今の現状を逃げで終わらせるつもりなど毛頭ない。それを言葉にするならば“逃げ”ではなく“撤退”に変わる。

見付かってしまったことで後ろ向きな考えを持つ前に、浩介は戦略的撤退という思考に変わったのだ。

相手が急遽動くであろう今の状況下の中、その僅かな隙を狙う逆手の戦略を思い描いたのだ。

だが当然リスクは背負うことになる。

「それで、ここはどこ？」

何も分らず浩介について行ったナーシエは、過去から置き去りにされたような虚無となった建物を視界に捉えた。

一方の浩介は戸惑いなくその敷地内へと入っていく。

「今はもう使われていない廃墟だ。そして、俺が初めて人を殺した場所でもある」

「えっ！」

それは綾華達と別れるきっかけを作った出来事であり、浩介の中で大きく道を変えることになった忘れられない場所でもある。

「コソコソ人の後を付け回すような奴から話を聞くにはいい場所だろうか？」

それは警察から逃げた時から感じている気配。どれだけ走ろうがしつこく一定の距離を保ちながら付け回すその気配の正体を知るには敵だろうと味方だろうとこのまま野放しにしておくことなど出来ない。

「執念深いというか、用心深いというか、そんなのほっとけばいいのに……」

「言っただろ？ 何か新しい情報が欲しい俺達にはうってつけの状況だ。それに敵さんだった場合、いつかは対立することになるんだから早めに潰しておいたほうが良い」

「それはそうだけどさ……ん？」

ナーシエも納得しかけたその時、今まで付け回していたヤツの気配が強くなったのを感じその方向へと目を向ける。

「早速来たな」

二人の立っている場所は廃墟となつてその周辺をフェンスで囲まれた丁度中央の位置。サッカー場でいえば丁度キックオフするハーフラインのセンターサークルの位置である。つまり一人一人隠れることが出来る瓦礫はあるが、それを含めても見通しの良い位置に立っているので強襲を受けようともそれらに対応出来る余裕もある。

そしてその気配の持ち主は諦めたように二人の前方にある瓦礫から姿を現した。

「お前一人か？」

「そうだ。何か問題でも？」

見た目からして日本人。年齢は三十代後半といったところで、服装は黒のダウンジャケットにベージュのメンパンといったラフな格好である。

中肉中背、その男の落ち着きようは探偵のような雰囲気もあるが、敵か味方か区別は付かない。ひとつ言えることはただ者ではないということだけだ。

そしてその口調からも浩介は警戒心を強めた。

「強いて言うなら俺をつけていた理由だけだ。お前は何者だ？」

「色んな人から追われているキミならこんな展開も慣れたものだろう？ 高崎浩介君？」

「質問に答えろ。それとも、死にたいのか？」

「情報通りの性格だな。まあそう身構えんな。俺だってお前と同じなんだからよ」

いつでも攻めれるよう僅かに態勢を整えた浩介を見て、男はクスツと笑みをつくる。

「同じ……？」

「そう、同じだ。俺は客から依頼を受けた依頼屋、おりましんじ折町真司。あんたと同じフリーの依頼屋だよ」
「依頼屋……」

浩介は身構えた体勢を少し緩め、考えを纏めながらコートのポケットにある煙草を取り出した。

「ということは、その依頼があつたから俺を追跡したと？」

口に煙草をくわえたまま苦笑し、火を付ける。

「まあそういうことだ。あんたを見付けることが依頼内容だったしな。その依頼主もすぐに来るだろうから警戒は解いてほしい」

折町は携帯電話を手に持つて浩介に見せる。

瓦礫に隠れていた時か、それとも追跡している途中か。どちらにしても依頼主にはこの場所を知らせており、今も向かっている最中ということだ。

折町という男を敵だと断言出来ればそれを敢えて待つことなどしないが、折町の言動を見ても嘘を言っているようには思えない。ならば危険はあるが、その依頼主が何故自分と接触しようとしているのかわからない浩介はその依頼主を待つてみることに決めた。

「ま、いいだろう。当然依頼主の正体を教えるつもりはないんだろ？」

依頼屋をしている者には幾つか決められた暗黙の了解というものがある。その一つが“依頼主の情報は漏らさない”というものだ。

依頼が完了した後なら問題はないので、浩介を見付けるといふ依頼そのものは既に終わっているのだが、もし言うつもりなら浩介が身構えた時に言っている筈なのだ。

中にはそんな暗黙の了解など守らない依頼屋もいるが、それは殆どが覚悟など微塵もしていないような半端者ばかりである。そしてこの男はそれに該当しないと言い切れる実力を持っていて、言わな

いのも何か考えがあるからだ」と浩介は思っていた。

「まあ今の段階なら教えてもいいが、依頼主が来てるなら直接依頼主に会って聞いたほうがいいだろ。顔見知りみたいだしな」

当然浩介の考えを熟知している折町も軽く笑って答えた。

「……顔見知りか。選択肢が多そうで全く浮かんで来ないな」

幾つかの顔を思い浮かべるが、わざわざ依頼屋に頼んでまで浩介を捜す顔ぶれでもない。ましてやその理由もわからなければそのことで悩むのは時間の無駄だと瞬時に切り捨てたのだった。

「にしても、あんたも大変だな」

そして不意に折町が声を掛けた。折町は瓦礫を椅子代わりにして座ったまま浩介に視線を注ぐ。

「研究所の社長、倉谷だけでなく特殊部隊までも全滅させ、今や史上最悪の犯罪者としてその身を追われてる。世間でも悪魔やら異端者やら騒がれる始末。正直今の心境はどうよ？」

その悪意を感じるような質問にも浩介は表情を変えない。

「気にするだけ無駄なことだな。世間にどう思われようが俺のやるべきことは一緒だ。それに世間の言う通り、俺は悪魔なのかもな」
「おー恐いねえ。それでその可愛いお嬢ちゃんを紹介してくれるのかい？ 出来れば顔ぐらいちゃんと見たいんだが」

折町の目が浩介からナーシエへと移り変わる。そしてナーシエが

口を開くより先に浩介がフォローを入れる。

「悪いけどあんたに見せる理由がないな。彼女はこう見えて結構シヤイなんだね」

「あーそりゃ……残念だな」

ナーシエを見て苦笑した折町があっさりと引き下がった後、ナーシエが小声で浩介に呟く。

「もうちょつと他に理由はなかったの！？　なんかわたしが残念な人みたいに思われてる！！」

「しょうがないだろ。下手な事言えないんだから」

ナーシエの言い分もわからなくもないが、浩介としては咄嗟に出て来た言葉だったのでどうしようもない。
ふてくされた顔で浩介を見ているあたり、フィーガルに帰ったら大変そうだと思ひ溜め息をついた。

「それじゃあ質問を変えよう」

そして折町は再び二人に視線をぶつける。

「彼女がキミを匿^{かくま}った協力者ということで良いのかな？」

そしてその質問は的を得たものだった。

「あんたが何故そんなことを気にする？　その情報をどこかに売るつもりか？」

「滅相もない！　今ニュースで騒がれている凶悪犯が目の前にいるんでね。ただの興味本位だと思ってくれていい」

折町は少し真剣な顔でそう言った。

「その興味本位がいつか命を落とすことになるぞ」

「俺を殺すのか？ 倉谷のように」

「——ッ！」

浩介が睨んだのを見て折町は苦笑する。

「まあ質問の答えは分かったよ。それで間違いないようだ」

そう言っ て折町は笑みを浮かべたまま瓦礫から立ち上がった。

「……そういうことだ。あの後彼女に助けられた。顔を隠してるのもそのためだ。悪いがシャイなんかじゃないぞ」

「はは、それはそういうことにしておこう。——そろそろかな？」

携帯電話で時間を確認した折町は浩介達に背を向け、この廃墟と街に繋がる一本道に顔を向けた。

そして折町の言った通り、その道から一人の女性が肩で息をしなから懸命に走ってくる姿があった。

「ハア…ハア……！！ 高崎君っ！！！」

その女性は浩介の姿を視野に入れそう叫んだ後、最後の力を振り絞って走り出した。

「……し、白木？」

依頼屋を使ってまで浩介に会おうとしていたのは他でもない愛理だった。

愛理はそのまま折町の横をすり抜け浩介に飛びついた。

「高崎君!!」

「白木……どうして……?」

咄嗟に抱き締めた浩介は自分の胸に顔を埋める愛理を見て驚きを隠せなかった。

乱れた髪と寒い中で額に滲み出る汗を見れば、如何に必死で走って来たのが窺える。

そんな愛理の乱れた髪を手で撫でるように直しながら、浩介はもう一度愛理に尋ねた。

「白木、なんで?」

「心配だったの!! ニュース見て、高崎君の指名手配を知って……怪我してるかもしれないと知って……いてもたっても……いられなくて!!」

「それで依頼屋に?」

愛理は浩介の胸の中でコクンと頷く。

何故愛理が依頼屋を知っているのか疑問に思った浩介だったが、今は愛理の心境を察してあげて優先した。

「心配……かけたな。すまない」

その言葉で愛理は首を横に振る。

「……………怪我は？」

「この通り、全然問題無い。大丈夫だ」

「そう……………よかった……………」

そこで浩介にしがみつくと腕に力を込めて、さらに強く抱き締めた。そんな愛理から鼻を吸る音が頻繁に聞こえてくる。

「白木、泣いているのか？」

「……………めん……………。もう少し、このまま……………いさせて……………」

「ああ。ありがとう」

その浩介の言葉で、愛理はついに声を出して泣き始めた。そして浩介は愛理の頭を優しく撫でることで自分を心配してくれていた愛理に感謝を伝えた。

「いやー、感動の再会ってとこかな。泣けるねえ」

折町はその光景を茶化すかのようにケラケラと笑う。勿論泣くような仕草は無く、そんな感情すら微塵も感じていない様子であった。

「もう用がないなら帰ったら？」

折町の声は浩介にも届いていたが反応することはなく愛理の頭を撫でただけだった。その代わりナーシェが嫌悪を込めた言葉を投げつける。

事情は詳しく知らないナーシェだが、少なくとも浩介を馬鹿にしているような彼の言動には腹立たしさを感じている。

だが折町はそんなこと気にしないというように微笑ましい顔をナーシェに見せた。

「やっと声を聞くことが出来た。可愛らしい声だな。益々キミが欲しくなってきた。その身体を、その心を、キミの全てを俺の物にしたい」

ニヤリと笑う折町を見たナーシェは引きつった表情で一步下がる。

彼の實力に怯えたのではなく、ただ純粹に気持ち悪いという感情が支配したのだ。戦えば負ける気がしないナーシェでもこればかりはどうにもできず、ただ鳥肌が立つ程の寒気を感じていた。

「……どうやらお前は、愛理だけでなく俺の望んでいないモノを待っているようだな」

そのやり取りを聞いていた浩介がナーシェを庇うかのように口を開いた。

依然愛理は浩介の胸の中にうずくまっているが、浩介の視線は愛理ではなく真っ直ぐ折町を射抜いていた。

「と、言うത്？」

「彼女の言う通り、帰らないのか？」

「まあ帰ってもいいけど、もう少しこの光景を見ていたいからな」

それこそ感情の無い言葉だと浩介は思う。

「いや、そうじゃない。あんたは間違い無く別の目的がある。危うくあんたの話術に騙されるとこだった」

「心外だな。俺が何か嘘をついたと？」

「嘘はついてない。だからこそ分らなかった」

「それこそ俺としてはわからんな。キミが何故俺を敵視しているのか……。ははぁん、さてはあれだな？ そのお嬢ちゃんを俺に取られると思っただ嫉妬からかな？」

挑発に近い折町の言葉で、浩介は愛理を離しナーシェに預ける。そして表情を変えず折町と向き合った。

「あんたは依頼屋。これは間違いではない。白木から依頼を受けたのも、その依頼が俺を見付けるということも、興味で俺の成り行きを知ろうとしたのも、彼女に言ったことがあんたの性格からくるものだということも、全てにおいてあんたは嘘をつかなかった」

浩介は再び煙草を一本取り出し火をつけた。

「だが断言しよう。折町、と言ったか？ あんたは最初から俺達の敵でしかない」

そこにはそう言い切った浩介に鋭い目を向ける折町の姿があった。

「勘だけで人を判断するのはやめてほしいな」

「勘じゃない。あくまで理論的な考えだ。じゃあ聞くが、白木からあんたに接触して来たのか？ これまで同様嘘無く答えてくれよ？」

軽く笑う浩介に折町は思わず舌打ちをする。

嘘など言える筈がない。何より当事者である愛理がこの場にいるのだから、折町には逃げられない質問なのだ。

「いや、俺から接触した」

「だよな。依頼屋の存在を知らない白木があんたに依頼をすること自体有り得ない。じゃあ次の質問だ。何故あんたは白木に接触した？」

折町は質問の内容がどんどん確信めいてくることに焦りを感じていた。

「彼女が困っていたから――」

「困っていたら自ら依頼を受けるのか？ 違うだろ。依頼屋というのは無闇やたらと一般人に教えていいものじゃない。それは暗黙の了解の一つで、勿論あんたも知っている筈だ。そんなあんたが白木に依頼を出させたのには必ず理由がある。違うか折町？」

吸っている煙草を右手の指で掴んだまま紫煙の上がる先端を折町へと向けた。

その顔、その声、そしてその態度に疑念はない。全てを把握しまかしは言わせないという浩介の姿に、折町は笑みを浮かべ天を仰いだ。

「は、ははは。それがあんたの強みか。もう少し粘れると思ったがな」

込み上げてくる笑いを隠さず折町は浩介と視線を交わす。

「まあ後々バレる事だから俺も大雑把に対応したが、どこから気付いた？」

「最初にあんたは俺に対して『情報通りの性格』と言った。先ずひとつ情報源があるとしたらそれは白木だ。だが白木から聞いたとし

ても学生でいる時の俺の性格しか知らない。この流れの中で“情報通りの性格”と口に出すあんたは白木ではない別のところから情報を得た事になる。『死にたいのか』と言った事を俺の性格だと思い込み、そしてその俺の裏側を知っている別のところからな。果たしてそれはどこの情報だろうな？ 選択肢はそう多くないぞ」

吸った煙を吐き出しながら、浩介は折町へと近付いていく。

「正解。俺は今警察に雇われている依頼屋だ。そして警察側の手回しは俺一人だと思わないことだ」

「捕まえたフリーの依頼屋を俺の搜索にあてさせている、といった具合か？」

「それも正解。勿論俺は警察に捕まるなんて馬鹿げたミスはしないけどな」

「……金まで積んでいるのかよ」

「お前は指名手配犯なんだぜ。そのぐらい当然だろ」

懸賞金を懸け浩介の情報を探る。その為には依頼屋だろうと使える者は使う、といった警察側の思想が手に持つようにわかる。

捕まえた依頼屋達は釈放を理由にでもすれば当然協力するだろうし、懸賞金を懸ければそれ以外の依頼屋も金目当てで動き出す。その一人が折町真司であるのだ。

「白木に声を掛けたのは、疑われずに俺と接触出来るからだな。事前に俺の交友関係を調べ、警察から情報を貰い嘘をつくことなく俺と会話して時間を稼ぐ。大した役者だ」

浩介は三メートルの距離を空け、折町に感心の言葉を送った。

「あんたには適わない。その目は最初から俺を信用していなかったという証拠だ。それどころかあんたは何一つ信用するつもりが無いだろ？　まるで昔の俺を見ているようだ」

「信用するに値する世の中じゃない。それだけだ」

「本当にそうか？　あんたは仲間すら信用していないように思える。一人になったのもその為じゃないのか？　お嬢ちゃんも気をつけた方がいい。いつ裏切られるかわかったもんじゃないぜ」

折町の言い分は必然とナーシエに向けられた。

「……大きなお世話。あなたに心配される筋合いはないよ」

ナーシエは浩介の背中をちらつと見た後、折町に言葉を返した。その言葉で折町は苦笑する。

「ならいいがな。殺されてから後悔はすんなよ」

「そうやって俺を追い込む作戦か？」

ナーシエを惑わすような言葉を続ける折町に浩介は睨みながら口を開いた。

「俺は事実可能性のあるアドバイスをしてるんだ。信用してない者を信用するリスクは多大にあるからな」

「それは納得だが、今お前の意見を聞いている暇はない。そうやって時間稼ぎするのが目的なのは目に見えてるからな」

「こちとら仕事なんでね。役割を果たさないと金が出ないんだわ」

「悪いが金は諦めてもらう」

「こちらが悪いが俺は役割は果たし終えた」

「何？」

「到着したようだ。これであんたを奈落の底へ落とす方程式が完成

する！！」

両手を広げた折町は高々と声を張り上げ叫ぶ。

第三者の気配などはない。ここは廃墟となった広場の丁度中央付近。人が居ればすぐに気付くことができ、周りを囲まれるようなミスはしない。

だが折町は言った。“到着した”と。

それ自体が惑わす為の虚構なのか？ 時間稼ぎのつもりなのか？

少しばかり焦りを覚えていた浩介から冷や汗が頬を伝う。

ナーシエですら愛理を庇いながら周りをキョロキョロと見渡している。

いつの間にか地面に落とした煙草からは紫煙が漂い、そして儚く消えていく。

この男の真意が全く掴めない。

最初から掴みにくい男だったが、何一つ情報を持っていない浩介としては、瞬時に真偽を問えと言われている今の状況は流石に難易度の高い注文だ。

「大丈夫！ 誰も居ないよ！！」

それはナーシエも同じことであり、浩介が判断する前にナーシエが先にそう告げた。

実際浩介もナーシエと同意見であるが、そう決め付けるのは早い

気がしてならない。焦りの中にも常に冷静さを持てるのが高崎浩介という人間性であり、それは今まで修羅場を何度もくぐり抜けてこれた原動力でもある。

そして折町真司という男が今まで一度も嘘をついていないということに気付けたのはその冷静な部分が教えてくれたのだった。

「いや、敵は来る！ 油断するな！！」

何事も最悪な状況を考え打開してきた浩介も、今回はかりは読めないでいた。それも全ては折町の頭の良さが関連してきていた。

その様子を楽しむかのように折町は両手を広げたまま笑みを漏らした。

「さあ、ショーの始まりだ」

うたかたのような3

太陽が沈んでゆく夕暮れ時。廃墟と化したこの場所も綺麗な夕焼けがスボットライトのように飾り付ける。

十一月の冷たい風も演出のひとつであるかのように、浩介の羽織っている黒いコートの裾をひるがえ翻す。

「さあ、シヨ一の始まりだ!!」

夕焼け空に木霊する折町の声で緊張感はピークに達した。

それはただ折町から視線を逸らさず、身構える浩介も例外ではない。

虚構だとは思えない。事前に折町から報告を受けていたとすれば何かしらの作戦は練ってきている筈であり、誰一人姿を見せていないこの状況で折町が大口を叩いているあたり間違いのない事実である。

唯一の救いは報告した時からそんなに時間が経っていないことだろう。

浩介が街に出たのは偶然だ。そこから折町に見つかりすぐ警察に報告したとしても、まだ一時間も経っていない。何らかの作戦は立てていても、執拗な計画を練る時間もなければ、それを成す為の人員を集めることも一苦労である。

だからといって無闇に強攻策に出てこないあたりは流石である。どちらかといえば表立って攻めて来てくれたほうが浩介としても対

処しやすいのだが、そのことを知っているかのように変化をつけたのは偶々なのか、もしくは頭のきれる策士がいるかのどちらかである。そしてそのどちらかであっても、今の浩介には躲しきる他ない。そして変化はすぐに訪れた。

折町が叫んだほんの数秒後、浩介とナーシェは僅かな音を耳に入れる。

「……………飛行機？」

その音は紛れもなく空から、そして何かが飛ぶ轟音に近い音だ。

二人は同時に空を見上げ、遠方に見える小さな飛行物を目にする事ができた。それは確かに低空飛行で飛びこちらに向かって来ていたのだ。

「——ッ！ 軍の戦闘機か！！」

見る見るうちにその姿は迫ってきて、目ではつきりと姿形を確認できた。

「クソッ！！ 逃げるぞ！！」

映画でしか見たことのないような軍用機、ましてや空から攻めてきている以上浩介達が太刀打ちするのは難しい。

相手がやる気満々だという意気込みを感じ取れる戦闘機を見れば、躊躇なく逃げる方針を露わにするしかない。

浩介は咄嗟にナーシェのほうへ振り返り、廃墟の建物へと走り出

した。それに続くナーシェも混乱している愛理の手を掴み強引に連れていく。

『こちらPー107。標的に照準完了。攻撃します』

乗っているパイロットは無線でそう告げると、慣れた手付きで前方の赤いボタンへと手を伸ばした。

機体に設置されている連射砲の準備が整い、操縦桿についている発射スイッチに指をかけ、まるでラジコンを操作するかのように戸惑いなく押した。

轟く銃撃音と共に発射された弾は地面に当たると同時に土煙を撒き散らす。

そんな状況を背後で感じながらも浩介達は懸命に走り続けた。

「止まるなよ！！ 建物まで一直線で駆け抜けろ！！」

「わかってる！！ —— きゃっ！！」

背後から迫る銃弾の嵐がナーシェの横を紙一重で着弾し、小さくとも叫び声を上げる。

一発の銃弾なら躲す事は可能なナーシェでも、一秒間に数十発発射できる軍の連射砲は流石に厳しいものがある。

それでも足を止めないあたりは普通の女性、この場合は普通の人間と違つと表現しても過言ではない。

そのまま戦闘機は浩介達の頭上を追い越して行き、なんとか初撃を堪える事ができた浩介達の次は、大きく迂回する戦闘機との競争

だった。浩介達が建物に入るのが先か、または戦闘機が迂回して二撃目がくるのが先か、そのタイミングはなかなか際どい。

だが浩介達に別の手段は無い。相手が先だろうと目指すべき到着地は変わらないからである。

「もう少しだ！ 急げ！！」

あと十メートルで建物内へと入ることができる距離で浩介は後方のナーシェ達へ視線を向けた。最初より若干距離が開いているのは愛理がいるからであろう。愛理の手を引っ張りながら走れば、流石のナーシェでも遅れることは否めない。

ナーシェに愛理を捨て去る覚悟があれば二人は無事に建物へ入ることが出来るが、その代わり愛理は無事では済まない。そして先程の愛理の行動を見ていたナーシェにはそんな考えなど微塵も無い。寧ろ、この子は守らなければならないという気持ちだったため何があっても繋がる手だけは離さなかった。

浩介が戦闘機に警戒すると、今正に正面で鉢合わせするようなタイミングであった。結果は僅かに相手の方が早かった。あとは攻撃が当たるかどうかの運次第という状況で、浩介は走るペースを少し落とし、唯一持ってきた腰元の専用ショルダーに収まる銃、――通称エネルギーガンへと手を掛けた。

こんな所で出たくない代物であるが、絶対的に間に合わない最悪の状況になれば有無問わず出さなければならぬと決意する。

浩介が戸惑う理由は、最初に浩介が危惧した事を自分から犯してしまうからである。当然のように地球には無い武器の存在を知らし

め、その情報がバリアの奴らへと回ればナーシェ達の事を知られる大きな手掛かりになる。

とはいえ命との天秤にかければそこまで守らなければならない事象でもない。後々厄介なことになるのは承知だが、それはその時考えればいい。

既に攻撃出来る態勢に入っている戦闘機を見た浩介は、いつでも出せるようにエネルギーガンのグリップを握る。

「——!？」

しかし、攻撃態勢が整っている筈の戦闘機から肝心の攻撃はやって来ない。建物まで最早数メートル。ナーシェ達も浩介のすぐ背後にいる。これでは建物に入ってしまった方が手っ取り早いと考えた浩介は疑問と共にエネルギーガンから右手を離れた。

「どうしたの Kouちゃん!? 今のうちに入るよ!!」

「……ああ」

走るペースが格段に落ちた浩介に横からナーシェが声を掛け、そして追い抜いていった。

今の浩介には得体の知れない嫌な予感があった。それは以前体感したことのあるような感覚であり、それを必死に探っていた。

——考える。なんだ、この感覚は? どこで感じた? 何故攻撃してこない?

もし自分が追う側ならこの好機を逃す理由はない。だが実際相手

は逃している。殺したい相手にも関わらずだ。その矛盾を頭に入れた浩介はまた別の観点で考える。

——それが矛盾でないとすれば、建物へ入った俺達を確実に殺す方法が……

「——！！」

そこまで考えた瞬間、全てが繋がった気がして浩介は全力で走り出した。

「ナーシエ、止まれ！！」

今にも入ろうとしていたナーシエの腕を浩介が掴み、慌ててナーシエは足を止めた。

「な、なに？」

「この建物は危険かもしれない！ 早くこの場から、——ッ！！」

刹那、激しい爆音が建物から響き渡った。

「——！！」

「イヤあッ！！」

「伏せろ！！」

浩介は建物から少し離れた所までナーシエ達を引っ張ると、その場で二人に覆い被さるように地面に伏した。

一度ではない。二度、三度と爆発音が響き、建物は粉塵を巻き上げながら哀れに崩れていく。

その衝撃と爆風が射程圏内にいる浩介達を包み、その威力の壮絶さを体感させるには充分な程だ。

爆発が終わった後は一気に静寂へと変わった。先程までが耳を塞ぎたくなるような爆音だったため尚更静けさが際立つ。

粉塵が撒い視界の悪い中、浩介はゆっくりと立ち上がった。ナーシェが愛理を抱え込み、愛理は両耳を塞いで震えていた。

「……………大丈夫か？」

愛理を抱えるナーシェは地面に倒れたまま、浩介に顔を向け頷いた。

「うん……………なんとか……………」

特に怪我を負っている様子は見受けられないので、浩介はホッと胸を撫で下ろす。

『爆撃失敗。ターゲットは生存しています。再び攻撃します』

浩介に気付かれた瞬間、慌てて爆破を実行したが、空から状況を見ていたパイロットが生存していることを告げそのまま攻撃態勢に入った。

「二人とも立て！！ 二撃目が来る、急げ！！」

それを見ていた浩介も慌てて二人を立たせ、次は建物とは逆の折町の方へと走り出す。

爆発で舞い上がる噴煙の中を駆けていく三人の姿を捉えたパイロットは容赦なく攻撃を再開する。

再び繰り出される銃弾の雨に浩介達は余裕を失い追い詰められていった。

「チッ！ クソがッ！！」

前後左右紙一重の場所に銃弾は着地し、いつ殺されてもおかしくない状況の中を走る浩介は苦言を口にする。

この現状を打開する方法は二つ。

一つは戦闘機を不能にすること。その為には浩介の持っている異世界の武器を活用するしかない。

威力、射程、効果などは使ったことのない浩介もわからないが、頼るべきものはそれしかない。

その代わり後々そんなオーバーテクノロジーの代物を持っていることが問題になってくる。

もう一つはこの場から逃げ切ること。人通りの多い街にさえ出れば相手も無茶な攻撃は出来ない。隙を見てフィーガルに戻る事ができればいくらかでも立て直すことが可能になる。

成功法でいえば当然後者だろうと浩介は考える。

浩介とナーシェだけならまだ前者でもいけるかもしれないが今は愛理もいる。空の敵を落とすには些かりリスクが大き過ぎる。

そう考えた浩介はこの場から逃げ切ることを前提にして、折町の方へと向かっていった。

「逃げるつもりか、高崎浩介。この戦略からは逃げ切れないのになあ」

浩介の進路を見て、ほくそ笑みながら独り言のように呟いた折町は携帯を耳に当てる。

「プランBに移る。全員配置に付け」

折町が携帯をポケットにしまう頃には、フェンスを囲むように戦闘員が配置された。その数ざっと三十人。全員がライフルやらショットガンやらを構えている。

戦闘機が攻撃を始めてから配置についた為、注意を促せず気づけなかった浩介は顔をしかめた。

どうやら逃げることにすら困難なようだ、と思いながらも足を止めることは出来なかった。走っているからこそ空からの攻撃も命中率が低下してはいるが、それが止まった標的に変わればかなりの確率で蜂の巣になってしまう。

「コウちゃんどうするの!?!」

とはいえ前方の敵を見ても空の脅威と大差はない。このままだと三人の末路は決まったも同然なのである。

「二手に別れるぞ! 俺が囫になる。ナーシエ達は横に逸れろ!」
「……………わかった!」

考えてる時間がないのはナーシェも同じだった。苦渋の選択で浩介の提案に同じたナーシェは愛理の手を引き右へと進路を変えた。

一方の浩介も瞬時に左へと進路を変える。

「先に高崎を狙え！！ 女二人は戦闘機に任せる！！」

二手に別れたことにより戦闘員が困惑する前に折町は指示を出した。その指示を受けた戦闘員も動揺することなく攻撃を開始する。

浩介はそれを回避すべく、人一人隠られる瓦礫へと身を寄せた。

激しく鳴る銃声。そして銃弾によって削られていく瓦礫。

容赦ない攻撃をこの瓦礫ひとつで防げるのも時間の問題である。

浩介は空を見上げ戦闘機が自分に向かってきていないことを確認すると、ホッと胸を撫で下ろし、すぐに頭を切り替えた。

「さて、どうするか……」

浩介はコートのポケットに入れている通信機を手で触りながら相手の上をいく戦略を考えていた。

実はもう手は打っているのだが、要はその使い方が問題だった。

如何にローリスクハイリターンでこの場を凌げるか、と冷静になった頭を回転させるが、考えれば考えるほどそれ自体が浅はかだと思えてならない。

「ローリスクなんて、言ってる場合じゃないか……」

苦渋の決断をした浩介は通信機を握り締めた。

浩介とナーシェがフィーガルから出て三十分が経過し、モニターに映る二人の現在地を印す点滅ポイントを見ながらロゼは溜め息を吐き出し椅子に深く腰掛けた。

「なんだかんだいって、リーダーも楽しんでるのね」

その点滅がゆっくりと移動し、ふとした所で止まったりしていることを考えれば、本気でデートっぽいデートをしているのだろーと思える。

あくまでそれは批判の思考ではなく、ナーシェにもそんな一面があるのか、という微笑ましい想いからである。

「リーダーが楽しんでいる、というのは本当だろうが、それだけで行動する人じゃない」

ロゼの独り言を聞いていたジョスライが背後から声を掛けた。

「どっついうこと?」

「ロゼはあの人と組むのは今回が初めてだからわからないだろうが、俺は何度か組んだ経験がある。その中であの人が考えなしの行動をしたことは一度もない」

そう言つてジョスライはロゼの横に立つとモニターを直視した。

「何か考えのある行動だということ？」

「多分そうだろう。彼と話したいことがあったのか、もしくは彼を一つの駒として操ろうとしているのか……」

「操る？」

思わず見上げるロゼにジョスライは頷く。

「昨晚、リーダーがセードル総司令官とやり取りしているのを目にした」

「総司令官と!？」

思わぬ人物の名前で、ロゼの口調も大きくなる。

セードル総司令官とは、ナーシェ達の惑星の軍事機関を表立つて管理する立場の人間である。その為、軍事機構に属する立場の人間は誰しも知っている名前であるのだ。

確かにこの作戦はセードルも参加した重役会議によって実行された内容だが、その指揮を担ったのは彼より下の立場の人物である。つまり報告もその人物にする予定であり、その人物からの指示を仰ぐ筈だった。どちらかといえばセードルはナーシェ達の惑星に危惧する抗争を重要視し、その方面での指揮をしている。

バラリア人がこの地球という星で何かしらの企みがあるとしても、

専任の指揮官を超えて軍事のトップに立っているセードルと直接話すことなど普通ならないのである。

「確かに通信でそう言っていた。全て聞いていたわけじゃないから内容までは知らないが、何かあるだろうな」

「ナーシェさんがコースケさんを裏切るというんですか!？」

二人の会話に混ざったカイは信じられないといった顔で声を荒げる。

「そうは言っていない。お互い目的は同じだし裏切るということはないだろうが、“こっち側”もコウスケを利用する可能性はある、と言っただけだ」

「そんな——!!」

「カイも彼女のやり方は知っているだろ？ 利用出来るものは限りなく利用する。任務遂行の為に手段は問わない。彼女に失敗はない。その実績で今の地位にいる」

「『不落の策士』、ナーシェ・バレンシア。その評価は知ってるけど、これから見物ね」

ロゼはクスツと笑うが、カイは依然難しい表情だ。

「でも、ナーシェさんは誰よりも仲間を大切にします。自ら仲間にしたコースケさんを利用するなんて……」

「それは俺も確信がないから何とも言えん。要はその可能性があることを知っておけばいい」

「そうね。問題は総司令官と一体何を話していたのか、ね。恐らくただ事じゃないわ」

ロゼの言葉にジョスライも同意したように頷く。

「まあリーダーが何も言ってこないあたり、急を要することでもないだろう。今俺達は流れに身を任すしかない」

「……………」

“不落の策士” ナーシエ・バレンシアの名前はカイ達の所属する国の軍事機関の中では有名な通り名である。

弱冠十六歳で魔法の才能を認められ国の軍事機関に入隊したナーシエは、血の滲む努力で更なる魔法の腕と戦闘技術を身に付けていった。

周りからの評価は、女性にしては頑張ってる、という程度であったが、二年、三年と経つにつれナーシエの隠された才能が浮き彫りになってくる。

ナーシエが参加したチームはどんな悲惨な状況になっても必ず任務は遂行して帰って来ていた。ましてやチームリーダーすら命を落とすような難易度の高い任務の時でさえ、ナーシエ一人で任務を終わらせ一人で帰って来たこともある。

勿論、ナーシエが努力で培った戦闘能力というものもあるが、それだけで生きていけるほど甘い世界ではない。名を知られる多くの強者達でさえ、一つのミスで命を落としていく。

それが惑星を賭けた戦争という厳しい現実である。

だが、名も知られていないナーシエが次々と功績を上げている実績を見た上官は、そこで初めて彼女の絶対的な力を見つけた。

状況判断、戦闘力、そして相手の考えの裏を見抜き、その裏を突

く策略。

そこからナーシェが任務責任者に昇格するまで時間はかからなかった。

そしてそれから一年後、入隊して間もないカイは初めてナーシェと同じチームになる。そこで一生忘れることのできない体験をカイはすることになった。

「ナーシェさん……」

カイはその時を思い出し、ボソツと呟く。

「二人が走ったわ！」

昔に浸っていたカイを現実へ引き戻したのはロゼの大きな声だった。

確かにモニター上の二つの点滅は速いペースで移動している。

「何かあったのかしら？」

「通信は？」

「やってみる」

ロゼはとあるボタンを押し、ナーシェの持っている通信機へ呼び出しを試みるが、応答が返って来ることはなかった。

「ダメね。気付いてないのかしら？」

「取れない状況、というのも考えられる」

重い口調でジョスライがそう言うと、動揺したカイがいち早く反

応ずる。

「た、助けに行かないと！」

「落ち着け！！」

今のカイでは冷静な判断が出来ないと直感したジョスライは、何をしでかすか分からないカイの腕を強く掴む。

「勝手な行動はするな！ 何かあれば向こうから連絡してくる筈だ。お前が慌ててもどうにもならん！」

ジョスライの力強い口調でカイは動きを止め、そして徐々に落ち着きを取り戻す。

「……………すみません」

俯いたカイの腕を放したジョスライは、溜め息をつき頭を掻く。

「いや、俺も不安にさせる事を言った。すまん」

「落ち着いたならこれを見て。二人は広い場所へ移動したわ。何かの広場かしら…………？」

詳細な地図と照らし合わせてもその場所が何なのかは分からない。わかるのは浩介達が真っ直ぐその場所に行ったという事だけだ。

「広い場所、そして街からも離れている。何かあったと考えるのが無難だな」

「そうね。あなた達も出動の準備をしておいた方がいいわ。私は念のためいつでも転送できる準備しとくから」

「そうだな。カイ、準備しとくぞ」

「はい！」

カイとジョスライは部屋で寝ていたセリアと、武器を磨いていたドルゴに事情を説明し、十五分で準備を終わらせるとコントロールルームへと集まった。

「状況はどうだ？」

ジョスライは素早くキーボードを打ち込んでいるロゼの隣に移動し、十五分間の変化の有無を確認する。

「二人はまだあの場所にいるわね。変化は——あったわ！通信よ！これはコウスケくんね」

ロゼは急遽入った通信に即座に対応する。

「こちらフィーガル。何かあったの？」

『めんどくさい状況になった！いつでも出れる準備をしておいてくれ！詳しくはまた連絡する！！』

そこで浩介からの通信は切れた。その口調からもかなり切羽詰まった状況だと思えるが、今は浩介の言う通り待機するしかない。

溜め息をつくロゼはくるっと椅子を回し、メンバーと向き合う。

「ということみたいよ」

「こりゃ戦闘になりそうだな。なあドルゴ」

ドルゴをからかおうとしたジョスライだったが、珍しくドルゴが難しい顔になっていることに気付く。

「どうしたドルゴ？」

ドルゴはあまり感情を表にだす人物ではない。何度か同じチームで組んだことのあるジョスライですら、難しい顔をしているドルゴを見るのは初めてだった。

ドルゴは所謂戦闘狂といわれるタイプである。普段は無表情で無口な彼だが、戦闘になると笑みさえ漏らす。あまり考えず敵に突っ込んでいくことからナーシェとは真逆のタイプであるが、戦闘の機転となる場面ではナーシェと同様に頭がきれる。

そんなドルゴが戦闘以外で表情を変えるのはかなり珍しいことだ。

そしてドルゴはジョスライと顔を合わせた。

「あの人が、こんなミスをする？」

ドルゴの言わんことはジョスライも察する。

「リーダーのことだろ？」

「そうだ。自分から出て行って面倒事に巻き込まれ、終いには戦闘もある状況。彼の戦略とあの人の戦略が噛み合っていない」

浩介がこのメンツを出動させなければならない程の戦況であれば、異世界から来たという事を隠すのは難しい。浩介とナーシェだけでは打開することが不可能と考えれば、こちらも異界の武器を持ち応戦する他ない。

そうなれば当然その異質さはバリアリア人にも伝わり、浩介の言っていたこの星を守る戦略からは大きく遠退いてしまう。

ではこの状況を招く“きっかけ”は何だったのか？

答えは当然、ナーシェの言動からだ。

ナーシェを知らない人ならただナーシェを責めるか、しょうがないこと、と先を考えるのだろうか、ここにいるメンバー全員そんな考えは持つておらず、一つの確信が生まれていた。

——これは“不落の策士”ナーシェ・バレンシアの策略だ、と。

「リーダーがコウスケを追い詰めるような行動をしたメリットは？」
顎に手を付けながらジョスライはドルゴに問う。

「無い」

そしてドルゴは間を空けることなく答える。

「俺達の存在をヤツらに教えることのメリットは？」
「それも無い。全くといっていいほど矛盾している」

いくら考えても浩介どころかジョスライ達にすらメリットがない。

勝利で終われば早く帰れるというのはあるが、その分真っ向勝負というイチかバチかの賭けであり、こちらが優位に進めることが出来る筈の“奇襲”という選択肢が失われることになる。

「何を考えてる……………ナーシェ・バレンシア……………」

ジョスライは膨らむ不安と疑惑を必死に抑え、苦い表情でモニタ―を見つめた。

戦闘機に追われた瞬間、浩介はフィーガルへ通信を入れた。

それから五分、いや十分ぐらいは経っただろう。その気になれば奴らを殲滅させることぐらい出来るだろう。だが、浩介は戸惑っていた。それで本当に良いのか、と。

先ず大事なものは命であり、今を開き出来る策としては彼らに来てもらうのが一番手っ取り早い。リスクは考えないと決めた浩介でも、やはり総力戦を決断するには些か躊躇してしまう。

ジョスライ達を呼ぶタイミング、役割を考える中でやはり最低限リスクを抑えて打開したいというのが本音だった。

自分を防いでくれている分厚い瓦礫もかなり削られている。ナーシエ達も戦闘機の進路を考えながら走り回っている。しかしナーシエはまだいいが、愛理の動きからして限界が近い。今もナーシエが手を引っ張ってなければその場に倒れ込んでいるだろう。

——考えてる時間はないか……

浩介は意を決して通信機を取り出した。

「どんな感じかな、折町君？」

「！？」

通信をしようと口に近付けた時、銃声の合間に男の声を耳に入れ、浩介は瓦礫から少し顔を出す。

「ああ、グランさん。作戦通り追い詰めてますよ。彼はあの瓦礫に隠れています」

そういつて折町は浩介の隠れている瓦礫を指差した。

「ツチ！ あいつかよ……」

益々厄介になっていく現状に浩介は苦虫を噛む。

「それで、あの二人は？」

グランが顔を向けるのは、走り回るナーシエと愛理である。

「ひとり俺がこの作戦の為に依頼を受けた一般人。もう一人は高崎浩介を匿った協力者です」

「協力者……」

ナーシエを見るグランの目が鋭くなる。

「今は上手く避けていますが、それも時間の問題でしょう。何なら高崎より先に殺しましょうか？」

折町はニヤリと笑みをつくった。

「いや、高崎だけ殺すことを優先してくれ。楽しみはとっておこう」
「全員攻撃を維持したまま高崎へ近づけ！！ 絶対に逃がすなよ！

「！」

そう命令すると、戦闘員はジワジワと前進していく。

それを見た浩介は再び通信機を口に近付け、フィーガルへ連絡を入れた。

『大丈夫なの！？』

「今後次第だ。一度しか言わないからよく聞いてほしい！！ 先ずカイとジョー、ドルゴは近くに降り立ち後ろから敵を全滅させてくれ。敵はおよそ三十。全員こっちでいう銃を持つて。流石に数が多いから固まり過ぎないことだ！ 同時にセリアは違う場所に降り、空飛ぶ戦闘機を撃墜してくれ！！ 方法は任せる。ナーシエの命が掛かっているから正確に頼むぞ。ロゼはいつでも転送収容出来るよう準備——なっ！？」

『えっ？ な、なに？ どうしたの！？』

早口で伝えている途中、ふと視線を変えた浩介の目が捉えたのは、愛理を爆破された廃墟の隅に隠し、堂々と戦闘機を見上げるナーシエの姿だった。そのナーシエの手には、隠して持って来ていた浩介と同じエネルギーガンが握られていた。

「ナーシエ——！！」

何をしようとしているかは一目で分かる。

そしてナーシエはエネルギーガンを正面に構え引き金を引いた。

銃口にエネルギーが密集し、瞬く間にそれは一本の細い光線となつて戦闘機に向かっていく。

躲すことも出来ず、外すこともなく、光線が当たった瞬間機体は赤い火の手と同時に爆発した。

「転送しろ！！」

浩介は通信機にそう言うのと瓦礫から少し身を出し、エネルギーガンをグランへと向けた。

絶対に逃がしてはいけない相手がこのグランである。

戦闘機が粉々になって墜落していく様を、銃を撃つことも忘れ啞然と見つめている戦闘員の間をつき浩介は抹殺を試みる。

そして同じくナーシェもグランへとエネルギーガンに向けていた。完全にニット帽とネックウォーマーを外し、顔をさらけ出すナーシェは睨むようにグランを見据えている。

どちらとも合わせた訳ではないが、二人が撃ったのはほぼ同時だった。

二本の光線が真っ直ぐグランに向かっていく中、彼は不適に笑みを浮かべていた。

「バリア計画、ここにて開幕だ」

別段驚く事もなく、避けようとする事もなく、グランはバリア計画の実行を口にする。

今の現状を作り出したのも、実は彼の編み出した策である。

折町はただその駒として実行指揮をとっただけに過ぎない。全てはグランが組み立て、またその全てが計画通りに進んでいる。

だからこそグランは余裕の笑みを浮かべ、二本の光線を見ているだけにとどまることが出来た。それは自分でどうにかしなくても打開できる算段を踏んでいるからだ。

そして浩介達の攻撃はグランに届く直前で大爆発を起こす。

先程のナーシェの攻撃した光景を思い返せば何かが違うと感じた浩介は目を凝らしてその場を見る。

煙が晴れた時、グランの前に一人の男が右手を突き出し立っていた。

その男の前方は大きなクレーターが出来ていて、男が傷を負っている形跡もない。

あの攻撃を右手一本で防いだのだと理解した浩介の額からは冷や汗が流れ落ちる。

全てにおいて先手を取られたもどかしさと、バリアリア人の実力を思い知らされた劣等感が浩介の今の率直な気持ちであり焦りだった。

男の前に移動したグランは笑みを浮かべたままナーシェを見据えた。

「ようこそ、“不落の策士”ナーシェ・バレンシア」
「――！！」

知られている事に驚く浩介をよそに、ナーシェは表情を変えなかった。

そしてグランはナーシェを指差した。

「キミでも、油断することあるんだね」

「——ッ!？」

その言葉を皮切りにナーシェの背後にまた新たな男が現れ、そして持っていた剣を突き出した。その動きは素早く、確かなる殺意が込められている。

咄嗟に振り返ったナーシェの反応も虚しく、剣はナーシェの胴体を貫いた。

太陽も沈み薄暗くなった廃墟で、ナーシェがゆっくりと崩れ落ちていく光景が浩介の目に焼き付いた。

うたかたのような4

都心部から離れたとある場所。

そこはかつて緑溢れる小さな森だった。小鳥が囀^{さえず}り、野生動物も身を寄せていた命の宝庫、自然の要塞だった。

しかし、今となればそれは全て過去形でしかない。何故ならその場所は森の面影もないのだから。

そして森とすり替わるように建てられている巨大な建造物。

——人工の要塞、
“神羅城”^{しんらじょう}——

その姿は城と塔の融合体。お城のような角張った造りが地に腰を付け、その中央から円形の塔が空に伸びゆくように聳^{そび}え立つ。城だけ見ても、塔だけ見てもそのどちらも息を呑むほど大きい。その外壁はメタルのような光沢感と、淡く輝く発光に包まれる。

約十年の歳月を経て完成した神羅城はこの世の頂点に立つかのよう
に異質な存在感を醸し出していた。

この城こそがバリア計画最大の切り札であり、絶対の力を見せ
付ける神の要塞といえる。

そんなものが何故世間に知られていないのかは、彼らにしたら極
簡単な方法をとっているからにすぎない。

それが魔術である。

彼らに与えられた特別な力、魔力を利用すればそれすら可能となる。

自然の力を具現する“魔法”と、物や人へ影響を与える“魔術”。その魔術の仕様で人の目には変哲のない森にしか映らない結界が張ってあった。

一般的に“魔術”は“魔法”よりも希少価値が高いと言われている。

魔力の練り方と具現効果が魔法と全く違う為、魔術を行使するには天性的な才能が必要となり、それでいて難易度も高い。

即ち、才能があつたとしてもその難易度故に魔術を行使出来ず挫折する人も多いのだ。その中で魔術を自分のものにできる人の割合は百人中一人いるかないかというレアスキルでもある。

そしてこのバリア計画が成せるのも、神羅城を包む結界を張れる強力な魔術師がいるからである。

「センドリース」の連中に“気付かれた”ようです」

神羅城の最上階、王の間と呼ばれるその場所で男は王座に座る主君を前に片膝を床につけ畏まった態度で返答を待った。

壁面には光を灯すランタンのような物が幾つかあるが、さほど強い明るさではないので薄暗い。それは目の前にいる神羅城の主が好む明るさであり、何より電気ではなく彼が扱う魔術によって介されている。

それ故に主の顔色などは窺えないが、白い歯を見せ笑みを浮かべている様子は感じ取れた。

「フハハ、かまわんさ。今更知ったところでセンドリースの奴らに邪魔はできん」

「すでにこの星に来ている偵察隊にも伝わっているかと……」

「そっちはグランに任せてある。ヤツなら巧いことやるだろう」

膝を付いていた男はその体勢を解きスツと立ち上がる。

「そうでなくては困りますね。グランの尻拭いをするのは御免ですから」

男は俄に口元を吊り上げ、サラリとした銀色の髪をかき上げた。

彼の整った顔立ちとサラリとした体型、愛用する袴のようなゆつたりとした服装。その見た目からは想像出来ないほど威圧ある雰囲気漂わせている。

「フハハハ！ そんなお前がいるからゆっくり計画を立てられるというものだ」

「その計画も後は実行に移すのみ。“ディノラド”もこちらの勢力になった今、センドリースに勝ち目はないでしょう」

その言葉で主は満足そうに頷いた。

「後はお前に任せる。失敗は許さんぞ」

「失敗？ 本気でそんな心配をしておられるのですか？」

男から苦笑が漏れる。

「………… お前にではなく、他の奴らに伝えとけ」

「そうなれば私が動けばいいだけの話。こんな簡単な任務もこなせない役立たずはあなた様には必要無いでしょう」

主は僅かに目を見開き、男を見る。

自分の右腕でもある男の自信溢れる口調は主も聞き慣れたものであるが、それでも驚きある言葉だった。

「ほう………… お前が動くとは珍しい。血に飢えているのか？」

「そんな醜い理由ではありません。これはあなた様の野望であり、同時に私の全てでもあるのですよ、“魔皇帝”」

そう言い返した男はクルリと踵を返し歩を進める。

去っていく男の背中を見て、魔皇帝は小さく笑った。

「全て、か。相変わらず読めんやつだ」

その呟きは男に届くことなく闇へと消えていった。

突如として現れた二人の男。

ひとりはグランをエネルギーガンの攻撃から守り、受け止めた男。長い黒髪を後ろで纏め、綺麗な白い肌も見受けられることから、一目では女性とも思える容姿である。

そしてもうひとりは、気配無く現れナーシェの背後をいとも簡単に取った無精髭の男。年齢はグランや先の男より高く見え、顔立ちも日本人ではなくヨーロッパなどで見かけるようなジェントルマンである。

そして今その男が問題点となっていた。男の凛々しい顔はその場に倒れているナーシェを射抜いている。躊躇や戸惑いなどという感情は浩介に一切伝わってこない。

それを証明するかのようにナーシェの血が付着した細身の剣が、男の意志で再び振りかぶられた。

「させるかっ！」

この現状についていけないのか、浩介に向け乱射していた銃弾の嵐はぴたりと止み、囲んでいた男達は自らの任務を忘れ啞然としている。浩介が瓦礫から飛び出しナーシェを殺そうとしている男にエネルギーガンを放つのは容易なことだった。

寸分の狂い無く放たれた光線に気付いた男は、振りかぶった剣の軌道を変える。

男が剣を振り下ろすと同時に浩介が放った攻撃は、バチバチという音と同時に分散して消えた。

「…………ッ！」

浩介もこれで倒せると思っていなかったが、それでもあっさり無効化されたことで表情は険しくなる。

ナーシエを助けるには無精髭の男をその場から退かすしかない。

しかし銃は無効化される可能性が高く、自分一人でどうにかできる可能性も皆無である。

それでも浩介は男に向かって走った。ただナーシエを助けたいという一心が、考えを上回ったのだ。

「ロージ、行け」

「はい」

グランの言葉で長髪の男はその場から消えた。

簡易転送装置を利用し、狙う相手は勿論浩介である。

走り続ける浩介の三メートル先に現れたロージは、剣の柄のような短めの棒を握り、それに魔力を込める。すると柄の先からワイヤーのようなものが出現し、それは五メートルはあろうかという長さまで伸びた。

それはれっきとした武器。鞭の一種で魔力を介して自由自在に扱

える優れものであるが、完璧に使いこなすにはかなりの集中力を要する為、戦乱の続くバラリアでもそれを使う者は極僅かである。

それを知らない浩介でも、リーチの長さで攻撃パターンの予想も出来ない未知なる武器に全神経を研ぎ澄まさねばならなかった。

ロージが割って入った事により、無精髭の男は再びナーシェに止めを刺そうとする。それだけは何としても止めなければいけない。

ロージの初撃を躲すことが出来ればまだ希望はあると、浩介は全てを賭けた。

そしてロージが鞭を持つ右手を振り上げる。

「オラアアッ!!」

刹那、横から現れた男の強烈な拳がロージに向かう。咄嗟に鞭の柄でガードするが、その力はロージを浩介の前から退かすには充分だった。

「ジョー!!」

「行け!!」

ジョスライは頷く浩介を見送り、僅かながら驚くロージと対峙した。

「う、撃て! 高崎を狙え!!」

咄嗟に戦闘員の一人がそう叫び、任務を忘れていた他の面々も我に返り銃を浩介に向ける。

「ぐああっ！」

「ヒイツー！」

「うわああ！」

銃を構えた戦闘員の後方から次々と悲鳴が上がる。その異常さ故に男達の視線は浩介から外れた。

「フンツ！ 手応えの無い奴らだ」

槍を振り回すドルゴは、戦闘員の数に気落ちすることなく叩き斬っていった。

普段なら楽しそうに槍を振るドルゴも、ナーシエの状態とバラリアの戦力も知っているので一切の手加減をすることなく、至って真剣な表情で戦闘員を蹴散らしていった。

「ドルゴ……」

その様子を見た浩介は、その先にいる男に顔を向けた。

ナーシエを後回しにすることを決断した無精髭の男は、近付いてくる浩介に狙いを定め剣を構える。

その構えを素人である浩介が見ても、研究所で闘った赤髪の男、カイザーの比にならない程熟練されていると分かる。

隙の無さ。力だけに頼らないであろうバランス感。ロージ同様読

めない攻撃手段。

ナーシェが直ぐ其処に倒れている中で浩介の焦りは高まっていた。

——しかし。

「邪魔はさせません！」

転送によつて無精髭の目の前に現れたのは、両手に少し短めの剣を持ったカイである。

カイは小さな動作だけで男に素早く剣を振るつた。それを剣で受け止めた無精髭の男に、もう一方の剣を振るう。

受け止めたカイの剣を力で弾くと、男は後ろへ回避する。

双剣で素早い攻撃を繰り出すカイも流石だと思えるが、不意をつくように現れたのにも拘わらずその攻撃をいとも簡単に防いだ無精髭の男の実力も相当なものである。

「早くナーシェさんを！！」

兎にも角にも男をその場から退かす事ができたカイは、それだけ言つと再び双剣を構え男を警戒する。

カイもナーシェを心配する気持ちが強いのだが、それを我慢してまで浩介に委ねた。今この男を止められるのは自分しかないと思つていてからだ。

そんなカイに感謝しつつ、浩介は無事ナーシェの元へ辿り着くこ

とができた。

「ナーシエ。おい、ナーシエ!!」

その場に膝を付き、倒れたナーシエを仰向けにさせるとナーシエの顔を両手で包み、自分の膝の上へ乗せる。

「おい、返事しろ！ ナーシエ!!」

腹部から大量の出血。息をしているので死んではないがそれも時間の問題だと直感する。

浩介はネックウオーマーをナーシエの傷口に強く押し当て止血を試みる。押し当てる浩介の手はすぐに溢れ出る血で染まっていく。

もう片方の手で通信機を取り出し、フィーガルへ呼び出しを入れた。

「ロゼ！ 今すぐナーシエと愛理をフィーガルへ転送しろ!!」
『今急いでやってるっ!! もうちょっと堪えて!!』

返ってきたのは大きく早口なロゼの声。その口調からはかなり焦っていると思えた。

これ以上ロゼと交わす言葉は今のところ無い。余計焦らせても逆効果だと思えた浩介はそのまま通信を切った。

「コウ……ちゃん……」

その時、弱々しくナーシエが口を開き浩介を呼んだ。

「ナーシエ、大丈夫か!？」

心配そうな顔を向ける浩介に満足するかのように、ナーシエは僅かに微笑む。

「ちょっと……油断、しちゃ……った……」

「すぐフィーガルへ転送させる。心配はいらない」

ナーシエを安心させようと浩介も落ち着いた口調で微笑んだ。

「ごめん、ね。こんな……はずじゃ……なかつたん、だけど……」

「……それについてはまた今度聞く。今は何も言わなくていい」

浩介はナーシエの背中と脚に腕を回しそのまま持ち上げた。あまり動かしたくはないが、この場で悠長に転送を待つのも不安がある。

ナーシエを抱えた浩介は、近くに隠れている愛理の元へ運びその場に寝かせた。

「白木。悪いが傷口を押さえといてくれるか？」

何も知らない愛理もただ動揺しているだけだったが、浩介の言葉にはしっかりと頷いた。

「それと、もう少ししたらもつと混乱するような出来事が起きるが、慌てず行動してくれ。今頼りに出来るのは白木しかないんだ」

その言葉にもしっかりと頷く。

「よし」

浩介は愛理の頭を撫でると、スツと立ち上がった。

「あんたの周到なやり方には脱帽したよ。知ってたんだな、ナーシエ達のことを」

その言葉はゆっくり接近していたグランに向けられていた。

一方のグランも浩介に気配を掴まれていることに気付いていたので、ただ笑みを浮かべるだけだった。

「最初からね。彼女達は気付かれていないと思っていたみたいだけど、この星に着く前に情報は届いていたよ」

「はっ！ 俺の考えは骨折り損だった訳か」

どれだけナーシエ達の存在に気付かれないよう行動を考えてきたか、と振り返った浩介はその愚かさに失笑するしかなかった。

「どんな考えをしていたのか是非聞きたいところだな」

「どうやってあんたを殺すか考えてたんだよ」

「おお、怖い。それで、出来そうかな？」

「殺すさ。――絶対に」

浩介の顔から笑みが消えた。

「悪いけど、今の俺には君と遊んでいる暇はないんだよ。もう一つやらなければならぬ任務があるんでね」

「依頼屋でも潰しに行くのか？」

「……鋭いねえ。確かに依頼屋潰しは今夜から決行だ。だが残念。そっちは違うヤツらに任せてあるから、俺は違う目的になる」

グランはそう言うと、視線を浩介の後ろへと向けた。

「ッー！」

後ろには勿論ナーシエと愛理がいる。ナーシエを殺すことが目的だと思った浩介はグランを警戒しながら後ろへと意識を向けた。

しかし、そこには淡い光に包まれた二人がいて、その姿は一瞬で消えていった。

——転送が完了したか。

それは確かに転送の光だった。ひと先ず安堵した浩介は視線をグランへと向けた。これでヤツの目的も果たせない、と心の中で思いながらも、グランは依然笑みを浮かべ焦っている様子もないことから疑問符を打つ。

「ナーシエに関して、って訳じゃなさそうだな？」

「ああ違うね。如何に相手が“不落の策士”であっても戦力はこちらの方が上。今すぐどうこうする相手じゃないんだよ」

「不落の策士………？」

「聞いてないのかい？ そう呼ばれているんだよ、彼女。こちらとしても数々の部隊が彼女によって犠牲になったから結構有名だ」

「へえ、それであんたらも警戒してたのか」

「……わかるのかい？」

「当然だろ。たかだか俺ひとりに主戦力三人も必要ないからな。それに“こっち”の軍も利用するほど準備周到。それもこれもナーシ

エを恐れての戦略だろ」

「否定はしない。彼女は頭が良いし、能力も高い。だから彼女の読みが届かない方法を取らせてもらった」

「悪いが俺はあんたを此処で殺すつもりでいる」

浩介はエネルギーガンを強く握り締める。

「確かにこの惑星のレベルから考えれば君は強い。あのジジイもそうだった」

グランの言葉に浩介はピクリと反応する。

「…………マスターか？」

「よくは知らないが、多分その人だろう。あの人も強かったよ。危うく負けるところだった」

そこで浩介はやはり死んだのはマスターだったと理解し、唇を噛み締めた。

良き理解者と、落ち着ける場所を自分のせいで失った責任が浩介に重くのし掛かり、次第にそれは憎悪に変わっていく。

「俺が仇を取る」

呟いた浩介はグランを睨み付けた。

一度はグランを追い詰めたことのある浩介からしてみれば、他の奴らより幾分戦い易い。それはグランも知っている筈だが、彼に焦る様子は全く無い。

「あの時の俺と同じだと思わないほうがいい。君を倒すのは今の俺には簡単だ」

「今度は武器でも持ってきたのか？」

浩介の的外れな言葉でグランは余裕の笑みを見せた。

「俺の強みはそこじゃない。少し見せてやろう、異界の壁を」

グランは浩介に向かって手の平を向けた。

「同じ攻撃が通用すると思うなよ!!」

学園で経験した魔力の放出。あの時と何も変わっていない攻撃パターンに、浩介は躲すのを止め先手必勝の考えで一氣に距離を詰めようとした。

「あの時と同じだと、思ったかい？」

グランから放たれたのは魔力——ではなかった。

それよりも強力な力は浩介を包み込み、圧力さえ感じる衝撃で十メートルは弾き飛ばされた。

瞬時に受け身をとった浩介は、その衝撃で咳き込みながらも顔を上げた。

「ゴホッ、ゴホッ……な、なんだ、今のは……？」

「今のはただ弾き飛ばしただけだよ。次は……殺す！」

「——ッ!!」

グランの声が聞こえたのは例の如く浩介のすぐ背後。

振り返るよりも早く地面を転がりながら回避した浩介はそのままの勢いで立ち上がる。

そして浩介の頬には一筋の切り傷が付けられ、そこから赤い血が伝っていく。

グランは繰り出したのは手刀だった。体勢を戻したグランは視線を浩介に向け口元を緩めた。

——何かがおかしい……

いくら強烈な手刀を繰り出したといっても、付けられた傷はまるで鋭利なナイフで切られたような痕筋である。隠し武器を持っているようにも見えず、浩介は疑問と共に流れる血を拭った。

「分からない、という顔をしてるね。だが、君には教えないよ」

そう言っただけで体勢を低く構えたグランはその場から消えた。

簡易転送装置を使ったのだらうと浩介は思い、いつもながら後方へ意識を集める。

だが――

「――！！！！」

グランは低い体勢のまま浩介の懐へ現れ、それと同時に手刀を繰り出した。

咄嗟に体を捻ることで回避した浩介だったが、着ていたコートの裾はそれに間に合わずグランの手刀が貫いていた。

すぐに反撃へ展開する浩介はそのまま体を回転させながらコートを脱ぎ捨て、それをグランへ覆い被せた後顔を殴り掛かる。が、僅かに一步遅く、グランは浩介と距離を開けた場所へ、そしてコートはハラリと地面に落ちた。

「そう、それが簡易転送装置の動きなんだかな……」

グランの行動に驚くこともなく、浩介は小さく呟き自分を納得させた。

簡易転送装置を使った場合は、今みたいな回避する時でも攻撃する時でも現れた時に僅かな隙が生まれる。それは浩介が経験から知った事実であり、間違いはないと確信があった。

だが、先程グランが消えた時は現れると同時に手刀を繰り出してきた。有り得ないその速さは簡易転送装置とは別物と考えてもいい。

浩介がそう判断した時、グランは右腕を振りかぶり勢いよく下ろした。

魔力を放出しただけなのか、誰かへの合図だったのか、瞬時にその真意を掴むことは出来ない。

だが浩介の脳は危険だと感覚的に察知し、身体が硬直していく。ヤバイと頭で思っても身体がついてこない。

その確かな攻撃の片鱗を浩介が垣間見た時には全てが遅かった。

空気が歪む。

グランと浩介の間の空気が、まるで蜃気楼を見るかのように歪んでいて、それは紛れもなくグランから浩介へかなりの速さで近付いている。

それに気付いた時、目の前に迫った“それ”に、硬直した浩介の体が反応出来る筈もなく、反応出来たとしても回避出来るタイムリミットは最早無い。

体で受け止めるしかないと覚悟した浩介は顔をしかめながらその時を待った。

ところが“それ”が浩介に届く瞬間、浩介の目の前に不思議なものが見えた。

何もない筈の空間に現れたのは白い光だった。その光は魔法陣のような丸い形を形成していて、浩介を守るかのように壁となって展開された。

ぶつかり合う双方はどちらも退くことなく、相殺すると同時に空気が弾ける音と爆風を生んだ。

「——クッ!!」

一番近場にいた浩介は腕で顔を防ぎながら地に足を付け、飛ばされないよう踏ん張るのが精一杯だった。

「……なんだ？」

「大丈夫？ コウスケ」

爆風が止んだ後、状況を整理しようとした浩介に向けられた声はとても幼い少女のものだった。

「セリア……」

浩介の少し横に立っていたのは黒のローリータファッションに身を包んだセリアだった。

これが戦闘服なのか、私服の一部なのかはわからないが、初めて見るセリアのその姿は愛しい想いよりも魔法使いのようなしっかりとしたイメージを浩介は抱いた。

そのイメージとは裏腹に、セリアはトコトコと可愛らしい足取りで浩介に駆け寄った。

「今のはセリアが？」

「うん。間に合って良かった」

セリアは浩介に微笑み、すぐにグランへと顔を向けた。その眼からは優しさが消え、冷たい視線を放つ。

「ナーシエはあの人が？」

「……ああ。元凶はアイツだ」

セリアの雰囲気が変わったのを感じながら浩介は答えた。

「そう……」

セリアはグランに一步近付く。

「許さない」

「セリア……」

ナーシエのことを考えればセリアの気持ちもわかる。セリアにしてみればナーシエは母親代わりのような存在である。セリアが感情を露わにするのも致し方ない。

「話はずいたかい？」

セリアの冷たい視線を受け止めながら、グランは微笑みながら口を開いた。

「あなたはわたしが倒す」

「キミの“創造の具現”の能力を使つてかい？」

「——！！ 何で知ってるの？」

セリアは驚いた顔に変わる。

「キミのことは何でも知ってる。さっきのはシールドを創つて防いだね。一般的な防御魔法で俺の攻撃を全て防いだのはさすが“具現の力”、と言いたところだが、その能力からすれば些か勿体無い使い方だ」

「……どういう意味？」

「キミはその力を使いこなせていないということだ。如何に具現の力があるうと、創造の力がなければ宝の持ち腐れに過ぎない。今のキミに俺は倒せない」

「それでもナーシエを傷付けたのは許さない。あなたは倒す！」

セリアの頭上には幾つもの氷の刃が現れる。その数は二十にも及び長さは一メートルある。グランの逃げ道を奪う程の光景に浩介は

言葉を失う。

しかしグランに動揺はない。

「アイスエッジ……確かにその数は魔法の比ではないが、創造というには程遠い」

「うるさい」

セリアがグランへ指差すと同時に氷の刃は一斉に動いた。

「それはキミの本当の力じゃないよ」

全く動かないグランを見て、勝負あったと言いたかった。浩介がグランの立場だったら為す術なくそう思っただろう。

だが現実を受け入れなければならない。

氷の刃がグランに当たると思った時、鋭い先端は見る見るうちに砕け散りあつという間に二十本あった氷の刃が粉碎されたのだ。

氷の欠片となって煌びやかに落ちてくるその様をセリアは啞然と眺める。

「ん……もう一回！」

「無駄だよ。本来の使い方を知らないキミは弱い。そんなんだからキミはナーシェに戦力として見てもらえないんだ」

その言葉はセリアの心に動揺を与えた。

「そ、そんなことない！ ナーシェはいつでも一緒にいてくれた！

任務にも連れて行ってくれた！」

「それはキミに別の使い方があったからじゃないのか？ “創造の具現”の能力は使い勝手がいいからねえ」

「そんなこと——」

「ないと言い切れるかい？ 困ったことがあつたらキミの能力に頼ったことも何度かあるだろう？」

「それは……」

「キミも知っている筈だ。ナーシェ・バレンシアが何と呼ばれているか？」

「……不落の、策士……」

「そう。キミは彼女に上手く操られているだけだ。都合の良い駒として、自分の盾として、利用すべき時に利用されているだけだ」

「ちがうちがうちがうッ！！！」

頭で否定はするものの、清らかでまだ未熟な心を乱された影響は大きくセリアの目から涙が零れ落ちる。

「違うないさ！ そうでなければキミと一緒にいる理由が無いんだよ。ナーシェ・バレンシアはそういう女だ！！」

「う、あ………アア………」

ポロポロと涙を零し、ついにセリアは膝を付いた。

そのやり取りに口を挟めなかった浩介は、顔をしかめながらセリアに歩み寄った。

「セリア！ ナーシェはそんな人じゃない！！ それはお前がよく知っている筈だ！！」

肩に手を掛けようとした時、震えるセリアがピクリと反応した。

そして――

「イヤアアアアア——！！！！！」

セリアから発せられた悲鳴。そして何もかも拒絶するかのよう
にセリアの周囲に具現する衝撃波が浩介を吹き飛ばした。

「クッ！！」

体勢を整えながら着地した浩介はすぐセリアに顔を向けた。

セリアを守るかのような歪な黒い靄が周囲を包み、とても近付ける状態ではない。

「セリアッ！！ 全てはそいつの虚言だ！ 冷静になれ！！」

「あアア……」

浩介の声が届いている気配はなく、セリアはただ泣くだけだった。

そしてそのセリアへとグランは歩み寄って行った。

「お前の声はもうこの子には届かない」

「——ッ！ お前は何がしたい！？」

「この子に現実を教えたただけだ」

「それが現実だって言いたいのか!？」

「ふん、知らんな。俺には全く興味無い話だ」

グランは黒い靄の手前で立ち止まると、セリアに向けて手を翳した。

「お前ッ！！」

グランの行動を見た浩介は慌てて駆け出すが、次第に靄が晴れていき、その場には倒れたセリアの姿だけがあった。

意識の無いセリアを肩に抱えたグランは浩介に微笑みの顔を向ける。

「とりあえず俺の目的は果たされた。後は適当に頑張ってくれ」

そう言つとグランはセリアと共に光に包まれた。

転送する時の光だと直感した浩介は走りながら強く拳を握り締めた。

「セリアアアア！！」

大きく叫んだその声は転送されると同時に儚く消えていき、意識を失ったセリアに届く事はなかった。

その場に佇んだ浩介は、転送された空間をただ眺めた。

「セリア……………」

「まあ終わったことは気にするな。もう手遅れだ」
浩介に声を掛けたのは、他でもない折町だった。

「……………」

しかし浩介がその言葉に返事を返すことはなく、今まで以上に鋭い睨みを利かすだけだった。

守りたいもの1

電子音が一定のリズムで響き渡り、緊張感に包まれた室内では静かに作業が行われていく。

今では体が覚えているほど慣れた作業であっても、決してそれを軽んじたりすることはない。人体を扱う以上、それに伴う責任と重要性を知っているからである。

命に関わる危険性が高いわけではないが、いつも以上に真剣な幸村がそこにいた。

勿論いつも真剣に手術はしているが、それでも柴田を手術する重みは違っていた。

何故かは正直幸村にもわからない。

十年前の事件で同じ境遇を辿っていたことでの親近感かもしれないし、もしくはただ単に分かり合える友人としてかもしれない。折れた肋骨の接合手術はそれ程難しい手術でないにもかかわらず、幸村は多少のプレッシャーを感じていた。

「ふう……。接合完了だ」

手術服の幸村は大きく息を吐き出し、安堵した表情を見せる。

従来の手術である最終段階を無事にクリアし、全身麻酔で眠っている柴田の容体も良い。普通ならば今からメスで開いた皮膚の縫合に入るのだが、幸村の手術はもう一段階ある。その為幸村の表情も再び真剣なものに変わった。

「今から溶接に入る。気を緩めるなよ」

それは助手のメンバーに向けられた言葉だが、実は自分にも言い聞かせる為の言葉でもあった。

溶接手術とは、骨と強力に粘着する特殊な素材を使い無理矢理くっつける手術である。それを使えば瞬間接着剤のように簡単に繋ぎ合わせることができる。

当然だが只の接着剤より耐性は高く、従来の骨の強度並みの粘着力を持つので、正に骨の為の接着剤といえるのである。

しかしその接着にはかなりの神経を使わなければならない。

幸村が溶接と言ったように、その特殊な素材は粘土のような固体である。それを折れた骨の箇所につけ、小型の溶接器具を使って溶かすことで骨を接着させるのだ。

その作業には針の穴を通すような手先の器用さが重要になり、接着させる箇所、溶かす温度とそのタイミングを少しでも間違えば骨そのものにダメージを与えてしまう。

一般ではまだ認められていないその医療法を幸村はこの場所で確立させていた。通常一ヶ月掛かるところを三日で治すと言えたのもそれが理由である。

だがその手術にはやはりリスクも付いて来る。接着させた箇所に再び強烈なダメージを受けた場合、ただ骨が折れるだけでは済まず、硝子割れた時と同じ様に骨が粉々になって碎けるのだ。

そうなれば完全に治せる見込みはゼロになり、それ相応の激痛が

訪れる。あくまでその事については柴田も了承済みであるが、実際恐いのはそうなってしまった時だ。

その幸村の手術を受けた者は今まで数十人いるが、再びその箇所を怪我した者の死亡率は四十パーセントを超える。手術を受けた箇所にもよるが、その時の激痛でのショック死、または普段の生活すら困難になる後遺症で酷く後悔するかのどちらかとなる。

それを知っている幸村だから強制はしないようにしているが、手術前に考え直す人は依頼屋という職業柄非常に少ないといえる。それが人間の愚かな部分と言ってしまえばそれまでだが、その時手術をするのかしないのかはその人の意志を含めた時、正解なのか間違いないのかは幸村に判断は出来ない。

だからこそ幸村は今、柴田の意志を尊重してこの場所にいる。

「よし。次が最後だ……」

精神力が磨り減るような手術を完璧にこなし続け、あと一力所で完了というところまできた幸村はその集中力を維持したままその作業に取り掛かるうとした。

ところが、手術中にもかかわらず扉が開くと同時にとある人物が入室し、幸村含め助手のメンバーもそちらに視線を奪われた。

「……あなたですか。どうかされたんですか？」

その顔を知っていた幸村は、入ってきた事への疑念を感じつつも意識を柴田へと戻す。それを見た助手のメンバーもそれぞれの仕事

を始めた。

その人物は幸村の近くへ移動すると、患者である柴田へと視線をむけた。

「どんな感じかしら？」

「……そうですね。柴田君の状態は安定してますし、手術も問題無いです。この調子でいきましたらあと三十分程度で終える事ができるでしょう」

その人物——その女性が聞いてきた内容は柴田の状態なのか、または手術経過なのか読み取ることができなかった幸村はどちらにせよ対応できる返答を返した。

「そんな事を聞きに来たのですか？ 心配されなくても完璧に終わらせますが？」

凜と立つその女性に幸村は手を休めることなくそう告げた。

今の依頼屋組織が、戦力となってくれる柴田達を如何に歓迎しているかは幸村も知っている。その女性も柴田の怪我を心配して来ているのだと幸村は思っていた。

だが、女性の口からは幸村の思いとは裏腹な答えが返ってくる。

「それはそうでしょうね。あなたの医療の腕は本物ですから」

台詞染みた言葉だった。

ならば何故此処に来たのか？ 幸村がそれをそのまま尋ねると、

女性は軽く笑みをつくった。

「再確認したかったの。今の依頼屋組織に必要なのは強い戦力に変わりないけど、それを再生させるあなたの力も絶対に必要なのだと」
「幸村さんっ!!」

おもむろ
徐にナイフを出した女性の行動に助手の一人が大声をあげ、その声で手を止めた幸村は咄嗟に振り返り女性に顔を向けた。

驚愕以外何ものでもない。

女性がそんな行動を取る理由も分からなかったし、何より今まで勝手に抱いていたイメージからかけ離れていたからだ。

予想外の出来事に対処出来なかった幸村は、自分に近付いてくるナイフを躲すことも出来ない。

「止める!!」

そんな幸村を庇うように、先に大声で幸村に異常を知らせた男がナイフを持つ女性の腕を掴みその場に倒した。

「——ッ! 邪魔よ!!」

暫くもみ合った後、女性は男に蹴りを入れ、男が怯んだ隙にナイフを突き刺した。

「うつ!! ああっ.....」
「山下!!」

刺された男――山下は無残にもその場に崩れ、微かな呻き声をあげたあと動かなくなった。

血が床に広がる中、女性は直ぐに立ち上がり再び幸村にナイフを向けた。そのナイフにはべつとりと血が付着し、その場にいる他のメンバーにも戦慄を与えるには十分な効果があった。

悲鳴の上がる手術室。混乱した助手の女性人は当然のように手術室から出ようと逃げ惑う。他の男性も動揺しているのが見受けられ、適切な行動を取れる者は一人もいなかった。

「逃がすわけ、ないでしょ」

主導権を握った女性は殺人鬼に成り果てた。

手術室というのもあって、この部屋一帯は防音設備がされている。それが仇^{あた}になるとは誰も予想だにできず、その考えも結果論に過ぎない。

適切な行動が出来る者がいれば、間違い無く壁に設置されている緊急ベルのボタンを押すか、同じく取り付けられた内線電話で助けを求めただろう。

ただ残念な事に、医療部隊である面子にそういった訓練をさせたこともなければ、争いに慣れている面子でもない。幸村を含めそんな現場になってしまった時、冷静な判断を下せる人間は一人もいなかったのだ。

「そ、そんな……」

悲鳴で溢れていた手術室は一気に静寂へと変わった。

扉の横で重なり合うように倒れている仲間達からの声はもう聞こえない。

今部屋にあるのは、血なまぐさい臭いと、仲間達の無残な姿。そして振り返り血を浴びた殺人鬼の姿。

佇むことしかできなかった幸村は次第に恐怖を覚えていった。

「なぜ……なぜ、あなたがこんなことを………？」

振り返り血を浴びた女性はその血を拭うこともせず、微笑みながら幸村に顔を向けた。

「何故？ そんなの簡単よ。今日が記念すべき始まりの日だから。

私は元々日本を変えたいと思っていた。変わればいいと願っていた。今日がその日よ」

「依頼屋組織は、あなたの所属する組織はそれを担っている筈だ！
なのに何故……」

「あなた達はいつもの日本に戻そうとしているだけ。だけど私の願いは違う。根本から変わらなければ意味が無い。破壊と殺戮を行って今の日本は変わるのよ。それを手助けしてくれるのは依頼屋じゃなく、異界の人達よ」

「彼らは手助けなんてしようとしてない！！ 自らの欲望の為にこの地球を乗っ取ろうとしている！！ 緒方さんの近くにいたあなたなら知っている筈だ！！」

「勿論知ってるわ。でもそれが悪い事なの？ 日本人に任せているより異界の者に任せた方がよっぽど信頼できるわ」

「地球上にいる人類が消え去ってもか！？」

「それでも、よ」

「……あんたは狂ってる！」

幸村は震える拳を抑えようと強く握り締めた。

「結局最後に笑うのは支配した側の人間よ。所詮この世は弱肉強食。あなたもそう思わない？」

「思わない。あなたは命の尊さを知らないからそんな事が言えるんだ。僕等の生きてきた世の中は努力すれば報われる！」

「命の尊さなら……私だって知ってる。知ってしまったからこそ、今の日本を変えたいと願った」

女性の雰囲気が一気に弱々しくなり、その顔からは悲しみすら感じられた。

「……知っているならそんな考えにはならない筈です。過去に何があったかは知りませんが、ヤツらが地球を支配した時、あなたが無事でいられる保証はありませんよ」

再び顔を上げた女性は笑みを浮かべていた。

「構わないわ。命なんていずれは朽ちるもの。今の日本を変えてくれるなら私は生にしがみつくことはしない」

それは女性の本心であり執念でもあると幸村は感じた。

「……何があったんですか？ あなたをそこまで追い詰めるまでの理由はなんですか？ 今の日本の何に不満を感じているのか、良かったら話して下さい」

「フフツ。今度はカウンセラーのつもり？ だけどあなたに話すこ

とは無い。お喋りが過ぎたわ。悪いけどこれは決定事項。死んで貰うわ」

ナイフを構え近付く女性に、幸村は近くにあったメスを咄嗟に掴み上げた。

「僕を殺しても何も変わりませんよ。依頼屋組織はそんなに脆くない」

「いいえ、あなた達は負ける。だって彼等には勝てないから」

そこで素早く女性が動いた。突き出したナイフに戸惑いなんてなく、ただ幸村を殺すことだけを目的とした殺意ある行動だった。

メスを握っているとは言え、戦闘経験などない幸村は必死になってそれを躲す。

「それでも、僕は彼らと戦う道を選ぶ！」

柴田から離れるように回避する幸村の体が戸棚や机に置いてある医療器具などを薙ぎ倒し、それを気にかける余裕もなく追ってくる女性から逃げ回った。

「それが愚かだと言ってるのよ！ 彼らなら必ず違う日本を作ってくれる！」

「その期待こそ間違いです！ 辿り着く先は僕らの世界ではなく彼らの世界に変わる。日本もアメリカも関係なく彼らの星になってしまう！」

徐々に追い詰められていった幸村は壁際で逃げ場を失う。

「私は彼らに忠誠を誓った。彼らに支配される星になれば本望よ！」

女性は幸村との間合いを詰める。幸村も咄嗟にメスを振り回したが、女性のナイフがメスを弾き飛ばし、幸村は無防備な状態へと変わった。

「——ぐあッッ!!」

鋭い痛みが幸村の身体に伝わる。

密着するように目の前にいる女性のナイフは、幸村の腹部に深く突き刺さったのだ。

「あ、アア……」

苦痛に顔を歪める幸村の耳元へ女性は口を近付ける。

「あなた以外の医者は、もう全員殺したわ」
「!!!!!!」

僅かに目を見開いた幸村は、微笑む女性から後方の柴田へと視線を移した。

ここで幸村が倒れてしまえば、麻酔で眠っている柴田を殺すことなど容易に出来る。それだけは避けなければならない。

「ああアアアア——!!!!!!」

自分を奮い立たせるように叫んだ幸村はそのまま女性の肩を掴み、

力の限り押していった。

「なッ!!」

予想外の幸村の行動で、足がもつれながらも体勢を維持する女性は背中を向かいの壁にぶつけられた事で顔をしかめた。

格好でいえば先程と真逆の展開となり、幸村が女性を襲っているようなポジションである。

「あなたの、好きにはさせないっ!」

女性が背中を付いた壁の横には出入り口の扉を開ける認証キーがある。外側からは暗証番号を入力するか、カードキーを通す事で開閉する仕組みだが、内側からは『開』というボタンを押すだけで開くようになっていた。

幸村はそのボタンを押した。

「まだ、僕たちは諦めない……」

女性の肩を掴む幸村の腕に力が入る。爪が皮膚にめり込むような感覚で女性の顔も苦くなっていく。

その女性を強引に振り回し、廊下へ突き放した幸村は直ぐに扉を閉めロックする。

「いつか……あなた自身が救われることを……願っています」

扉のむこうにいるだろう女性に、幸村は額を付けながらそう言う

た。

彼女の持つ闇が晴ればその考えは間違っていたと気付けるのだと確信しているからだ。

そして幸村は非常ベルを鳴らした。警報を知らせるサイレンがけたたましく鳴り響く中、背を扉に預け、ズルズルと崩れ落ちていった。

脇腹に刺されたナイフは女性を突き飛ばした時、一緒に抜かれている。傷口から湧き出る血は幸村の太腿を赤く染め上げていく。

止血をしなければ、と医者の方村でなくとも思うことだ。だが医者であるが故に、幸村にはやらなければならないことがある。

「柴田君……直ぐ、取り掛かるから……」

それは柴田の残された手術である。

皮膚を切り裂き、完全に骨を接着させてない状態で柴田の麻酔が切れれば、意識を取り戻した柴田は絶叫するだろう。

幸村自身の怪我も致命傷に近いほどの重傷であるが、それでも柴田を優先したのは自分の限界を悟った直感と、自分にしかできないという責任感。そして柴田に嘘をつきたくないという決意からだっ

た。

「僕が治すと……言っただからね」

他の医者は全て殺したと聞いた時、幸村の頭の中に柴田の存在が

浮かんだ。そして覚悟したのだ。僕しかない——と。

そもそも今の手術が出来るのは幸村しかないが、それでも骨の接着だけ終わらせて、後の縫合は別の人物に任せるという選択肢は選べないのだ。

自分の身体は自分が一番良く分かる、というのはこういうことを言うのだらうと、幸村は消えつつある自分の命を実感しながら柴田の元へ辿り着いた。

寒気もあるし、意識も朦朧とする。当然痛みもあれば視界もぼやける。

満身創痍の中で幸村は培った感覚と助けたいと願う気持ちだけで柴田の手術を開始した。

あの時の父さんもこんな想いだっただのかな？ と、どこか懐かしさを感じながらも幸村は立ち続けた。

十五分経った時、幸村の身体から全ての力が抜けその場に崩れ落ちる。

「僕はやっぱり……父さんと母さんの、息子だったよ……」

まさか自分も最期の最後まで医者として終わる運命になるとは微塵も思っていなかった幸村は小さく笑った。無念さより満足感が強いのは、そんな人生を送った両親を見たからだろう。

「良かった……」

これが本望だと言うように幸村は目を綴じた。

『この子には人を守る強さと意志を持って欲しいの。だからこの子の名前は守まもでどうかしら？』

『守、か。いいんじゃないか。よし！ 今日からこの子は守だ！』

幸村守だ！』

『フフ……そんなに乱暴に抱き上げたら守が泣くわよ？』

『心配はいらん。私達の子だぞ？』

『あら本当。守、笑ってるわ』

『お前は立派な医者になれるぞ、守！！』

不思議と消えゆく意識の幸村にそんな両親の光景が浮かび上がる。

そして幸村の頬を一筋の涙が伝っていった。

享年三十三歳。平坦ではない短い人生だったが、幸せな想いを抱きながら幸村守の人生は幕を閉じた。

その部屋には完璧に手術を終えた柴田が眠っていた。

守りたいもの2

満月に照らされる中で、浩介はどうしてこうなったのかを模索していた。

執拗な戦略でナーシェを戦闘不能に陥れ、おとしい終いにはセリアを連れ去った。

それは浩介が何らかのミスを侵した結果ではない。ただ相手の戦略通り事が進み、相手の戦略通りに動いてしまった結果だ。別段浩介がどれだけ悔やもうがその結末は変わらない。

例えばあそこでナーシェが現状を打開させようと動きを止めなくても結局は追い込まれ、致命的な隙ができただろう。

例えば浩介が仲間に協力を求めなかったとしても結局は追い詰められ、殺されていただろう。

そして浩介だけでなく、ナーシェすら危機的状況にもなれば、浩介の指示がなくともカイ達は出向いていただろう。

結局は成すよう成らせたグランの戦略が上をいったのだ。

あの時点でバリアの新鋭が二人も出てくる考えもなく、セリアを狙いとしていることも頭にない。少しでもその考えがあればセリアだけ呼ばないよう対策していたのだが、それも今となってはどうしようもない。

浩介もそれは痛いほど分かっている。だからこそ悔しく、だからこそ情けなかった。

互いの勝負を決めるのは戦略だと分かっているながら先手を許した。完璧なるその先手に浩介は結果として完全なる敗北を喫した。

ナーシエは重傷を負い、セリアは問答無用に連れ去られた。今後バラリア勢と対抗するには些か代償が大きすぎる結果なのである。

考えているうちに一段と増していく悔しさは浩介の顔にも表れていた。

「悔しいか？ 悔しいだろうな。お前の戦略は奴らには通用しなかった。通用するわけがないんだ。奴らは全てを把握していた。その差は埋められなかったってことだ」

嫌みたらしく言う折町の言葉が浩介の胸に突き刺さる。

「……………ああそうさ。全てお前の言う通り俺の考えは無駄に終わった」

「随分あっさりだな。もう少し言い訳するかと思ったが……………」

「言い訳はしない。今回は俺の負けだ。お前らの手の内を読めなかった」

浩介は煙草を一本とり出し火を付けた。悔しそうな表情に変わったのは一瞬であり、今はもう悔しさなどの表情は無く淡々とした雰囲気に変わっている。

「……………それでもお前は諦めないのか？」

喜怒哀楽、全ての感情が読み取れない浩介の雰囲気、折町は何とも言い難い心境で口を開いた。

「諦める？ 一体何を諦めるんだ？ 確かに状況は悪くなったが、俺にその他の道があると思っっているのか？」

「退くに退けない……と、そういうことか？」

ここまで踏み込んでしまった浩介に逃げ道はない。

この場で、もうあなた達には関わりません、と白旗を振ったとしても見逃してくれるほど甘くもないし、見逃せないとも折町自身思っている。

例え見逃してもらったとしても、国を敵にまわしている以上元の生活に戻れないことも自覚している。

ましてや真実を知っている中で、このままにしておけば普段の生活というものが無くなると知っている。

ただ殺されるか、それともビクつきながら余生を送るか。

覚悟を持っている浩介にしてみれば実に簡単な選択肢であり、折町の言葉に苦笑しながら煙草の煙を吐き出した。

「そもそもこの件から“退く”という選択肢が無いだろう。今回は確かにしてやられたが、これでお互いの情報は五分五分だ。有利なのはそつちかもしれないが、後はもう全面戦争だからな。——って、お前に言っても仕方ないか」

所詮折町は日本人であり、バリアに協力しているだけに過ぎない。政府同様言葉巧みに操られ、そこまでの情報しか与えられていないだろうと思い再び苦笑した。

そして一方の折町も浩介に対して笑みを向ける。

「全面戦争か。異界の者がこの地球に來たことで俺達の生活は劇的に進化する。今までなかった異界の技術を手に入れ日本は更なる先進国となる。空飛ぶ車も夢ではないし、人型ロボットが街を歩く日がくるかもしれない。月ではなく、異世界旅行なんてのも提案されるだろう。俺たちが生きている間は不可能とされた近未来の進展を唱える者も多い。お前はそれを止めようとしている」

折町の言うことは人としては正しいものがある。実際に辻褄が合っていれば浩介もそう期待した筈だ。折町の言うこともわからなくない。だが先にグランのような異世界人と対峙した浩介にしてみればそれはズレた期待だと確信を持って断言できる。

「本当にそう思っているとしたら、おめでたい奴らだと言っておう。いいか折町、それは奴らの表向きの戯れ言に他ならない。地球全体の発展ならともかく、日本だけの発展という時点で可笑しな話だろ？ 日本の発展を望んでいたとしてもコソコソ秘密裏に動かなければならない理由もない。奴らにメリットなんて一つも見当たらない」

「外国の奴らに知られたとしたら技術の取り合いでそれこそ戦争になる。アメリカに本腰をあげられたら日本なんてあつと言う間に植民地だ。それを防ぐ為秘密裏に行動し、万が一の時反撃できるように日本の力も必要になる。彼らはそれを知っていた」

折町の言葉に浩介は首を横に振った。

「知っているからこそ付け込まれたのさ。日本人の心を操る術を奴らは実行し、納得させた。その結果が生み出すものは日本の発展じゃない。奴らの独裁政権だ。日本人なんてこれっぽっちも必要とされてないんだ」

「そうだとしても俺達が信じるのは彼らしかない。結果として日本人が騙されていたとしても、俺達は流れに逆らうことを許されな

い」

内容はある意味筋が通っている。だが浩介は折町の言うことに何かしらの疑問を感じていた。

そう願いたいという願望や焦りみたいなものが折町から滲み出ているような気がしてならない。

「お前とこれ以上討論する気もないが、これだけは言っておく。利用されているのは間違いのない事実だ。俺の考えが正しいか、お前が正しいか、直に答えは出る筈だ」

浩介は短くなつた煙草を落とし足で踏み潰す。

「その時、お前はこの世にはいないだろうよ！」

言い終わるや否や、折町の腰から拳銃が取り出される。

やはり幕締めは互いに勝敗をつけなければ訪れない。言葉を交わすだけでは解決しない互いの意志。そんな世の中になってしまっている。

「どうだかな」

柔らかい口調と共に、浩介は既に動いていた。

パアーンと響き渡る一発の銃声。その後に聞こえてくる音はない。

「この勝負は俺の勝ちだ」

月明かりに照らされたのは密接する二人の姿。

「くっ……そ………」

その中で崩れ落ちていくのは折町だ。

折町が狙ったのは一撃で仕留められる頭部だった。撃つ瞬間に体勢を低く屈めることによって回避した浩介は、そのままの勢いで折町の鳩尾に強烈な一撃を叩き込んだのだ。

満足に呼吸も出来ず、立っている力を失った折町は地面に横たわった。

「セリアがどこに連れて行かれたか、お前知ってるか？」

苦しむ折町を横目に、浩介は新たな煙草を口にしながらセリアの居場所を聞いた。

「ぐっ……し……らん、な………」

呼吸を必死に整える折町はそう言って浩介を睨む。
依然敵意を剥き出しにする折町を見た浩介はその度胸に苦笑した。

「そうか」

苦笑しながらも折町の落とした拳銃を手に取り、躊躇なく折町の

頭に突き付ける。その行動によって、酸素を取り戻しつつある折町は一瞬驚いた表情を見せるが、それはすぐに微笑みへと変わる。

「ハハ……、俺を殺しても意味なんてないぞ」

「知ってる。だが、ここで逃がし再び俺の邪魔をする可能性のあるお前を易々と野放しには出来ない」

「それこそ考え過ぎだ。一度敗れた弱者を生かしておくほど彼らは甘くない」

折町の眼差しは真剣だった。一度バラリア側に付いた以上、負けるということがそのまま死に繋がることを折町は痛いほど知っている。

ましてや折町は地球人であり彼らの駒にすぎない。折町がいなくなってもバラリア勢力に何の支障もない。

それがわかっている折町に、浩介は感じていた疑問を口にした。

「折町、お前が何をしたいのか俺には良くわからない。日本の発展を願うというお前の言ったことは一理ある。だがそれはバラリアの事を良く知らない奴の意見だ。表面上しか見ていない奴の理論だ。でも、お前は違う。バラリアの奴らがどういう人間かを理解し、地球をどうしたいのかも知っている。今の現状だってそうだ。バラリアに對抗する異界の者が来ていることは見るだけで明らかだ。それは奴らが日本の未来の為に来ているわけじゃないという明確な証拠になる。なのに何故奴らに肩入れする？ 何故考えを改めない？」

決して強い口調ではない浩介の言葉を折町は俯きながらも真摯に聞いていた。

「お前はこの先どうしていききたい？」

そしてもう一度問う。

言われなくても分かっていた。バラリアが日本の発展を望んでないことも、それによってバラリアとは別の反勢力が日本に来たことも。

それを確信したのはつい先程だ。地球以外の事情は知らない折町でも、転送で現れ、Sランクのバラリア人と決闘しているジョスライ達を見た時にやっぱりそうかと思ったのが本音だ。勿論元々からバラリアに疑問を抱いていた折町だからこそ、すぐにその疑問は確信へと変わる。

彼らは掌で地球人を踊らせていただけなのだ。

しかし、折町が舞台から降りるには遅過ぎた。途中棄権もリセットもキャンセルも効かない折町のストーリーはギョツと拳を握り締める姿で表現されていた。

「退くに退けない。それは俺も同じだ」

折町が呟いた言葉は、彼の心境を表すストレートなものだった。

「人質でも捕られているのか？」

不意に頭の中で浮かんだ図式をそれとなく口に出す。それならば意地でもバラリアに付こうとする折町の心境も分かる。

だが折町は首を横に振った。

「近いものはあるが、そんな生易しいものじゃない。人質ならさいつを見捨てることで俺は自由になれるが、奴らはそんな選択肢すら与えていない」

「……………命を握られている。そういうことか？」

——裏切り者には死を——

どこかの暴力団ならあり得る話かもしれないが、従来 of 世の中からしてみれば馴染みのない考えである。しかしバリアが相手だと踏まえればその考えは当然のように思い浮かぶ。

裏切ったなら勿論、ミスをした者、邪魔な者、負けた者。どれをとつても地球人は駒でしかないと考えているならば何人死のうがバリア勢力からしてみれば痛くも痒くもない。折町がそこで考えを改めれば彼らにしてみれば折町も邪魔な存在にしかない。

そして浩介の予想通り、折町は小さく頷いた。

「気付いた時には手遅れだった。俺はもう彼らに協力し続けるしか道はなくなった。でもどこかで期待はしていた。彼らが現れたことで日本はより良い国家になるんじゃないか、とな」

「俺達が奴らから全てを取り返せた時、そうなれば良いと俺も思う。だが取り返せなければ何も変わらない。寧ろ悪い方向へいくのは明らかだな」

折町は浩介に顔を向けた。

「俺がお前に言った理想論。あれを信じている奴は未だ多い。一種の洗脳に近いぐらい奴らを崇拜している。全て取り返すのは無理だ」

そして真っ直ぐ浩介と視線を合わせた。

「全ては無理でも大事なものは取り返す。お前もこのまま奴らに飼
い殺されるぐらいなら少しは抵抗してみろ」

「遅いんだよ……」

そこで折町は視線を外した。溜め息を吐いた浩介は二本の指を折
町に向ける。

「早かろうが遅かろうがお前に残された選択肢は二つ。ここで俺に
殺されるか、命を賭けて奴らに抵抗するか。好きなほうを選べ」

浩介の言葉に偽りがないことを折町は感じた。殺すと決断すれば
躊躇なく引き金を引くだろう。それだけのプレッシャーを掛けなが
ら向けられる真剣な顔を、折町は苦笑しながら受け止めた。

「恐いねえ……お前は」

心は決まっている筈だった。
開き直ったつもりだった。

命を握られていると知ってから無駄な抵抗はやめた。最初に思っ
た自分の理想を表に固定させ、バラリアに対しての疑問を裏に封印
した。だから浩介の抹消に戸惑いはなかった。

しかし――

「ここで散るのも致し方ない、か………」
「……………」

折町の呟きに浩介は銃を強く握った。何時でも撃てる、そういう姿勢をとった。

浩介の僅かな変化を感じながら折町は周りを見回した。

激しい抗争を繰り広げるバラリア勢力と浩介を保護した別勢力。そこに地球の勢力はない。ドルゴによって一閃され、動く者は一人もない。血の海と化した光景を見ると、まるで戦国時代にタイムスリップしたかのような錯覚に陥る。

生き残っているのは共に異世界人だ。ふとそう思うと、浩介の言った言葉が頭を過ぎる。

“ 奴らの独裁政権—— ”

現状まさにその通りだった。異世界人の戦いに日本人が入り込む余地がない程戦力に差がありすぎる。今後を考えなくても既に異世界人に日本を握られているようなものだ。

状況を確認し終えた折町は、その場に胡座をかいて座り直す。

浩介は折町に選択肢を与えた。どちらをとっても自分の末路は変わらない選択肢であっても、今信じるべき人物は目の前にいる高崎浩介ただ一人。ならばその期待に応えてこそ自分の命に価値が付く。

そんな儚い思想を抱きながら折町は口を開いた。

「これは噂で聞いた話だ。日本の何処かに奴ら専用のアジトがあるらしい。あの女の子が連れて行かれたのは恐らくそこだろう」

「お前……」

「高崎、お前の言ったことは全て正しい。だが覚悟しろ。奴らは異世界の人間。どう足掻いても勝つのは難しい。大勢の日本人が犠牲になる。それでもお前は取り返すと言った。なら俺はお前に伝えなければいけない」

折町はそう言うつと羽織っていたダウンジャケットだけでなく、中に着ていたシャツも脱ぎ捨てた。突然上半身裸になった折町を見ても浩介は別段驚きはしなかった。折町が“伝える”と言った以上何かあると思っていたし、その何かを一目で気付くことが出来たからだ。

「それは、刺青……か？」

月明かりだけではハッキリとしたことは分からなかったが、折町の左胸から左わき腹にかけて禍々しく渦を巻くような黒い模様。ただの刺青でない事は一目瞭然だが、浩介にはそれ以外思い浮かぶものはなかった。

「これは、呪い……だよ」

「呪い……？」

折町はその模様を指で撫でるように触る。

「お前は、絶対の恐怖を感じたことはあるか？」

「……………」

折町は浩介と視線を合わせることなく微笑んだ。そして浩介の返事を待たずに口を開く。

「俺はある。これがその時の証拠さ」

刺青のような模様を見つめながら吐き捨てるようにそう言った。

「こいつが俺の命を握ってから奴らに逆らうことが出来なくなった」

「そんな馬鹿な……」

「その時は逆らおうとも思ってた。自分の意志で奴らに協力し日本の未来を勝手に思い描いていた。だが奴はそんなフリーの依頼屋達に同盟という趣で呪いを掛けた。駒として扱うために」

「何故それが呪いだと？」

「……その時に一人、プレッシャーに耐えきれなくなった奴が逆らった。そしたらこの刺青がその体の内に消えていき、すぐにそれは苦しみだしてもがきだして、泡を吹いて死んでいった。その時のその顔は今になっても忘れられない」

「それがその刺青の正体ってことか」

折町は静かに頷いた。

「それを見た俺達はどうすればいい？ 奴らに協力し続けるしかないだろ！ 不安を押し込んでこれが正しいと開き直るしかないだろ！！ お前を殺す手立てを考えるしかないだろっ！！」

声を荒げて不満を爆発させた折町は大きく息を吐き出した。

「……………すまん。ただ、それが俺の見た真実で、これが現実だ」

俯く折町から銃口を外した浩介は、また新たな煙草をくわえ火をつける。そしてフーツと煙を吐き出し、折町を見下ろした。

「まんまと魂を売ってしまったわけか。不用意な行動だったな」

「舞い上がってしまったんだ。依頼の一環で偶然その事実を知った

俺はすぐにその異世界人と接触したいと思ってしまった。理由は……わかるだろ？」

「まあ、な。それで？ その爆弾の解除法は何か検討がついているのか？」

俺に任せろ、とまでは流石に言えないが、出来ることなら呪いから解放してやりたいという程度の気持ちで浩介は聞いた。

だが折町は大袈裟な動きで首を横に振った。その姿は慌てているに近いものだった。

「や、やめとけ！ お前死ぬぞっ！！」

「やると言ってるわけじゃない。ひとつの情報として聞いてるんだ」

折町の普通ではない反応に一抹の不安を抱えずにはいられない。だがそれ程折町が恐怖する存在ならばその解決策を見出さなければ自分も同じ立場に成りうる可能性だってあるのだ。

「……………そうか」

浩介の客観的な言い方によって、折町も落ち着きを取り戻している。出来ることならこの呪いを取り払って欲しいという願望はある。だが折町はそれは不可能だと諦めに近い考えを持っていた。

「どんな原理が働いているのかは俺も分からない。相手が相手だけに科学的な理解をするのは難しいと思う」

「だろうな。技術力も高いし、何より魔法というものがある世界だ。お前のそれも魔法の一種と考えるのが妥当なところだろう」

折町の言葉に浩介も肯定する。

「魔法とは少し違うかもしれない」
「というと？」

浩介としても魔法の詳細はナーシェ達から聞いていたためある程度理解しているつもりだが、折町の違うかもしれないという発言には首を傾げるしかなかった。

「奴らはこれを魔術と言っていた。どう違うかは分からないが魔法と魔術は別の扱いなのかもしれない。流れるにもそんな感じだった」

結局は魔法と魔術の違いを詳しく説明できないということだが、実際体感している折町がそう言うのだからそれで納得せざるおえない。

「ロゼに詳しく聞いてみるか」

そう呟いた浩介だったがふとナーシェの事が頭を過ぎりつい舌打ちをする。

もしもナーシェが助からなかった場合、残ったメンバーに冷静な判断が出来るだろうかと考えたのだ。

ジョスライやドルゴならまだ冷静でいてくれるかもしれないが、ロゼやカイに至っては難しいかもしれない。

そうなれば魔術の説明を聞く以前にそのような時間が取れるのかも怪しい。

「それを考えるにはまだ早いかな……」

一人でそう結論付け、浩介は煙を吐き出した。
そもそもその考えに至るにはジョスライ、ドルゴ、カイが奴らか

ら勝利することが条件となる。カイはナーシエを刺した男と、ジョスライとドルゴは共闘で鞭使いの奴と殺り合っている。遠目で見ただけでははつきりとした優位性は分らない。三人とは言わずとも一人でもここで欠けてしまった場合、彼らに冷静さを求めることは難儀なものになる。

——この現状もどうにかしなければならない。

浩介は次々と思ひ浮かぶ難点に溜め息をつきながら折町へ視線を戻した。

「取り敢えずお前はそこにいろ。俺もあの戦闘に参加する」

浩介は脱ぎ捨てたコートを拾い折町に被せた。ここまでさらけ出した折町が再び敵に回ることはい。そう決断した浩介は拳銃を腰元へしまい、代わりにエネルギーガンを手を取った。

「その前に、言っておきたい事がある」

その様子を見ていた折町が浩介に話し掛けた。

「お前の話はまた後で聞く」

「駄目だ。今じゃなきゃ後悔するかもしれない。お前には話しておきたい」

真剣な表情で言葉をかける折町に浩介は向き合っしかなかった。

「そんなに重要なことなのか？」

折町は浩介の掛けたコートの裾をギュッと握り締める。

「重要かどうかは……正直わからない。でも何も知らないより知っておいたほうが良い事だ。それに、俺には後がないからな」

そう言つて苦笑する折町に力強さは全く無い。まるで抜け殻のような脱力感に包まれているように見える。

「その呪いのことか？」

「これ自体ではなく、根本的なことだ。この呪いを仕掛けた人物。俺が心から恐怖し、心から悪魔だと思つたやつだ。恐らくそいつがバラリアのトップに立つ存在。とても人とは思えない……」

折町の身体が徐々に震えていく。それ程ヤバいと思える存在に、聞いていた浩介が折町に集中するのは仕方ないことだった。

だから気付けなかった。

丁度その時、カイが倒れたことに――

「そいつは………？」

静かに尋ねる浩介に、折町は意を決したように真剣な目を向けた。

「そいつを奴らはこう呼んでいた。“魔皇帝”と。多分そいつ――
うッア――！」

「――！！」

突如途切れた折町の言葉。そして聞こえた折町の苦痛の声。

呪いでも何でもない。その正体は折町の背中から貫いた一本の剣

だった。剣の切っ先は胸の中央から貫通し、ポタポタと真つ赤な血が滴り落ちる。

思わず目を見開く浩介に、虚ろな目で血を吐き出す折町と、後ろに立つ男の姿が映し出されていた。

「いらぬことをベラベラと……」

男の剣が引き抜かれ、折町は地に倒れた。無精髭のその男は折町に目もくれず浩介を見抜いている。

ナーシエにも剣を突き刺したその男は表情を一つも変えることなく剣に付着した血を拭っていく。

「ッ……お前……——！！ カイは！？」

「まだ生きているだろうが、暫くは動けないだろう。それよりもお前らが何の話をしているのか気になってな」

「クソ！ 油断した……」

「油断？ 違うな。お前が油断しなくても結果はこうなった。あの若い男一人で俺を倒せると思っていたのか？ お前が倒した二人の役立たず共と俺の実力が一緒だと思っていたのか？」

「……………」

その言葉に浩介は答えねず、苦虫を噛んだ表情で男を睨んだ。

「俺も甘く見られたものだ」

男は剣を浩介に向けた。

確かに実力が違う。男が言ったように、浩介が初めて殺した力任

せの男、研究所で殺した赤髪の男。比べるまでもなく目の前にいる無精髭の男が放つ殺気は別物だ。カイも決して弱くはない。フィーガルの中で浩介はそう実感していた筈だった。だが結果は見ての通りだ。

甘かった。その一言がピッタリと当てはまる。奴らはもう本気の戦力で潰しに掛かって来ている。そう直感した浩介は初めて逃げる事を打算した。

鞭使いのロージすらジョスライとドルゴの二人を相手にしながら苦戦している感じではない。

俺達に勝ち目はない。ならば逃げなければならない。その為には転送を使うのが一番手っ取り早い。

そこまで考えを纏めた浩介は通信機を取るためポケットに手を入れた。

しかし――

「……………」

肝心の通信機がない。舌打ちしながら素早く思い返す浩介は僅かに折町へと視線を向けた。正確には折町自身ではなく、折町に羽織らせたコートだ。ナーシェと愛理の転送を頼んだ後、コートのポケットに通信機を入れたことをすっかり忘れていたのだ。

浩介の顔から冷や汗が流れ落ちる。

折町はまだ息があり苦しそうに唸っているが、そんな折町に頼んで取って貰う時間も、自分で取る余裕も無い。正に絶体絶命の中、

浩介の頭の中で更に良い案が思い浮かぶことはなかった。

「お前はグランのお気に入りだと聞いたが、これも一つの縁だ。俺が殺してやろう」

男のプレッシャーに耐えながら、浩介の足は少しずつ後ずさっていく。解決策が見付からないのは浩介の行動を見ても明らかだった。

「……………高崎……………に……………げろ……………」

掠れるような声が聞こえた。小さくともそれは浩介の耳に届き、そして足下に何かが転がってくる。

「通……………信機……………?」

浩介の足下には通信機があり、その更に視線の先には折町が微笑んでいた。

「死に損ないが……………余計な事を」

浩介を見据えていた男は折町へと顔を向け、剣を逆手に持ち替え狙いを定めた。

倒れる折町の頭部を狙って――

守りたいもの3

浩介の中で何かが弾けた。

自分は今何をしているのか、何をしなければならないのか。考えるまでもなく身体が先に動く。同時に浩介の中で逃げるという考えが消えた瞬間でもある。

「やめろ!!」

無意識に近い感覚で浩介はエネルギーガンを撃っていた。

かなりの至近距離から放ったにもかかわらず、いち早く反応した男は地面を転がるように回避し直撃を避ける。そしてそのまま体勢を整えながら地に足を付け浩介へと顔を向けた。

「……いい腕だな」

表情を変えることなくスツと立ち上がった男は皮肉を込めてそう言った。

グランが過大評価していたのは聞いているが、男からすれば興味の無い一般人と同じ対象である。浩介を危険人物だと容認していない為、ここで浩介を殺さなければならないという執着心は無かった。

「せっかくの逃げる機会を無駄にしたな」

男からみれば浩介の行動はそういうことだ。

バリアと言えど転送自体を止める術は一切無い。折町に気を取られている間に通信機で転送を指示すればまだ逃げられる可能性は充分にあったのだ。

それを無駄にした以上、男も浩介を逃す理由はなくなった。最初に言った通りここで始末する考えを改め、まだ僅かに血が付着した剣を構えた。

浩介としても逃げるチャンスを失ったと痛いほど理解したが、不思議と後悔はない。いつかは対峙することになると開き直りに近い感情が強く、不適に笑みを浮かべる。

——バキッ

そして浩介は折町の投げた通信機を足で踏み潰した。

強がりなのかもしれない。でも逃げたいという気持ちが再発するぐらいなら、いつそ逃げ道を遮断してしまったほうが迷わなくて済む。

「これで文句はないだろ、無精髭？」

挑発にもとれる浩介の言葉に男は眉をピクリと動かし、怪訝な顔を向けた。

「自惚れるなよ小僧。ちんけな星の下等人間が俺に楯突くなど十年早い」

「お前こそ自惚れてるんじゃないか？ お前らが優れているのは魔法の存在と技術力。後は俺達となんら変わらない。倒すのも不可能じゃない」

「違うな。俺達は小さな時から鍛え込まれた戦闘技術が身体に染み付いている。対等に闘ってもお前たちが勝てる要素は絶対ない」

魔法や技術の差だけではなく、経験値を含めた単純な戦闘力からしても負ける気がしない——負けるわけがない、と確信を持ちながら男は重心を下げ戦闘姿勢をとった。

それに反応した浩介もエネルギーガンを男に向けた。

「それが自惚れてるって言うんだ。何でもかんでもお前たちの思い通りにいくと思うなよ。追い詰められた人間の意思は固いからな」
「フツ……それはお前のことか？」

鼻で笑った男は浩介へと集中していく。

——楽しめそうだ……

邪魔をする者はいない。相手がナーシエだったからこそこの作戦に参加した。それ以外特に興味もないと思っていた男が今浩介に興味を持ち始めていた。

僅かなものだ。浩介を認めたわけではなく、自分の全力を出せるとも思っていない。実力的に言えば剣を向けてきたカイより弱いという評価が本音である。

「逃げ道を自分から断った俺に今更意志を曲げる必要はないだろ？」

苦笑しながらも男へと集中していくのがわかる。

その辺りが楽しめそうと思った理由である。

自ら不利な状況に持つて行き、格上相手に勝負を挑もうとしているその果敢さが男の闘志を擲ったのだ。相手の実力さえ見定められない単なる馬鹿なら話は違うが、浩介は男の実力を見定めていた。それは通信機を探していた時の態度で気付いていた。だからそのままで浩介に興味を抱かなかったのだが、今はまるで別人のように言動を変えている。

——逆境に強いタイプなのだろうか？

それはそれで面白い、と男は剣を構えた。

「全力で来い」

「……当然だ」

短い言葉を投げ交わし、浩介はエネルギーガンを撃ち放った。

先ずはお手並み拝見というようなエネルギーの弾道を男は剣を握っていない左手を突き出し、魔力で構成された盾をつくり相殺する。

エネルギーガンを防ぐ手段は幾つかあるが、一般的なのは魔力で相殺することだ。特殊なエネルギーを圧縮させて撃ち出すのだが、それは魔力展開で防げることが証明されて以来あまり重要視されなくなっていた。

全く需要がなくなったわけではないが、科学よりも魔法が強いという概念が確立されていたのだ。

つまり浩介がエネルギーガンを持っていたても、男にしてみればそれ程脅威ではない。

威力は高くても魔法で防げるのだからそれも致し方ない。

エネルギーと魔法の盾とが相殺したことによってその反動で爆音と爆風が生み出される。範囲はそこまで広くなく男自信にも影響はないが、砂煙が舞い上がる程度の影響は出る。

「……………」

これが狙いかと男は瞬時に判断し、砂煙に覆われた自分を中心にその場で浩介の気配を探る。

「——！！」

左側から気配を察した男は顔だけ左に向け問答無用で剣を突いた。

「残念！」

その右側から現れた浩介は走り込んだまま握り締めた拳を振り抜いた。

男は咄嗟に身体を捻り、それによって拳は空を切った。男はそれを確認すると同時に突き刺した剣を身体の回転を使い水平に振るつた。

「うおっと！」

ある程度予測していた浩介はハックスステップで剣が届かない距離をとった。

砂煙もなくなっていく、視界が良好になったところでその距離を男が瞬時に詰める。

無駄のない動きで一振り、二振りと斬りかかっていき、浩介は横

へ後ろへ、時には地を転がり躲けていった。

浩介に距離を取られたところで男はチラッと後ろを振り返る。

「成る程。エネルギーガンを匣にして反対側から攻めたわけか」

確認したかったのは最初に察した気配の存在である。今の浩介の手にエネルギーガンは無く自分が立っていた場所に落ちているということは、あの気配は浩介が投げたエネルギーガンだと推測したのだ。

その言葉に浩介も否定はしない。

「その通り。エネルギーガンがお前に通用しないのはわかっていてし、何よりエネルギーの残量も無かったしな。まあ欲を言えばあの不意打ちで一撃当てたかったが」

浩介は自分の拳を余裕で躲されたことを思い返しながら嘆いた。

効かないと分かっているでも武器を失う意味は大きい。攻撃手段が一つ減り、その減った分を違う攻撃でカバーしなければならない。元より武器はエネルギーガンだけしか持っていない浩介にしてみればその負担は己の身体に降りかかる。

それを知りながら浩介は捨て身の攻撃を仕掛けたのだが、呆気なく、それこそ何の苦もなく避けられたことに落胆するしかなかった。

「確かにあの一撃が当たっていれば、戦況は少し違っていただろうな」

男も浩介のあの攻撃は予想していなかった。

エネルギーと魔力の相殺で視界が悪くなるのを狙って、その後唯一の武器を匣にしてまでその一撃に全てを込めた。何よりその攻撃も迷いのない強烈なものだった。

それだけを考えれば、剣士がイチかバチかで敵に剣を投げつけるような無鉄砲な攻撃だと思えるが、浩介の場合は違っていた。

その後の男の攻撃を寸でのタイミングで躲し、続く攻撃も見事に躲しきった。それは頭の中で想定していなければ反応出来る動きではない。

もしあの一撃が当たっていたとしたら間違いなく浩介のペースに持って行かれていただろう。

そう思うとグランが浩介を敵視している理由が分かる気がして男は僅かに口元を緩めた。

その変化は僅かなもので、月明かりしかない薄暗い状況で浩介がそれに気付くことはなかった。

「いくぞ」

中距離からの攻撃手段をなくした浩介がどうしようかと考えている時、先に動いたのは男のほうだった。

脚の筋肉を最大限生かした強い踏み込みであつと言う間に距離を詰めた男は、そのスピードが緩まることなく剣を振るう。

「——！！」

男の得意とする瞬殺の攻撃。

一瞬でトップスピードまで持って行き、相手が反応する頃には剣で肉と骨を斬る感触が伝わる筈の一撃必殺の攻撃法。その速さのまま剣を振るうには正確な技術とタイミング、鍛え抜かれた筋力がなければ成し得ないこの技で今まで多くの人を斬り捨ててきた。

だが男の剣に伝わる感触は何もなく、ブウンという空気を切り裂いた音しかしなかったのだ。

自信のある攻撃だっただけに男の驚きは大きかった。

浩介の動きが見えなかったわけじゃない。寧ろその全てを目で捉えていただけに驚きを隠せない。

剣を振り出した瞬間、浩介は僅かに動いた。大きくではなく、僅かにだ。距離にしてみれば三十センチ。一步だけ後ろに下がり尚且つ体も僅かに傾ける。たったそれだけの動きで男の攻撃を躲した。

剣を扱っている以上、その間合いと範囲は限られる。男のようなスピードで迫ればその範囲が伸びる事は殆ど無い。その分躲す事は難しくなるが、見切れさえすれば浩介の僅かな動きだけで回避することが可能となるのだ。

「——ツチ」

思わず男は舌打ちをする。

躲された時の自分の隙は大きく、無駄のない動きで躲した浩介は男目掛けて拳を繰り出していた。

空を切った剣を戻すよりも防いだ方が速いと判断し、左手で浩介の拳を払いのける。

左手に伝わる衝撃は重く、的確である。だが、防げたことにより再びチャンスは男へと変わる。右手に持つ剣を、防ぐ手段を持たない浩介へと薙払ったのだ。

しかし、それよりも早く男の腹部に痛みが走る。

右の拳が防がれた時には左の拳を出していた。勿論、剣が浩介に届くより早く男の腹部へめり込む。そして直ぐにバックステップで男から距離を取った。

「ゴホッ……、何故躲せた？」

少し咽せながらも男は浩介に口を開いた。

攻撃は当たりはしたが、利き腕で無い分威力は弱く、男に大したダメージはないと推測した浩介は左腕を押さえた。

「もっと速い奴と戦ったことがある。それだけだ」

簡単に説明する浩介の表情が変わることはなかった。唯一の変化といえば、左腕を押さえる右手の指の間から真っ赤な血が流れていることだ。着ている白シャツの袖が見る見る赤く染まっていき、初めてじゃないその感覚に思わず溜め息が漏れる。

「グランか……。それなら理解出来るな」

自分より速い存在を想像した時、思い当たるのはグランしかないな

かった。

「そうだな。奴はお前より速かった。ただ、俺の攻撃を受けながらあの速さで剣を出されるとは思ってたよ。お陰でこの有り様だ」

苦笑いを浮かべながら浩介は男を見据えた。

咄嗟にバックステップを取っていなければ体が二つに別れていたかもしれない。考えただけでも恐ろしくなるような、速くて強烈なものだった。

結果として左腕を掠めただけで済んだが、浩介の与えたダメージを考えれば割に合わない代償である。

「お前を甘く見過ぎていたのかもしれない。もう手加減はせんぞ」
「勘弁してくれ……ッ!!」

浩介の呟きを無視するかのように距離を詰めた男は、最初同様瞬殺の一撃を放つ。それを慣れたように躲す浩介だったが、男は躲された後の隙もなく、次々と素早い攻撃を転じていった。

反撃すら与えない男の攻撃を、浩介はひたすら躲し続ける。

受け止める事が出来れば戦況も違ってくるだろうが、素手の浩介にそれを求めるのは無理がある。

攻撃手段の無い浩介が追い詰められるのは時間の問題。観客でもいれば誰もがそう思う展開だった。そしてそれは現実となった。

攻撃し続けていた男の戦法が変わった。

剣を振り下ろし浩介が巧みなステップで躲した瞬間、男は剣ではなく左手を翳した。

集まる魔力が一瞬で目に見える物質に変わり、それはサッカーボール程の赤い球体となった。

——コイツは不味い！

そう判断した浩介は咄嗟に腕でガードを作りながら距離を取ろうと試みる。しかし——

「弾ける」

男が口を開いた瞬間、その球体が爆発する。その風圧は易々と浩介の身体を吹き飛ばし、受け身も取れず地面を転がる結果となる。

「うつ……ゴホッ、ゴホッ……」

全身に痛みが走り、呼吸も満足に出来ない。それでも浩介は両手を地面に付けながら起き上がろうとする。

頭を少し切ったのか、頬を伝い顎から雫のように落ちる血が地面を僅かに染めていく。

そして、既に男が浩介の近くに移動しているのを視界の片隅に捉えた。

再び球体を作り出し、突き出した掌を握り締めると同時に爆発をする男の魔法に反応出来る俊敏さは今の浩介にはない。それを確認した瞬間に頭を抱え衝撃に備える事が精一杯だった。

再び吹き飛ばされた浩介は、仰向けで必死に呼吸を整えることしか出来ず、顔だけを動かし近づく男に目を向けた。

「ハア……ハア……ッ……、まるで……爆弾、だな……」

「爆弾より優しいだろ？　これは殺傷能力が殆ど無い。まあ運が悪ければ死ぬだろうが」

「……ハハッ……体感したよ」

苦しみながらも笑みを作った浩介は自分の体の状態を確認しながら口を開いた。

風圧による痛みはあるが、身体の一部が吹き飛んだわけではない。あちこちに擦り傷や切り傷はあるものの、特に重傷という訳ではない。あくまで相手の隙を作る為の魔法で、最後は結局男の手で葬る手立てらしい。

男の構えた剣を見上げながら浩介は冷静にそう理解しながら、別の疑問を口に出す。

「魔法は、地球では使えない……と、聞いていたんだが……？」

「少し前まではな。だがそれが解決された今、この星は俺達の支配下になる」

「解決……ああ、だから……通りでな……」

一人納得するように浩介は苦笑する。

「何を理解したか知らんが、お前にとっては最早どうでもいい情報だ」

男はそう言つて剣を振り下ろした。

浩介は痛む身体に鞭を入れ、地面を転がるようにしてそれを避ける。地面に突き刺さつた剣を抜き、男は驚くこともせず浩介の行動を見ていた。

痛みをこらえ、震える足でなんとか立ち上がった浩介も男へと顔を向けた。

——やっぱり手強いな……

想定通りの強さ——いや、男はまだ全力を出していないと思え、浩介の心境は重くなる。

一番厄介なのは魔法の存在だ。純粋な戦闘能力で比べると浩介でもまだ太刀打ち出来る。だが、そこに魔法が加わつたとなれば戦況は一気に不利な立場に変わる。その対処法がわからない浩介が勝利を掴むのは難しいことだ。

「魔法が厄介だ、という顔だな」

顔に出ていたのだろうか、浩介の心境を読み取つた男はそう口に出した。

「厄介だな。魔法だけでこの有り様だ。正直キツイな」

男の言葉に素直な感想を返す。

「これで分かつただろう。俺達は特別な存在。お前たちはただ従うだけの下等民族にすぎない」

「異界の壁……か。面白くない現実だが、勝負を決めるにはまだ早

い」

「お前たちに勝つ可能性があるとでも？」

優位に立つ者の余裕といったところだろう。負けると微塵も思っていない男は軽い口調で問う。それに浩介はニヤリと笑った。

「さあな。ただ少なくともこんなところで死ぬつもりはない」

「……………大した自信だ」

その自信を打ち砕くというような勢いで男は地を蹴った。剣を正面に構え、いつものスタンスで間合いを詰めにいく。

それを見た浩介も瞬時に走り出した。身体が痛いなどと言っている場合ではない。スピードでは劣るが、それでも今の状態を考えれば男が驚くだけのキレがあった。

男は咄嗟に剣を振るう。いつもならもつと綺麗な形で無駄なく振るっていたが、今回ばかりは少し焦ったのか振りが大きい。

狙い通りいち早く懐に入れた浩介は、そのまま男の右腕に左手を添える。

「——っ！ お前……………！！」

右上から左下へ振り下ろそうとした剣は、浩介に腕を力一杯掴まれたことによって停止する。

この際、左腕の傷から血が吹き出した事など気にしない。

剣を主要とする者は懐に入られることを嫌う。それは剣よりも素手やナイフの方が射程が短く素早く攻撃出来るからだ。だがそれは

相手より実力が上、または奇襲の場合のみ成功する。 勿論、男は浩介との実力差を信じて疑わなかった為、今の現状に驚いていた。

「一つ、お返しだ」

男の攻撃を止めた浩介はすぐさま反撃の拳を出す。

「があッ……!!」

強烈な拳が腹部を直撃し、男は圧迫される痛みと共に唾を撒き散らす。

——この距離はマズい……

痛みの中でそう判断した男は、一旦距離を取ろうと後ろへ跳ぶ。しかし――

「そう簡単には逃させねえ」

浩介の左腕がそうさせなかった。真っ赤に染まった腕は離れようとする男の腕をガッチリと掴み続け、距離を取ることを許さない。

「二つ、仲間の仕返しだ」

再び腹部へ一発、そして顎へと一発拳を打ち出す。

それをまともに受けた男は顔をしかめながら浩介を睨む。

「き……さま、調子に……乗るなよ!」

——何故こんな下等民族に……

そう思うと驚きと怒りが同時に込み上げてくる。力もスピードもテクニクも自分のほうが上。更には剣と魔法もあり、攻撃手段も劣る筈がない。まだ全力でないにしろ、この状況は男にとって屈辱以外他ならない。

力任せに浩介の腕を振り払った男は、左手を前に翳した。魔力を集め先程の魔法が形成されていく。

魔法で弾き飛ばした後に、剣で追撃し打開する。これがあまり魔法が得意でない男の戦闘スタンスである。

自分の星の戦闘時には当然のように魔法が飛び交う時もあるが、それでもこの戦法で打開し生き抜いてきた。

魔法を使えない浩介を相手に——下級民族とあしらった相手を前にその時の高ぶる気持ちを抱いた男は、有無を言わせず叩きのめすという思いに変貌を遂げた。男が纏う雰囲気が変わる。プレッシャーはあったが穏やかな雰囲気の時とは別に、今は標的を定め意を決して飛び出した猛獣のような威圧感を感じ取れる。

それを見た浩介は後方へ跳躍してから走り出す。

男の出す魔法は何処の距離まで出せるのか？ 出してから動きはあるのか、などを知るには良いタイミングだった。

およそ五メートルの距離を取った時には、球体の魔法が出来上がる。場所は男が左手を出した先。つまり浩介が被害を受け難い距離にある。

——さて、そこからどうする？

男から目を離さないように気をつけながら、浩介は男の動きを観察する。

魔法の球体を動かせないならそんな気にすることはない。隙さえ見せなければ簡単に躲せる自信が浩介にはある。

「……………そんな簡単じゃないか」

その希望を打ち砕くように球体は浩介に猛スピードで突っ込んで来る。

この時点で魔法は男の意志で動かすことが出来ると確信した。

自分の中で想像していた魔法もほぼその通りなのだが、空想で納得するのと実際に目で見るのでは理解度が全く違う。フィーガルで聞いた話と、セリアの“具現の力”では、魔法の底を知る事が出来ないのも一つの収穫である。

そして、よもや想定していた浩介がこれを避けられないというオチはない。

タイミングを見計らいながら足に力を入れ、爆発する瞬間に地面を転がるようにして避ければダメージは少ないと想定していた。

「コースケさん!!」

「——!？」

ところが、それを行う前に浩介の名前を叫ぶ声が聞こえ、浩介の前方に展開されたシールドが男の魔法を防ぐ。

爆発と同時に剣を構え疾走してきた男の攻撃を、シールドを展開したカイが双剣で受け止める。

「はあっ！！」

両腕に力を込め男の剣を弾くと、素早いカウンターで双剣を横に振るった。男はそれを後方へ跳躍することによって回避し再び距離をとる。

「カイ、大丈夫か？」

肩で息をしているカイの後ろから浩介が声を掛ける。よく見れば腕や脚にも傷が目立ち、カイがその声で振り返った時、腹部にも剣で斬られた傷が見受けられた。

「僕は大丈夫です。それよりも、何故かこの星で魔法が使えるようになってるんですね？」

一度浩介に頷いた後、男に視線を戻しながら双剣を構える。

「そうみたいだな。今のところあれしか見せてないが、他にも戦法が有りそうだ」

満身創痍の状態で浩介を守るように身構えるカイに、苦笑いを浮かべながら答えた。

「コースケさんは下がって下さい。あの男は僕が請け負います」
「おいおい、無茶するな。カイまで倒れたらこの先、手の打ちようがなくなるだろ」

「心配いりません。ナーシェさんの仇は僕が取ります！」
「仇って……」

どうやらナーシェに怪我を負わせた男に恨みに近い感情を持ち合わせているのだろ。大怪我を負いながらも男を睨み付けているカイの姿を見ると、頭に血が上っていることは容易に察することが出来た。

それが絶対に悪いわけではないが、無精髭の男が相手だと考えれば今のカイの一直線な思考が良い結果で終わるとは思えない。

さて、どうするか……と悩んでいる時、男が体の前で構えていた剣を下ろした。

「場がシラケたな。別にお前等を殺せと命令を受けている訳ではないから、俺はここらで退かせて貰う」

「——なっ！？ 逃がすと思っているんですか！？ お前とはここで決着を付ける……！」

——状況が見えてないな……

そう思った浩介は、今にも飛びかからんとするカイの前に腕を出してそれを止める。

「止める、カイ。お前が突っ込んだところで返り討ちに合うのが関の山だ。今回は相手が悪い」

「ですがっ、あいつはナーシェさんを——」

「ならお前も刺されるぞ。純粹な剣の勝負で一度負けたお前が、その怪我でまた殺りあえば今度は殺される。気持ちは分かるが、お前たちのリーダーが負傷したんだ。時には引く事も必要だ」

「それは……そうですが……」

浩介に言い返せず、カイは落ち込むように俯く。

「冷静で、良い判断だな」

それを見ていた男は拍手をせんばかりに柔らかい雰囲気ですべてに視線を送る。

「恐らくあの女は無事だ。咄嗟に急所をずらされ、その後のトドメも刺せなかったからな。まあ重傷である事に変わりはないが……」
「貴様っ！」

瞬時に怒りがこみ上がり、男を睨み付けるカイの肩に浩介はポンと手を置いた。

「無事みたいだぞ。カイは先にフィーガルへ戻れ」

それだけ言つてカイを宥めた浩介は一步カイの前方へ移動し男との距離を詰めた。

「この地球で魔法……ねえ……。随分苦労したんだろうな。五十年の期間は伊達じゃないってか？」

「俺は知らんな。全ては奴らの計画だ」

「そついやそんな事言つてたな。お前は雇われの身分か？」

その問いにはカイが口を挟んだ。

「その男は僕達の星でも有名なSランクの傭兵です。名前は確か――」

「エジルだ」

男がそう言うと、淡い光がエジルを包み始める。転送が開始されたエジルは僅かな笑みを浮かべ剣を浩介に向けた。

「お前が異界の者を相手に何処まで来れるか楽しみにしている。全ての力を出して登って来い。お前にその力があれば、その時は神羅城にて決着を付けよう」

「……………」

その言葉を残しエジルは完全に消え去り、険しい表情で浩介はエジルの言葉を頭に刻む。

久々の静寂が戻り、それを堪能するかのように浩介とカイは沈黙を続ける。あつと言う間の出来事だと感じていたが、実際には長い時間が流れ、それに伴う精神の疲れが徐々に湧き上がってくる。

「コウスケ！ カイ！ 無事か！？」

その静寂を破り、二人の元に駆け寄って来たジョスライの声が響く。

隣にはドルゴも居合わせ、二人の体に目立った傷は無い事から、鞭使いの男を相手に善戦していたと思える。

だが、その男の死体も無いことから勝負はつかずにエジルと同様に転送で退いたのだろうと理解した浩介は、Sランクの強さが身にしみて分かった気がして溜め息を出す。

「何とかな……。此処にもう要は無い。早いとこ離れよう」

「……………そうだな。ドルゴ、転送指示を頼む」

ジョスライの言葉に静かに頷くドルゴは通信機を取り出しロゼのいるフィーガルへ連絡を始める。

その間、浩介は匣に使ったエネルギーガンを回収しようとその場を離れそれを手に取る。

「コイツの使い方も考えものだな」

魔法が使える異世界人に通用し難いエネルギーガンを見て、浩介はボソツと呟く。

「……………か……………さき……………」
「ん？」

その時、僅かに聞こえたかすれ声に浩介は耳を傾ける。

「たか……………さき……………、頼み……………が……………ある……………」

その声は、近くで倒れていた折町の声だった。浩介はゆっくりとその場へ移動し、折町を見下ろす形で足を止めた。

「まだ生きてたか……………って、俺が止めたんだっけな。悪いがお前の頼みを聞いてる余裕はないぞ」

素っ気ない言葉を返す浩介に、折町は苦痛で顔を歪めながらも微笑みを向けた。

「そんな……………難しいことじゃない。このままでも、俺は……………死ぬだろっが……………それは、嫌なんだ……………」

「俺が出来る事といったらフィーガルへ連れて行ってその怪我を治

す事だけだ。お前にかけられた魔術のこともあるし、助かるかどうかは分からないがそれで良いなら連れて行ってやるぞ」

「俺は……お前たちをはめたんだぞ。……今更、合わせる顔もないし……生き長らえようとも思っていない……」

折町の言葉に浩介は頭を搔く。

「お前、言ってること矛盾してるぞ。だったら俺に出来ることは——」

「俺を……殺してくれ」

——出来ることはない。そう言おうとした浩介は耳を疑う。

「——何故俺が……」

そして出て来た言葉はそれだけで、後続く言葉は思い浮かばない。

「俺の……最初で最後の、抵抗だと思ってくれればいい。奴らの手で、殺されたくないんだ。今にでも……この呪いが発動すると思うと………恐いんだ………」

あの時、この呪いで苦しんで死んでいった者の残像を自分に置き換えると、折町は底知れぬ恐怖が感じられる。

自然と目に溢れる涙を拭うことも出来ず、折町は最後の希望を浩介に託した。

「な、何言って——」

「頼む………お前しか………いないんだ………」

浩介は目を見開いて驚きと困惑の籠もった言葉を出す、折町の消えそうな声が浩介の心に響く。

折町の命は既に消えかかっている。それは力の無い声と、血の気の無くなった真つ白な顔が物語っている。

このまま命が尽きるのを待つべきか、折町の願い通り浩介の手で終わらせるべきか、二つの選択肢に浩介の心は揺れ動いていた。

その時、カイとドルゴの転送を終えたジョスライが浩介に近付く。

「コウスケ、後は俺達だけだ。…………何なら、俺がやるつか？」
「……………」

浩介の気持ちを察した言葉だ。ジョスライの気遣いに有り難さを感じながら、浩介は一度目を瞑り、自分の意志を固めていく。

そんな事とは露知らず、迷っていると判断したジョスライは更に言葉を重ねる。

「なにもお前が苦しむ必要は無い。そうさせたのは俺達と同じ異界の者だ。俺達の抗争に巻き込まれた事でこんなことになったのだから尚更さ」

「それじゃ駄目なんだ」

浩介は目を開き、ジョスライへと顔を向ける。

「それじゃこいつの願いは叶えられた事にならない。この世界を狂わせたのが異界の者だからこそ、俺がすることに意味があるんだ」

「コウスケ……………」

その意味を捉えきれないジョスライにうつすら笑みを返した浩介は、近くに落ちていた折町が持っていた拳銃を手にとった。そして、そのままの足で折町の側へ進み、身を屈める。

「折町。俺は何もなく人を殺すことはしたくない」

抑揚のないその言葉に、結論は断られたと思った折町は若干驚きの顔を向けた後、落胆するかのように口を開いた。

「そう……か……。そう、だよな……。なら……しょうがない」

「勘違いするなよ。俺は依頼屋だ。どんな依頼も、引き受けたからには遂行させる。——言え。お前の依頼はなんだ？」

浩介が決断したのは肯定の道。依頼という趣であれば自分としても割り切れると判断した——いや、そう思い込んだ。

心は既に決まっている。後はそれに耐えるだけの精神力があるかどうかは未知の領域だ。

「俺を……殺してくれ……」

そして、改めて折町から依頼の言葉が紡がれる。

今までとは違う、重みのある依頼であり、自分の為に人を殺す過去のような成り行きでもない。

「わかった」

声が震えそうになるのを押し隠し、自分にのし掛かる重さを折町

に見せなかった浩介は、ゆつくりとした動作で銃口を折町の胸に付ける。

——人の命はいつからこんなに軽くなった？

「報酬は要らない。これは俺にとってもお前にとっても納得出来る依頼じゃない筈だからな」

——何故こんなに俺達人間が翻弄されている？

「これでお前は呪縛から解放される。もっと別の手があれば良かったんだが、今の俺には思い付かない」

——俺達の世界が変わっていく

「ゆつくり休め、折町真司」

——止めなければいけない……

乾いた銃声が鳴り響く。

——こんなこと、この世界にあつてはならない

折町の体に付いている魔術の様子がスーッと消えていった。それは魔術の効果が消え去ったことを意味している。

浩介は銃を捨てると、折町に掛けた自分のコートを上に被せ、ジヨスライへ顔を向ける。

「行こう」

一切表情を崩さない浩介を見たジョスライは、齒痒い思いで一杯だった。

「……すまない」

自然と口に出た深い念をこれ以上掘り出すことはせず、ジョスライは通信機を取り出し連絡を始める。

その間、浩介は思い入れのある場所を見るかのように廃墟を見渡した。

崩れ落ちた建物と、未だ火の手が上がる軍用機の残骸。散らばった銃とその薬莢。倒れ伏す死体の山と真つ赤な血の海。

まるで戦争の惨事であるかのような廃墟の光景に、ただ現実を受け入れるべく脳裏に焼き付けた。

これは夢だと思いたい衝動を抑え、最悪世界全土がこうなるのだと未来を見据えながら、浩介は大きく深呼吸をする。

「準備が整ったぞ」

ジョスライが声を掛けると同時に、淡い光が二人を包み込む。

「秩序も平和もないな」

ボソツと呟いた浩介の言葉にジョスライは渋々と頷く。

「問題はこれから先、奴らがどう動いてくるかだ」

「そんなの決まってる。本格的に日本を支配しにかかるか、もしくは世界中を破滅させるかだ。動くとなればそこまでするだろうな」

「対抗するには戦力的に厳しいぞ」

「……………そうだな」

二人の会話はそこで止まり、その姿は転送によって消えていった。

満月で灯された廃墟にはバリリアの爪痕だけが残り、辺りは再び静かな夜へと戻った。

星を越えた争い 1

「どういふ事よ！」

フィーガルのコントロールルームにロゼの怒鳴り声が響く。

粗方の事情を説明して程なく、ロゼの顔は次第に険悪なものに変わり、独り言を呟きながらコントロールルームを落ち着かない様子で往復していた。

その考えが纏まったのか、ソファアーに座る浩介と、浩介の腕に傷薬を塗るジョスライ、武器の手入れをするドルゴに向かって罵声に近い怒鳴り声を上げたのだ。

戦闘を終え、疲れの溜まった三人としては勘弁してほしい態度であるが、それを口には出せず内心溜め息を吐くのであった。

「セリアは連れ去られ、リーダーは重傷！ 終いにはこっちの情報筒抜けだった！ 一体何がどうなっているのよっ！！」

最早、自暴自棄という感じのロゼは疲れた三人などお構い無しに声を荒げた。

だが、ロゼが混乱するのも仕方がない。フィーガルに戻った浩介とジョスライから、大まかな結果と簡単な説明を聞いただけで全てを冷静に纏めると言うほうが無理な話なのだ。

まだ状況を整理しきれしていない浩介とジョスライも、詳しくは後で話すと言って、まずは治療の優先とナーシエの状態を確認する事に意識が向いていたのだ。

結果、ナーシェの命に別状はなく、今はカイと愛理に付き添われ眠っている。そしてドルゴはいつも通りに愛用の槍を手入れし始め、浩介はジョスライに頼み腕の治療をしてもらっていた。

その間にロゼは一人、何とか纏めようと頭をフル回転させるが、悪くなった状況と込み上げる焦りからその苛立ちは三人に向けられた。

「まず、バリアの奴らは最初からセリアの確保とナーシェの抹殺を狙いとしていた」

ロゼをこのままにしておく訳にもいかず、コーヒーでも啜りながら落ち着いて話をしたかった浩介は、予定を変更して口を開いた。

「リーダーの抹殺は戦略として分かるけど、セリアを連れ去った理由は何!？」

「創造の具現。奴らが欲しがるのはそれしかない」

「確かにセリアの能力は異質だけど、何もそんなに重要視されるものではない筈よ! セリアの創造出来るものしか具現出来ないっていう制限があるもの。大抵のものは奴らの技術力と戦力があれば賄えるわ」

「そこまでは俺もわからない。だが、奴らがその能力を欲しがっていたのは間違いない。異質な能力だからこそ俺達の想像を超える何かを企んでいる可能性もある」

浩介の腕に包帯が巻き終わり、ジョスライにお礼を言った後、白いカッターシャツに袖を通す。

ちなみに替えのシャツは背格好が似ているカイのものである。

「実際、グランを筆頭に二人のSランクを投入してきたのだから、

その線が高いだろうな」

浩介の意見に同意しながら、ジョスライもソファーへと腰掛ける。

「じゃあ——ッ!」

ロゼが再び質問しようとした時、コントロールルームの扉が開いたことでロゼは口を閉ざした。そして、入って来たのがカイと愛理だと認識すると同時にホッと肩を撫で下ろした。

「ナーシエはどうだ?」

浩介の言葉にカイは笑みを浮かべて一度頷いた。

「ナーシエさんは心配いりません。今はぐっすり眠っています」
「そうか」

カイの返答にひとまず安心した浩介は、カイの隣に佇む愛理を見て手招きをする。

愛理は直ぐに浩介の隣へ移動し、立ち上がった浩介は愛理の頭にポンと手を置いた。

「紹介が遅れたな。こいつは白木愛理。俺の友達なんだが、訳あって今回の事に巻き込まれたんだ。気持ちの整理も付いてないだろうから、暫くここで面倒を見てほしい。ちよつとの間頼めるか、ロゼ?」

「それは問題ないわよ。リーダーの治療も率先して手伝ってくれたし、ある程度の自己紹介も済ませてるから。ね、アイリ?」

浩介の提案にロゼは穏やかな顔で愛理を見た。

「はい。お願いします、ロゼさん」

愛理も丁寧に頭を下げる。

「それでこっちがカイとジョスライとドルゴだ」

「カイです。宜しくお願いしますね」

「よろしく、嬢ちゃん」

「……………」

カイとジョスライは言葉を返し、ドルゴは無言で頭を下げる。

そんな皆の反応に浩介もホッと息をつく。

愛理を直ぐ家に帰しても良かったのだが、流石にこれだけ関わってしまった経緯というのもあれば、バリア勢、もしくはそれに準ずる依頼屋達がまた愛理を利用しようと考える手立ても有り得るのだ。

浩介は愛理をソファアに座らせ、そんな皆に感謝を込めて全員分のコーヒーを淹れ始める。

「俺も手伝おう」

ジョスライは自分も飲みたかったというのもあり、浩介の隣へ並ぶ。

普段ではカイが気を使って飲み物全般を用意するのだが、エジルに負わされた怪我の状態もあり、今は大人しくソファアに座っている。

「で、それはいいとして、問題は今の現状よ！」

そんな中、口火を切ったのはやはりロゼであった。一度、カイと愛理が入ってきたことと思わず口を閉じた内容をそのまま続ける気で、真剣な表情を浩介へと向ける。

「ナーシェが“不落の策士”と言われているのは知ってる？」

——不落の策士

グランが言っていた言葉を思い返ししながら、浩介は皆の飲み物をテーブルに置き、愛理の隣へと座る。

「ああ、知ってる」

今更詳しい説明もいらないので、浩介は率直に返答した。

「なら話が早いわ。その不落の策士が何の策も無しに街に繰り出し、バラリアの猛攻を受けた。結果論かもしれないけど、状況としては私達を不利な立場へと変えた。でも何の策もなしに行動するリーダーじゃないっていうのがわたし達の意見。意味のある行動だったなら尚更この結果に納得出来ないの。言ってることわかる？」

「……………ああ、何となく、な」

浩介は煙草をふかしながらコーヒーに口を付けた。

「何か聞いてない？」

一緒に出掛けた浩介なら何か知っているんじゃないか……。そんな期待を——いや、そんな推測を持ってロゼは浩介に目を向けてい

た。

その視線から目を背けた浩介は溜め息混じりに口を開く。

「結論から言えば何も聞いていない。ただ、こんな状況にまでなっていたとはナーシェ自身予想外のことだろう」

——こんな状況に“まで”なっていた

浩介の言葉に疑問を感じたロゼは首を傾げる。

「どういうこと？ ナーシェの策では戦闘まで考えてなかったってこと？」

「当然だろう。そこまで考えていたのならもつと装備を強化して行く筈だ」

浩介は一度コーヒーを口に付け、そして静かにカップを置いた。

「これは俺の推測だが、ロゼの思っている通り、ナーシェは何かしらの考えで街をフラついた。だが恐らくそれは戦闘ではなく、この星がどれだけバリアの影響を受けているのか、どれだけ奴らの準備が進んでいるかを垣間見る程度のものだったと思う」

「だけど結局戦闘になったわ」

「それは俺の責任でもある。俺達を尾行してきた奴の正体を知りたかったから俺がその時は退かなかった。それが奴らの作戦だとも気付かずに」

間違いなく自分の責任でもあると感じている。だが、浩介は落ち込む姿などは見せず新たな煙草に火をつけ、視線をロゼに戻した。

「でも、それによつてこつちとしても色々分かったこともある」

「それは何？」

「その前に先ずは情報の整理と共有をしたい」

浩介は一旦間をあげ、皆と視線を交わした後で再び口を開いた。

「まず、地球での状況はわかるかな？ この星をもう一つの拠点にするため日本を裏で支配し、兵器開発を進めた。そしてそれに反発する組織、依頼屋が結成され、決して表沙汰にならない小さな争いへと発展した」

「おいおい……それに何の関係がある？ この星を救うにはどのみちバリアを潰す事しか方法は無いぞ。言い方は悪いが、そんな過去の情報より今の現状をどうするか話し合った方がいいんじゃないか？」

言ってみればこの星、日本で如何にバリアが事を進めてきたのかなどは、全く重要性のない話だとジョスライは考えた。あくまで今の自分達の役割は、日本に來たバリア人の排除だと思っている。正直なところ兵器を造ろうが依頼屋が立ち上がるうがバリアを排除してしまえば、全て解決する問題だ。

そんなジョスライの思いとは裏腹に、浩介は笑みを浮かべてその質問に返答する。

「確かにジョスライの言うとおり、盤面から見ればそれは全く関係ないと思えるかもしれない。元を辿ればジョスライ達の星とバリアでの抗争の延長で奴らは俺達の星に來たんだからな。——だが、それは本当にあんた達の星を独占する為の作戦なのか？」

ジョスライに向けていた浩介の眼が鋭いもの変わる。その顔に曖昧な雰囲気は無く、自信に満ちた表情にも見えた。

そんな顔を向けられてしまえば、ジョスライも自然と眉間にシワを寄せる顔つきへと変わる。

「どういう事だ？ 互いの戦力が五分である以上、この星を拠点とするメリットは幾分もある。現実はこの星で兵器開発をしているし、流石に二つの星から攻撃されると俺達の星も只では済まない」

「構成上ではな。じゃあここで質問をしたい。二つの星の抗争となると、一体どんな戦闘になる？ 俺の知識だと宇宙空間で戦艦の撃ち合いぐらいしか思い浮かばないんだが」

技術力が地球より高いというのは、このフィーガルを見ても明らかである。違う惑星同士の戦争となると、浩介が思い付くのはSF映画のような宇宙での戦いぐらいしかない。

「勿論それがメインとなる。そしてそれをかい潜った戦艦が上陸し地上での戦いへと進んでいく。一度上陸してしまえば、後はお互いの星のある程度の距離に近付けば転送システムで降り立つことが出来る」

「つまりは現状、お互い敵陣に本拠地を置いていて、宇宙戦か地上戦どちらかを制した側が有利になる。当然、星に向けられた攻撃はシールドか何かで防ぐ手段は確立されているわけだろ？」

「その通りだ」

日本で生まれ日本で育った浩介が地球の技術ではまだ発見されていない生命体のいる惑星の事など知る由もない。

だが、ゲームや漫画で出てくる知識で物事を考え、それに大きな間違いがないことに思わず笑みを見せる。

「ならそこで矛盾が生じる。何故ヤツらはわざわざこんな星から攻撃を仕掛けようなど思ったんだ？ ジョーの言うとおり、二つの星から攻撃されたらナーシエ達の星としては厳しいものがあるのは確かだろう。だが、どの道その攻撃に耐えるだけの技術は備わっている筈だ。ましてやいくら技術力を地球の人間に教えても、そのレベルはたかが知れてる」

「実際に此処で造られた兵器での効果よりも、単なる攪乱かくらんが目的なんじゃないの？ 二つの星からの攻撃に加え、ちゅういきぶたい宙域部隊に一斉攻撃されれば間違いなく戦況は変わるわ」

険しい顔でロゼがそう言った。

ロゼの言うように、攪乱させる事が目的と考えることも出来る。実際にその戦いを見たこともない浩介が、地球からの攻撃でどれだけの影響を及ぼすかは見当も付かない。

しかし、それにはまだ腑に落ちない点がいくつかあり、浩介は顎に手を当て考え考え始めた。

「五十年も計画を練ってか？」

そして、ふと出てきた浩介の言葉にロゼは、えっ！？ と聞き返すだけ。愛理だけは全く話に付いていけない様子で表情を変えることすらなかった。

「ヤツらが初めて地球に来たのは五十年前。その時はまた違う目的だったのかもしれないが、兵器を作り始めた頃……少なくとも十年前には今の目的が明確になっていたと思える。なら何故そんな時間も掛かり、回りくどい方法を取る必要がある？ 同じ効果を得るだ

けなら、もつと簡単な戦略は山ほどある。それに、この星と接触を図っていたことがもつと早くにバレていたらその計画自体が白紙になる」

淡々と話す浩介の内容に、愛理を除く全員が考え込む。

バリリアがこの星と接触をしていると分かった時、それは間違いなく戦争に関わる相手の戦略だと決議された。勿論、話し合ったのは国を動かす上の立場の人間であり、ナーシェやロゼ達には決議された内容だけが伝えられていた。

その時は何の疑いも覚えず、計画の全容を把握、または阻止するための行動に思考を向けていた為、改めてその矛盾点を示されると成る程と納得するものがある。

「つまりは、どういうこと？」

いくら考えても答えなど出そうにない。ロゼは率直に浩介の答えを求めた。それは全員同じなようで、考えることを止め視線は浩介に降り注いだ。

「奴らがこの星に来たのはただ戦争での勝利が目的でも、負けた場合の拠点作りでもなく、もつと違う陰謀があるかもしれない、ということだ」

浩介は一段落したかのようにソファアに深くもたれ掛かり、煙草を一本取り出し火をつける。

「戦争とは違う……また別の陰謀……」

こういう事にはあまり詳しくないのか、カイは内容を考えながらも、顔には不安そうな雰囲気表れていた。

逆にロゼとジョスライは険悪ともとれる顔である。考えもしなかった事項を自分達なりに整理しているのだらうと、浩介は煙草片手にコーヒーを飲みながらその姿を眺めていた。

「戦争と全く無関係だと決まった訳じゃない。だが、改めて考えてみたら違う陰謀というのは納得出来るかもしれない」

「そうね。確かに戦力は五分といえ、Sランクの備兵、エジルとグラン率いる地上部隊が直接戦争に関与しないこの星に居ること自体有り得ないわ。兎に角、これは報告しとくべきね」

ロゼはジョスライとそう結論付けた後、上部に報告する為にフィーガルに備えられた通信システムを起動しに向かった。

「誰に報告するんだ？」

その行動を待っていたかのように上体を起こし、浩介はロゼに問い掛けた。

「え？ シン司令官と言って、今回わたし達の作戦の指揮をとっている人だけど……」

どうして浩介がそのような事を聞くのか疑問に思ったロゼは、手を止め浩介に振り返る。

「その人じゃない。なんつったかな……？ ——ああ、そうだ。セードル総司令官と直に話したい」

「なっ！？」

「ど、どうして！？」

浩介から出てくる筈のない名前に、ロゼとカイからは驚きの声が漏れる。

「……………コウスケ。お前……………」

「聞いていたのはジョーだけじゃないって事だ」

それは間違いなく昨晚のナーシェとセードル総司令官とのやり取りである。

まさか浩介も立ち聞きしていたとは思ってもなかったジョスライは驚きと共に感心する勢いであった。

「お前、抜け目ねえな……………」

時刻は二十時を回った。

依頼屋本部で幸村守が命を落とすまで三時間を切った時、フィーガルではジョスライのそんな呟きが聞こえていた。

星を越えた争い2

バラリアがこの地球に來た意味を考えると大きく三つに分けられる。

先ず一つは、戦争に勝つ為の戦略だ。

五分五分である互いの戦力なら、今のバラリア勢が地球からも攻撃する事で相手の惑星に多少なり混乱を招くことが予想される。

二つ目に、戦争に負けた場合、もしくは単純に新たな拠点作りだ。

これは戦争の勝ち負けに関わらず、自分達の勢力を拡大させる効果がある。いってみれば植民地のような考えであり、二つの惑星を自分達の領土として活用出来るのだ。そうすることで例え戦争に負けた場合でも、自分達の拠点を失わずに済み、また新たに態勢を立て直す事が可能となる。

今まで聞いたところによると、ナーシェ達はこの可能性が高いと踏んでおり、ただ単に地球を我が物にしようとしているバラリアの計画阻止を任務としていた。

そして三つ目。これは浩介が提示したそれらとは違う考えである。

拠点を作るというのはあながち間違いではないかもしれない。だが、それが戦争の勝ち負けに関わりあるかと言われれば、その根本性は限りなく薄いというのが浩介の考えである。

ロゼが言ったように、Sランクの備兵、エジルや、恐らく上位の

強さを誇るであろうグランの地上部隊が何故こんな辺境の惑星を乗っ取る計画に参加しているのか。もし戦争の勝利を目的としているのならば、ナーシェ達の惑星で暴れさせたほうがその可能性はうんと高まる筈である。地球で兵器を造ろうとも、その攻撃しか出来ない時点でグラン達が勝利に貢献できる仕事は皆無と言っている。

では、なぜそのような選択をしたのか考えると、浩介の思案した思惑が浮かび上がってくるのだ。

だが、残念ながら今の浩介が分かるのはここまでである。この星で何を成し得たいのか、戦争をどうやって終結させるのか、宇宙の進展を知らない浩介が答えを出すのは現時点では無理なのだ。

だからこそ、浩介はセードル総司令官と話をしなければいけないかった。今の戦争状況を理解し、少しでも相手の思惑を把握しなければならぬ。そして、ナーシェに何を伝えて焦らす行動を取る羽目になったのか、それを知る必要があった。

ロゼ達には伝えてないが、浩介はナーシェの行動を焦りから生まれたものだと解釈している。

戦闘までもっていったのは自分だが、頭の良いナーシェがあそこでも無理に地球での現状を知ろうと街に出るような行動をしたのは、紛れもなくセードル総司令官からの何かしらの情報があつてこそのものだ。

だが、そこまで伝えなくても浩介自身が直接セードル総司令官と話す事に反対する者はいなかった。現に状況の整理や行動の指示をロゼ達に出しているのは浩介だと皆が認めている。

そして、映像付きの通信をロゼが承諾し、その準備をしている間も浩介は煙草を吸いながらコーヒを啜るという、至って落ち着い

た行動を取っていた。

「高崎君」

そんな時、浩介を呼んだのは話に付いていけなかった愛理である。愛理は不安そうな顔で浩介の服をちょんちょんと引っ張っている。

「どうした？」

浩介は小さな声で愛理に顔を向け尋ねる。

「……ううん。呼んでみただけ」

「なんだそりゃ」

そう言って浩介は苦笑する。その僅かな笑顔に愛理もうつすらと笑みを浮かべた。

——良かった。わたしの知ってる高崎君だ……

此処に来てからというものの、浩介との距離感が否めない。当然、異世界から来たロゼ達の居るこの空間、この船艦の中ではよりそう感じるのだろう。それでもその異界人と気兼ねなく話す浩介が——その雰囲気、学校の時より遙か彼方まで離れて行ってしまったような、そんな感覚になっていたのだ。

元からミステリアスな部分があった浩介だから、学校で会話したかのように表に出す浩介の言葉と笑顔に、愛理はホッとしていた。

「悪いな。もう少し訳の分からない話が続くけど、何なら先に寝てるか？ 結構疲れてるだろ？」

「疲れてるけど、まだ起きて此処にいる。実感は無いけど多分今貴重な体験をしてるし、それに……もう少し高崎君を見ていたいし……」

最後の言葉は自然と小さくなり、愛理は顔を赤くして俯いた。

「はは、そんな縁起の悪い事言っなよ。なんか一生の別れみたいだろ？」

そんな愛理に浩介は笑いながら頭を撫でる。複雑な心境で更に俯く愛理は、頭に伝わる浩介の手の温もりを堪能していた。

「コウスケ。お前はもっと女心を勉強しろ」

そのやり取りを聞いていたジョスライが、コーヒーを飲みながら呆れた様子で声を掛けた。

「ん？ どういうことだ？ 一応白木の言ってることは理解したつもりだが？」

「それが分かってないって言ってるんだ。女心とはそんな単純なものじゃねーぞ。時にはストレートに、時には柔らかく、そして時には優しい嘘で包み込んでやるものだ。女の出す多種多様な細かいサインを如何なる時でも感じ取ってやるのが男の使命だ。でなければ女心を知る事は出来んぞ」

ジョスライは一人納得するかのように、うんうんと頷いている。

「ジョスライさんって彼女とかいましたっけ？」

そんなジョスライに、カイが首を傾げながら尋ねる。

「…………いねえよ。つーか分かってて聞いているだろ？」

睨み付けるようなジョスライの眼差しにカイは慌て始める。

「す、すみません！ それらしい事言ってたんで、どうだったかなあつて…………ハハハ」

「つまりは、何の説得力もない力説だつてことだな？」

浩介もコーヒーに口を付けながら、ジョスライに冷めた言葉を贈った。

「説得力が無いとはどういうことだ！ これでも今までの経験はお前より上だ！！」

「知ってるか、ジョー。今の地球では結果が全てだ。例えそれを実践出来たとしても、それだけで彼女ができる訳じゃないとお前自身が証明しているんだ」

「ぐっ！！」

「ジョスライさんも結構いい年ですよ？ そろそろ本気で将来の相方見つけた方がいいんじゃないですか？」

「ぐぐっ！！！！」

「で、でも！ わたしはそういうの大事だと思いますよ！」

「おおっ！！」

追い詰められていたジョスライが、愛理の一言で盛大に笑みを浮かべた。

「ほら見る！ 女性がそう言ってるんなら間違いない！」

見栄を張るジョスライを無視し、浩介は愛理に顔を向ける。

「フォローしなくてもいいぞ。ならそんなジョーから告白されたら白木は受けるのか？」

「そ、それは……ごめんなさい!!」

流れが分かっているのか、愛理はジョスライに向かって思いっきり頭を下げた。

「ほら見る。確かに大事な部分かもしれないが、それが直接交際に繋がるかと言われればそういう訳ではないということだな。良い勉強になったな、ジョー」

「お前、いつか覚えてろよ……」

ああ、疲れたと言わんばかりに煙草を吹かす浩介に対し、ジョスライはジト目で睨みながら傷を癒やすかのようにコーヒーを飲み干した。

「ハイハイ、その独身三人組。セードル総司令官と通信の準備が出来たわよ。馴れ合いも程々にこっちに来て!」

ロゼの声で全員が顔を上げた。

ふと思えばロゼも最初は丁寧な言葉使いだったが、今では浩介に對しても気軽に話している。さっきの会話もそうだ。いつの間にかジョスライをからかうことが出来るところまで壁を無くしている。戦闘がそうさせたのか分らないが、ここ数日で随分距離が縮まったものだと、浩介は苦笑しながら煙草の火を消した。

「ちょっと待て!」

そしてジョスライが不意に声を出す。

「独身三人？　いくら会話に参加してないとはいえ、ドルゴも数に含めてやれよ。可哀想に……」

「可哀想なのはあんた達よ。ドルゴはもう結婚して、子供も一人いるわ。勿論、わたしも彼氏いる――」

「ええええーっ……！」

「ドルゴ！　お前……」

「見かけによらねーな」

カイは絶叫し、ジョスライは固まった。浩介が知らないのは当然だが、カイとジョスライが知らなかったのは意外でもある。

「本当か、ドルゴ！？」

唐突に知った事実にはジョスライはドルゴに詰め寄る。

「本当だ」

それだけ答え、ドルゴはロゼの元へ歩いていく。

「そんなバカな……」

「初めて知りました。男はやっぱクールな方がモテるんですね」

「クールとは、ちょっと違うと思うけど……」

カイの解釈に思わず愛理が控え目にツツコミを入れる。

「ほら！　仲間の情報は分かっただろ？　次は本題の情報を知るぞ」

緊張感の無い雰囲気、浩介が苦笑いを浮かべながら声を掛けた。

偶にはこんな雰囲気もいいかなと浩介は思う。短いながらも気の休まる、そんな一時であった。

「わたしの彼氏の事も反応してよ……………」

そう小さく呟いた口ゼが、気を取り直して通信を開始した。

モニターに映ったのは、険悪な表情ともとれる四十代の男。短く切りそろえた茶色の髪と、同じく茶系の瞳が男前な印象であるが、険しい顔付きがそれらの印象を感じさせない程険悪な表情である。

どうやら機嫌がよろしくないというのは一目で分かる。現に口ゼやカイ、ジョスライに至っても先程の雰囲気とは違い、少々畏縮している様子が見受けられる。

「なんの用だ？」

威嚇するような一言。その言葉で口ゼは軽く身震いした。

「い、いえ……………。一応、現状報告を、と思ひまして……………」

らしくないほど、絞り出したような口ゼの返答であった。

「ナーシェはどうした？　そしてシンには伝えたのか？」

「ま、まだです……」

「順序が違うだろ。まずはシン司令官に伝えるべきじゃないのか？」

「い、いえ………はい。そうです。ですが………」

余程いつもと違うセードルに怖れを感じているのだろう。戸惑う口ゼからの確な言葉が出てくる気配はない。

しかし、ただ順序が違うからといってそこまで不機嫌になるわけがない。セードル総司令官が不機嫌な理由は他にもあると確信した浩介は口ゼの隣へ移動した。

勿論、その理由についても浩介の推測に当てはまっている。

「悪いが俺が頼んだ。セードル総司令官」

浩介の言葉にもセードルは表情を変えない。

「お前がその星の仲間、コースケとか言ったか？　大まかなことはナーシェから聞いた」

「それじゃあこの際、自己紹介は無しにしよう」

「自己紹介どころか無駄話も無しにしたい。こう見えてこっちも忙しいんでな」

「ナーシェがいないとわかれば用済みか？　さぞかし戦争が忙しいんだろうな」

浩介の言葉でセードルの眉がピクリと動く。

「なんだと？　まあお前は知らんだろうが、こういう報告はシン司

令官を経て伝えるのが決まり事だ。俺もこの戦争の全指揮を任されている身でな。一方的に通信をしてこられたこっちの身も考えてほしい」

「先に直接連絡したのはそっちからだろ？ それに、そんな忙しいならこっちからの通信なんて無視すればいい。……だがあんたは通信を受けたんだ。一体何の期待があつたんだろうな？」

浩介は笑みを浮かべ、モニターに映るセードルを見据えた。

「お前には関係の無いことだ。ナーシェにはこちらの状況を知らせただけだ」

「シン司令官を介さず直接か？ おかしな話だな」

「ただの気紛れだ。シンも忙しいのでな。俺から通信することもある」

「あんたよりもシンの方が忙しかったのか。それこそおかしな状況だ。そして、ナーシェにだけ教えなければならぬ報告となればかなり重要な内容だつたんだろう？ 例えば、拮抗した戦争状況に動きがあつた、とかな」

「……ナーシェから聞いたのか？」

「聞いていたらあんたに通信なんてしてないさ。これは俺の推測を確認する為のものだ」

そこで初めてセードルが笑みを浮かべ、声を出して笑った。

「推測を確認か。……まるで分かっていたようなセリフだな」

「図星なんだろ？ あんたらの抗争は間違いなく何かしらの動きがあつた。それも、あんたにとっては良くない方向へな」

そこで、そのやり取りを聞いていたジョスライが思わず前に出た。

「それは本当なのですか、セードル総司令官!?」
「……………」

ジョスライの問い掛けに、険しい表情を浮かべながらもセードルは答えない。

「総司令官!! そちらでは今何が起こっているのですか!? ナーシェに何を言ったのですか!?」

痺れを切らしたジョスライが再び大声を発した。

「……………ナーシェはどうした?」

それに対し、セードルの言葉は弱く、そして小さいものだつた。彼自身、今ここにナーシェがいない意味を察しているの言葉だ。

「敵に討たれ重傷です。命に別状はありませんが、完全に動けるまで当分掛かるかと……………」

ロゼは重苦しい空気の中、ナーシェの容体を簡潔に伝えた。

「そうか……………。最早そちらでの決着は絶望的か……………」

「決着!? やはりこの星にエジルやグランが居るのは重大な意味があるのですか!?」

「グランだけでなく、エジルもそっちにいるのか。これはしてやられたな……………」

「どういう意味ですか、総司令官!? この星にエジルとグランが居るということは、敵の戦力は少なからず弱まっている筈でしょう!?」

「弱まってなんかないのさ。寧ろ確実に戦争に勝てる保証があるか

ら奴らはこの星にいるんだ」

いきり立つジョスライに対し、セードルの代わりに浩介が口を挟んだ。

そしてそれを聞いたセードルが静かに口を開く。

「コースケ。お前はどこまで掴んでいる？」

「粗方は掴んでいるつもりだ。ただ推測が大半を占めるから絶対の確証はないけどな」

「成る程。直接俺に通信したのはそれだけの推測があつたからか。確かにシンじゃ役不足だな」

「納得するのはいいが、こっちは一つも納得してないぞ。俺だって全部の推測を話したわけじゃないし、ナーシェがこんな状態じゃ戦力も半減だ。作戦を練るには正確な情報が欲しい」

「そうだな。下手なプレッシャーをかけないようナーシェにだけ話したが、それも今となっては間違いだったか……」

「どういうことですか？」

ロゼが真剣な表情で問う。ロゼだけでなくジョスライやカイ、ドルゴも険しい顔を向けていた。その姿は最初に見せた畏縮や動揺は見当たらない。それだけセードルの説明を待ちわびていたのだ。

そして――

「俺達の討つべき相手がその星にいる。そして、我々宙域部隊の五軍のうち三軍が全滅した。どういう意味かわかるか？」

モニターから聞こえるセードルの声音に、皆の頭の中にあつた状況の構築図は一瞬にして白紙になった。

ただ一人、浩介を除いて。

星を越えた争い3

「俺達の討つべき相手がその星にいる。そして、我々宙域部隊の五軍のうち三軍が全滅した。どういう意味かわかるか？」

誰も答えない沈黙が続く。

戦力が拮抗していたのは紛れもない事実だったのでそれも仕方のない反応だ。

少し前まで五分五分だった戦争状況が、この数日で一転したとなれば、その理由を誰も理解することが出来ないのは当然である。

そして、場が凍り付くようなその沈黙を破ったのはやはり浩介だった。

「宙域を支配されれば容易く自分達の星に敵の地上部隊がなだれ込む。後は途切れる事のない援軍にあんたらの国は耐え忍ぶのみ。宙域、地上と二つの場が均衡していたからこそ互角だったのなら、どちらかが支配された時点でどちらかの敗北が決定する。つまりはあんたらの負けが濃厚になった」

ストレートな言葉を言い放ち、浩介はセードルに顔を向けた。

「まだ……まだそうと決まった訳じゃない!!」
「いいや。彼の言うことは正しい」

決して認めたくない想いからカイは抗議するが、セードルは渋い表情で首を横に振った。

「今はまだ地上部隊が食い止めているが、それも時間の問題だ。いずれ我々の地上部隊を上回る数の勢力が集まり叩き込まれれば我々に打つ手はないのだ」

「そ、そんな……」

「何故急にそのような展開になったのですか！？ セードル総司令官」

それなりの期間を自国の部隊に身を預けているジヨスライは、全体の戦力も知り尽くしている。

宙域部隊のメインは五人のベテランリーダーが率いる五軍から形成され、そのチームワークを駆使した防衛は誰もが認める安定感を誇る。地上部隊の強さもあるが、戦力が互角とされる最大の要因は宙域部隊の防衛力にあるといっても過言ではない。

いくらバリアの宙域部隊が総攻撃を仕掛けても、そう簡単に崩れる筈がないのだ。

それを知っているジヨスライだからこそ、セードルの言った言葉を理解することは出来なかった。そして、セードルがそのような嘘を付くことはない知っているので余計に不安は増している。

ジヨスライの問いに、セードルは深く息を吐き出してから重い口を開いた。

「“デイノラド”がバリア側に付いたのだ。五軍といえどデイノラド勢力も相手にするのは無理だった」

「デイノラドがですかっ！？」

思わずジヨスライが大声を上げた。その言葉はジヨスライだけで

なく、他のメンバーをも驚かす内容だった。

「なんなんだ？ “ディノラド” って？」

聞き覚えの無い浩介は当然のように説明を求める。

「ディノラドとは、我々“センドリース”と“バラリア”の上方にある大きな惑星だ。今までは戦争に関与することはなく、あくまで中立の立場を取っていた星だったが、急遽、バラリアと共に攻撃を仕掛けて来たのだ。あまりに急なことだった。五軍含め、我々も何一つ対処出来なかったのが本当のところだ」

「成る程……」

セードルの説明に浩介は頷く。

「君達にはまだ教えるつもりはなかった。何しろ、センドリースの宙域は既にバラリア側に占拠されていると言っている。今の君達に戻る術はないのだ」

最初の陰悪な表情から一転、申し訳なさそうに俯くセードルの表情が現状の厳しさを物語っている。

「じゃあ、このままわたし達は自分達の星が乗っ取られるのを黙って見てるしかないの……？」

「そんなの……辛過ぎますよ……」

落胆の色が隠せない口ゼとカイ。ジョスライとドルゴは無言を貫くが、感じている心境は一緒である。

浩介は頭を掻きながら、煙草に火をつけフーツと煙を吐き出した

あと口を開く。

「今現在、どれだけの侵略があるんだ？」

「現在は地上部隊が総出で前線を固めている為、そこまで侵略はさせていない。だが、いつまで持ちこたえられるか……」

「あんたの推測でいい。完全崩壊までどれだけの時間持ちこたえられる？」

「……およそ一ヶ月。それ以上は無理だろう」

「一ヶ月か……。短いな」

「それもほんの目安でしかない。最悪、二週間で勝負が付くだろう」

「そこは意地を見せてくれよ。あんたらの地上部隊もそれなりに骨のあるヤツらばかりなんだろ？」

「当然最大の抵抗はするさ。その点は俺が保証しよう」

「こっちは保証出来ないがな」

「ちょ、ちよつと待って下さい！！ 何故そんな落ち着いていられるんですか！？ セードル総司令官も……状況は最悪なんですよ！！」

浩介とセードルの会話があまりにも和んでいる。お互い笑みさえ浮かべていたこともあり、カイが慌てて口を挟む。

このままいけばカイを含めこのメンバーの生まれた星であるセンドリースは崩壊する。それは覆らない事実。

愛する家族、恋人、仲間さえも命の保証はない。部隊の人間は処刑され、女は身体を弄ばれ結局は奴隷などの生き死にに成り下がる。戦えない男は毎日重労働を課せられ力尽きるまで働かされる。

そんな光景が目には浮かぶ程のバリアによる独裁政権がすぐ間近に迫っている中で、カイは動揺を抑えることなど出来なかった。

「今すぐにもセンドリースへ戻りましょう！！ 僕らも戦わないでどうするんですかっ！？ どうせ死ぬなら僕は最大限戦ってみせますー！！」

「その意気込みは認めるが、俺はそんな事を頼むつもりはない」

「何故ですかっ！？ セードル総司令官！！」

「わたしもカイと同じです！ 例え宙域が支配されていても何とか耐えてセンドリースに戻ります！」

カイの勢いに触発され、ロゼもセードルに真っ直ぐな視線を送った。

浩介は二人の気持ちを察しながら、灰皿代わりにしているガラス容器へと煙草の火をもみ消した。

「落ち着けよ。なんにも黙って隠れてるなんて言ってるわけじゃないんだ。自分の星の状況を聞いて、セードルの言った内容を忘れたか？」

その言葉で視線は一気に浩介へと集中する。
そしてセードルが大きく頷く。

「そうだ。俺は討つべき敵がその星にいる、と伝えた筈だ。そして君達にはその任務についてもらいたい」

「それって……」

「そっちにいるバリリア勢の抹殺だ。援軍を送る事が出来ない以上、君達にその任務を任せる他ない」

「それでセンドリースの無事が保証されるのですか？」

「直ぐには無理だろう。だが、トップが倒れたと分かれば必ず統率に乱れが出る。その隙に叩くしかセンドリースを守る方法はない。

……頼めるか？」

セードルが言ったのは、命令ではなく確認である。
断られれば命令に切り換えるしかないが、それしか解決策が無い
今、断る理由もないのだ。

何よりもう一度グランやエジルとの戦いを繰り広げなければなら
ないので、当然命の保証は出来ない厳しい任務になる。

その任務の厳しさと重要性を理解しているからこそ、セードルは
命令という決断は取らなかったのだ。

自分の星を捨てれば少なからず生き長えられるが、センドリース
の終わりが確実になる。そして、戦うことを決断し敗北した場合に
もセンドリースは終わる。例え勝った場合でも、センドリースの終
わりが回避された事にはならない。

それ程条件が厳しいのなら、その決断はそのメンバーに任せよう
と思ったのだ。

そして暫しの沈黙が流れた後、ジョスライがパンツと拳を叩いた。

「やるしかないなら……やるしかないだろ！」

「そう……ですね。やってやりましょう！」

「初めてね。これほどの重要な任務は……」

「…………叩き潰す」

メンバー全員の意志が固まった時、セードルと浩介は同時に微笑
んだ。そして、モニター越しに顔を合わせる。

「と、いうことだ。んで？ その討つべき敵とは誰の事だ？」

「バラリア全体を統一している王の中の王。『ブライト・バラリア

皇帝”だ」

「ブライト・バリリア皇帝……」

浩介は頭に刻むように一度呟いた。

「一つ聞きたい。そいつは強いのか？」

問題はそこである。ブライト・バリリアがどれだけの力を持ち、どれほどの器の人物なのか。

自分の推測が正しければ……と確信を持っていた浩介は、セードルの返答に疑問を抱く結果となる。

「彼が優れているのは絶対的な頭脳だ。強いが弱いかの武力で言えば彼自身は弱い。厄介なのはその頭脳と統率力を駆使して鍛えた側近の部隊だ。グランもその側近部隊だからな」

「ブライトは……弱い……？」

「どうした？」

突然考え込んだ浩介を見て、セードルが尋ねる。

「そのブライトが魔術を使える、とかはないのか？」

「魔術？ 珍しい言葉を知ってるな。勿論それはない。魔術なんて古くから言い伝えられている伝記にしか出て来ない。現在のセンドリス、バリリア、そしてディノラドでも使える人間は一人もいない」

「誰も、使えない。魔術……」

小さく呟きながら、折町の言った言葉、そしてあの呪いは何だったのかを考える。

死に逝く日本人の言葉だ。決して嘘を付いているとは思えない。

——なら、“魔皇帝”とは……誰なんだ？

「何か思い当たる節があるのか？」

「あ……いや、何でもない」

セードルに伝えようか迷った挙げ句、今はまだ黙っておくことに決めた。

そもそもあれが魔術でない可能性もあれば、ブライト・バラリアがこちらでそう名乗っているとも考えられる。

「兎に角、君達が無理をする必要は無い。相手が強大である以上、慎重に動いてくれて構わない。ナーシェにも、そう伝えといてくれ」

考え込む浩介を余所に、カイ達ははつきりと二つ返事を返す。

「何か進展があればこちらからも随時報告をする。そちらから何かあれば俺に通信をしてくれて構わない。………それとコースケ」
「ん？」

突然自分の名前を呼ばれた浩介は、モニターに映るセードルへ顔を向ける。

「皆を頼む」

「ああ」

その意味を察した浩介はしっかりと頷いた。

「だからナーシェさんは街に出て内情を探ろうとしたんですね……」

セードルとの通信を終えた後、各自飲み物を片手にテーブルを囲っていた。

何故ナーシェがあのような行動を取ったのかはセードルの話を聞いて理解した。飲み物の入ったカップを両手で握り締めたまま、カイはナーシェの行動を思い返していた。

「センドリースがピンチと聞けば、ナーシェといえど焦る気持ちがあつたんだろう。それを伝えなかったのはセードル総司令官と同じで、俺達の心境を追い込みたくなかったってところか」

カイの言葉を聞いたジョスライがそう付け加える。そして、そこからセンドリースの知り合いであろう部隊の話に突入していった為、浩介は一人違う思考に没頭していく。

ナーシェと共に街に出た時、ナーシェにしてはネガティブな発言をしていたのはそういうことだったのかと、内心溜め息を吐く。

自分達の星が危険な状態、そして帰ることも許されないと知らされれば、誰だつて焦る気持ちはあるだろう。センドリースが最悪の結果になるより早く奴らの拠点を見付け、叩き潰さなければ先に進めないとなれば、否が応でも行動しないといけないのだ。

それならセンドリースに関係のない俺に相談してくれば良かったものを、と思う浩介だったが、それは今更な部分もあるので深くは考えない。寧ろ、あんなことがなければ、浩介には話すつもりだったかもしれない。そうでなければ浩介と“二人”でという考えには至らない筈だと勝手に結論付けていた。言うつもりがなければ、ナーシェが可愛がっているセリアと出掛けていたのではないか……。

——そつちも早く解決させなくては……

自分の思考の中にセリアが出てきた事で、思考内容はまたガラリと変わる。

セリアを連れ去った理由、場所は今の浩介には分からない。戦闘員としてしっかり働いているといっても、心も体もまだ幼い少女である。そのセリアがグランの言葉で心に深い傷を受けている可能性は十分にある。ましてや心を閉ざしていることだって考えられるのだ。

それをナーシェに伝えれば、自分の怪我など気にせず助け出そうとするのは目に見えて分かる。

——どうしろってんだ……

頭が痛くなるような状況に、浩介は一人もがいていた。

「ちよつと、コウスケ！ 聞いてんの！？」

そんな浩介は口ゼの強い口調で我に返る。

「あ？ 悪い、聞いてなかった」

「しっかりしてよ！ 今のリーダーはあんただってみんな納得してるんだから」

「いや、リーダーとか言われてもあんたらの星の内情なんて殆ど知らないぞ」

「その話とはづくに終わったわ！ 今はブライトがこの星にいる理由とか、セリアの事とか、色々話合ってるんじゃない。あんたが聞いてなくてどうすんのよ！？」

「そうだぞコウスケ。何しろセードル総司令官がお前に任せたと認めるぐらいだからな」

「そうですよ！ セードル総司令官に敬語を使わない人は僕らの知ってる人達の中でも少ないんですから！」

「最初は焦ったけど、思いのほか清々しさもあつたわ」

「うむ。少し見直したぞ……」

三人だけじゃなくドルゴまで会話に参加して盛り上げている。そんな状況に浩介は苦笑いを浮かべながら、ナーシェの苦勞を思い知った。

「あの……、また話変わってますけど……」

そこでちゃっかりとツツコミを入れる愛理も中々新鮮であつた。

「というか、自分の星がピンチだっていうのに、随分と楽しんでるようだが？」

浩介がそこを指摘すると、思いのほか早く真剣な表情に変わるジヨスライが口を開く。

「だからといって焦っていても仕方ないだろう。セードル総司令官

は一ヶ月は持つと言ったんだ。可能性がゼロでない以上、俺達のやることは変わらない。寧ろ明確になったんだ」

そこでドルゴが頷く。

「心配するな。いざとなれば覚悟は出来ている。バリリアを潰す為ならこの身を捨てても戦い続ける。それ程名誉ある任務だ」

今度はドルゴの言葉に全員が頷いた。そこに半端な気持ちは存在しない。

「成る程。いつでも動ける準備は出来てるってわけか。それは頼もしいな」

「いつちや悪いけど、その為にはコウスケの力が必要なの。どのタイミングでどう動けばいいか、その判断が出来るのは悔しいけどあんただけ。だからコウスケの考えを聞いているのよ」

「ブライトがこの星にいる理由か？ まあ奴らの狙いが分からん今安全だからこの星にきたんじゃないかと言えないな」

ブライトよりも気になることがある浩介は、ふと思った事を口にした。するとロゼは睨むような鋭い目を浩介に向けた。

「なんかいつもより適当じゃない？ なに？ 眠いの？」

「疲れてはいるが眠くはない。ただ、ヤツの事は今考えても答えが出ない。勿論、セリアの事も」

「それは、コースケさんの言っていた奴らの狙いが分からないからですか？」

「それもあるが……いや、そういう事にしよう」

そう言って浩介はコーヒーを啜る。その曖昧な返答にジヨスライ

は眉間にシワを寄せる。

「コウスケは何かを掴んでいるんだな？」

一斉に向けられた期待の眼差しを、浩介は煙草を吸う事でスルーした。

「掴んでいるというより、俺の周りを浮遊している、と言った方がいいのかもな。それは確信でもなけりや推測でもない。全く絵図の分からないバラバラのジグソーパズルのようなもんだ」

「ジグソー、パズル……？」

「あ、これは伝わらないのな……——ん？」

苦笑する浩介の肩にポンと何かが当たり、浩介の目線はそちらに移動する。そこにあつたのは愛理の頭である。

疲れもピークに達したのか、愛理はうたた寝状態で浩介に倒れ掛かっていたのだ。

「白木、白木。もう寝るか？」

軽く肩を揺さぶり、浩介はうたた寝している愛理を起こす。

「ほえっ？ ……………うん。もう無理みたい。寝ようかな……………」

「色んな事があつて疲れていたのね。仕方ないわ」

「ロゼ。他に空き部屋はあるか？」

「ごめんなさい。個室はもう一杯なの。良かったらわたしの部屋を使つて」

「え、でも…………それは悪いです……………」

「なら俺の部屋を使うといい」

そう提案したのは紛れもなく浩介である。

「えっ！？ 高崎君の部屋に？ で、でも……それは………その……」

一瞬、目を輝かせた愛理だったが、深く考え徐々に俯いていく。

「問題ないだろ？ 別に俺が私物化してるわけでもないんだし」

浩介の言う通り、その部屋は元からの簡素な状態のままである。特にプライベートな物が置いてある訳じゃないのでそう提案した浩介だったが、それはロゼの強い口調によって止められた。

「問題ないって、大有りじゃない！ なに！？ あんた、アイリと一緒にベッドで何するつもりなの！？」

身を乗り出すように問い詰めてくるロゼに、浩介は全身全霊をこめて否定する。

「まてまてまて。変な誤解してるぞ」

「何が誤解なのよ！ あんたそういう大胆な趣味があつたの！？」

「コウスケ、やるなあ」

「違うっつーの！ 寝るのは愛理一人だ。今日俺は寝るつもりはない！」

「何もそこまでしるってんじゃないわよ。そんなのアイリだって後味悪いじゃない」

浩介が寝ない代わりに、愛理を部屋で寝かす。ロゼの言葉に愛理も頷き同意するが、浩介はそれも違つと付け加えた。

「今夜、奴らが動き出す。Sランクが何人来るか分からないが、黙って見過ごす訳にはいかないからな」

「おいおい、それは初耳だぞ」

その言葉にジョスライは驚き、飲みかけていたカップを手元に置いた。

「グランが言っていたんだ。依頼屋本部を今夜潰しに掛かるらしい」

時刻は二十一時半過ぎ。

腕時計で時間を確認した浩介はロゼへと顔を向ける。

「ロゼはこの近郊一帯を魔力探知してくれ。Sランクが居れば必ずそれに引つ掛かる。そこが依頼屋本部の拠点だ」

依頼屋本部の拠点を知らない浩介にとって、後手に回らなければいけないのは必然だった。しかし、グランから前もって情報を得れたのだから後手に回っても後れをとることは^{おく}ない。

それはバリアに立ち向かう上で、貴重な日本の戦力を潰したくないと思う浩介にしてみれば、その襲撃の対策をとれる大きな情報である。

それもあって今日は眠れないと断言する浩介は、下準備をするかのようにブラックのコーヒーを飲み干した。

「作戦はどうする？」

どの様に動けばいいのか、ジョスライはそれを浩介に尋ねる。そ

の眼差しは意気込みを感じられるほど熱く、浩介は信頼を込めた笑みを浮かべる。

「行くのは俺とドルゴとジョーの三人。ロゼはフィーガルで状況を確認しつつ、俺達のフォローを頼む。そしてカイはロゼのサポートとナーシェの付添いを頼む。現状を知った時、ナーシェなら無茶しかねない」

尤も、いつ目覚めるかわからないけどな、と付け加えた浩介は溜め息まじりに苦笑する。

センドリースの現状はセードルから聞いているだろうが、セリアが連れ去られた事をナーシェは知らない。それを知った時ナーシェ自身が責任を感じ、万全でない状態でも動こうとするナーシェが容易に想像できる。

「まあ……それも致し方ないですね。了解しました」

浩介がカイを連れて行かない理由はカイ自身の状態も良くはないからである。

センドリースが大変な時に動けない自分を悔やむ気持ちもあるが、このままの状態で行っても足手まといになるのは目に見えている。

カイはそれを納得し、浩介の言葉に頷いた。

「それから、一つ確認しておきたい事がある」

浩介は立ち上がり全員を見回した後、ロゼのところで視線を止めた。

「もし……魔術が現実にあると仮定して、魔術と魔法の違いを教えてください」

「え!？」

「皆が知っている仮説の知識程度で構わない。大まかに何が違うかを知りたいんだ」

存在しない筈の魔術の理^{ことわり}を聞いてくる浩介に皆驚いた表情を見せるが、浩介は至って真面目な顔を向けていた。

この場で冗談なんて言う筈ないので、ロゼは困惑しながら口を開く。

「仮説どころか……古伝で稀に出てくるぐらいだから、違いを聞かなくても正確な答えなんて言えないわよ」

「俺は少し聞いた事がある」

困惑するロゼ達だったが、ジョスライは記憶を引っ張り出したかのように違う顔をしていた。

「知つての通り、自然の原理を魔力に宿し、形を表すのが魔法だ。それは自然の物理と生物にとつての相性の良し悪しで宿す量も形も違う。灯火程度しか出せない人もいれば、巨大な炎を出せる人もいるのはその為だ。科学とも合理され、今や俺達の生活に欠かせないモノとなっている。魔法は使われるべくして使われているモノ……しかし、魔術は違う」

「魔力なんて必要ないってことか？」

「そうだ。厳密に言えば魔法と似て異なるモノ……と言っておこう。魔法は大気中の天然魔という成分を元として体内に蓄積され、そこで魔力として変換し放出する事で魔法となる。だが、魔術はその名

の通り“術”なのだ。天然魔など一切関係なくその術を行使して呪術、操術など様々な現象を起こすことが出来ると聞いている」

そこで浩介はジョスライの言葉を自分なりに整理する。

「つまり、人に呪いを掛ける……人を操ることが出来る……そして魔法のような攻撃性も兼ね備えているってことか。だから魔法と似て異なるモノなんだな？」

浩介の言葉にジョスライは頷いた。

「勿論、俺も見たことはない。だからその内容が合っているかどうかは確証しかねる。実際に“魔術を使える人間”がいたとしても、本当に呪術や操術など扱えるかは自分自身、半信半疑だからな」

「その魔術を実際に使う為の方法は？」

「魔術がどういう原理で発生するのか……現在では全く分かっていない。何しろロゼの言うように大分昔の古伝ですら詳しくは書かれていないし、この時代の人間では“魔術”という単語自体知らない者も多い。それ程希少な存在なのだ」

ジョスライはカイをチラツと見てからそう言った。

啞然とする表情で聞いていたカイを見れば、魔術を知らない人間も多いというのは頷ける。地球では魔法自体が御伽噺の域だが、ジョスライ達からいえば魔術がそうなのだろう。

それもその単語自体広まってはいないのだから、これ以上魔術について知るには限界があった。

知らなかったのは反応からしてカイだけであつたが、その変わりというようにロゼは鋭い目をジョスライに向けていた。

「どうしてジョスライはそんなこと知ってるのよ？」

ジョスライ本人も魔術は希少だと言った通り、その存在は人々にとつて表沙汰どころか闇にも葬られていないような未知なる存在にすぎない。詳しくではないが、一般の知識では知ることの出来ない情報を持っていることに疑問を感じるのは当然の反応だった。

そのロゼの反応にジョスライはふむ、と相づちを打ちその経緯を思い返す。

「……俺はセンドリースの中でも極小さな村で育った。その村に伝わっていた魔術の出てくる御伽噺を爺さんから聞かされていたんだ。今の知識も全て爺さんから聞いたものだ。まさかこんなところで作り話だと思っていた爺さんの話が役に立つとは想像もしてなかったがな。後五年も経っていたら俺自身忘れていたところだ」

ハッハッハと笑うジョスライに浩介は俄に首を傾げる。

「ともかく、魔術についてはそれで以上だ。それよりもアイリがもう限界のようだが？」

ジョスライが言うように愛理はソファアの上でコクン、コクンと夢の中へ入りかけている。

「ああ……そうだな、時間を取ってすまない。その時が来るまで皆も体を休めていてくれ。ロゼは悪いが俺と一緒に魔力の探知を頼む」「りょーかいよ、コウスケ」

ロゼの当然のような微笑みに浩介は頷き、それから各自フィーガ

ル内で自由に寛ぐのだった。

——セリア……無事でいてくれよ……

連れ去られた仲間を助ける為に浩介はその意志を強く固め、守るべく為の戦略を行動に移していった。

依頼屋の攻防 1

鳴り響く警報音の音は依頼屋本部に異常を知らせ、建物内にいる全ての人に動揺を与えた。

依頼屋のトップである緒方亮二から問われた依頼屋に残るかどうかを一晩で考えなければならぬ矢先、只でさえ緊迫していた依頼屋内部の人間に警報音が追い討ちを掛ける。

とは言ってもその仕事上、何が起ころうとも対処できるよう訓練はされている。統制の取れた動きで廊下を走り回る警備隊もその恩恵を受けているのだ。

本部で寝泊まりしているのは警備隊だけではなく、戦闘に特化しない部署の人間も多くいるのだが、警備隊の指示と訓練の賜物もあり不安を抱いても取り乱す者は居なかった。

「社長！ ご報告します！」

そんな中、飛び入るように社長室の扉を開けたのは警備隊所属の人物。

その一室には社長である緒方亮二と警報が鳴る前から緒方と談話していた綾華と杉田の姿もある。

「警報場所は本部三階……手術室と判明しました！ 中からロックされており、開けるのに少し時間が掛かってしまいましたが……その……」

警備隊の人物はそこで齒切れが悪くなり、報告しにくそうに口ご

もった。

「手術室だと？ たしか……今日柴田君の手術をするとか幸村が言っていたが……」

聞いたのは今日の夕方である。聞き間違える筈がない。

「まさか……柴田君は……！？」

最悪の展開を予想した綾華は顔色を変えながら警備隊の人物に視線を送る。

「い、いえ……柴田さんは無事です。手術も完璧に終わった状態で眠っていました。しかし……」

「幸村は！？」

怒声のような声を上げた緒方にその男は縮こまる。

「ゆ、幸村さん含め……医療班数名の死亡が……確認されました……」

「な、なんだと……」

緒方の身体から全ての力が抜けたような、そんな弱々しい声だった。

「……現在、本部の全てを搜索中ですが外部から侵入された形跡はありません。犯人の身柄も分かつてはいませんが……」
「これで決まりだな」

顔をしかめる緒方を前に、杉田が重い口を開く。

「俺達の推測通り、内部にいるスパイの犯行だろう。緒方さんの指令通り警備は厳重にしていたにも拘わらず行動に移している。動きにくくなる前に行動したのか……咄嗟的なものなのか、判断は出来ないが」

「でも……行動に移すとしてもスパイ一人で本部を落とそうなんて無謀にも程があるわ。バリア勢と繋がりがあるなら警備をより強化して援軍の対策をしないと」

内部の人間の仕業というのは明確である。そのスパイをより動きにくくさせるため依頼屋組織を縮小させようとした緒方の考えは間違いではなかった。

ただ唯一の誤算はその前に動かれた事だ。スパイがその事情を報告しようとも多少の時間が残されていると考えていた緒方の裏を取るようなタイミングである。当然、そのスパイ一人で実行されるとは微塵も想像していなかった。

「聞いての通りだ。警備を厳重にし、今本部に残っているメンバーを全員集めさせる」

「はっ！」

警備隊の男は敬礼した後、速やかに部屋を出て行った。

「まさか幸村が………」

緒方の口から嘆息が漏れる。

「ご冥福を祈ります。ところで緒方さん……聞くところによると、その幸村さんは依頼屋でかなり重要な立場にいたと考えられますが

……」

あまりに大きなダメージを負っている緒方を見た杉田は、幸村という人間が依頼屋でどういう存在だったのかを尋ねた。

「幸村は今の先端医療の第一人者と言っても過言ではない。依頼屋に尽くしていた為に世間には公表されていないが、折れた骨の接合手術は幸村が開発したものだ。従来、一ヶ月は掛かるであろうところをたった数日で動けるまでにするのは今現在幸村しか出来る者はいないだろう。勿論、外科医としての腕は全般通して一級品だった」
「……それは依頼屋の実行部隊としては大きな存在ですね」

「それだけじゃない。彼は勉強熱心で全て依頼屋の為に動いてくれた。人望も厚く、実行部隊だけでなく他のメンバーの悩みなんかも聞いていたよ。誰もが幸村に信頼を置いていた………それ程影響力のある男だった………」
「それ程影響力のある幸村さんだったからこそ………真っ先に狙われた」

綾華の言葉に緒方は唇を噛み締める。

実行部隊じゃなく、トップに位置する緒方亮二でもなく、戦闘手段を持たない医者………しかも誰からも信頼される幸村を先にだ。

為すすべない憤りを感じながら、次第に心が熱くなっていくのを感じる。

「これは依頼屋に向けた宣戦布告だ。私達に後戻りは出来ない。もう………全てを終わりにしよう」

緒方はゆっくりとした動作で、机の引き出しの中から一つの銃を取り出した。

「父の代から始まった日本の抵抗を終わらせる。十年前に成し得れなかったことを、今私が清算させよう」

父の残した遺産と言える古い拳銃。それを使う時は全てを終わらせる覚悟をした時だと決めている。

十年前に父を亡くすことになったあの爆破事件から此処まで立て直したのは緒方亮二の意地と言えよう。だが、その時あった依頼屋の勢力は徐々に削られていき、幸村や弟の祥三さえも失った緒方亮二に再び立て直しを図る考えは毛頭ない。

「共に、闘ってくれるか？」

拒否されたとしても緒方はやり遂げなければいけない。その為の依頼屋なのだから——という祥三の言葉を再現するような、緒方からそんな強い意志を感じ取れる。

無論、緒方の言葉に二人は頷く。

「俺達は一度マスター……祥三さんに助けられました。その恩返しを今しようと思います」

「今更聞くような事じゃないでしょ？ わたし達が依頼屋に来たのには意味がある筈。わたしは自分で正しいと思える道を進むわ。勿論、依頼屋の一員としてね」

二人の答えに緒方は微笑み、銃を懷にしまう。

「ありがとう。君達は柴田君の様子を確認してくるといい。恐らく警備隊に聞けば場所を教えてくれる」

「そうね……多分まだ眠っているでしょうけど、姿は見えておきたいわね」

「なら柴田は楠木に任せるとしよう」

緒方に同意した綾華とは別に、杉田はそう口にした。

「杉田さんは会っていないの？」

てつきり一緒に行くものかと思っていた綾華は杉田に尋ねるが、杉田は苦笑を浮かべ頭を掻いた。

「いや……まだ刑事の感覚が残っているんだろうな。柴田が無事ならば俺は現場を見に行こうと思う。何か手掛かりが残っているかもしれない」

一日、二日じゃ長年続けた仕事を無に返す事など出来ない。刑事として身体の奥が疼くような、そんな感覚を抱きながらの苦笑である。

「刑事辞めても……やっぱり刑事なのね」

一方の綾華もしようがないと言わんばかりの苦笑を見せる。

「一応、相手はもう動きを見せてるから気をつけて捜査しないと痛い目みるわよ」

「そうか……そうだな。犯人が内部の者なら全員が容疑者だからな」

杉田は依頼屋から受け取った拳銃の弾を確認し、腰に付けた専用のケースへと戻す。

「楠木も油断するなよ。いつ誰が狙われるか分からないからな」
「大丈夫。心得てるわ」

綾華も同じように受け取った拳銃を確認した後、小さく頷いた。

「緒方さん、当然あなたも気をつけて下さい。次はトップが狙われる可能性が十分にありますから」

「なに、そんな簡単に殺られはしないさ」

祥三と共に訓練し、依頼屋として行動していた実績はある。それでも依頼屋のトップとして活動していた期間は長く、その間のブランクはあるが緒方は弱音を吐くことなく笑みを浮かべてみせた。

「何かあつたら駆けつけます。では、後ほど」

杉田は小さく礼をしてから部屋を出る。残された二人も目的とする場所が違うので迷うことなく行動に移そうとする。

「楠木くん」

杉田と同じく、部屋を出ようとした綾華を緒方が止めた。

「なに？」

綾華はその声で振り返る。

「……君は……本当にこれでいいのかい？」

緒方の口から出た言葉は綾華の意志を再確認するものだった。

「君は女性で……まだ若い。元々君を巻き込んだ発端は依頼屋にある。何度謝つても許して貰える事じゃないかもしれない。それなのに、君の依頼屋と共に闘ってくれという決意はとて有り難かった。しかし……だからこそ……依頼屋として、ひとりの人間として君には幸せになって貰いたい。こんなところで命を賭ける必要はないと思う」

思わぬところで再び訪れた分岐点に綾華は一瞬驚いた表情を見せる。内容としては一度浩介から言われたことに酷似しているが、それとはまた別に今度は依頼屋としての責任を兼ね備えた緒方の願いが入っている。

真剣な表情の緒方に、綾華は思わず苦笑を漏らし口を開いた。

「確かに……あの通り魔からわたしの道はガラリと変わったわね。それもただの通り魔ならまだしも依頼屋組織から命を狙われるとは思ってもなかった」

苦笑混じりに向けられた視線に緒方は申し訳なさそうに俯いた。

「それが無かつたらわたしは今もひとりの女子高生として生活していたでしょうね」

綾華の尤もな言葉に緒方は更に肩を落とすが、顔を上げて綾華を直視する。

「だからまだ遅くはない。今からでも普通の人生に戻れる」
「でもわたしは知ってしまった。今の日本がどういう状態か……あなた達のおかげでね。そんな中でわたしは幸せを得ることなんて出来ない。普通の人生を送れるはずがない。わたしはそう思う」

暫しの沈黙の後、綾華は溜め息混じりに息を吐き出す。

「あなたがわたしの命を重要視してくれるのは分かるわ。でもあなたの案は何の解決策にもならない。それに……わたしはこんなところで死ぬつもりもないわけだし」

バタバタと廊下を走る足音を意識しながら、綾華は緒方から目を外し体を翻した。

「全て見届けてからわたしは幸せを考えることにするわ。少なくとも、今は考えられないもの。柴田君も杉田さんも……浩介だって……そうするはずよ」

そう言って綾華は部屋を出て行った。パタンと扉の閉まる音のすぐ後、緒方は笑みを浮かべ頭を掻いた。

「君達は強いな……」

世の中がそう単純であればどれだけ良かったことが。

「だが……君達はまだ事の大きさを知らない」

それを知った時、彼等の強い意志は変わらずにいる事は出来るのだろうか。

「今の日本を……知らない事が幸せかもしれないな」

例え崩壊の結末になろうが、絶望して死んでいくよりマシなのかもしれない。

「依頼屋には……日本を変えるだけの力はないのだから」

そう呟いた緒方は、神妙な顔付きで部屋を出て行った。

先に社長室を出た杉田は、そこらの警備隊を捕まえ医療室の場所を尋ねた。緒方の言う通り警備隊は明確に事件のあった場所を伝え、杉田も迷うことなく辿り着く事が出来た。

「これは……凄いな」

その医療施設は大きな大学病院に引けを取らない程の設備が整い、驚きと共に嘆息を漏らす。

「流石は依頼屋……と言ったところか。侮れないな……」

刑事という役柄、杉田もある程度の病院の設備を理解している。現状の依頼屋の設備を見ても、それはそこらの病院の設備を遥かに凌駕していた。

「これ程の設備を整えるには、裏で何者かの協力がないと無理だろう」

警察組織にも知られず、ここまでの設備を調達出来るのはその道

のコネがないと無理だと断言できる。事件のあった部屋に行くまで何ヶ所かの部屋を回ったが、どれもが最先端の医療器具であった。中には杉田では何に使うか分からないような機械まで揃っている。

それぞれの部屋で贅辞の念を上げながら眼科室を出た杉田は、前を通り掛かった、ファイルを持つ白衣の男と目線が合う。

「おや？ あなたは確か……」

サラサラとした黒髪に小さめの眼鏡を付けた白衣の男は、見覚えのない杉田の顔を見つめ足を止めた。

「杉田です。緒方さんの弟、祥三さんの紹介のもと、この依頼屋に協力する事になりました」

優しそうな男である。身長も高く、無駄なぜい肉も付いていないような細い体型の男性は、杉田の言葉を聞いて何かを思い出したように笑みを浮かべた。

「ああ……社長から聞いています。新たに三名の協力者が来たと。その一人があなただったのですね」

「何が出来るか分かりませんが、宜しく願います。あなたは……」

「医者の人だという事でいいのでしょうか？」

「そうです。申し遅れました。私は外科医の唐山からやまと申します。以後、お見知りおきを」

「こちらこそ」

唐山はファイルを左手に持ち替え右手を差し伸べると、杉田もその手に快く応じた。

「今は少しバタバタしてますので用件があるならわたしが伺いますか？」

握った手を離し、唐山は杉田の行動を問う。

「そうですか。事件の調査を含めて少し見に来たんです」

「元刑事さんかなにかですか？ それなら私も協力します。殺された幸村……いや、そのメンバー全員仲間でしたから」

「ご協力感謝します。それにしても凄い設備ですね。素人の私が見ても他の大型病院に引けを取らない」

杉田は辺りを見渡しながら本音を口にし、唐山は誇ったように笑みを浮かべる。

「依頼屋の目的上、ここまで揃えないと回らないんですよ。一般の病院だと何かと不便なもので」

確かに怪我をする度、一般の病院で治療していたら時間も掛かり、下手をすれば医者に疑われ政府の手が降りる。その旨を理解した杉田は唐山の言葉に頷いた。

「それにしても、これだけの設備をどこで？」

「殆どは幸村が来る以前から備わっていたものですが、最新の医療器具は全て幸村が裏から調達した物なんです」

「裏から？」

「ご存知じゃないかもしれませんが、その筋には依頼屋に協力して下さる企業が幾つかあります。稀に海外からも調達していましたよ」
「依頼屋という名の企業が存在しない以上、中小企業に発注すれば足取りも掴みにくい。その企業のトップも依頼屋の存在を認めていたのなら隠蔽いんぺいするのも簡単という事か」

「流石は杉田さん……その通りです。ただ、最近はそれすら難しくなってきましたが」

「警察が依頼屋の搜索に力を入れてきたんですよ」

「はい。そのお陰で迂闊に動く事が出来なくなりました。それは医療関係だけでなく、実行部隊にも影響していますね。明らかに表だった行動は出来ないわけですから」

警視庁一貫で搜索されれば依頼屋としても行動を縮小せざるおえない。

そもそも、今の依頼屋本部としては裏家業である、依頼を受けて依頼を遂行していくという仕事よりも、攻め立ててくるバリア勢力との攻防に重点を置いている。神出鬼没であるバリアに対抗しようものの、警視庁の搜索を含めた挟み撃ちに合っている状態では些か分が悪い状況でもある。

「今の警察は完全に依頼屋組織を敵だと認識していますから。バリアという存在を全体で認識してくれば状況はもっと違ったものになってくる筈なんですが——」

「それはちよつと違いますね」

杉田の願望に唐山ははっきりと否定する。その言葉に杉田は圧迫されそうな心境に陥る。

杉田の言ったのはあくまで願望である。そうじゃないと願いながらも、唐山からは確信に迫る言葉が紡がれる。

「間違い無く今の警視庁はバリアを認識しています。いや……それどころか、依頼屋ではバリア勢力の一つと捉えていいでしょう。考えてみても、今までの支部襲撃に伴った——」

「唐山さん……すみませんが事件のあった部屋へと案内して頂けますか？ 警備隊の動向から場所は予想出来ますが、詳細についてもあなたから意見が聞きたいもので」

「え？ え、ああ……構いませんよ」

突如会話を切られた杉田の不自然さに首を傾げながら、唐山はそれに承諾する。

「では、行きましょう」

そう言って杉田は唐山に背を向け足を進めた。

別段変わった動きはないが、前を歩く杉田の腕は限界まで力を込めているような、——そう見える程拳を握っていた。

それを見た唐山は思い出したように納得し、先に行く杉田の背中を見つめた。

「あなたからしたら嘘のような話だったでしょうね……“元”刑事さん。しかし、反応からするにあなたもどこかで真実を予測していた……というところでしょうか？」

決して杉田に聞こえない大きさを唐山は呟く。

「少し……配慮が足りませんでしたね」

唐山は手に持っていた医療のファイルを近くの机の上に起き、葛藤を繰り広げる杉田の後を追っていった。

事件のあった手術室――

そこに足を運んだ杉田は血塗られた部屋の光景に息を呑んだ。死体こそ無かったものの、その部屋で何が起こったかは容易に想像できる程だ。

器具などは散乱し、血の跡が転々と付着している。逃げようとした人を優先的に殺したのか、扉を開けた直ぐ目の前にも血だまりが見受けられ、凝血具合からそんなに時間が経っていない事も生々しい惨状の一つである。

「この部屋で殺されたのは六人。ほぼナイフで心臓をひと突き……酷いものです」

杉田の横に立つ唐山は、仲間の死を嘆くように首を振る。

「普通ならこの武器の所持者を特定すれば簡単に容疑者を特定出来るんだが……そうもいかないか」

杉田は足元に落ちていた血塗れのナイフを見ながら苦言を漏らす。恐らくこのナイフが凶器だろうと予想は付くが、その所持者を見付けることは難儀である。

「ここは依頼屋ですからね。全員が何かしらの武器を所持しています。私もこの通り」

その理由として、唐山は懐から一丁の拳銃を見せた。

「ナイフを武器にしている者を集めるといのは？」

「特定するのは難しいでしょう。ナイフを隠し武器として所持している者も多数いますから」

医者である唐山もそうであるように、依頼屋は携帯できる武器で最も有力である拳銃に重点を置いている。つまりはメインとして持つことの少ないナイフだけで犯人を特定する事は不可能に近いのだ。

ナイフをメインとして戦うのは、依頼屋の実行部隊、東野和樹だというのは知れ渡った事実であるが、個人戦以外の戦闘手段として勿論彼も拳銃を所持している。

「幸村さんはいつも此処に？」

「まあ普段はこの医療フロアーにいますね。休暇の時は海外やらに飛んでいます」

備品の調達とかね、と補足を入れる唐山に、杉田は感心を込めた笑みを浮かべる。

「依頼屋の為……というのもあるでしょうが、それが幸村さんの素の性格なんでしょうね。優しく真面目な性格が行動に出てる。信頼されてたのも頷けます——」

「そんな幸村を殺されたんです。それも……仲間だと思っていた内部の人間に！ とても許せる事じゃない！！」

唐山は拳を握り体を震わせる。初めて怒りを露わにする唐山の心境は痛い程分かった。真実が酷ならば杉田だって他人事ではない。それと向き合った時、果たして自我を残す事が出来るのだろうかと内心焦りもある。

だがいつかは訪れる運命だ。

その時、冷静ではいらなくても、道を間違えなければいいと心に刻み、今まで必死に抑えていたであろう唐山の悔しさを脳裏に焼き付けた。

「殺してやりたい…… 八つ裂きにしてやりたい…… 絶望で満たせてやりたい…… はは、どんなにそう思っても私には出来ないでしょう」

唐山は震える手で拳銃を前に構える。

「銃なんて撃ったこともない。死体には慣れているのに、人を殺した後を考えると押しつぶされそうになる。気持ちとは裏腹に腕も体も震えてしまう。こんなに力のない私では何も出来ない……」

「唐山さん……」

「幸村が復讐を望んでいたなら、どんなに楽だったか」

唐山は前に構えた拳銃をゆつくりと下げた。

「今のは私の弱い部分です。でもね杉田さん。こんな私にもまだ出来る事があるんです」

微笑みを浮かべた唐山は杉田に顔を向けた。

「出来ること……？」

「人を…… 救えるんです。殺す事は出来なくても、人の命を助ける事が出来るんですよ。一般人には簡単に出来ない事を…… 手術を…… 私は出来るんです」

「命を…… 助ける……」

「幸村のこの言葉がなければ、私はもう闇の中だったでしょう」
「幸村さんが、それを……？」

唐山は軽く頷いた。

「僕らは医者です。命を奪う者に命を救う事なんて出来ない。どんな命も、それがどんな人だったとしても、僕らに矛盾があつてはいけない。僕達は……それを救う事が出来る側の人間なんですから——と。それは……僕が初めて医師として誇りを持てた瞬間でした」

唐山は持っていた拳銃を杉田へと差し伸べた。

「幸村は私が医師としての道を外す事を望んではない。勿論、依頼屋として奪わなければならない状況もあるという事は彼も分かっていた。だからこそ、医者をしている者だけにそれを伝えた。私たちをひとつの仲間にしてくれた。……これは、私の道に必要な物です。あなたの進むべき道のため使つて下さい」

差し出された拳銃を杉田は一度間を空けてから強く握った。

「……分かりました。幸村さんと、あなたの強さを確かに受け取りました」

「……少し、すっきりしました。あなたと今此処で話せた事に感謝します」

「それはこちらと同じです。少し、自分の中の葛藤に答えが出た気がしますから」

杉田はすっきりとした笑みを浮かべ、受け取った拳銃を背中側のベルトに差し込んだ。

幸村と唐山が明確に進む道を選択し、出来ない事を杉田に託した
その拳銃の重みを身体に感じながら。

「では、調査を再開しましょうか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1239o/>

迷宮世界

2011年12月13日20時28分発行